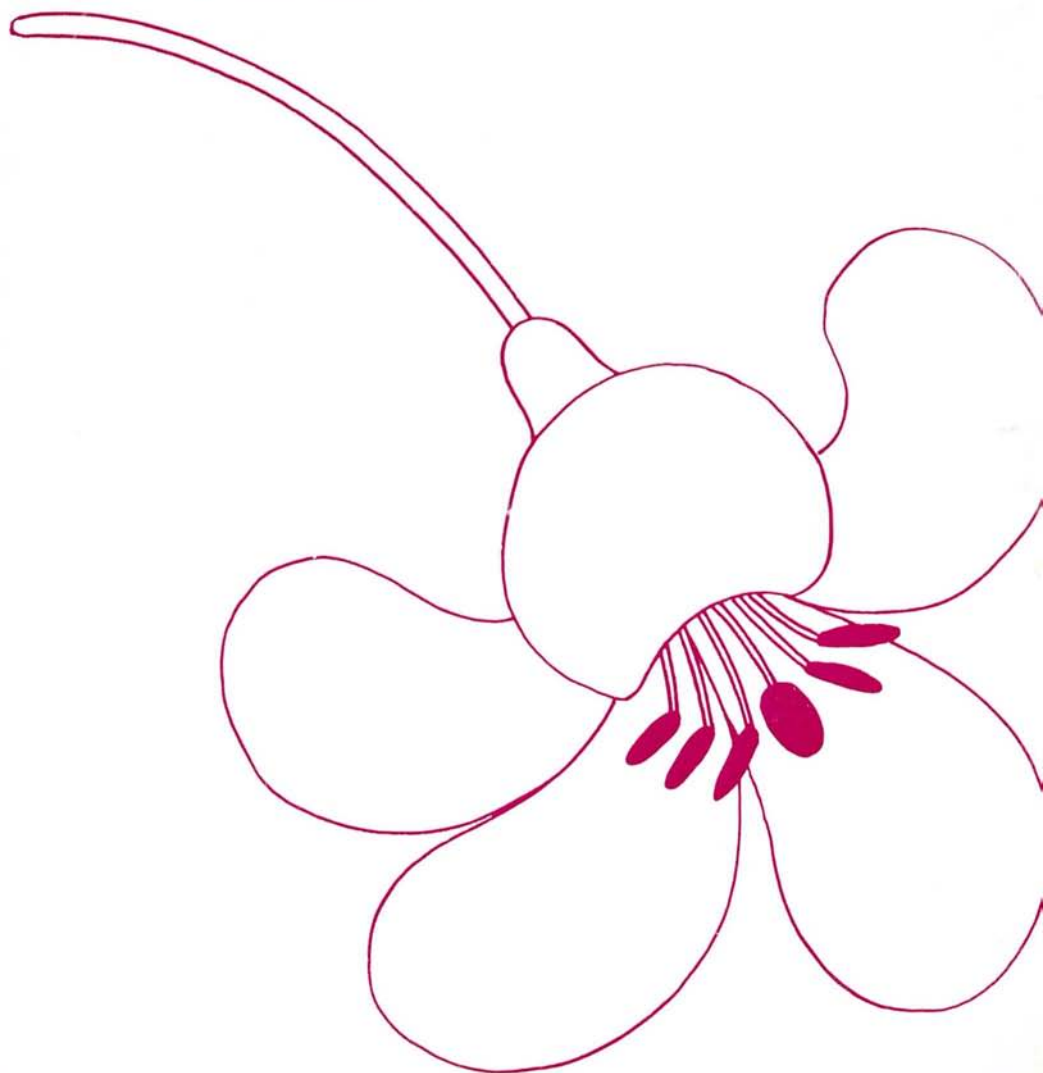


働く女と考える主婦のひろば〈あごら〉9号

# 働く女と主婦の 接点を求めて

国際婦人年は行動の年／山川菊栄  
主婦のいない国／松岡洋子  
調査と意見／専業主婦と兼業主婦

あごら





同じ女であり、共通の問題をたくさんかかえながら、  
職業を持つ人と持たない人とは、  
お互いに心ひらいて話し合う機会が、なかなかないようです。  
就職することもしないことも、  
それぞれの自由だと思いますが、  
私たちにほんとうの選択の自由が保証されているのでしょうか。  
それぞれの欲求や状況を把握しあっているのでしょうか。  
風の吹きとおる小さな窓を、せめて紙上だけでも開いて、  
考えてみたいと思いました。  
これをよすがに、お互いの声を、もっともっと響かせ合い、  
共通の場をひろげていきたいと念じています。

あごら 9号 目次

国際婦人年こそ平等をかしとるとき	山川 菊栄	2
主婦のいない国 —社会主義中国の女たち—	松岡 洋子	8

特集 ●働く女と主婦の接点を求めて

調査 / 働く女と主婦

●それぞれ相手の立場をどう思っているか	あごら編集部	17
●生活時間からみた働く女と主婦	NHK生活時間調査より	67

感想 / 主婦から働く女へ

●有職婦人とエゴイズム 関 妙子	●主婦は家庭の中に 塚本和子	
●一つの事件をめぐる考えたこと	吉野由喜子	
●ある風邪の日に 青山由紀子	地域を見つめ直そう 若林高子	21

感想 / 働く女から主婦へ

●ママが働いていてよかった 谷内睦子	●小さなあいさつ 佐伯佑子	
●飛鳥くんありがとう 岡 ゆき	●働く女はオニか魔女か 橋田光子	
●服装・表情・考現学 永松三恵子		36

記録 / 私の1日 (必要最小限の合理化生活ほか)		32
---------------------------	--	----

考察 / 働く女と主婦の接点を求めて

●それぞれの立場から目指す方向は同じ	神田道子	47
●情報化社会の中の専業主婦と兼業主婦	斉藤千代	53

最後の地母神	寿地区の女たち	野本 三吉	80
--------	---------	-------	----

10年目の主婦休暇 —ケンブリッジ留学記—	高橋ますみ	90
-----------------------	-------	----

資料 出産と妊娠の事故		78
-------------	--	----

1975年は国際婦人年		124
-------------	--	-----

運動するグループ 〈リブ新宿センター〉・〈石禁連〉		126
---------------------------	--	-----

人口抑制と産む性 (ティーチ・イン)	青木やよひ	
--------------------	-------	--

飯島愛子・高木佐和子・松井やより・村松博雄		95
-----------------------	--	----

●あごら読書室		131
---------	--	-----

●新聞切抜帖		142
--------	--	-----

●あごらのあごら (読者のひろば)		160
-------------------	--	-----

## 国際婦人年こそ実質的平等をかちとる年

八十三歳という高齢で、この秋、「覚書 幕末の水戸藩」を脱稿された先生は、封建時代のことを書きながら、現代に生きる私たちに、その視点のたしかさと新鮮さで、多くの示唆を与えて下さった。

先生をお訪ねしたのは、菊栄のお名の由来である菊香のお誕生日近くだった。先生は年来の神経痛に加え、月余のかぜで、まだ流動食のおからだだったが、あごらの読者のために、貴重なお時間を特にさいてくださった。

\*

——一九七〇年代に入ってから、日本でも新しい形の婦人運動が出てきたといわれますが、先生方がなさっていらした運動と今のウーマン・リブの運動とを、どうつなげてお考えになっていらっしゃいますか。

私は、よく研究してはいませんが、

根本的には、そんなに違いはないと思うのです。

これはイギリスなどでも言われていることですが、戦前、婦人参政権のない間は、婦人参政権さえ与えられれば、女の問題はすべて解決するように考えられていました。これは、とんでもない買いかぶりだったといわれています。

戦後になって、世界中ほとんど、

法律上の平等や形式的な平等を認められましたが、それでも実質的な差別は残っていますね。それを撤廃しようと、実質的な運動になった。それが、今、皆さんがおやりになっている運動ではないかと思います。

私は、もともと参政権には余り大きな期待はしていなかったのですが、以前はとにかく、大学へは入れず、政党へも入れず、政談演説会も聞けないという状況でしたから、まずそうした形式的なものから獲得していこうとしたわけです。しかし、

今は、そういうものが皆、自由になつてしまったので、かえって運動が盛りあがりませんね。

——たしかに、形式的には一応の平等が与えられているのに、何を今さら婦人問題という声があり、婦人問題に目を向ける人たちが少ない状況です。この見通しについて、どうお考えになりますか。

私は大体において、いつも楽観的なんです。





大学が開放されて、どんどん入学するけれども、むかしの花嫁教育のような感じで、出ればお嫁さんになる。職業の機会はずっとふえているけれど、これもまた二、三年でお嫁さんになる。しかし、その中で残って行く率がずっと高くなっていますね。これはやはり一つの進歩でしょう。

また、主婦と有職婦人との間の断絶も埋まりつつありますね。今では、一度も職業についた経験のない人は少ないし、若いときに職業を経験し、技能を持っている人で、再就職を望む人も多くなっています。そういう点は昔と違いますね。昔はやむを得ず、ぎりぎりに追いつめられて就職する人が多く、職業婦人という特別なもののように言われましたが、いまは普通のことになっています。これは戦争を経ってきたからだと思います。

教育なども、女が職業を持つのは当然だとして行なわれるようになる

と、また違ってくると思いますが、そこが中途半端ですね。例の家庭科を、女の子だけ必修にしてみたり。

ああいうのを、どしどし世論や議会の力で改めていかなければだめだと思いますね。京都では家庭科をみな必修にしたんですよ。そういうことに、もっと女の発言力が強くならなきゃだめですね。「女の子は女らしく」なんていう母親が多くちゃ困りますね。

全体として、もっと社会が変わらなきゃだめですね。保育所なども義務教育と同じに認められるようになり、どこの地域でも、特に職業を持つ母親ばかりのためではなしに、一般の母親も利用できるようなになると、主婦と職業婦人というものが、別のものでなくならなきゃいけないと思います。

しかし、昔に比べれば、のろいけれど、いいほうには向かっていると思います。

——働く女が増えたといっても、パート労働者の問題や、保護と平等の問題など、残っている問題は、まだまだ大きいように思いますが。

合化労連で、二、三年前に働く主婦を調査して、「自分は労働者だと思っているか」「労働者と呼ばれたときに、どんな気持ちがあるか」といったことを聞いたことがあるのですが、あいいいで、はっきりした労働者の意識というものがないのですね。パートであろうと、再就職であろうと、労働者意識をもっとはっきり持つようであればいいと思いますね。

それには、今の労働組合も悪いと思います。積極的に組合に入れようとしなくて、パートは仲間はずれにしてほうっておく。教育もしない。邪魔なものにして、クビになってもいいという。——これは外国の場合と違いますね。外国の場合は、ただ就労時間が短いだけです。時間が短いから、それだけ賃金は少ないでし

ようが、ほかの諸権利は違いがないのです。都合がつくようになれば、またフルタイムで働く。男のパートタイマーもいくらもあるそうです。労働者として何の差別もない。ここがたいせつだと思っています。

いま、働く女の平均年令は三十歳を超えていますね。再就職してから勤務年限も長くなっています。お座の前後とか子どもの小さいうちは、どうしても勤めにくいし、これだけ働く人がたくさんいるのですから、社会全体が妊産婦や乳幼児を持つ母親に無理をさせる必要はないと思いますね。

日本の場合、通勤条件が非常に悪いので、妊婦が途中で続かなくなる場合が多いようです。

日本では女の労働問題というと、生理休暇ばかり取り上げますが、外国では生理休暇はなくてもいいというのは、労働状態や通勤条件に日本ほどむりがないからだろうと思いま

す。もう少し女を人間扱いする条件をつくらなくちゃいけないと思いますね。アメリカなどでは立作業でも、ちよいちよい腰が掛けられる設備をしています。二時間も三時間も立ちづめということはないわけです。生理休暇はたしか初めは背バスの女車掌さんの労働条件が非常に悪いことから始まったと記憶していますが、ロンドンなどでは、バスの車掌さんでも時々腰掛けて、お化粧直しなどをしていきますし、日本のような重労働ではありません。生理休暇を与えているために、かえって労働の場の条件が悪いというのは問題です。ほ

うり出されていて、生理休暇だけ与えられても、本質的な解決にならないと思いますね。生理休暇なんてものはばかばかしいものです。もっと労働の基本的な条件を改善すべきであって、生理休暇などでごまかすのはおかしいんじゃないでしょうか。

——出産期や育児期の女が保護されなければ

はいけないのは当然ですが、その時期の保護によって、女は家事育児が天職だという社会通念がつくれがちなのは、どういふふう調整していけばよろしいでしょうか。

私は、男も女も、なるべく大勢で仕事をし、長く働かないようにすることだと思っています。

イギリスの児童問題研究家たちの話では、子供を保育所に預けるのはいい。しかし長時間預けることは不自然だ、子供に不安を与える。子供は何も言えないから大人の都合で勝手にされているが、今の生産力を維持するには、男女とも、一日六時間平均の労働でいいはずだと言うことです。機械化が進んで能率が上がっているのですから、男女ともに六時間労働で十分だとすれば、何も女だけたくさん休む必要はありません。

——しかし、現実には、日本の男は八時間労働はおろか、十時間労働でも十二時間労働でも働いています。そんな中で育児期の女が六時間労働をすると、たちまち職場を追われたり配置転換になったりします。だから子供を持つ有職婦人は齒をくいしばりながら悪戦

苦闘しているのだと思います。男女ともに六時間労働ですむようになるためには社会主義社会にするほかないのでしょうか。

利益のために稼ぐのではなく、みんなの必要を満たすのに十分な労働をするという社会になれば、いいと思いますね。無意味な競争をして、必要以上にモノを生産して、売れなくて困っている。レイ・オフがもう始まっていますが、日本だけでなく、東南アジアなど、よその国の労働者も失業させたりしている。無意味なことですね。

——競争のない社会を作るというのは言うはやすく行なうはむずかしいことですが、そこへ近づくためにはどうすればいいでしょう。

戦後獲得した参政権を活用するのの一つの方法でしょう。せっかく参政権を持っても、相変らず保守勢力を支持する女の人が多いや、どうも困りますね。

——そういう女の人たちは、どうすれば勉強していけるでしょう。

市民運動なり、団体活動なり、何か自分たちに行きうることをすることでしょうね。

——女の人、とくに主婦は何かの団体に属することを恐れる傾向がありますが、そういうアレギーには、どう対処していけばいいでしょう。

それは、その団体のやり方でしょうね。みんなが働きたいような団体にしていくことでしょう。デモなどでも、行きたい人と行きたくない人がありますから、一律には規制しにくいでしょう。会合の時間なども、

日本では遅れるのが普通で、おしまいの時間が守られない。四時には帰れないと、普通の主婦はだんだん参加できなくなります。イギリスなどでは、主婦の集会でも、そういう時間は、たいへんきちんとしています。これは、教会に集まる習慣があるからではないかと思いますが、時間がきちんと守られる上に話し合いの時間にも無駄がありません。ふつうの

会合ではお茶やお菓子を下さずもっぱら話し合いをします。ですから二時間なら二時間という時間でも、何か一つのことがまとまり、出席した人たちが満足して帰ります。このような小さなグループが各地にでき、主婦も何らかの団体に属し、少しずつ社会に参加する方法を練習していくことがたいせつではないでしょうか。お互いに教育される機会がないと、団体生活の運営に慣れないと思います。

——女の自己改革と同時に、男の人の生活習慣や考えを変えて行くことも重要ではないかと思いますが、そのためにはどうすればよろしいでしょうか。

やはりそれには結婚するほうがいいと思います。結婚して、家事や育児を分担し合うことの中から共通の話題もでき、男の人の考えも変わっていくのではないのでしょうか。

——山川均先生は、そういう意味で、理想的なパートナーでいらしたわけですね。

ええ(微笑)。はじめから、「一緒に

なる以上は世話にはなるだろうが、手はとらせないようにする」と言っていて、そのとおり実行してくれました。いい人でした。むずかしいところはありませんでした。

——先生ご自身のご意思是、どのようにおしつけになりましたか。

私はほうりっぱなしにしてしまい、嫁に文句を言われているところです(笑)。



——話は変わりますが、最近のウーマンブの主張の一つに、性の解放がありますが、これについては、どうお考えですか。

人間には、選択があるでしょう。無条件に誰にでもゆるすということとは、特殊な人はさておき、一般的な女の人は望まないでしょう。自由になったからといってそう無条件に無選択というわけにはいかないと思います。

女が強くなれば、女の意見が支配的な道徳になるかもしれませんが、私はやっぱり子どものためには父親がはっきりとわかっていて、両親の協力で育てられるほうが幸福だろうと思いますね。

ただ離婚の自由はもう少しあってもいいでしょうね。悪い夫を我慢して、いつまでも一緒にいることはないと思いますが。社会的には、離婚すると女のほうが非難されますが、これも、昔ほど、出戻りといった感覚はなくなってきたのではないのでしょうか。今は法律的には自由なわけですが、生活上の問題と、社会通念が問題なのですね。そういう意

味でも、やはり古典的な女の自立の  
第一歩である経済力を持つことが必  
要ではないかと思えますね。

——来年は国際婦人年で、イギリスなどでは一九七五年いっぱい、男女同一賃金を実現するということが、日本では具体的な動きにとほしいようです。どのような運動を展開すれば有効でしょうか。また労働組合が婦人問題に無関心なことが大きなガンになっていますが、どうすればよいでしょうか。

英国労働党は婦人に対する差別問題委員会を設け、男子の下院議員が数名、女子十数名を加えて、差別条項をあげてパンフレットを発行し、広く公衆に訴え、法律も改めています。それは一九七四年の白書にも入れて、その中の同一労働同一賃金の一項を一九七五年十二月二十一日までに実行することになっています。

争議のとき、男女賃金を平等の率であげるときは、双方の格差がそのまま持ち上がることになるので、男子の率はそのまま、女子の率を幾分引き上げることによって、格差の幅

を縮めていく方針をとっている組合もあります。

いま労働組合は全国統一の最低賃金を要求しています。これは女にとってもつてこいの有利な方法ですね。なぜなら、いつでも女は最低賃金なみにされているおなざけ賃金しかもらっていないのですから。フランスは男女賃金格差の最も少い国ですが、これは男女共通の最低賃金法が実施された結果だといえます。

日本の婦人もぜひこの運動に必死の力をそえることです。この運動に力を入れない人には断じて一票を入れないこと。せっかくの参政権を口足でふみにじられるようなものですから……。

国際婦人年をお祭りでなく、実質的な婦人解放、男女平等の勝利の記念として日本の男女は何かをなすべきでしょう。

\*  
静かで穏やかで、あたたかで、しか

も信念にあふれたおことばが続く。

内外の文献にくまなく目を通し、絶えざる勉強を続けていらっしやる先生は、持病（堆間板ヘルニア）のため藤沢のご自宅からほとんど外出不能なおからだながら、驚くほどたしかな思考力をお持ちである。

婦人問題の論客として同時に、婦人運動の実践家として、長い苦闘の歴史を重ねられた先生の足跡を、しっかりと見すえながら、後退することのない運動を続けなければいけないと改めて思った。

「敗戦の結果、新憲法その他の立法によって明治維新のおきみやげの多くの封建的遺物は、一応形の上では清算されたが、独占資本の利益のために、こそこそと復活されようとしている。その復活は無意味な流血さたの復活にはかならないのに」

「幕末の水戸藩」のこの最後の一節は、婦人問題にとっても、貴重な重みを持つことばだと思うのだが。

先日、私たち何人かが、中国展を見学し、中国の人たちと懇談したときのことである。

「中国では女の人たちが化粧をしない。パーマもかけない。女というのは、本能的にきれいになりたいはずだが、どう考えているのだろうか」

という質問が出た。質問者は、中国に行つてこの日で中国の女を見た人であるが、回答が得られぬまま、心中、疑問に思つていたので、この質問となつたのだろう。

なぜ化粧をしないか、それを女の本能だと考えることは、中国の女の人を知るうえに、かなり本質的なかわりをもつ問題なので、まず、このことから考えてみたいと思う。

「女は本能的にきれいになりたいと思つてゐるはずだ」と思いこんでゐる人が日本には多いようだが、「本能的」ということばは、はたして妥当であろうか。また、「美しくなりたい」という場合の、美の基準は、いったい何にあるのだろうか。

まず「本能的」とは何か、具体的に考えてみよう。私たちは、熱いものにさわたときは、思わずパッと手をひっこめる。これは日本人だろうと中国人だろうと変わりが無い。こういう、万人に共通したことなら「本能的」といえるだろう。

だが「きれいになりたい」という美の基準は、時代により、社会によつてまちまちで、つくられたものと考えべきだろう。四年ほど前のことになるが「基地で闘う婦人代表団」の一員として訪中した帰途、香港に寄つた

## 主婦のいない国

社会主義中国の女たち

松岡 洋子

とき「西側の化粧は、はたして美しいといえるのだろうか」とみんなで話し合ったことがある。一か月間中国で過ごし、化粧しない女の美しさに慣れて、化粧した女を見たとき、文字どおり「お化け」という印象を受けた。ブルーのアイシャドウをしたり、飛び出しそうなつけまつ毛をつけ、かがめばおしりの見えそうなミニを着て、あれで美しいのだろうかという疑問が、素朴に生まれたことを覚えてゐる。

同じ日本の中でも、時代によつて美の基準は大層変わつてゐる。たとえば平安時代にはパンタロンのお姫様があらわれたら、男だけでなく、女もみんなひっくり返るほど驚いたにちがいない。

中国でも、むかしの女はてん足をしてゐた。足が小さければ小さいほどいいという、美の基準があつたためである。また江戸時代のおいらんの衣裳を思い起こしてみたい。男に体を売ることと生きていく女の衣裳、そういう女を男が見て美しいと思う美しさというのは、徹底的に男にかしづく女、あるいは男の言うなりになる女であつて、そういう基準からこれが美しいとされてゐたと思う。女が女であるがゆゑに普遍的に、本能的に美しくなりたい、と思つてゐるのであれば、中国の女というのは、非常にわかりにくい存在であると思われる。中国の女たちと、私たち、資本主義社会の女たちとは、考え方が根底的に違つてゐる。つまり真の社会主義とは、制度が違ふだけではなく、価値基準が全く違つてゐるからである。

### ・家事専業者は一人もない

中国は、主婦のいない国である。つまり、家事を専業とする女がいない。

社会主義中国では、集団生産労働に携わることが、プロレタリアードとしての思想を持つうえに、欠くことのできないものだと考えられている。

既婚者であれ、未婚者であれ、すべてが集団生産労働に携わる、というのが解放後の中国の大きな願目であり、それがプロレタリア文化大革命により一層徹底して行なわれるようになってきた。

ソ連の有名な婦人指導者が来日したとき、彼女はこう言った。「ソ連では男女平等である。女は家事だけに満足できずに外に働きに行っている」と。家事だけに満足できないから外に出て働くことが、はたして男女平等といえるかどうか。家事労働に満足できずに働きに出るのなら、アメリカの女も、イギリスの女も、いわゆる西欧の女たちも日本の女たちもやって来ていることであって、女は家事をやるべきという考え方が前提になっている。ちなみに中国では家事は、男女を問わず、家族のものが皆が分担している。社会主義なら当然そうであろう。

真の社会主義とはどういうものなのか。経済基盤の社会主義化の上に、どのような意味でもエリート層がない、ということがまずあげられる。人間の間接はみな対等であって、決して縦の関係ではない。

中国に主婦がいない、というのは、つまり主婦に対しての主人がいない、ということである。社会の中で人間関係がすべて横の関係であるということは、一つの家庭の中でも同じであって、家族全員が主人であるともいえる。そして、家事に満足できないから働くのではなく、工場で働いたり、人民公社のような集団農業の場で働く。そうした集団生産労働に携わることこそが、社会主義的な思想を持つ上に欠くことができない、と考えるために、中国では男女の別なく、生産労働に携わっている。

現に、現在の中国では四十五歳以下の既婚女性で、むしろ未婚の女性も含めて、そうした生産労働に携わっていないのは、よほどの病弱なものでない限り、一人もないと言える。

### ・抗日戦の中でかちとった女の解放

中国には「農業は大寨に学ぶ」という言葉がある。もともとは山合いのやせた耕地であった大寨の村を、集団の力で段畑をつくり、日照りや冠水のとくも安定した収穫をあげる新しい農地とした。

大寨は新しい農村の見本とされているのだが、この大寨の婦人たちの解放は抗日戦争にさかのぼる。日本軍は大寨にも侵略して行き、当時四百人ほどの人口であった村の男たち数十名を殺した。女たちは否がおうでも立ち上がらざるを得なくなった。後方での生産をひきうけるだけでなくゲリラとして抗日戦にも加わったのである。

こうして、戦いながら、民族の解放闘争のなかで女の解放をかちとる運動が、いたる所で進められた。

一九三四年から三六年にかけて、中国共産党は、中国の南から延安の北あたりまで、長いそして困難な戦いを続けて行った。これが、いわゆる長征であるが、ここにもたくさんの方々が参加している。周恩来夫人の鄧穎超もその一人である。

四年前、私は、広州で白髪の美しい老人に出会った。彼女も又、長征を生き残った一人であったが、彼女の育ててきた子供たちは、長征で亡くなった同志の子供であるという。つまり彼女たちは、行軍に参加し、戦いながら子供を産み育てていたのである。あるときは戦い、あるときは解放区を作り、兵力を増強したり、何か月かそこで生活したりした。動き出さなければならないときもあつたであろう。そんなとき、彼らは子供たちをどうしたのであろうか。

ある女は乳呑児をロバの背にのせて長征を続けた。また、生まれたての子や連れて行けない赤ん坊を村の貧民に預けたものも多いときく。「革命の種子を残す」という言い方を彼らはしているが、絶対に安全なところとして貧民に子供を預け、また預かった農民たちも、むしろ自分の子供よりみなお、大切に、みんなで育てた。このことは、長征を行なった中国共産党と紅軍のあり方が実際道義になつており、又農民たちがそれに共鳴したということをも物語ってはいないだろうか。

女性解放の闘争が民族解放の闘いと重なりあうのは、

アジア、アフリカに共通していることであるが、長期にわたるきびしい戦いの中で子供を産み育ててきたという歴史は、世界の女性解放史の中では、めずらしい例であるといえるだろう。

### ・プロレタリア文化大革命と女性

こうして抗日戦を戦い民族の解放をかちとつた中国は、共産党を中心とする政権を作り、社会主義国としての道を歩んでいる。

それはまず、経済的基盤の社会主義化、つまり下部構造の革命であつた。さらに進んで、そして集団化運動と重なりあつて、上部構造、つまり思想、文化、教育等のプロレタリアート化である。これを徹底させるために行なわれたのが一九六六年から七〇年にかけて、プロレタリア文化大革命であつた。

社会主義の経済的土台ができ、農民、労働者にも、教育の機会ができた。能力があれば労働者の子弟も大学へ行けるようになる。これはたしかに一つの大きな進歩であつた。けれども、六〇年代前半の大学生の多くが、大学に入つて求めたのは、労働者、農民から離れ、知識人になることであつた。頭脳労働者として、ホワイトカラー、役人になろうとした。これは、エリート層ができるということの意味している。こうした事実を、つまり、一度社会主義の経済的基盤を作つた国がブルジョア化の方向に逆戻りするときに、彼らはそれを修正主義という言葉



であらわしている。

真の社会主義国にあつては、どのような意味でもエリート層があつてよいはずはない。人間関係は常に対等であり、同志的階級的間柄であるという考えを進めたのが文化大革命である。

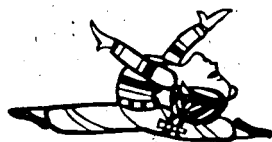
では、同志的階級的間柄とはどんな間柄であらうか。

この質問を四年前私は広州の小学校で子供たちに向けてみた。答えはこうである。「昔は先生がこわくて批判できなかつたけれども文革になってからは、先生が間違つていれば、自由に批判できるようになった。むしろ僕たちが間違つていれば先生は僕たちを批判する。そのように、相互批判し、自己批判する間柄のことを同志的階級的というんだ」と。

相互批判、自己批判ということとは、私たちの中ではあまり行なわれていないので実感としてとらえにくいことだとは思ふが、ただお互いにやつつけ合う、ということではない。彼らは援助するという言葉を使っているが遅れたものがあれば助けながら批判するということである。

いずれにしろ、対等な間柄というものは、お互いにとって、むしろ非常に敵しいものであるといえよう。

これも四年前のことになるが、周恩来首相にお目にかつた。当時中国では日本の軍国主義映画が問題になっていた。「日本海大海戦・軍閥・あゝ海軍・山本五十六」の四本が特に問題になっていたが、周首相は私たちにその映画の話をするために、当日の朝、午前一時から、「軍閥」を見直した、と言われたのである。



あの頭脳の鋭さでは定評のある周首相が、日本から行った女十人の私たちを相手に、それらが軍国主義映画であることを説得するのに、わざわざ映画を見なくてもできるはずであらう。「ああこれは、もうかなわない」。真剣勝負で刀を抜いた瞬間に、負けを感じる剣士の気持が、私にはそのとき、わかつたような気がした。周首相ほどの人が、私たちに對して全く対等に迫つてこられる、それは、どんなにつらく、敵しいことであつたらうか。

それら四本の映画をたて続けに見れば、日本人ならば誰でもが「やれやれ」と思うことがいくつあつた。日本が明治以来海外で行なつた戦争はいずれも中国の領土で行なわれてきたという事実がはつきりすること。さらに満州事變の十四年間に殺した中国人の数が最低に見積つて一千万、多くは三千万といわれているが、それらの映画の中にはどれもこれも、日本の兵隊が、中国の市民、婦人や老人や赤ん坊を殺している場面が出てくることである。周首相の最初の質問は「ああいう場面をわれわれがどういう気持で見るか、あなた方にわかるか」ということだつた。全くの真剣勝負である。「わかる」といえば、それは何か、と問われるに違いないし、めつたにわかる等とはいえないことくらい、私にもわかつた。では、一体何と答えたらいいのだろうか。「日本人は残虐である」とか「戦争はけしからん」とか、そんなちやちやなことではないこともわかっている。結局のところわからないと答えたのだつた。

すると周首相はこう言われたのだ。「われわれが抵抗せ

ずに殺されたと思うか」と。一千万の人が殺されたのである。赤ん坊だって殺されているのだ。そんな赤ん坊が事実として抵抗できたとはいえない。

けれども、一千万の人間が殺された、殺され方の本質は何かといえは、抵抗して殺されたということである。

抵抗して殺されなければ、今の中華人民共和国はあり得まい。今の中国は、男も、女も、子供も、抵抗して殺されたということが作ってきた歴史があり、その歴史の上に、抵抗して生き残った人たちが女たちも含めて、作ってきた国である、ということ、中国の女の解放を知る上では忘れてはならないと思う。

だが、中国では、「オレは抵抗して来たんだぞ」ということの上に、あぐらをかくことを許さない。その事実の上にあぐらをかいたとたん、ブルジョア化すると考えているし、そのような事例はいくつもある。それを防ぐために、階級闘争、思想闘争が常時行なわれている。

社会主義社会にも階級があり、階級矛盾があり、したがって階級闘争があるというのが、毛沢東の考え方である。そして思想闘争とは肉体労働をすることの中で行なわれる。だから、誰でもが肉体労働をすることは、文革後の中国では当たり前のことになっている。その意味で単なる知識人は今の中国には存在しない。一人の人間が労働者であり、農民であり、兵士であり、知識人であり、どの意味でもエリート層を作らないということの一環として、性別による差別もない、ということが行なわれている。こうした新しい人間づくりの中でしか女の姿は浮

かんでこない。つまり婦人の解放も全体の社会主義化の中でしか実現し得ないと考えているのである。

### ・中国の教育と女たち

教育面でも、実際に、理論と実践が完全にかみ合うような方法がとられている。以前は北京大学といえは、日本の東大のような学校であったが、今ではどの大学も労働者、農民、兵士たちの勉強する所であって、大学生という階層はない。

義務教育は北京市の場合は小学校の五年、中学校の五年の、十年とされている。農村は九年制のようだ。だが日本の小中学校とは全く異質である。

中国の学校では、教育と生産労働が必ず結びついている。小学校生にもできるようなものを実際に生産するのである。私の行った北京の小学校では中国の将棋を作っていた。中国の将棋は日本のものと違い円いコマであったが、実際に通用するものを小学生が作り、国家に買い上げてもらう仕組みになっていた。

課外活動でも実践を重んじている。無論、ピンポンも、武芸も、絵画も、音楽もあるが、私がなるほどと思ったのは、小学校で散髪屋をやっているのを見たときである。バリカンを持った一人の少年が必死になって相手の子供の頭を刈っていて、それは見ても気の毒なくらいのトラ刈りなのだけれども、いずれは役立つことなのである。中学生になると、これは女の子が多かったが実際に

ハリ、キユウをやっていた。友達を相手に、ハリをさす練習をしていた。

教科書も又、「はな、はと、まめ、ます」といった思想性のないやり方ではなく、たとえば「わが国は、何年に解放されました」という風なことから教える。プロレタリアートの思想を身につけるよう、教師、両親、周囲の人々が一緒になって、一日二十四時間、子供たちはきかえられているといい。政治目的のないものは一つもなく、だから競輪だのブルジョア思想を培養するようなTVの番組などは、いまのところ彼等の中にはない。

### ・はだしの医者たちの意味

だからといって、ブルジョア思想、封建思想が完全に払拭されたとはいえないし、また劉少奇や林彪のようにソ連と結びついて、旧思想に逆戻りさせていこうとする動きが皆無であるというわけでもない。そこで、そうした古い思想を払拭しようと、出て来たのが批林批孔である。なかでも強調されているのは孔子の「克己復礼」つまり昔に逆戻りしようとすることの打倒である。また男尊女卑をはじめ、もろもろの格差、断層をなくすように、すべてが対等であるようにという努力が意識的に払われている。人間関係は無論のことであるが、都市と農村の関係でも同じである。

大都市の役割とは何であろうか。ブルジョア社会では、支配するものが支配しやすくするために、ことに農村の



労働力を吸収し、農村地帯が貧しくなることによって格差を増大させていく上での都市づくりではなかったか。中国では、そのような社会の役割を完全に打破すべく努力を続けている。その意味で北京はむしろ大きな村だといえよう。北京は郊外を含め今のところ人口六百万位であるが、これ以上は絶対ふやさない方針になっている。

農村から都会へというやり方はむしろ格差を広げる一方である。逆に都会から農村へというやり方によって格差を縮める方針を中国ではとっている。都会の知識青年を農村に下放する、あるいは医療は農村に基礎をおこうというのがその例である。ちなみに言えば、六八年から今年の春までにすでに八百万の知識青年たちが農村に入っている。中国の人口は八億であるから、百人に一人が都市から農村に移住した若い青年である。今後はさらに多くなるであろう。「はだしの医者」も又、農村入りをした若い知識青年たちが多い。「はだしの医者」の名の起りは温暖な上海付近で半分農業をやりながら医療関係もやっている、そんな所からであるが、これには女性も数多く占めている。この医者たちも現在は百万を超えている。

この人たちは日本式に言えば保健婦のようなもの、と私は思っていたのであるが、今度延安で会った「はだしの医者」は全くすばらしい医者なのには驚いてしまった。単にハリ、キユウができる、それからちよっとした治療ができる、というのではなく、それこそ本物の医師に自らを養成していた。彼は二十二歳であったが、外科手術も数百件手がけているし、その中には腹部の手術や脇の下

の腫瘍などの手術も含まれている。十七歳で農村に入り、「はだしの医者」になり、外科手術をやる必要が生まれて来たので、自分の身体をまず実験台にするところからはじまって、実践の積み重ねのなかで技術を体得したのであった。

### ・能力による差別はあり得ない

そうした社会にあつて、能力とは、又われわれにとつて能力とは、一体どういうものなのであろうか。どうやら、われわれの能力という概念と、彼らの能力開発とは違ったものを目指しているように思える。

日本の女性解放運動の中でも、能力開発ということがいわれている。今、日本で働く女が解放されたいと感じるのは、まず男と差別されるということの実感からわいて来るものである。自分を自他ともにアホだと思つてゐる女性はいざ知らず、能力があると思う女性ならば、そして事実能力がある女性であればあるほど、まわりの、全く自分よりも能力のないような男が、男である故に長になつてゐるとか、男であるが故に認められるということに対する憤慨、あるいはいきどおりを感じて、何としてでも女は解放されなくてはと思う。私も四十年近く働いて来て、女であるが故に差別され、心からけしからんと思つたことが多い。能力で人間が評価されればどんなにいいであらうと、それが女性解放であると、私も長い間思つて来た。女が男と同等の能力、あるいは男以上の

能力、つまり資本主義社会でいう能力を持っているにもかかわらず、女であるが故、ということだけで抑えつけられるということに憤慨して、だから女の解放、だから女の運動というふうに考えた時期があつた。そして、能力で評価されるのが社会主義であると、長い間思つて来た。けれども、例えば大学を出た頭脳労働者が能力があるとして、小学卒よりも価値があると認められることが、労働者農民の国として正しいのかどうか、労働者農民の国でありながら、労働者農民は支配されるものであつて、頭脳労働者が支配するものであるならば、これはやはり、おかしい話ではないか。

能力がある、ない、という場合、例えば身体障害者のような人たちはどうであらうか。社会主義国になれば、今の日本とは比べものにならないほど生活は保障されるであらう。けれどもそれだけでは社会主義とはいえない、と中国の人たちは言う。

毛沢東思想は、例えばろうあ者にある程度の技術を教え、ある程度の生産労働に携われるようにして、最低生活を保障する福祉施設の普及で十分である、とする考えは、修正主義であるとして否定する。ろうあを何とかしてろうあでなくするわけにはいかないか、というところから発想するのである。ろうあの原因を取り除き、どうすれば聞こえ、話せるようにするかを考える。毛沢東の矛盾論は主要な矛盾は一つで、あとは副次的な矛盾である、と指摘している。彼らは、耳が聞こえない口がきけないのどちらが主要な矛盾であるか、を考える。当然耳の方

であらう。

それでは耳が聞こえるようにするにはどうすればよいのか。たまたまある東北地方の解放軍兵士が自分の体を実験台にしてツボを探しあてた。そこにハリを一日に一回十日間続けてさすと五メートル位先からだんだん聞こえるようになることがわかった。一年続けると大体ほとんど聞こえ、話せるようになった。このようにしてストマイによる障害を除いては九十%が治療可能になっている。

私が見学した北京の第三ろうあ学校は、だから福祉施設ではもはやなく、革命の後継者を育てる場所である、と彼らは言う。つまりろうあ者をろうあ者でなくするところからやって行く。小児麻痺の子供たちをそのまま車椅子に乗せておいて生活を保障していれば満足だというのではなくて、実際に歩けるようにすることだという。それを見て、われわれのいう能力というものは資本主義社会に限られたものであって、本当の社会主義社会では人間の能力はほとんど無限に開発されていくものなのだ、と思わざるを得なかった。

身障者だからこれだけの仕事しかできないから、この人にはこれだけの給料でよく、あるいは出来高計算で報酬をやるとういうような能力の標準で計ることは決して社会主義ではあるまい。すべての者が労働者、農民、兵士そして知識人になることであり、体の具合の悪いものはどのようにしたら根本的に治せるかということを考える発想にまで本当の社会主義ならなっていくに違いない。



われわれブルジョア社会の概念では計り切れないのが中国であり、全く新しい概念を生みだし、なお前進しようとしているのが今の中国である。

男女の関係も、私たちの考えているような能力で価値基準が決まるというのではない。男、女の差別もなく、先生、生徒といった断層もなく、都市と農村の断層も徐々になくなりつつある。あらゆる意味で、一日の生活二十四時間がすべて対等な関係、横の関係になる中で、男女の差別、性による差別がなくなっているのである。

これは本物である、と私は考える。だから主婦がいない。主婦がなくて主人がない。主人といえは家の中では全部が主人のようなものである。子供も大人も、年よりも、男も女も、皆自分のうちで主人であり、そしてすべてが社会の主人公である。というのが今の中国であり、だから女房が亭主を尻に敷くという関係でもない。親子の関係も、それこそ自己批判、相互批判の間柄であり、子供から批判されるという話をよく耳にする。また先生と生徒の間柄も師道尊厳であってはずらず、これら批判孔で打倒の対象になっている。

### ・おまごことのない国

そのような社会であるから、中国にあっては、男の子も女の子もその意味では区別がない。女の子だからお人形で遊ぶ、というようなこともない。なわとびや、石けりや鬼ごっこはずいぶんみかけた。おまごことをしてい

るところはないかと、気をつけて見ていたのだけれど、おままごとはなかった。

あらゆる意味でおままごのない国なのである。すべてが実際の生活と結びついている。農繁期で大人が忙しいのなら、子供たちは畠で昼食をとる大人たちにお茶を届けるとか、実際に役立つことを訓練されている。事実、おままごではなく実際のことは、真剣になってやらなくてはならないし、おままごよりは、子供たちにとっては、よほど面白いことであろう。

あるとき私は汽車に乗っていた。シュッシュポッポの汽車である。だから給水しなくてはならないのだが、高い所が上がって給水のネジをあげているのが十歳位の男の子であった。よく見ると、恐らく父親であろうが、そばに立って、実際に間違いがあつたら大変であるが、間違いないように見ているのである。日本ならどうであろう。まず子供にはそんなことはやらせない。けれども、間違いないように大人がついていて、実際に子供に覚えさせる、子供にも実践させ、役立たせる。それが中国なのである。

だから、普通の体であれば、男の同志にできることは女の同志にもできるといふ毛主席の言葉を全く文字通りうけて、訓練すれば何でもできると彼らは言う。この春、空軍の女パイロット五人と話し合ったが、まず私は彼女らのたくましい体に圧倒されてしまった。三十八歳、三十九歳という女の人が三人いたが、彼女らはそれぞれ子供を二人ずつ産み育てて来たという。そして妊娠五か月

まで飛行機を飛ばしていたとのことだった。その後は本当はもっと飛ばせたいし、飛ばしたかったのだけれど、どうしても皆が許してくれなくて、地上勤務になってしまった、というのである。

こうした社会であるから、女が化けるような化粧をすることは、第一すこしも美しくは見えないであろう。中国では、皆、こざっぱりとしたかつこうをしているが、きわめて質素である。ことに冬は、グレイ、紺などのあまり色彩のないものを厚着するので、みんなぬいぐるみのようになる。それを見た西欧のジャーナリストが中国の女の人はオッパイがない、などと言ったというが、これは認識不足ではなはだしい。男の性を意識しての女の衣裳を考える必要のない所では、体の線を強調して腰をしめたり胸をあげたりしなくてもいいわけだし、それなりに自分たちの体に合った、清潔で健康なかつこうが基準であつて、それは本当に美しい女の姿であろう。

女であること自体が商品価値を持つ日本のような社会での美貌であるとか、性的魅力とかがあまり強調されるので、全くそうでない社会で、本当に美しい人が解放軍の兵士で、バクバクのぬいぐるみのようなかつこうをしているのを見ると、とてもうらやましいと思うし、ああ、これは本当に解放された女なのだなあ、と私は思うのである。

〔市民講座「現代を生きる女たち」〕

十月九日小金井市公民館における講演から〕

# 調査

## 専業主婦と兼業主婦

——それぞれ相手の立場を

どう考えているか——

あごら編集部

もっぱら家事に従事して職業を持たない主婦（以下専業主婦とよぶ）と、職業を持ちながら家庭の主婦としての責任も果たしている主婦（以下兼業主婦とよぶ）の間には、果たして何らかの断絶があるだろうか。

専業主婦と兼業主婦というテーマを取り上げるに当たって、まず、これから調べてみるべきではないか、と編集部で問題になり、取り急ぎ問題をごく簡単にしぼって、それぞれのグループが、相手のグループに羨望感を持っているかどうか、その理由は何か、将来は現在の立場

を変えたいと思っているか、の三点だけを調べてみた。

調査期間が短かったため、十八人の編集委員が手わけをして、一人八票ずつを受け持って調べてみた。したがって、調査としてはたいへん不完全なものだが一つの傾向だけは示されたように思うので、以下にご紹介する。

〔調査対象は二十代から六十代まで〕

調査数と被調査者の年齢分布は、第1表に示す通りである。専業主婦は二十代から三十代が多く、兼業主婦は三十代後

第1表 被調査者の年齢分布表

年 齢	専業主婦	兼業主婦	合 計
21～25	3(人)	0(人)	3(人)
26～30	17	14	31
31～35	8	13	21
36～40	18	21	39
41～45	7	18	25
46～50	3	3	6
51～55	2	0	2
56～60	0	3	3
61以上	2	1	3
合 計	60	73	133

半から四十代前半が多かった。

### 〔養望度は専業主婦のほうが強い〕

まず専業主婦から、職業を持てている主婦をうらやましく思うかどうか、また反対に、兼業主婦が家事専業をうらやましく思うかどうかを調査した結果を分析してみた。その結果、全体としては専業主婦で有職主婦をうらやましく思うのが六十五・〇%もあるのに対し、兼業主婦で家事専業をうらやましく思っているのは十三・七%しかない。専業、兼業を問わず一般に、家事以外の仕事をしたいという意識は強いと思われる。これを年齢別にみたのが第1図である。

この図から、専業主婦が現状に満足できず、家事以外の仕事をしたい意向は非常に強いようであるが、五十代以上になると、養望度は五十%と低くなっている。これには、年齢的な限界から職業につく可能性がなくなったという、一種のあきらめ因子が働いているのかも知れないし、また、世代的に受けた教育の影響もあるのかも知れない。

### 〔子供数と養望度〕

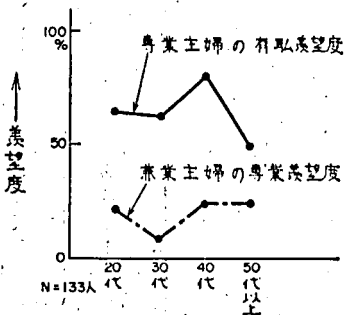
主婦の生活は、子供の存在によって大きく変わってくる。そこで、子供の数と養望度の関係をみた。まず、被調査者の子供数分布は第2図の通りである。今回の被調査者は、家庭にとどまっている主婦は子供が多い、などという特別な傾向はみられず、専業・兼業とも子供数についてはほぼ同じ条件であるが、子供のいない主婦は、兼業主婦の方がやや多い。

### 〔三十代の養望度〕

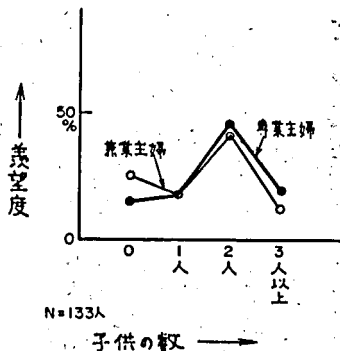
ここで、被調査主婦は結婚生活を始めたばかりの若いミセスから、孫のいるような年齢層まで広がっているので、一応三十歳以上の主婦層に焦点をあて、この層と全体とを比較してみた。三十歳以上と区切った理由は、三十歳という年齢を、一応出産を経験し、家庭生活も安定した年齢と考えてもよいかと思ったからである。

まず、専業主婦については、第3図に有職養望度と子供数、および年齢層についての比較をしてみた。グラフからわかるように、兼業主婦に対する養望度は、子供の数にも、また年齢にも関係なく、一般に高いといえる。子供がない場合

第1図 年齢別養望度



第2図 子供数と養望度





は、一応主婦として安定した生活に入っていると思われる三十代以上では、百分の主婦が有職をうらやましく思っているが目立つ。

〔兼業主婦は、だいたい満足〕

兼業主婦の専業満足度は、第4図に示した。このグループでは、全体と、三十代以上の年齢層とでは、はっきりとした違いがみられる。三十代以上の兼業主婦は、子供の数には関係なく、一般に家事専業に対する満足度は低い。しかし、子供数が三人以上になると、さすがに疲れを訴える母親が多く、専業満足度も二十・二%とやや高くなっているが、それでもなお残る七十七・八%の母親は、三人または四人の子供を持ちながらも、家事専業になりたいとは思っていない。三人以上になっても仕事を続けている主婦は、それなりに日常生活のサイクルも定着し、家庭と職業とのバランスがうまくいっているのではないだろうか。これはうまいといっている人だけが、三人以上子供を持っても仕事を続けられるということかも知れない。

二十代の若い主婦をも含めた、被調査

者全体の傾向としては、子供一人のときが、家事専業をうらやましく思う度合いが、最も強い。第4図の、二つの曲線の違いは、二十代の主婦によるものと考えられる。二十代で子供が一人産まれたときというのは、生活のサイクルがまだ出来上がっておらず、精神的にも動揺が大きいことがうかがわれる。

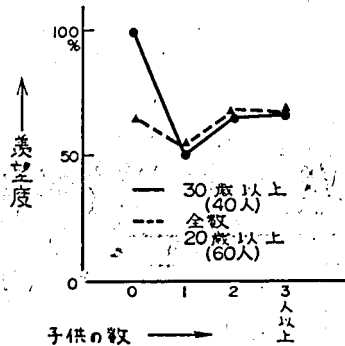
〔うらやましい理由〕

専業主婦と兼業主婦の中で、お互いに相手のグループをうらやましく思う理由については、調査数が少ないこと、複数回答が多いことなどから、表や図ではあらわしにくいので、その主な回答を列挙してみたい。

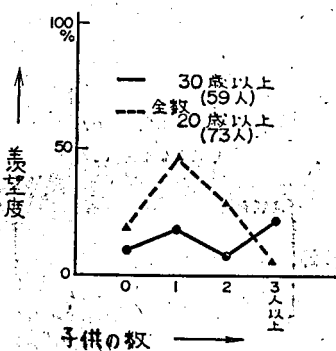
●専業主婦側

- 専門を生かしたい。才能を生かしたい。
- 収入がある。経済的に独立したい。
- 社会とのつながりが欲しい。社会参加。
- 刺激が欲しい。精神的に若くいられる。
- 人間的成長を求めて。充実した生活。
- 規則的生活ができる。
- 育児より会社の方が楽だから。
- 家事だけでは満たされない思い。
- 資格を持っている。仕事への意義。

第3図  
専業主婦の有職満足度と子ども数



第4図  
兼業主婦の専業満足度と子ども数



# 兼業主婦側

○趣味の時間が持てる。

○身体がきつい。

○家事が好き。やむをえず働いている。

○精神的に余裕がない。

以上が両グループのあげた理由であるが、専業主婦の側には情緒的な回答が多く、兼業主婦の方からは具体的な回答が多かったようである。

## 〔将来については？〕

専業主婦の中で、現在は別に兼業主婦をうらやましいとは思わない、と答えた現状肯定グループについて、将来もそのままよいのか尋ねてみた。また、兼業主婦については、専業主婦をうらやましいと答えたグループに、将来について質問した。これらの両グループとも、主婦が職業を持つことに否定的かと考えたためである。(第2表と第5図)

しかし専業主婦の現状肯定グループでも、その三十八%が、将来は家庭に無理のない程度で仕事を持ちたいと答え、家事専業から逃れる意志を表わしている。

また、兼業主婦の家事専業希望グループ十人中三人(三十%)は、専業をうら

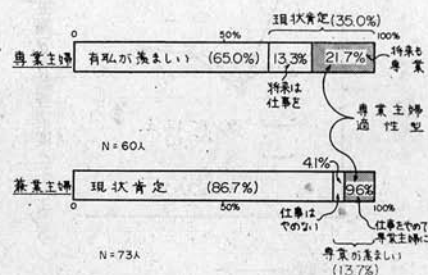
やましいとは思わが、仕事をやるつもりはないと答えており、生活の疲れなどから家事専業をうらやましく思うことはあっても、本質的には家事専業志向ではないと考えられる。

そこで、最後に残るのが、専業主婦の二十一・七%の、将来も家事専業で満足と回答した人たちと、兼業主婦の九・六%を占める「現在人手不足、夫の病氣などでやむをえず仕事をしているが、将来は家事専業になりたい」と答えた人たちである。これらの主婦は、両グループとも、「家事が向いていて、大好き」と答えた。家事を楽しみ、それに没頭したというタイプで、いわば、専業主婦適性の女性と思われる。このいわゆる主婦適性と思われる回答をしたのは、専業主婦・兼業主婦グループを合わせて二十人で、被調査者総数の十五・〇%に当たる。

以上の結果では、一般に家事以外の仕事をもちたいという傾向は非常に強く、多くの主婦にとっては、専業主婦という立場は、あまり魅力的ではないようである、と一応いえるように思う。

まとめ 飯田順子／植松節子  
図表 月江政美

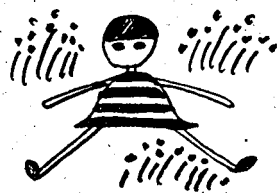
第5図



第2表



# 主婦が 働く女へ



有職婦人と  
エゴイズム

関 妙子

先日、ある会合の終わりに、一分ずつ近況を語って解散しようということになった際、私は職業婦人のエゴイズムに憤慨している、という一言を述べました。それがこの原稿を依頼されるきっかけとなったのですが、当時私は、PTAの役員選びで頭に来ていた時期でもあり、主婦生活十九年の間に蓄積されたもやもやの一端がこの言葉となつて吐き出されたとも言えます。

テーマに忠実に話を進めるとすれば、このエゴイズムということから出発するのが妥当かと思ひます。「婦」の字をとって「職業人」とした方が、より公平かと思うのですが、この場合、女の問題を考えると、点から職業婦人としましょう。独身あるいは夫婦だけ、または、自分が一家の生計を支えている場合を除いて、婦人が職業を持ち、それを貫ぬこうとするには、それを支障なく遂行出来るだけのよほど良い条件に恵まれていない限り、どうしてもエゴイズムが問題になります。例えば幼児がいて働こうとする場合は、自分が職場にいる間、必ずだれかがその子を保育しなければなりません。そのだれかというのが、適切な保育施設に恵まれない場合、年老いた親やその他の肉親が、犠牲的精神を発揮させられている例が多くあります。預けられる子にしても、その子の性質によっては、託された相手によつて本来の姿をゆがめられて育って行く例を多く見ます。これらは母親のエゴのために周囲や子供が犠牲になっている例です。

更には地域社会の仕事に対するエゴです。例えばPTAの役員——これは町会役員などのように強制輪番持ち廻りではなく任意ですから、何らかの理由があれば逃れられる性質の仕事です。これはもちろん無償の労働ですから、子供のためにという純粹な気持ちの持ち主、地域活動の場を求めている人、月謝の要らない主婦大学(朝日「ひととき」の発言)——と思う人など以外はだれしも逃れたい種類のものです。そこで逃げ出す

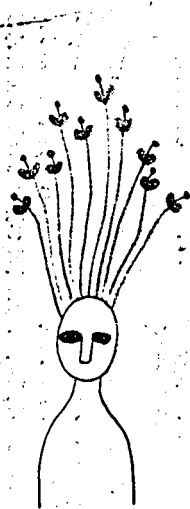
のに最も手っ取り早い口実が「仕事を持っています」なのです。けれどもPTA、町会、子供会などの仕事を實際に手掛けてみてわかることは、これらの報酬につながらない地域的な仕事というのは厳然として存在し、だれかがそれを処理しなければならないということなのです。その仕事を、奉仕的精神に富んだ善良な人たちだけにゆだねていいものでしょうか。子供がそろそろ手を離れて余暇が出て来た、この辺で小遣い稼ぎにでも出掛けた方が老化防止にもなるし、面倒臭い役を押しつけられなくて一石三鳥というものだとばかりに勤めに出る人が相当にいるのです。しかし、そのように自分の時間を自分たちだけのために使っているものでしょうか。仕事に出られる人というのは、それだけ家事負担が少ないということなので、大家族の人、幼児や老人、病人を抱えた人などは仕事どころではない、毎日毎日が必死の生活なのです。そういう人たちのところへまたまたPTAなどの役がまわって来るのです。暇をもて余し、小遣い稼ぎに勤めに出た人が、仕事がある「の大義名分のもとに、そのような無償の労働には見向きもしないというのは、どんなものでしょうか。つまり極言すると、エゴイズムを主張する人が外に職場を求め、犠牲的精神に富み、周囲の人を思いやる心優しい善良な婦人は家庭に残って家の内外の無償の労働にいそむということになるでしょう。

これは単に婦人との間の現象ではないように思えます。家庭の中から男と女の一般を見てみると、どうも

そんな気がして来るのです。分業の名の下に男は外で生活の糧を稼ぎ、女は家事育児をする。夫婦お互いの一日の労働量によって違うけれども、一般的に言って、男が外の仕事から帰って来ると、殿様風を吹かせて茶をすすりながら読書など楽しみ、女は終日家族のサービスのためにばかり単純な作業の連続にきりぎり舞いしている風景を見ると、古代に奴隷ないしそれに近いものがあつたころには、彼らに任せていたような生活の底辺的な仕事を全部女に押しつけて、その上にあぐらをかいて男性が優雅高尚に文化の華を咲かせているような感じがします。つまり最初に分業の名の下に出生した生活形態なのですが、それによって男性社会の機構が定着してみると、男性にとっては、その方がはるかに居心地がよいのでしょう。男性は何の社会的なあるいは家庭的な抵抗もなしに、その点でのエゴは主張出来るのです。

女性もエゴを主張して自己の能力を開発しようと社会に進出する——これが男女平等を唱えたきっかけであり、また実際に社会で働いてみた場合、男性社会の壁にぶつかって、その不平等を打破すべく、平塚らいてう以来、多くの女性運動家たちが努力されて来たのです。そして事実、数々の社会的権利を獲得し、現在もお、ウーマンパワーやリブの人たちがそのために健闘していられる努力も認めます。しかし、男女の性質から考えて、男性が築き上げたこの居心地よい男性社会の支配権を、そう簡単に明け渡すとは思われません。私

のような不精者には、むしろ、法律的な不平等を徹廃するとか、能力だけで勝負出来る分野を除いては、殊に人間関係が大きくものを言う組織社会などでは、男女



の平等を唱えるのは心情的に徒勞の多い作業のように思われます。私はむしろ、女性には、①無理のない育児をした後で、②別の分野で進出し、理想社会を築くのも一つの方法ではないかと思うのです。

①に掲げたこの育児ということを私はもっと大切に考えたいと思うのです。これは私の以前のからの持論なのですが、いろいろな職種の中で、人間を成育する仕事は非常にクリエイティブで興味深い仕事です。どんな仕事でも、その過程では、単純な労働の繰り返しばかりきものですし、育児はその最たるもので、いかにもつまらない仕事のように思う人もいますが、問題は、その仕事への接し方です。人が生まれ落ちてからどのような過程で成長していくか、それを四六時中観察していることは大変面白いことです。私は最初の子を育てるとき「個体発生は系統発生をくり返す」という説をよく実感したものです。また同じ人間でも、時期により人により、千変万化で、育児とは子供のために

育ててやるのではなく、自分の人生経験や人間観察のために行なっていると考えることも出来ます。

それともう一つの価値は、自分が「かけがえのない存在である」ということです。家族はお互いにかかけがえのない存在であることは大方の認めるところですが、職場は、はたしてどうでしょうか。大企業や官庁などでは、始終人事交流がありますし、AさんがいなくなればすぐBさんを補充し、極端に言えばAさんもBさんも社会に於ては差し替えのきく歯車の一つではない。この点では総理大臣でも大統領でも変わりはないでしょう。けれども母という存在は、その家族にとって簡単には差し替えのきかない存在であるという点で大きな意義を持っていると思います。(いつまでもそうであるとは言えないかもしれませんが、少なくとも子育ての時期には、その大切な役割を放棄してまで納まりたいと思うほど立派な歯車は、そうさらには見つからないでしょう)。

②の社会活動とは、近頃の言葉で言えば、住民パワ―でしょうか。地域の住民の結束によってなされるべき仕事は沢山あるのです。既存の例えばPTA、地域婦人会、子供会などの組織によってなされる仕事は沢山あるし、無償の労力が要求されているのです。さらに、私の描いている夢は、福祉の貧困はこれら住民組織の活動によって補うべきではないかということですが。新聞などで報ぜられる通り、多くの施設が人手不足に悩んでいます。これらを現在支えているのは、少

生き方ではないかと思っています。



主婦は

家庭の中に

塚本和子

近頃家庭を持った婦人もどんどん職場へ出て行く傾向にあります。このことについて考えて見たいと思います。

まず第一に女の人が外で働くというこの意味ですが、これには①経済的な目的、②自分の能力を生かす、③社会に役立ちたい、というようなことが考えられると思います。

今述べて来た①②の生き方は、何のことはない、従来の良妻賢母、老いては慈善の有閑マダムに過ぎないではないかという感じですが、男女の本性が変わらない限り、やはりそれだけの必然性があって落着いている生活形態のように思われます。分業上、女は男に経済的に依存した形をとつても、実質的には必ずしも主従の関係であるとは言えません。男は見えつぱりな動物ですから、表に立てて大切にすれば、優越感に酔ったまま思うようにリードされている場合もあります。名を捨てて実をとれる戦法で、既成の組織にとらわれない世界で価値ある仕事をするのも、一つの女の

れは、あくまでも一般的なことであって、個々の家庭の事情や考え方によって違ってくるでしょうが、まず、①から考えてみたいと思います。

今、外で働いている女性の大部分はこれに属すると思います。経済の主力を女性が担っている場合は論外ですが、夫の収入で一応成立している家計をさらに豊かにしたいという目的で働く場合、何をもって豊かとし、何をもって貧しいとするかは、主観の問題ですが、収入を得ることで失われる物をしっかりと見つめ直す必要があるのではないのでしょうか。



②、③についても、自分の欲求ということと家庭における責任ということが問題になると思うのです。外に出て自分の能力を生かす、社会に役立つということが自分の家庭を放ってまでなされるべきなのか、いかに有能な女性でもある時期自分を殺さなくてはならないときがあると思うのです。それは結婚をし、家庭を持ったという責任において、自らその枠の中に入ったからにはそれによる束縛もやむを得ないと思います。はじめは夫と妻が家庭内の仕事を分けあって、すべて平等にしても、子供が生まれるという事態になれ

ば、どんなに夫が協力したとしても、妻の側の負担は重くなりますが、これは結婚したからには当然予想される状態で、それを無視することはできないと思います。本心に②、③のことを女性が望むのなら、やはり仕事か家庭かの二者択一を迫られますし、これは本心は男性も同じだと思うのです。

けれども、現実には両手に花という形を当然のものとして家庭を持った婦人が社会へ進出しているわけですが、はたして本心に両手に花を持っているのでしょうか。それを持ってない者のひがみかも知れませんが、子供が生まれたら年寄りに面倒をみてもらう、保育園に入れるなどして外で働き、それで職業と家庭を両立させていると考えるとしたらそれは間違っているように思います。その人が外で働いている間、その人の分を肩がわりしなくてはならない人がいるということは本心の両立とは言えないのではないのでしょうか。洗濯とか掃除、炊事などは、いわば機械的な仕事ですが、育児を他人に任せてよいものなら、親としてこれほど楽なことではないと思う位、子供を育てるということは大変なことだと思ふのです。自分の今していることが、何らかの形で子供の人間形成に影響を及ぼして行くわけで、親が育てるよりもっとよい育て方はいくらでもあると思います。自分で産んだ以上、好むと好まざるとにかかわらず育てて行かなければならない義務があると思うのです。私自身その責任から逃れたい願ひは切なのですが、逃れられない以上、今おかれた状況の

中で、いかに自分を生かすかを考えて行かなくては  
思っています。平凡な主婦として、大げさに自分の能  
力をうんぬんするのではなく、一見死んだような状態、  
家族のふみ石のような存在であっても、そのことによ  
って子の中に自分を生かすこともできますし、それを  
自覚さえしていれば、はたで見るとどみじめな状態で  
はないと思います。

今、家庭の主婦は三食昼寝つきなどと悪口を言われ  
ますが、それほど家庭婦人が無自覚に妻の座に安住し  
ているとすれば、それと同様に外で働く女性の大半は  
情性で職場へ通っていると思います。家事というもの  
は外の仕事に比べて決して楽なものではない。私にと  
ってはむしろ苦痛に思われますが、それだけに、すべ  
て我がもの、我が世界という感もあり、その中で何を  
思うことも自由ですし、又その中で自分の能力を生か  
すことも、社会に役立つことも可能だと思えます。

ただ、それは夫と妻の共同生活ということ的前提と  
して、夫は経済面、妻は家政という分担の上のこと、  
いったんそのバランスが崩れたとき、妻の側の経済的  
裏付けが問題になります。だからといって女性の経  
済的独立だけがすべてとは思いません。外で働くこと  
が何か進歩的で、専業主婦は無能の故に家庭から出ら  
れないように思われますが、主婦として専念すること  
も外で華々しい仕事をするに負けずばらしいこと  
だと思えますし、大部分の女性はその方に適性があ  
るのではないかと思うのです。



一つの事件を  
めぐって  
考えたこと

吉野由喜子

日常生活の中で、私たち専業主婦は、家を留守にし  
て働く主婦に対して、種々の非難の目を向ける場合が  
ある。毎月決められている道路の清掃日に出てこない  
とか、ゴミの出し方が悪いとか、配達された荷物を受け  
取らせるとか、PTAの役員にならないとか、他方から  
みればとるに足らない事柄かも知れないが、主婦であ  
り、母親である私たちが、毎日の生活の中で、逃れら  
れないものであるだけに、うらみも積み重ねられて行  
くのではないだろうか。そして、働く母を持つ子供が、  
人に迷惑をかけるような事件を起こしたときに母親た  
ちの非難の声は、それみたことかと、あちらこちらで  
ささやかれ、広がってゆく。

しかし、一方では、主婦たちでにぎわう夕方の商店  
で、しっかりした態度で買物をしている小学生をみて、  
専業主婦の母を持つ我が子と比べ、共働きの子は、  
何としっかりしていることだろう、やれば出来そうだ、  
私も外に出て働いてみようかなどと思ったりする。



「子供をめぐっての争いもろのうわさは、主婦たちの間の話し合いの大部分を占めてゐる。しかし、こういった話し合いの中には、当然ながら働く母親は入っていない。また、一か月か二か月に三回ぐらいの割合で開かれるPTAの集まりにも、働く母親は出席出来ない。これも当然のことなりである。井戸端会議であるが、PTAの集まりであるが、大部分の主婦は、くだらないことだと思ひ、少くも社会に目を開いていると自負する主婦はなおさらに、まして、社会に出て働いている主婦たちはそうなのかも知れない。

しかし、このところをもう少し考えてみて欲しいと思う。前に述べた、悪いことをする子供の母親に、直接注意してあげたいと思つても、全然面識のない人には、なかなか言えないことである。また、学校の担任の先生も、留守がちの母親に会つて話す機会を作るのに苦労することである。子供の友人の母親との間に交流があれば、非難的は、小さいうちにとり払われることが多い。

二年前のことになるが、当時小学校六年だった息子の子転車が盗まれる、という事件があった。盗んだ子供は、中学二年生、マンションに、サラリーマンの父親と、職業を持ち、週末にしか家に帰れない母親との三人で住んでいた。母親は、警察の少年係の部屋でその子が盗んだと言うまで、我が子を信じていた。問題の子転車は、その子がどこかに隠してしまつて、みつからないままに二万円を弁償することになったが、母

親は、夫である。その子の父親に内緒にしておきたい事情があるので、二万円が出来るまで、しばらく時間が欲しいということだった。

この子供が、この母親の庇護のもとにどのように成長して行くのか、なぜ父親に内緒なのか、両親の責任において、子供がまちがった道を進まないようにしなければならぬのではないのか、なぜ母親が週末しか帰れないような職業についていなければならないのか、警察の少年係の仕事はこまで、で終わりののか。いつも子供に目の届く位置にいる母親以上に、働く母親は、もつとしっかりと子供をつかむ努力をしなければならぬのではないのか、と私はこの事件で、いくつもの疑問を持った。その後、この子供はその自転車を乗りまわしているし、私は、自分の子供が、盗まれた方で良かったなどと思つてゐる。

この母親も、子供の友人の母親たちとの話し合いの場がなかった。母親同士の交流があれば、たとえ、盗んだ自転車を他の場所に隠して置いたとしても、我が子の不審がわかつたのではないかと思う。

女として、この母親に、私は同情を寄せることができる。だが専業の主婦としては、さいの河原の石を積み上げてゐるような毎日の家事の単調さ、不満のけい口のない自分の日常の日々を思うと、底には、外に出て働く主婦への敵意のようなものが、かすかにでも流れているのではないかと感じるのである。

家庭において、子供を育てるのはもちろん、両親の

意向と責任によって行なわれているのであるが、世間的に悪い子供が現われた場合、非難されるのは母親であり、それが働く母親の場合には、同じ母親である家事専従の母親も、その非難の列に加わる。

やりきれないものだと思う。そして、現実の問題としては、子供を育てるということを、母親同士敵対することなく根気よく考え、実行できるよう努力していきたいと思っている。



## ある 風邪の日に

青山由紀子

五日前からの風邪が、休むひまもないまましだいに重くなって、その日は九度を越える熱だった。

夫と子供たちを送り出すと、倒れるように、ふとんの中に転がりこんだ。

横になると同時に、日ごろの疲れがどっと出て、吸いこまれるように、とろとろとまどろんだ。

ものの三十分もたったころだったろうか。

「青山さん、青山さん」、玄関でたたまたましい声。

何ごとかと、よろめく足をふみしめながら出てみると、「電報、電報です」

さては、実家の老父が……と、ドキッとして開いた電文は、「セイリキユウカヲユウキユウニセヨ」

夫の勤める会社の労組、女子組合員からの要求であった。「キユウカ」という四文字は、火花のようにチカチカと目の前で光った。

休暇、——そうか、働いている人たちには休みがあったのだ。しかも、日照のほかに、生理日まで休めるのだ。主婦には、気の遠くなるようなうらやましさであった。

それを有給にしてほしいという。私はただ、ため息だけをつきたかった。

キユウカ、ユウキユウ、キユウカ、ユウキユウ……赤い文字が頭の中に光っては消え、消えては光る中で、夢とうつつの間を往き来するような眠りをむさぼったのは、三十分たらずだったろう。

「青山さん、青山さん」

玄関の大声は、またしても電報であった。

そして、その三十分後、またその三十分後と、配達時刻を指定したかのように、電報の波状攻撃は続いた。夫は、ある会社の総務部長である。部長とはいっても、中規模の会社の悲しさ、給料は安く、負担は重い。管理職ゆえに残業手当のつかない残業が、月に百時間は役に越える。

夕食は、夜九時。一本の銚子をあけて、「働く人の

要求は多様になってきたからなあ……」と、ポツンとこぼす。組合のなかった会社で組合を作ったのは、ほかならぬ夫であったのだが。

「旗を振ったころのほうが、ずっと楽だったよ」

その夫に、妻の私は言うことばを知らず、だまっただかすきを満たすだけだ。

「疲れた」。けさも、重い足どりで出て行くうしろ姿に、私は自分の発熱を言い出せなかった。

生理休暇を有給にしなければならぬのなら、なぜ、管理職の残業は無給でいいのだろう。なぜ、主婦には休暇がないのだろう。

主婦は生理休暇どころではない。きのうなど、八度五分の熱をおして、一日働いた。町会の草取りにも出た。

ヒューストンの基地のように、家を守る主婦の仕事は重く、限りがない。日曜日、朝八時まで眠ることをゆるされるのは、年に一度あるかないか……。

守られなければならないのは、働く女だけだろうか。生理休暇はおろか、産前産後の休暇さえもろくにとれない主婦たち。その主婦がささえるエネルギーで、夫は無給の残業をし、働く人たちのしあわせを守ろうと働き続けているというのに、一方的に「敵」ときめつけられ、ののしられ、攻撃を受けなければならぬのだろうか。

きょうも夫は、「疲れた」と言って帰るだろう。女に生理休暇が許されるのなら、男にも生理休暇が許されていいはずだ。働く人はかりでなく、家を守る主婦

たちにも……。

夫が帰る前に破り捨てようかと、電報の束を握りしめながら、できることならば、私も同交の席に出席させてもらいたいと思った。

人間なら、だれしも人間らしく生きたい。それがゆるされていないのは、単に経営陣が悪いのだろうか。

もっと大もとの、社会全体の人間不在が問題なのではあるまいか。

社会の吹きだまりのようところで、息をひそめて暮らしている主婦の上も思いやってほしい、と四十度に近い熱でぼんやりかすむ頭で思い続けた。



地域を  
見つめ直そう

——働くことだけが  
生きがい——

若林高子

「女も男と同等に働くべきだ、働くことで視野もひろがり、人間性も豊かになる」私もそう信じて働いて来た一人だが、子供の出産を機に（フルタイムの職場を退き）家庭に入ってから、この考え方に疑問を感じている。

一部のエリート女性とは別として、大部分の働く女の労働力の位置づけは、アメリカ軍（男性）の下での南ベトナム軍（女性）のようなものではないかと思う。大企業を頂点とする産業のピラミッド構造の中で、またそれぞれの企業におけるピラミッドの中で、男も女も能力さえあれば好きな仕事ができるなどというのは夢にすぎない。まして女は、底辺から地上へ昇る階段すら途中で切れている場合が多いのだ。

私は経済的な理由からやむなく働いていたので「出世など問題ではない、仕事さえ面白ければ、給料は、男の半分でも幸せ」と、ばか正直に努力し、悪戦苦闘することこそ生きがいと考えていたが、今ふり返ってみると高度経済成長のカケ声にただおどらされていただけではないかと思うのである。

最近、不況が深刻化して、女子労働者はまづ先にクビを切られている。これは働く女の先頭だったウーマンパワー論者の「働け働け」のカケ声もまた、企業側にとって都合のよいときだけしか利用されなかったことを物語っているような気がしてならない。

この一年、私は自分の住む小金井市の市民運動に参加して、いろいろな意味で啓発された。組織の中で働くことに生きがいを求めない若者たちは食うための最低限の労働以外は、市民運動にエネルギーを注ぐ。それは働くことを至上とする出世タイプの中堅（忠犬？）管理者とは全く違う生き方のように思われる。経済成長が何をもたらしたか、そこで働くことはどういう意

義があるか、深刻化する環境破壊や公害を食い止めるには、何をなすべきか……新しい時代をになう若い世代の意識は、働くことで豊かな社会が来ると信じていた世代のものではなく、そのもたらした弊害から出発している。



既成の組織（企業・労組・政党）から独立し、真に人間性の回復を目ざす運動は、今、日本のあちこちにひろがりつつあるようだ。高い理念をかかげる市民運動、消費者の主権を取り戻す消費者運動、住民の権利を守る住民運動、これらは日本全国で三千以上もあるという。そこに参加する主婦も専門家や研究者も、数はまだわずかだが、本当に人類が生き残るために、何をしなければならぬか、真剣に語りかけてくれる。それは日和見的でおざなりの講義でも企業奉仕型人間のためのチョウチン持ちの話でもなく、そのどれもが私にとつては意義深いものばかりで、この一年、本当の意味で視野がひろがって来たように思う。

巨大な資本と科学技術のもたらした数々の公害に立ち向かうには、学際で多くの人々の協力が必要であり、その連帯にたつたときにのみ、本当に人間同士のつな

がりが生まれるのではなからうか。まず足もとの地域を見つめ、その改革の実践の中から、地方自治の復権を目ざそう。地域の小さな川を清流に戻せなくて、どうして日本の海をきれいにできようか、と考えたとき、一地域の問題はより大きな問題解決への糸口になる。私には今のところこういう地域に根を下ろした運動がたとえ絶望に近いほど困難なものであろうとも、わずかながら、先のほうに光が見え、世の中をいくらかでも動かしつつあるように思われる。

女が働くということは、やはりどこかで、大量生産、大量消費の一役を買っている。働く職場で、あるいは家事の合理化という名の使い捨て、資源の浪費の中で、大資本を中心とする巨大なピラミッド型の組織の中で働くことを通して女が本当に解放される余地はあるのか、それが真に女性全体の解放、あるいは子孫のためになり得ることなのか、私はその点を直視した形での明快な解放論をきいたことがない。経済的自立と引きかえに失われる精神的自立と時間の自由は、特に女の場合、あまりにも大きすぎて、前途に光などさし込んで来る余地はないように思われる。

「すまじきものは宮仕え」……アメリカ軍たる男性の顔色も決してさえてはいない。むしろ管理社会でしごかれ、地域に目を向けるにはあまりにくたびれはてた夫たちに代わって、子孫のため、人類のため立ち上がれるのは、これからの若い世代と、時間的にも行動の自由な主婦たちであろう。その立ち上りを期待する

声はむしろ男性側からきかれる。(花森安治、藤原弘達、松田道雄など)

家事、育児を切り捨て、地域社会から浮上した形で女の生きがい論に私は賛成できない。家事(生活)を公害の原点として見つめ直したとき、次の言葉のほうにより説得力がある。「世界最高の日本の公害を、いささかでも食い止めているものは住民運動しかない。過去も、そして残念ながら当分未来も、公害を減少させ、あるいは未然に防止する可能性をもつものは、法律や条例のような制度的なものでなく、眇たる住民運動だけが頼りである。もし病める都市の未来に希望があるとすれば、その基盤は住民の運動において他にあり得ない」——宇井純。

髪の毛をふり乱して働いていた間、私は汚れた川や海にも、失われる緑にも、滅びゆく鳥や小動物にもほとんど傷みを感じているヒマはなかった。それはいつの間にか都市がコンクリートのジャングルに変わっていくように、私の心もまたコンクリートのようになりつつあったのだと、反省している。

古代ギリシアもローマも緑を切り倒して都市を石でかためたとき、滅亡の一步、踏み出したという。日本はまだ滅亡への道をたどりつつあるのか、それともまだ救える余地があるのか、主婦も、働く女も、共にカゴの鳥から抜け出して、今、自分にできることは何か、まず自分の足もとを見つめ直すことが必要だと思う。

(三多摩問題調査研究会所属)

# 1 日 ☆

## 私のこの優雅な1日 K.H. (主婦)

家族 夫

子供3人(小1・小6・中3)

- 6:30 夫、起床、ひとりで朝食を食べる。
- 7:10 夫、出勤、見送らない。
- 30 私、起床、子供3人を起こす。
- 45 テレビを見ながら朝食、(パン、ハム、レタス、紅茶)
- 8:10 子供たち登校。
- 15~45 テレビで「鳩子の海」、ニュースを見る。
- 45 朝食の後片付け。
- 9:10 前日の新聞に目を通してながら切抜き。
- 9:30 片付けをはじめるが、前日の洗濯物をたたんだり、私の机の上の山を整理したりで手間取る。
- 途中思い出して、ごみをまとめ、ごみバケツを出しに行く。
- 10:00 掃除機をかける。前日はしていない。
- 10:30 小6の次男のやった問題に○×をつけ今日の予定を作る。
- 11:00 原稿を書こうとして机に向かうが書けず、新聞投書原稿など書いてしまう。
- 12:00 昼食にしようとして、冷蔵庫を開けると、ゆでた栗があったので、昨日の新聞に出ていたマロンケーキを焼く気になり栗の皮をむいて砂糖を入れて火にかける。
- 12:30 食事、(ハム入りラーメン、漬物、煮豆)
- 1:00 お菓子を作りはじめる。
- 1:30 小1の長女帰宅、自室で宿題。

- 2:00 天火にお菓子のたねを入れて、後片付け、便所掃除、運動靴洗いをして新聞を読む。その間長女は習字のけいこ児童館に出かける。
- 2:50 ケーキを天火から出す。
- 3:00~3:00 寝ころがって読書。「主婦とおんな」
- 3:30 長男(中三)帰宅。
- 4:00 次男帰宅。
- おやつ、ケーキの出来ばえにはば満足。
- 4:30 長女帰宅。
- 5:00~5:30 長女ピアノの練習、そばで見る。
- 5:30~6:30 おつかい。長男のメガネ作りのため長男を連れて行く。本屋へ寄り、子どもの参考書と婦人公論を買う。
- 6:30 食事の支度。
- 7:30 夕食(いかのさしみ(冷凍)、大根と生揚げ煮付、なすの味噌汁、トマト)。
- 8:00 長男が風呂に水を入れて、火をつける。
- 8:30 夫、帰宅、食事。
- 9:00 夫が夕食の後片付け、私は婦人公論を読んでいて動かない。
- 長女入浴就寝(ひとりでやる)。
- 10:00 次男の勉強を見てやる。
- その間主人は勝手にコーヒーを入れてケーキを食べている。
- 11:00 夫、就寝。
- 私、入浴。
- 30 床に入って本を読む。
- 12:00 就寝。長男はまだ起きているらしい。
- 注 洗濯と掃除は原則として1日おき。

## 必要最小限の合理化生活 S.H.

(化学技師)

## ☆ 私 の

家族 夫

子供2人(4才女児双子)

6:30 全員起床。

子供たちは前日用意した服に自分で着替えるので手数はかからない。

6:30~7:00 私、朝食の仕度、夫、寝具片付け。

7:00~7:30 朝食(パン、目玉焼き、生野菜)……毎日同じ献立。

私は一足早く食事を終えて化粧。

7:30~7:50 私、食事の後片付けをして夕飯用のお米をどぎ、電気釜のタイム・スイッチをセットする。

夫、ほうきで部屋の掃除。(ふき掃除は週1回)

7:50 私、子供たちを連れて家を出る。

8:00 保育園に着き、子供を預けて、バイバイ。

8:10 夫、出勤。

9:00~午後5:05 会社で仕事。技術系なので、仕事は自分で計画して行なっている。

5:05 退社。「遅くなつては大変」とそればかり考えながら迎えに急ぐ。電車の中で献立を考える。

5:50 保育園で子供を迎え、3人で買物をしながら帰路につく。

6:15 帰宅。夫も同時帰宅。

6:15~6:45 私、食事の支度。ご飯は、もう炊けている。

夫、前日の風呂の水をあげて洗い、風呂にお湯を入れる。

子供、2人でテレビを見ている。

6:45~7:30 夕食(肉ソテー、野菜いため、味噌汁、子供用冷凍グラタンを電子レンジで温める)

夕食のときには子供の話を極力、聴いてあげようとするが、話が弾みすぎて、食べるほうがお留守になるので、つい「早くしなさい」と言ってしまう。

7:30~7:45 夕食の後片付け。

子供たちは夫と「きせかえ」などして遊んでいる。

7:50~8:20 私、子供たちを1人ずつ入浴させる。

8:40 子供たち就寝。

夫、入浴。

9:00~9:30 洗濯(毎日)

前日の洗濯物が乾いているのでたたみ、室内に干す。

9:30~11:00 テレビを見たり、読書などする。この時間に縫物なども近ごろは出来るようになった。以前子供が小さいころ、雨の日の朝、保育園まで1人をおぶい、1人をだっこして通つたころに比べると、ずいぶん楽になったものだと思う。この時間には飲食はしない。

11:00 就寝。

注：\*買物は日曜に火曜までの分ぐらいは買っておく。

\*仕事は自分の自由にまかせられており、遅くなるときは前もってわかるので、朝、夕食も作っておき、夫に電子レンジで温めたりしてもらふ。

# 1 日 ☆

## 老人の世話に明け暮れる毎日 T.N.

(主婦)

家族 姑 85才(病気ではない)  
夫 48才(会社員)  
子供2人(中2, 小5, いずれも男)

- 6:00 私, 起床。電気釜のスイッチを入れ、やかんをコンロにかけてから前庭掃除。
- 6:15 新聞来る。夫の寝室に届ける。
- 6:30 掃除終わる。子供たちを起す不起きない。あきらめて朝食の支度。
- 6:40~7:00 朝食の支度をしながら 5 分刻みで子供たちを起す不起きない。
- 7:00~7:05 子供たち, やっと起きる。
- 7:10 朝食(ごはん, みそ汁, 白すおろしあえ, 焼魚(鮭), 生野菜, つけもの), 出来上り。
- 7:20 夫を起す。5度目にやっと起きる。
- 7:20~8:00 子供たちと夫, 20分刻みの間隔でバラバラに食事して出かける。
- 8:20~9:00 洗たく機に洗たくものを入れて, トイレ, 玄関等の掃除。
- 9:10 姑の寝室をのぞくが, まだ就寝中。
- 9:15~9:25 TVを聞きながら(見ながらでなく)10分で食事。洗たくものを干す。
- 9:30 姑の寝室をのぞくが, まだ就寝中。今日は授業参観なので気が気でない。夫の寝室と二つの子供部屋を急いで掃除。
- 10:00 姑が目を覚ました気配。洗面用具を持って行って, 洗顔してあげる。
- 10:15~10:50 姑食事(みそ汁を温め直す。魚は新しく焼く)。
- 姑が食事をしている間に, 姑の寝室の掃除。ポータブル便器の清掃。
- 11:00~12:20 小学校の授業参観に遅れて行く。後の面談はしないで走って帰る。

- 12:20~1:00 TVを聞きながら昼食の支度(姑にはうどん(かも南ばん), ほうれん草ごまあえ, つけもの, 私は残りもの)
- 1:00 姑を食事に呼ぶが, 就寝中。
- 1:20 姑起きる。うどんを温め直し昼食。
- 2:00~3:15 食後, 姑の話し相手。
- 3:20~3:40 洗たくものを取り入れる。
- 3:40~4:40 アイロンかけとつくろいの。小学生帰る。おやつを出す。
- 4:40~5:10 日用品と食料を買いに出る。
- 5:25 姑にお茶を出す。
- 5:25 中学生帰る。(くだものを出す)。
- 5:30~6:30 夕食(かれいのムニエル, わかめの酢の物, 京菜からしあえ, 吸物, つけもの)の支度。風呂に水を入れる。
- 6:30~7:30 食事と食後の談笑。風呂に火をつける。
- 7:30~7:50 後片付け。風呂わく。
- 8:00 夫帰る。すぐ入浴, その間に夕食を温め直す。酒のサカナも作る。
- 8:30~9:20 夫, 日本酒を飲みながら食事。少々相手をする。
- 9:20~10:00 姑を風呂に入れる(つききりで世話)。
- 10:00~10:40 夕食の後片付けをしながら保存食(かつおの角煮)をつくる。
- 朝食の米をとき, 電気釜に入れる。
- 10:40~11:20 中学生の勉強(英数)をみる。
- 11:20~11:50 ダイニング・キッチン掃除, 床みがき。
- 12:00~12:10 夫の靴みがき。
- 12:10~12:30 私, 入浴。
- 12:30~1:00 親戚に, 姑の代理で手紙。
- 1:00 就寝。



# 職場も家庭も秒読みの毎日 F.S.

(社内報編集)

## ☆ 私 の

家族 夫 45才(会社課長)

子供2人(高3, 高1,  
いずれも男)

- 5:50 電気釜のガタガタという音で目が覚める。毎晩タイムスイッチを仕掛けておき、お釜の沸騰する音を目ざまし代わりにしている。床の中で10分ほど、もたえ苦しんで、6:00起床。
- 6:00~6:06 洗面。
- 6:06~6:48 夫と高校生2人のお弁当づくり(献立は、サケの塩焼、ホウレン草のゴマあえ、こんにゃくの白あえ、プチ・オムレツ)と、朝食(トウフとアゲのみそ汁・野菜サラダ・生卵)の支度。
- 6:48 夫と子供たち起床。洗面所満員のため台所で顔を洗う人があり、10分間炊事中断。食卓のおぜんだて。
- 7:03~7:22 夫と子供たち食事。その間に台所の炊事道具を洗い、身ごしらえ。
- 7:22 子供たち出かける。
- 7:22~7:50 夫は新聞を丹念に読む。その間私は5分間で朝食を終え、全自動洗たく機に洗たくものを入れて、朝食の後片付けと夕食の準備。
- 7:50 夫、出社。洗たくものを洗たく機から取り出して乾燥機に入れる。
- 8:00 戸じまりをして駅まで走り続ける。
- 8:59 すべりこみセーフ。
- 9:00~9:35 社内ミーティング。
- 9:35~午後6:30 1分の休みも、昼食時間もなく仕事。
- 6:30~6:43 会社の近所で夕食の買物。
- 7:58 帰宅。すぐ夕食。みんなが待たずに

食べ始められるよう、寄せなべにする。

- 8:30 夕食終わる。
- 8:30~9:00 お風呂に水を入れながら、夕食の後片付け。その間、風呂ブザーの音で水を止め、ガス点火。
- 9:00~9:15 明日のお米をとぎ、電気釜のタイムスイッチをセット。
- 9:15 風呂がわく。夫、入浴。
- 9:15~10:00 夫婦の寝室とダイニングキッチン掃除。(子供部屋は、各人が日曜に掃除する。トイレや廊下の床ふきは、私が日曜にする)。
- 10:00~12:00 自宅に持ち帰りの仕事があり、ダイニングキッチンでシチュウを煮ながら仕事をする。子供たちは入浴後、勉強。夫はTV見物、のち読書。
- 12:00~12:15 みんなの夜食をつくる(即席ラーメンに、野菜、卵等をプラス)。
- 12:15~12:35 一同夜食。
- 12:35~12:45 乾燥機から洗たくものを出して、たたみつけとアイロンかけ。
- 12:45 夫、就寝。
- 12:45~1:10 明日のお弁当の下ごしらえ(いんげんをさつとゆで、ネギを刻み、それぞれクレップに包んで冷蔵庫に入れる。とり肉は一口に切り、フライの下ごしらえをして冷蔵庫へ)。
- 1:10~1:35 今日受け取った手紙(郷里の姑からの封書)の返信を書く。(手紙類は朝ポストから出し、出勤の途中、読む)。
- 1:40 子供たち寝た様子。私、入浴。入浴しながら風呂場の掃除。
- 2:10 就寝。床の中で朝夕刊をまとめて読む。

# 働く女から主婦へ



ママが働いて  
いてよかった

谷内睦子

私の子は十歳と七歳、二人とも保育園のお世話になった。いま小学生の彼等は、「ママが働いていてよかった」とよく言う。私は最初、それを母親の社会的労働にたいする共感かとうぬぼれていた。しかし、よく聞いてみると、そうではなかった。母親が働くことによって、保育に欠けると認定され、保育園に入園できたことを喜んでいるのである。

彼等にとって、楽しい思い出は、いつも保育園の生活と結びついている。それも遠足とか運動会などの特別の行事よりも、むしろ毎日の園での生活のひとつ、ひとつが楽しくて仕方がなかったらしい。

しかも、こうした現象はわが子たちだけではなく、一般的だったように思う。たとえば夕方、親が迎えにきてても、もっと遊びたくて、帰りがたらない子が実に多い。

私が仕事を終えて保育園にかけつけても、息子が私の姿を見つけて喜んだことは、ほとんどなかったように思う。

息子が私に言う最初の言葉は、「お帰りなさい」ではなく、「チェッ、もう帰るの」であった。すると横合いから悪友が、「ヤーイ、ヤーイもうお迎えだ、ママを見る、いい気味だ」とはやしたりした。息子は暴れたりしなかったが、「あしたはもっとおそく迎えにきてよ、本当だよ」と念を押しながら、帰宅の支度をするのがつねであった。

娘は朝、保育園に着くと、「早くお迎えに来ないでね、おそくしてよ」と私に言うことが多かった。迎えに行くのが遅くなって、園児の中で最後になったりすれば、保母さんの労働時間を私が延長してしまうことになるし、子供たちの食事や入浴のことも心がせくので、私はいつも息せき切って迎えにゆくことが多かった。

しかし子供たちは、親の迎えがなるべく遅いことを

願っていた。いつも遅くまで残っている友達のことを、「○○ちゃんはいいな、いつもお迎えがおそくてたくさん遊べるから」とうらやましがっていた。

お迎えが遅くなることを願うだけではない。息子も娘も、保育園を一日でも休むのをいやがった。そのため、「かぜひくと困るもんね」と言いながら、せつせとうがいをし、「おなかをこわさないように」進んで手を洗い、腹巻きをして寝た。

保育園のどこが、これほどまでに子供たちをひきつけるのだろうか。第一に考えられるのは「禁止」が少ないことである。保育園は救貧制度として発足しているから、幼稚園にくらべると、園庭の面積や施設などの設置基準が低い。しかしそれでも一般家庭や、それを取りまく環境にくらべれば、広い庭、広いホールや部屋である。しかも厚生省の管轄であって、文部省の統制から自由であるから、保母さんたちの自発性を抑えたり、つまらないカリキュラムを強制したりということも少ない。

子供たちは自由に遊びほうけることができるのである。保母さんたちはいつも「大人がリードしないでも自発的に、自力で遊べる子」を育てたいと言っていたが、これは現在の日本の子供としては、まれに見る幸せな環境ではないだろうか。いま幼・保の一元化が叫ばれているが、文部省の脅威にさらされない聖域である保育園が破壊されることを私は恐れる。

第二に、保母さんの定員がふえて、年齢構成も才能

も多様化し、子供たちはそれを敏感に楽しんでいるのではないだろうか。

東京では、区によって多少の違いはあるが、保母一人当りの担当児数は厚生省の基準の約半数であるうか。クラスの編成も、複数担任制をとっていて年齢や性格などの違う保母を組み合わせるようにしている。

「○○先生はとび箱がうまい」「××先生はピアノと歌が上手」「△△先生はお話をよく知っているよ」と子供たちが保母さんたちの個性をそれぞれ適確に評価しているのに驚いたことがあった。

園の定員は九十名と小規模だったから、クラス編成を越えて、全部の子供を保母さん全員が保育するという精神があった。子供たちは、それぞれ自分の個性やその目の気分によってとび箱やなわとびをしたり、自分たちで紙芝居や物語りをつくって昼寝の前にみんなに話したり、自由自在のようだった。

第三は、保母さんたちの職業意識の高さ、熱意と献身であるう。園では、大部分の保母さんが、Tシャツやジーンズに着がえた年長組の子どもたちにマラソンをさせたり、公園や植物園、動物園へと連れていったりと、広い場所でのびのびと飛びまわらせようと一所懸命だった。

物語りや本、紙芝居の研究も熱心で、子供たちも喜んでいたり、保護者会での説明に感動する親も多かった。なすや豆を栽培して、それをみんなで食べたり、あべは蝶を育てたりに子供たちは熱中した。かまぼこの板

や発泡スチロールを利用してかなづちやのこぎりを使ったりもした。

お正月にはこま回しが流行して、みんなが競争で回した。年末にも、会社は休みでも家事に追われる両親のそばで放置される子供たちを心配して、休まないように呼びかけてくれた。版画の年賀状をつくらせ、それを親宛てに出させるとか、たくさんの計画をたてて、年内ぎりぎりまで行き届いた保育が行なわれたのである。

年に三、四回は混合保育も行なわれた。ふだんは年齢別のクラス編成だが、このときだけは、タテ割りのグループがつくられる。



年長の子たちは、小さい子を面倒みたり、いばったり親分気どりになったりし、小さい子は甘えたりしていた。グループごとに競争したり、張り合ったりもしていた。これも子供たちには楽しかったらしい。

そのほか、地下鉄でいも堀りに行ったり、マイクروبスで多摩動物公園に行ったり、親たちの知らない間に子供たちはいろいろと楽しい思いをしている。真夏には、ビニール・プールで水遊びもした。近くの幼稚

園のプールを借りて、泳いだこともある。

このとき保育さんたちは、プールの掃除をし、疲れて眠くなった子を背負ったりもして、親たちが過労を恐れたこともあった。

第四は、保育園と親とが対等の関係にあり、それが子供たちの生活にも好ましい影響を与えたことも大きいのではないだろうか。親、とくに母親にとって、保育さんは働く女性であり、保育者と保護者という立場を離れた関係ができていたように思う。保護者会での発言も、双方が卒直に語り合う空気が強かったし、保育さんの夏休みや労働条件などについても、そうした立場からの発言がよく出た。親たちも、わが子だけではなく、子供たち全体のことを考える人が多かったと思う。昨年の秋のパニックで画用紙が不足したときも、ホゴだが裏は十分使える紙をたくさん届けてくれた印刷屋さんや、職場で不要になった書類を持ってきた母親などがいたし、卒園児の親の中にもそういう人たちがいた。

この夏には、父母の会が二泊三日のバス旅行を計画し、卒園児にも呼びかけた。数人の保育さんたちも、休みをとって自費で参加し、役員の父母たちとともに子供たちを率いて、利根川上流まで出かけた。大きい子供たちの親は行かなかった。

子供たちはよほど楽しかったらしく、また行きたいと言っている。役員の人たちも、子供たちが集団生活になれていて、それほど大変ではなかったという。

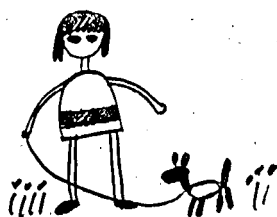
さまざまな職業を持つ親たち、とくに母親と身近かに接したことは、子供にとっても、相当大きな体験だったらしい。娘はその後しばらく、将来どんな職業を選ぶかということで、頭がいっぱいの子供であった。

保育園をとりまく状況には、保母の過労をはじめ、さまざまな困難な問題があることは事実である。しかし現在の日本における子供の生活環境として見た場合には、相当恵まれたものということができるのではないだろうか。

私が曲りなりにも働いてきたのは、専業主婦の生活が嫌いだからであって、子供たちのために働いたわけではない。しかし、私が働いたために子供たちは保育園に入ることができ、子供たちはそこの生活を享受した。もしかすると、彼らの人生に対して、母親の私ができることができた最大のものになるかもしれないような気がする。

「ママが働いていてよかった」という言葉を聞いたのに、私は胸をはりたいような、しかしすこし面はゆいような気分になる。自分の人生を自分自身で選ぶことができない年齢の子供に、保育園の生活を与えることができたことは、やはりこの上ない幸運だったと言えよう。

(団体職員)



飛鳥ちゃん  
ありがとう

岡 ゆき

結婚前に考えていたものである。結婚しても子供が生まれるまでは働こう。そして貯金をし、子供が生まれたら、その貯金を育児費にあてていこう。実になんの疑いもなく、まじめにそういうつもりであった。だから、当時、共稼ぎ育児論を執筆中だった人に「あなたは子供ができたかどうかどうするの」とたずねられて、「やめます」とためらいもなく答えたものだ。

ところが私の計算はすっかり狂ってしまった。産休明けてもなお働き続けて、子供はすでに十歳なのである。

その時点でやめなかったのは、ちょうど、仕事が面白くなりかけた時期で、もう少し続けたい気持ちがあった。幸せなことに婦人雑誌づくりの職場には、男だから女だからという差別がなく、その意味では快適でもあった。

もちろん家計も私の収入がなくてはきびしかった。このことは共稼ぎがやめられなくなってしまいう一般の

な大きな問題点だと思ふ。家を建てるといったような目的をもたない共稼ぎはいつも妻の稼ぎがそのまゝより豊かな生活することで消えてしまい、いつまでたっても共稼ぎから足が洗えなくなっていく。

子供ができて仕事をやめないことは世のご多分に漏れずたいへんだった。まず産休あけの子供を二十四時間保育の愛育病院に預けようと思つたら、姑の猛反対にあった。「それでは動物園の動物と同じではありませんか。そんなことをするなら孫としては扱いません」というのである。さあもう夫側の親族一同会しての非難ごうごう。そのプランはつぶされた。妥協点はお手伝いさんを頼んで姑の目の前で育児してもらうということだった。やっと頼んだせつかくの年配のお手伝いさんが実家の母親の病気で帰郷。

零才児を預てくれる保育園を探し歩いて出会った五十代くらいの園長先生に「とりあえず仕事をやめて、子供を育てあげてから再就職してはどうですか」とまで勧められた。そうするにはまがりなりにもマスコミの世界が職場とあつては、その間のプランクによる感覚のずれがおそろしくてできなかった。

次来、小学校入学まで、五年六か月という長い期間を、私の子供は新宿区立東戸山保育園で預っていた。帰宅時間が不定なので、保育園への送り迎えはずっと二十歳前後の、ほとんどが二十歳にならないお手伝いさんたちであった。それでも彼女たちが病気になるったり、実家の都合でやめたり、転職したりすると

青息吐息。なんとかやりくって三週間までは自分で送り迎えをしたが、そのころは月刊誌から週刊誌に職場がうつっていたため、それくらいが限度でダウン。SOS対策は私の実家、和歌山まで預けに行くことだった。時間がとれないと新幹線でのトンボ帰り、ひどいときは名古屋のホームでまるで荷物のように母に託して、その足で東京へ、あるいは出張へ。



かわいそうだという気持は、ピタッと密封して歯をくいしばらなければできない綱渡りだった。だから私は、共稼ぎの中の育児を人に「子供がかわいそう」ということばで同情されるのがいちばんいいやだった。「そんなことは親の私が百も承知で、それでも働かなければならないから、私にできる最良の方法をとっているのです」というわけである。私自身は共稼ぎママに、「睡眠をなるべくとったほうがいい」とはいうけれど、けつして子供に同情めいたセリフはいわない。かえって残酷に思えるからだ。

そうまでして働かなければならない理由とはなんなのか。じつに明瞭簡潔。私が大黒柱になってしまったからだ。

妻が一所懸命働くのをみて、夫はそろばん勘定無頼

着な、趣味的な生き方をはじめてしまった。彼は勤務先の事業整理で、その親会社へあつせんされたが、さつさと断わった。驚いた上役に、「きみがぼくの弟だつたら心配で放っておけない」といわれて「いやァうちはぼくが働かなくても、女房がコレコレシカジカ」とやった。「うらやましいね」と上役も納得したとか。こんなにひどい話があるだろうか。いやな職場でも女房子供のことを考えて働くご時世に、家計への収入ゼロ、月々の小遣い妻より支給、の生活をはじめたのだ。ぜいたくというか、天国と地獄といってもよい。

私があまかったといわれればそれまでである。しこうして晩秋ともなれば、月かげ踏んで保育園から子供を迎えて、風吹きすさぶバス停でラッシュ時は三十分も待ち、ほんとうにこらえて働き続けた。共稼ぎ育児論の筆者先生の「ママが働くのは、あなたたちにもっと満ちたりた幸せな生活をさせるため」という理由より、もっと最低限の背水の陣だった。

この現実のきびしさのため、仕事への姿勢もきびしくなり、とりあえず書くことでその日暮らしはできるところとなった。はじめは口を糊する仕事でも十数年もやっていれば面白くもなる。かくてとうとう子供は十歳になった。

保育園に預けることすらさまたまの反対をうけたけれども、独立心旺盛、陽気でクラスの人気者、そして私が寝こむと必死で看病してくれる子になっている。

保母先生や若かったお手伝いさんたちにはいくらお礼をいっても足りない。

小学校も高学年になると夏休みは少年野球大会だ、剣道大会だ、合宿だと親同伴が望ましい行事が多く、今夏は子供に引きずりまわされた。「合宿には親が同伴してくれない」というおかあさんもいて、さびしい気がした。それで仕事が休めないおかあさんの子は来なかった。がんばって一人で参加した子供たちは、緊張のためか、申し合わせたように宿で吐いたり、乗物にも酔った。小学校四年生ですら、母親の存在が子供に与える安定感ほんなにも大きい。仕事があると夜はひとり留守番をした保育園時代のわが子のがんばりに心から「飛鳥クン、ありがとう」をいいたい。あの時代にそれを自ら口にすれば、私のはりほもたなかっただろう。

(文筆業)

働く女は、

オニか魔女か

橋田光子



学童保育に行っている長女が、ある日、私の帰宅を待ちかねたように飛びついてきた。

「ね、ママ、ママはちっともコワイ人じゃないわよね」  
何ごとが起こったのかと、私はびっくりした。

「どうしたのよ、いったい……」

「おばさんたちがね、ママの悪口言ってるの」

目に涙さえ浮かべて、長女は、せきを切ったように話し始めた。

「私がカギっ子でかわいそうだって。ママは何にもお仕事になんか行かなくていいのに、働きに行つてひどいって、パパも麻美ちゃんもかわいそうだって。ママはコワイおくさんで、コワイおかあさんだって……」

えんえんと続く話には、いつか吹き出していった。

「麻美は、ママのこと、コワくないんでしょ。じゃ、いいじゃない」

「でも……」

長女は、母親の悪口を言われたことが、まだくやしそうである。

「麻美、学童保育はいや？」

「ううん、スゴクいい。学校から帰って、すぐ遊べるもの」

「カギっ子はいや？」

「ううん。——ママのお帰りが遅いと、ちょっと寂しいけど、みんな遊びにくるし、ヘイキ」

「じゃ、よかったね」

私は長女を抱きあげて、頬ずりした。

\* \* \*

正直なところ、私の心の中には、もったくさんの

時間を子供たちと一緒に過ごしたいという願いがいつもあふれている。限られた愛情に何一つ不満を言うでなく、与えられた環境の中で精一杯伸びようとしている子供たちをいじらしく思うことも多い。

でも、社会人として公的な性格を帯びている仕事のことを考えると、私的な欲望は抑えなくてはいけないと、いつも自分の心に言いかけせる。それに誰かも言っていた。「少しの飢えと少しの寒さは、子供の何よりのごちそう」だと。

それにしても、なぜ、つまらぬ干渉が多いのだろう。私たち、働いている側では、家事も育児もたいせつなことだと思っているし、それに没頭できる主婦の立



場をうらやましく思うと同時に、尊重もしているつもりだ。でも、この間も、こんな話を聞かされた。

「自分で言うのもおかしいけど、私はやさしい女なのよ。だから、小さい子をよそに預けてまで働くことができないくて、仕事をやめちゃったの。とても残念だったけど……」

(オヤオヤ、そううすると、働き続けている女は、非情でやさしさのない女だろうか……) 幼ない子を預けて働くことの身を裂かれるような悲しみや苦しみを



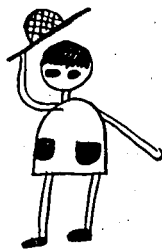
思い出しながら、私は、有能な編集者であったその人の顔を見つめた。職場でも待望され、ご自分でも好きでたまらなかった仕事を断念しなければならなかったその人の心中は、さそかし残念だったろう。その残念さをへ私はやさしい女だ、だから……と、何度も理由づけたのだから。

思いきって仕事をやめて母性に徹する人は、たしかにやさしい人だと思う。でも、だからといって、仕事を続けている人間がコワイ人間ということにはなるまい。仕事をやめるのには、かなりの決断が必要だし、仕事の間を主として考えれば、逆のやさしさのためにやめられない人間も多いと思う。

出産だ、育児だといって、簡単にやめたのでは、あとに続く女の人が低い地位におかれてしまう。先輩の開いた道を守ろうと、つらさや悲しさに耐えながら働き続けている人も少なくない。どちらをやさしいと言いい、どちらを強いと言うかは、しよせん見る立場の相違である。それにしても、子供を持って働き続けることが問題になるのは、なぜ、いつも女の側だけなのだろう。男もやさしければ、育児期に仕事を中断して育児に没頭するかもしれないのに……。

働き続ける女に非難の目を向ける人たちは、多分、自分自身のやるせない悲しみを、怒りのかたちでぶつけているのだらう。罪もない子供にまで、その怒りをぶつけるのでなく、どうして女全体のしあわせのために手を結べないのだらう。もう、女の復讐や再就職

が、もっと容易だったら、たとえ一時中断しても、もっと朗々と毎日を過ごせるだらうし、働き続けている人には働き続けている事情を思いやるだけの、やさしさやゆとりが生まれるにちがいないのだが。(会社員)



小さな  
あいさつ

佐伯佑子

毎朝、駅に急ぐ私に、「いってらっしゃい」と、明るい声をかけて下さるのは、三階のTさんである。

その明るい声を聞くと、私の心の中も、パッと明るくなる。

そして、夕方、帰ってきたとき、「お帰りなさい、お疲れでしたでしょう」と、やさしい声をかけてくださるのもTさんだ。

団地の二階と三階、隣同士ならぬ上下同士の関係が結ばれて八年。お互いに、入居してから生まれた団地ベビーが、もう小学校にあがるようになった。

保育園から地域外の学童保育に進んだうちの娘は、地域とのつながりがほとんどなく、子供同士のつきあいはない。Tさんとも、朝夕、ほほえみあう程度の、

あわいおつきあい。考えてみれば、私の住む号棟で、ただ一人共働きする私は、隣近所、どこともあわいおつきあいだ。

顔を合わせれば、おたがいに軽くあいさつしたり、お天気や子供の話をする程度。その中で、Tさんの、朝夕の心こもるあいさつは、日常会話以上に心にしみる。

ある日、スーパーでTさんと顔を合わせた。朝も夕方も、とにかく時間貧乏、走って走って、むだ口一つきくひまもなかったが、珍しくすこし時間があつたので、立ち話をした。Tさんの、「いってらっしゃい」「お帰りなさい」で、どんなにか心やすらいでいることなどを。

「まあ、あんなことで……」と、Tさんは、大きな目をいっそうまるくした。「私も、むかしはお勤めしてたんですよ。研究室の助手をしてたんですよ。——だから、ほんとうは、お勤めしてらっしゃる方を見るとうらやましいな」という気持ちがあるんです。

美佐が学校にあらりましたから、ことしぐらいから、また働きたいんですけど、私って、ものぐさでしよう、就職の運動に出かけるのもおつくうで。でもね、毎朝、新聞の求人欄は見てるんです。こんな仕事ならできかなあと思ったり、もうこんなに長いこと働いてないんじや、掃除婦ぐらいしかできないんじやないかと思ったり……。でも、求人欄見てるだけでもたのしいんですね。だからかしら、働いてる方見ると、つい、

ごあいさつしたくなるんですよ」

Tさんのあいさつが、どこかひと味ちがう、あたたかい理由が、何となく理解できた。働いている私は、階段掃除なども思うにまかせず、るす中の荷物は隣近所のご迷惑になり、いつも肩身狭い思いをしているのだが、話を聞くうちに、「そうだわ、やっぱり一所懸命働こう」と思うようになった。できないことは逆立ちしてもできないのだし、できることを、できる限りしよう。

私の仕事、福祉の仕事も、どこが遠くて、まわりまわって、地域の主婦の方たちのお役に立っているかもしれない、働くことがプラスだマイナスだと目くじら立てず、私は静かに働き続けていこう。そしてTさんのようなやさしい心、やさしいことを、主婦の方たちに、そしてそのお子さんたちに、向けていきたいと思った。

(公務員)



服装・表情  
考現学

永松三恵子

女二十六歳。そろそろ結婚が気になる年齢である。

そろそろなのは本人だけで、周囲はやきもきから、やがて気の早い連中の中には、私の結婚を絶望視する人もいる。

人のことなんかもいいじゃないかと思いたが、本人も同年輩の同性の、いったい何割くらいが結婚しているのかなど、けっこう気になるものだ。

日本の女性の平均結婚年齢が二十四、五歳と比べると、多分半数以上は結婚しているのだろう。そのうちの何割かは子育ての真っ最中に違いない。

独身時代からの友人の中には、結婚して変わる人と変わらない人がいる。結婚後変わった友人をみると、なにかまぶしいような、彼女が大変大人になってしまったようなとまどいを感じるときがある。



それが、東京郊外のわが家のまわりでみかける、幸福そのものの非個性人たる同年輩の主婦たちをみると、さらにとまどいを強く感じる。

たいていゆったりとした服を身にまとい、せかせかと走ることもなく、共働きの主婦が夕暮れに見せる疲労のかげりもない。

私の仕事は、時間が一定していないので、仕事の行き帰りのわが家から駅までのバスの中で、みるからに

主婦らしい人と乗り合わせることもある。

九月の中ごろのまだ暑さのきびしいある日のバスの中の光景といえは——私の真向いにはノースリーブの柄ものの袖ぐりの広い、ストンとしたワンピースを着た三十代の女性。頭には白っぽい布地でできた日除け帽をかぶっている。ひざは少し開きかげん、しかし足もととはくついている。

右どなりには、レースのような編み方の丸い襟ぐりで、袖もゆったりしたスケスケのサマーセーターを着たおば様。下着がよくみえる。手にはピンクっぽいバラソルをもっている。

左どなりは、模様編みのニットのようなツーピースで、胸もとがレース飾りになっているものを着ている人。どこかにおでかけのようだ。

私は、彼女たちが皆、専業主婦であるとの断定にいささかの自信をもっている。なぜかなあ、と自分でも考えてみる。

まず勤めていたら、いちいちバラソルなんかしてられない。それに、わりと専業主婦というのは、ドレスアップしていても、していなくとも、流行とは無縁の存在のようだ。

いや待てよ、さらにとりには、今流行のジーンズのスカートをはいた女性が座っている。しかし私は、彼女が新しくファッションマーケットに登場したナウなヤングミセスであることを、一瞬のうちに了解する。なぜなら専業主婦のはく靴は、カチツとしているも

のよりも、底がベタンコで、中途半端にスポーティな感じが多いからだ。

彼女たちのふんい気は、一様にエレガントで、たおやかでゆるんでいる。こうしたバスの向い側の乗客たちの表情は、実に穏やかで、あたかも彼女たちをつつんでいる大気の分子の結合もゆるんでいるかのような錯覚にとらわれる。座り姿は無脊椎動物のようだ。

専業主婦のあまりの主婦らしさに比べ、働いている女性の場合、未婚か既婚かの区別が判然としていない。働いている女性は一年齢に関係なくいちおう流行をさりげなくとりいれ、体にフィットとしたブラウスとスカート、あるいはパンタロンなどを身につけ、専業主婦の優雅さに比べ、間違いなくはるかにスポーティな身なりをしている。

異なるのは服装だけでなく、全体から受ける印象が違ふのだ。共働きの主婦が、仕事婦りの疲れ切った様子の中にも、準戦時体制といった表現が似つかわしいのに対し——実際彼女たちは、昼間の緊張を再現して働けといわれたら働くのではないのかと思われるのだが——専業主婦の印象は買物という主婦業をしている最中も、実に穏やかで緩慢な感じがする。

もちろんご主人としても、口を三角にして働いている奥さんよりも、穏やかな顔で迎えてくれる奥さんの方が疲れをいやせるだろうし、働く人が皆あんな表情ができたらずばらしいだろう。

専業主婦の表情について、悪しき想像をすれば、思

うに彼女たちの顔は、自分がすでに選んでしまった人生のスタイルに対する全肯定の顔ではないのか。誰だって自分を否定することはできないし、彼女たちとて夫や子どもに対して少々の部分否定はあるだろうが、少なくとも自分自身に対しては、全的に肯定している顔といえる。

だからといって共働きの主婦が自分を否定しているわけではない。あえていえば、肯定も否定もする以前の顔といえよう。

さらにいえることは、専業主婦の印象は、生的でもなければ性的でもなく、常に静的なイメージである。それは私のように悟りきらないものが、あらゆるものに対して感じる焦燥感とは対極をなす、安定したイメージともいえる。

視点を変えれば、やはり服装にしても表情にしても、労働の質の本質的な差が出てくるのだと思う。片や管理され監視され、社会的にきびしい評価を受ける労働と家事労働との差が。

しかし、私は働いていて思うのだが、たとえ緊張して疲れていても、仕事がうまくいったときの痛快な気分や、みずみずしい緊張感、そこにはたしかに自己実現という言葉のかげらがある。それは永遠に続く皿洗いの一回分をやりとげたあとには味わえない感情といえる。

それは私にとってかなりのものをさいても、したたかな価値が今のところ見いだせるようだ。(編集者)

# 働く女と主婦の接点を求めて 1

## それぞれの立場から目指す方向は同じ

神 田 道 子

東洋大学講師

「働く婦人と主婦の問題」は、戦後ずっと大きな話題になってきたといえる。

戦後の婦人論の流れをみると、最初は戦場に進出することによって一歩進むということが第一条件であるという考え方であった。それが昭和三十年代に入って主婦の社会的活動が活発になるにしたがい、主婦もまた婦人の解放という点で、大きな位置を占めるのではないかということがいわれるようになった。

その結果、婦人の解放の方向はまさに混沌に陥って、婦人が主体性をもって自主的に選んだものであれば、どちらでもないかといわれるようになった。そこでこれから五十年代は、この二つの方向をどのようにとらえるべきか、ということが、婦人論の大きな中心点をなすであろうと考えられる。

### (1) 中高年期の長期化

昭和三十年代以降、婦人の生活は大きく変わってきた。その第一は、中高年期の長期化である。その背景には子供の数の減少と、平均寿命の延長があり、その他家事労働の簡素化などがある。そのため、中高年期における家庭内の女の役割は著しく減少してきた。

そこで中高年期を中心にして婦人の層は大きく二つに分かれ、中年で再び職場に出ていく人たちと、若いときからずっと仕事を続けてきた人たち「就労層」と、職業を持たないで家事に専念する層が出てきた。特に昭和三十年代後半からクロースアップされてきたのが、就労層の増加である。この二つの層はそれぞれ異なる問題をかかえている。

第一の就労層では、まずパートタイマーの問題である。

また仕事と家庭の両立はなかなかむずかしく、家族が家庭の中で安らぎ、疲労を回復するという状態は得られない。さらに昇進昇格の問題、男性との賃金格差など、さまざまな問題をかかえている。現在、男女の賃金格差はだんだん縮まってきているというものの、全体で男を百とすると、女は五十・二である（四十七年）。そして年齢が高くなるにしたがって、男子との賃金格差が開いていく。これはずっと仕事を継続して働いた場合も同じで、三十五歳以上になると、ますます、その差が開く。中途採用になると、さらに格差が大きくなる。労働省の調査によると、標準労働者、学卒からずっと仕事を続けていた人の場合、標準労働者を百として、中途採用者をみると、三十五—三十九歳の年齢層で女の人は四十六・〇、それに対して男は七十五・五という数字が出ている。途中で職場に入るということが、いかに賃金面でマイナスの状況に立たされているかということになるだろう。その他に母性保護の問題もあるし、職種が女性向きの職種に限られているということもある。

第二は家事専業層の場合の問題である。その一つには就職希望がある。就職したいという人は非常に多いが、時間的に家庭と両立する仕事は少なく、現実には就職はむずかしい。また就職したくても適当な職業がないという状況がある。このように就職希望はあっても現実には就職がむずかしく、これらは潜在的な就職希

望者といえるだろう。

## (2) 余暇時間の増大

次に非常に大きな問題として出てきたのは余暇時間の増大である。最近では一般的な労働時間の短縮という傾向が出てきて、余暇社会の到来などといわれている。余暇時間とは拘束されない自由な時間をいうが、余暇の問題としてはその時間内に、総合的、主体的な自由な活動が行なわれているか、それとも非常に消費的な過ごし方なのかということであり、いかにして創造的な自己実現的な余暇活用を行なっていくかが目標になる。

こういう見方から余暇をみると、余暇時間を持ち余暇を生かす可能性のある主婦は、むしろ大変高く評価されることになる。事実、学習に、趣味に、地域の活動に、あるいは消費者運動に、政治運動に、主婦が積極的に参加している姿が見られる。こういう視点からみると、職業婦人というのは逆に非常に拘束的な労働を強いられているということになる。しかも家に帰れば家事もしなければならぬし、余暇時間も少ない。結局余暇という観点からみると、職業婦人は主婦よりおくれているということになりはしないか。

ここで職業に就きたい人は就く、主婦になって余暇活動したい人は余暇活動をする、ということになると、いろいろと矛盾が出てくる。例えば家事専業で社

会活動をしつらよいという考え方が強くなると、職業は一時的なもので、家計補助としての性格しか持ち得ないことになる。こうなると、職業を長く続けたい人たちの職場における地位に、当然影響してくるようになる。家事専業で社会活動を、という考えの基礎には、女は家庭という考え方があり、家庭科教育などが別枠として課せられたり、結婚したら家庭に入るということで、職場での職業訓練もはつきり差をつけられてしまう。

このように余暇の問題が入ってくることで、問題はますます複雑になってきたといえよう。

### (3) 余暇の課題とは何か

職場への進出——就労層の増大、家事専業層に就労希望がふえて来たという状況の中で共通する課題は、職業と家庭の両立であった。これは家庭婦人と職業婦人を結びつける生活課題という形として出てきたものである。そこに、余暇の増加という状況が起ってきた。そこで余暇の課題が問題になってきたわけである。

そこで余暇を生かして主体的な活動をするということが、一つの目標として出てくる。主体的に生きることとは、考えてみると今まで婦人が長い間目指してきた方向であり、これからも目指すべき方向なのだといえるだろう。婦人の目指す方向というのは、婦人ひとり

ひとりが、女性であるということとで差別されないで、主体性をもって行動でき、その過程の中で個人の持つ能力を充分発揮できることであろう。

これまで家庭に閉じこめられてきた女は主体性をもって、個人の能力を発揮してきたなどという意識はあまりなかったに違いない。それが余暇という考え方が出てきて、その面から女の生き方が、あらためて検討されることになるだろう。

余暇が生まれたということ自体は、自由に活動し得る可能性が出てきたという意味で、婦人にとって大いにプラスになる可能性を持つものだと考えられる。ところが現実はどうか。家事専業層の余暇の過ごし方として特徴的なのは、テレビをみる時間が長いということである。また余暇活動が、休息とか娯楽のみに活動が集中してしまうという点でも問題がある。それでは、テレビを除く趣味とか学習、地域活動、市民運動に参加している主婦は、本当に能力を発揮して、主体的に取組める活動をやっているといえるだろうか。

結局ここでも、主婦の問題点として、家事労働の問題が出てくる。例えば家事の中で非常に大きなウェイトを占める炊事、これは一日のうちに一回で全部を整えるわけにはいかない。三回に分けるから、余暇時間を集中的にとることはむずかしい。あるいは子供のいる人が何かをしたくてもできないという問題もある。たしかに婦人の余暇は貧困であり、テレビに集中していることを問題にするのはいいが、それを解決しよう

とすると、婦人の意識は低い、だから婦人の意識を高めなければならないということだけでは、解決し得ないのである。

#### (4) 家庭という枠職場という枠

趣味とか学習活動の場合、その内容はどうか。

婦人の余暇を生かした学習活動として最も多いのはお茶やお花、子供の教育、料理などであり、やはり家庭という枠に明らかに限定された内容のものになっている。

さらにこれらの活動に参加する主婦は、経済的に妻が働かなくても何とかやって行ける層であり、夫の収入によって、こういう活動に参加できるかどうか規制されるということになる。これは、趣味や学習活動に限らず、地域の活動や政治運動に参加する人の場合も同じだろう。

家事専業層が、余暇を主体的に生かし、自由に自分の持っている能力を発揮するということは、一つは家庭での役割との関連ということで枠づけられている。

それともう一つ否定し難いのは、夫の側の状態によって規制されるということである。ただ、意識の面では最近男性の意識も変わり、女の活動を主体的に認め、個人の能力を伸ばすという考え方がひろがってきているのは事実であるが。

学習活動が、料理とか刺しゅうとか、優雅な主婦の

ものであるうちは、家庭における女の地位、男と女の関係は、男は今までの考え方のままで安心していられるし、家庭も安泰である。

ところが余暇活動が従来の家庭の枠をこえ、主体性を確立し、個人の能力を伸ばす方向に進もうとしたとき、どういうことが起こるか。料理にしろ、生花にしろ、お稽古ごとの領域から次第に本格的になるにしたがい、それらは家事に還元して行くという方向ではなくなくていく。家事に還元される限り、女は家庭という従来の役割の範ちゅうにあり、また従来の女のイメージをはずれることもなく家庭内における女性の地位は安泰であったが、それが外へ向かってひろがって行くにしたがい、いろいろ問題が出てくる。また料理や絵の場合は、比較的個人的な活動であるからそれほど大きな問題にならないが、今非常に高く評価されている地域活動とか市民運動といったグループでの活動ということになると、当然家庭内の家事労働を少なくしようとする方向をとる。一般にこのような活動を熱心に行っている人の場合、家事と、そうした活動の葛藤に悩まされるという状況がみられる。熱心になればなるほど、集団からの役割期待も大きくなってくるから、そこで、夫がどの程度理解し、協力してくれるかが問題になってくる。夫の収入に依存している限り、最終的には夫の意見に従わざるを得ないということになる。

したがって、家事専業層の場合も、余暇を生かし得



る可能性は持っているが、よくよく考えてみると、やはり家庭という枠があって、本当に自由な活動をして飛び出そうとすると、家庭内の地位が非常に危くなる。しかし、現在主婦がいろいろの活動に参加していることを私は否定的にとらえているわけではない。むしろ消費者運動や学習に参加することは、限界をもちながらも望ましいと思うが、それが本当に余暇を生かして能力を開発できると、心から信じこんでしまうことは、一種の錯覚にすぎないということも、はっきりさせておきたい。

次に就労層について考えてみよう。家事専業者が夫の収入に依存しているのに対し、就労層は自分の収入で生活を維持している。(パートの場合は、家計補助という限界があるが)。では、この就労層が主体性を持って個人の能力を充分発揮し得ているかどうかというと、職場内で自分の能力を生かし得る人は、大変少数だと思う。大多数は個人の能力とは関係のない仕事をし、主体的に仕事を行ない得る状況になく、与えられた仕事に、時間を費やしている場合が多い。これは男性にも共通していることである。女性の場合、まわりの条件が主体的にさせない、ということにもよるが、女性自身にも問題があり、他人に依存して楽なほうをとるという態度がある。職場における賃金格差、性差別の問題などに、職業に本腰を入れている一部の人を除き鈍感な人も多い。それは女性自身の意識の問題と、そういう風にさせた社会的状況がかかわりあい、

相互に関係しあっているという風にとらえられる。一言つけ加えておくが、家事専業者の場合、男性が職場で主体性を持ち、個人の能力を伸ばし得ていないという状況があり、そういう夫の働きに依存しつつ、自由な活動をしているという矛盾がある。

# (5) 自己を客観的にとらえることから

## 社会の改革に

このように、家事専業者、就労層をひとりひとりが差別されずに主体性を持って、個人の能力を発揮するという面からみると、私には共に傷だらけであり、どちらかがより進んでいるという関係ではないように考えられる。結局、将来の方向として、両者がどう進んだらよいかということから考えると、この両方とも傷だらけ、穴だらけなのだということをまず認識しなければならぬと思う。

言い方を変えるならば、まず自己を客観的にみるというのが第一段階であり、案外このことが出来ていない。最近、私たちのグループでは大卒女性の意識を調査したが、大卒女性の結婚は大変うまくいっており、離婚も少ない。しかし多くの場合、ある枠をはめて、その枠の中で安泰に暮そうとしており、その中でより能力を伸ばしたい、あるいは自主性もその中で発揮したいという形が一般的であり、もう一步進んで、現状をつき崩そうというような生き方はしていない。余暇

の増大の中で、ある枠の中にはまっていながら、自分は少しでも能力を生かしている。あるいは主体的に生きているということに満足感を持っている人が多いのが現実である。

さらに、自分の矛盾をはっきりと知り、自分が能力を伸ばし得ていない、主体的に生きていないということを知ったとしても、そうさせている社会的条件に目を向けていかなければならない。そうでないと、たまたま条件の恵まれた人だけが、個人の能力を伸ばし得るという、単に個人の問題に留まってしまうのである。ひとりひとりが性によって差別されず、自分の主体性を發揮すると同時に、他の人の主体性を發揮することが必要なのだということが意識され、すべての人たちがそういう風な生き方を出来るような状態に変えていくために手を取りあっていくことが必要になってくるのである。

そのような状態を作りあげていくためには、私は社会の仕組みを変えていかなければならないと考えている。私は、女は家庭を単位としてではなく個人を単位として、自分で自分の生計を維持していくということが基本的条件だと考えている。個人を基底におく場合には、仕事を持つということははっきりおさえておく必要がある。この仕事を持つということをはっきりおさえた上で、その前提の上になつて、自由な、主体的活動を阻んでいる社会的条件を切り除いていく方向がなければならないと思う。

この点から、結婚した女の人たちから働き続けられないような状態はなくなして行かなければならない。

子供を産むということに対して保護するのは当然であり、仕事と家庭を両立させるために、労働時間の短縮もはからなければならない。産後の休暇ももっと延長すべきだし、育児休暇も必要だろう。

このように一方で職場で働いている婦人が職業と家庭を両立させるための運動を展開し、主婦は主婦で、余暇を生かして地域の問題、消費者の問題の中で、住民として、消費者として、主人公になっていく運動を行なっていくことによって、傷だらけ、穴だらけの層が共に一つの方向を目指していくことが出来るだろう。婦人として、主体的に生きる条件は何か、社会全体としてどういう条件をつくっていったらよいか、それぞれの立場からアプローチすることが最終的に婦人ひとりひとりが主体性をもって、個人の能力を發揮していくことに連なるのだと考えられる。

余暇が生活課題としてとらえられ、自由時間を利用して、主体性を發揮することの価値が一般に認められてきたことは、女性にとってチャンスだろうと思う。これを契機にして女の人が能力を伸ばし、生きるということを基本に持ちながら社会的なものと結びつけていくことが大事であり、こういう面にまで広げて考えていかないと、一つの枠の中の自己満足になりかねない。そういう意味では今、大変むずかしい時期に来ているともいえよう。(十一月十六日の講演から)

## 働く女と主婦の接点を求めて 2

# 情報化社会の中の専業主婦と兼業主婦

斎藤 千代

BOC(創造力の銀行)  
コーディネーター

### 1 井戸端会議の声から

日常の生活の中で、専ら家事に従事している主婦たちから、外に仕事を持つ主婦についての不満を聞くのは、それほど珍しいことではない。

「PTAの仕事は、みんな、お勤めをしていない人に押しつける」「ゴミ掃除や草取に協力しない」といった被害者意識が始まって、「子供の世話が十分でない。爪がいつも黒く伸びている。髪がよごれている」「家の中がきたない」など、多少内政干渉めいた話題に及び、「要するに子供に対する愛情や女らしさがないから外へ働きに出られるのだわ」といった結論が出る。されることがさえないようである。

日常、働く女性に接し、自分も外働きをする主婦の一人として、共働きの生活がどんなに非情なものか、身につまされている私は、そうした会話を聞くたびに、「遊びや蓄財のために女が外に出て働くわけでもないのに」と、同性に寄せられる非難を悲しく思う。

しかし、外働きをしている主婦の側からは、特別主婦とかかわりの深い職業についている人ででもない限り、専業主婦(以下、混乱を避けるために、就労している主婦を「兼業主婦」、就労していない主婦を「専業主婦」と呼ぶことにする。「兼業主婦」ということばは「兼業農家」を思わせ、農家が主体であるように、主婦が主体であるという印象を与える点で、好ましいものではないが、便宜的に使うことを許していただきたい

い)に対する批判を聞くことはほとんどない。一日の余暇時間をほとんど持たない兼業主婦たちは、他の主婦群をあげつらうほどの余暇がないためであろうが、一面では、自らも、まぎれもない「主婦」として、主婦のさまざまな問題に直面しているためであろう。

## 2 兼業主婦をおびやかす専業主婦たち

とはいえ、兼業主婦をふくめた就労婦人層(以下、「働く女」とよぶ。これも、就労婦人を「働く女」と称すると、専業主婦は「働かない女」のような印象を与えるので、好ましい分類ではないが、便宜的な使用をゆるしていただきたい)が、専業主婦をはじめとする不就労女性たちから多くの脅威を受けていることは、労働問題に多少かがわりをもった人たちなら、誰しも知っていることである。

就労して数年を経ないうちに「結婚」に逃避する女が多い限り、働く女たちは、就労期間の短い、あてにならない労働力としてしか認めてもらえず、わりの悪い職種、わりの悪い賃金を与えられる。その結果、定着率が低くなって、女子労働者全体の地位を、いっそう引き下げるといふ悪循環を繰り返している。

しかも、兼業主婦の総数にはほぼ敵する専業主婦たちは、常に産業予備的な立場を占めて、「必要ならいつでも代わりはいますよ」と、婦人労働の根底をおびやかしているのである。

しかし、女の、その不就労期こそ、出産・育児という、女ならではの創造力が発揮される時期であること、兼業主婦たちは知っており、その時期に家事に専念している専業主婦を、一概に非難する気持にはなれないでいる。

とはいえ、専業主婦が兼業主婦をおびやかすのは労働の場ばかりではない。生活の場でも、問題は大きい。たっぶりの時間を家事に費やすことのできる専業主婦の家庭が、行き届いた掃除、心のこもった料理などを誇っていられるのに対し、否応なしに家事を省力化しなければならぬ兼業主婦たちは、常に肩身の狭い思いをしている。しかも、家事を専業とする主婦層がいる限り、「家事は女の分担」という社会通念は、容易には変わらない。その結果、兼業主婦の多くは、職場では仕事、家庭では家事という二つの職業を、文字どおり兼業しつつ、その両方の場で悪戦苦闘しているのが現状である。(同じ兼業といっても、兼業農家の場合は、一家の中に就労者がいるという意味での兼業が多いが、兼業主婦の場合は、字義通りの兼業であることに注意したい)。

そのうえ、「家事は女の分担」という社会通念の定着は、そのまま、職場の中の職種差別にも直結する。お茶くみ、掃除、コピーとり等の、もろもろの雑用は、頭から「女の仕事」と決められているのが通例である。執務時間中に、上役や来客のタバコ買いに走らされた経験を持つものさえ、決して少なくはない。

こう考えてみると、専業主婦の問題を解決しない限り、兼業主婦の問題、ひいては女子労働の諸問題は、永遠に解決しないとさえ言える。しかし現実には、両者はほとんどすれちがいに近い日常を送っており、共通の問題についての対話の機会を、めったにない。

### 3 専業主婦を理解しない兼業主婦たち

極端に兼業主婦の側にたつて専業主婦を見れば、前述のように、専業主婦は常に兼業主婦をおびやかす存在となるのだが、それでは兼業主婦が専業主婦をおびやかすことはないだろうか。冒頭に述べたような不満が専業主婦の口から往々にして洩れるということは、兼業主婦が専業主婦にとって、必ずしも好ましい存在でないことを物語っているとと言える。たしかに、専業主婦は、家事だけに専念しているわけではない。地域の清掃、ゴミ処理などに始まって、公害、日照権など、多くの公的な仕事は、日常を地域社会の中で暮らす主婦たちの肩にかかっている。兼業主婦の目から見ればうらやましい豊富な家事時間も、「職業」として果たさなければならぬ限りは、労働時間が長いのと等しい重さを持つ。手を加えれば加えるほど無限の労働時間を必要とする家事、土曜日曜も休むことを許されない家庭責任は、家事そのものは、本来、創造的で楽しい作業であるにもかかわらず、一種の重圧となって主婦たちにやすらぎを与えていない場合も少なくない。そ

のほか、外出の自由度が少ないことや、たとえ外出しても食事時間という時間帯に拘束されなければならない専業主婦の状況は、一応、経済的な自立と外出の自由の糸口を得ている兼業主婦が、十分に理解し得るところではない。

家庭もよし、職業もよし、と、多様な選択を許されていることが、現段階ではたして女性の解放となるのか、国際婦人年に向けて、ふたたび論議がかまびすしくなった現状は、両者の、それぞれの立場をもう一度考え直す必要を迫っている。しかし、両者の共闘は、はたして容易なことだろうか。私もBOCでは、両者の接点を求めて、実践の中に解決をはかりたいと考えて続けたが、現実には、たくさん問題が山積していることを痛感したのに止まった。

同じ「産む性」として、本来、最も提携し合わなければならぬ女たちが、就労を機会に、なぜ対立的な関係に陥りがちなのか、両者は、なぜ異なった存在になつていくのか、それを解決するのは何なのか、これらの問題に対して、明快な答が得られたわけでは決していないが、私たちが実際に体験した事例を通じて考えた幾つかのヒントを述べて、読者の考える資料として供したいと思う。

### 4 ふしぎな話A「約束を守らない主婦たち」

子供が就学して、育児に手がかからなくなった三十

代後半ごろから再就職の希望は急激にふえる。

何かのあたちで働くつてを求めて、私どもを訪れる人も多いのだが、いざ仕事をお願いしてみると、予想もしていなかった事態が起きることが少なくない。

その代表的なケースを紹介すると――

#### 「時間に遅れる」

主婦の集合時間は九時では無理と考えて、十時と指定し、十時には遅れないよう、繰返しお願いしても、一人二人は遅刻者が出るのが通例である。

#### 「納期を守らない」

何月何日まで、という約束が破られることが多く、それに対する謝罪も比較的少ない。遅延理由は、家族の病気、不意の来客、家事雑用の処理など。

#### 「依存心」

ある仕事、例えば録音テープを原稿に書き起こす仕事が有利だという情報が伝わると、たちまち希望者が訪れるが、「テープレコーダーを持っていないので貸してほしい」といった予測しない要望に驚くことがある。また、録音テープを家に持ち帰ってから、「空リールがないので買って届けてほしい」という要求が出されたことも、再度ならずあった。

そのほか、自分の未熟を理由に、予備費としてフィルム代を普通の倍額請求した写真家、デッサンの手本としての画集を買うための資料代を請求するデザイナーなど、ふつうのプロの世界では考えられない要求に遭遇したこともあった。

#### 5 ふしぎな話B「見えないボールペン」

これは、三部式のノンカーボンの複写伝票記載の仕事を頼んだときの話である。

終業後に伝票をチェックしたところ、出来上がった伝票の一枚目の文字が途中から見えなくなっている。

調べてみると、担当のAさんが、インクの出なくなつたボールペンをそのまま使っていることがわかった。

「見えないボールペンを使い続けるとは、少しおかしいのではないか」と不審の声があがり、「こんな行為をするのは欠陥人間ではないか」という意見まで出た。

翌日、ボールペンを変えるよう指示したところ、

「なぜ一枚目が見えないといけないのですか」と付けんな表情。「なぜ……」と問い返されたことに、「瞬

杲然としたが、だんだん事情を聞いてみると、Aさんは事務員時代、鉄筆でカーボンを切っていたことがわかった。昭和二ケタ生まれのAさんだけに、「鉄筆」とは考えてもみなかった理由だった。しかし、「よかつた原因がわかつて」と、喜ぶ私たちに返ってきた答には、また驚いた。「どうして、見えないボールペンを使うのが、ふしぎなのですか」

#### 6 なぜ、ふしぎな現象が起きるのか

以上のような例は、極端な事例と受けとられるかもしれないが、象徴的ではあっても、ごく一般的な、多

数の例の一つであることをお断わりしたい。ここで、この話を持ち出したのは、当事者を責めるという気持では、もとよりない。主婦の問題を考える基本的な要素をふくんでいる例のように思われるからである。

では、なぜ、学生時代は、九時集合といえ九時五分前に集まることのできた女たちが、主婦生活十年ともなると、十時の約束も守れなくなるのだろうか。しかも、わが行ないを恥じるという、フィードバック機構を失ってしまうのだろうか。これは主婦という以上に、「女」の問題なのだろうか。

一つ、また一つと、事例が積み重ねられるたびに、私たちは苦しみ、悩んだ。長い間、疑問がどうしてもとけなかった。しかし、最近になって、やっと、次のような仮説を考えてみるに至った。

簡単に言うなら、主婦と働く女とは、その属する情報社会がちがうということではないだろうか。つまり、生活圏がちがう、日常受けとめている情報がちがう、したがって努力目標もちがうということではないだろうか。

専業主婦という家事管理職にとつての目標は、家事をとどこおりなく遂行し、家族の生命を守ることである。

とすれば、家計補助的な収入のための外出時間を多少遅らせても、一さおでも多くの洗たくものを干しあげ、一枚でも多くのアイロンをかけて出かける主婦のほうに、専業主婦としては望ましい主婦ということになる。

なる。家事に時間をさいて遅れることは、美德にはなっても、悪徳にはならない。むしろ、家事を中断したまま職場に急ぐ兼業主婦が非難的となるわけである。

「ふしぎな話A」の中で、私は、「専業主婦の中には約束を守らない人が往々みられる」と述べたが、専業主婦にとっては、約束を守らないわけではない。正確に言えば職場の約束を守らないだけの話であって、家事管理者としての約束は守っていると言える。自分の住んでいる情報社会のおきてや価値観には忠実なのである。

ところで、ある情報社会の中で過ごした者は、別の情報社会にスムーズに同調できるだろうか。

異なる情報社会に住むことは、分割国家の国民の関係に似ている。例えば東ドイツと西ドイツは、三十年前までは、同じ国であった。しかし、たがいに体制の異なる国家に分割され、異なった情報の中に置かれている現在では、異民族以上のギャップが生じている。同様に、同じ女性であっても、家庭という情報社会に専ら住む者と、職場という情報社会に主として住む者とは、価値観も行動の習慣も異なってくるのは、むしろ当然のことであろう。

## 7 なぜ、ふしぎなことに気がつかないのか

問題の第二は、「ふしぎな話2」で述べた、「なぜ私がおかしいのですか」というAさんの疑問である。

これは、二つの点で、大きな意味がある。

一つは、「見えないボールペンで書くことはおかしい」という固定観念をもっている私たち就労層への痛烈な反論を含んでいるということであり、もう一つは、「自分の行動にあやまりがあるはずがない」という確信の強さである。

かつて有能な学生であり、職業人であった人は、主婦生活の中でも、過去の経験や技能を忘れ去ってしまったわけではない。Aさんの場合も、「鉄筆による起票」という、過去の経験、過去の情報を見事に記憶していた。しかし、働く場としての情報社会が、Aさんが所属していた当時とは異なっていることに気がつかなかった。Aさんが、出産・育児に追われていた時期は、ちょうど、日本経済の高度成長の時期——そして、高度工業化社会から情報化社会へと移行する時期と重なり合っている。職場という情報社会に所属し続けた者にとっても、変化への適応は容易ではなかった。まして、職場を離れ、家庭という異なる情報社会に所属した者には、変化の状況を想像することさえ困難だったろう。Aさんが異なる情報社会にスムーズに移行できなかったのは、むりもないといえる。

もう一つは、Aさんが、学生としても、職業人としても、抜群の成績の持主だったということである。即ち、かしい過去の情報を持つ人ほど、自らの過去にとらわれがちである。有能で自信に満ちていなければならないほど、職場という新しい情報社会の状況を虚心にみつめ、それ

に適応して行く力は弱くなるといえるかもしれない。

## 8 なぜ、主婦は自信をもつのか

ここでもう一つ注目したいのは、「あなたの行動はまちがっているのではないでしようか」と注意されたときに、「なぜおかしいのですか」と、とっさに切り返す自信の強さである。これは、Aさん個人の特性ではない。多くの主婦に共通してみられることであって、主婦と接触する機会の多い職業を持つ人たちの間ではしばしば話題になることである。そして、「要するに女の本性ですよ」と、女全体の問題にまで拡大解釈されることが多いのだが、私は、以下のような二つの理由が大きな要素になっているのではないかと考える。

一つは、家庭——特に最近の核家族は、構成人員が少ないため、その中にだけひたっていると、自分の行動を批判し修正するフィードバック機構が、しだいに弱くなってくるのではないかと考える。

家庭という社会の中では特に子供が幼ないうちは、主婦の行動に批判の目が向けられることは、ほとんどない。主婦は、文字どおり一家の中の「主たる婦」であって、どのような献立を作るか、どのようなインテリアにするか、どのような育児計画を立てるか、どのように家計を運営するかなど、ほとんど主婦の思いのままという場合が少なくない。とくに核家族化した今日では、若い主婦も、責任・権限ともに大幅に拡大し



ており、主婦は一家の管理職兼専門職となっている。しかも、夫に家事や育児を分担させない場合、専門職としての主婦の地位は、いっそう高い。専門外のことに出さない非専門家たちに囲まれて、主婦は誰に批判されることもなく、日常生活の大半を過ごしているといっても過言ではあるまい。

しかも、主婦の基盤である「家庭」は、今日、どのように変容しているだろうか。農耕社会では、生産の最も基本的な単位であった家庭、工業化社会では労働力の再生産の場であった家庭は、いま、生産という軸から離れて浮遊している。そして浮遊した家庭と家庭の間には、連絡も、提携も、共同作業も、ほとんどない。

この不安定で不安な家庭の中で、主婦は何をよりどころに、過大な自信を持ち続けているのだろうか。

その一つの要素は、膨大な量の情報ではないかと思う。中でも、TVによる情報である。別掲のNHK生活時間調査でも、男女、あらゆる層を通じて最も多くのTV視聴時間を持っているのは専業主婦であり、平均一日四時間半の多きに達していることが示されている。とくにカラーTVの普及は、社会のすべての情報をいながらにして把握できるような幻想を与える。家事についても、家庭についても、教育や社会についても、最も精選された（と信じこまずにはいられない）情報を常に受け取っているという自信が、自らのフィードバック機構を鈍化させている面があるのではない

だろうか。

つくり手の主体が男であるマス・メディアによって伝えられる、一見、過大な情報は、女にとつての情報という意味では、きわめて過少な半面を持つ。情報の量が多いことは、その質の良さを意味するものではない。それにもかかわらず、必要にして十分な情報を与えられているような錯覚を持っていることが落し穴になっている。

もしも、自分が日常受け取っている情報が不完全であり、偏っているかもしれないというおそれがあれば、職場で与えられる指示に対しても、もう少し敏感に反応することができらう。また、職場という別の情報社会で働く就労婦人に対しても、別のアプローチで接することができらう。

専業主婦の側から働く女へ近づくためには、自分が得ている情報、それに基づく判断を修正するフィードバックを怠らないことと共に、受動的に与えられる情報だけでなく、自らの選択で経験的につかみとる直接情報の量と幅を増大させることが必要であると思われる。

例えば、職場という異なる情報社会は、いわば「情報化された情報」だけではうかがい知ることのできない側面を持っている。過去に経験した職場とは異なる時々刻々に変化しつつある現在の職場を、直接情報に接して自ら確かめることがなければ、働く女との距離は、いつまでも縮まらないであらう。

## 9 働く女は、専業主婦を理解できるか

一方、働く女は、専業主婦をほんとうに理解しているだろうか。また、理解できるだろうか。

前述5のように、「見えないボールペンを使い続ける人は欠陥人間だ」といったことが不意に出たということは、やはり一つの危険を秘めている。発想の根底には、「見えないボールペンを使い続けるのはおかしい」という前提情報がある。Aさんがいみじくも反論したように、「見えないペンを使うことが、どうしておかしいのですか」という考え方も、当然、あつてよい。もう一つの立場「反対情報があるかもしれない」と考えるときに、フィードバック機構が訓練され、強化されていき、私たちは、はじめて異なる情報社会の状況を想像することが可能になるのではないだろうか。

就労層、いわゆる「働く女」たちは、専業主婦とはまた違った意味での自信を、しらずしらず深めている面も多いのではないだろうか。

専業主婦が働く女になろうとするときには、「非可逆的」というほどではないにしても、かなり大きな抵抗があるのに対し、働く女から専業主婦への転向は比較的容易である。転向が容易だということは、容易に理解できるということにはならないのだが、その自信に裏打ちされて、「主婦は働く女を理解しにくいが、働く女は主婦を理解できる」と思いがちな傾向がないとはいえない。

多くの女は、幼時に過ごした家庭生活の経験を通して、誰しもが容易に妻になり、母になれるという錯覚を持っているが、変化が激しいのは職場ばかりではない。家庭も同様である。戦前の母——妻は、ほとんどが嫁として姑に従属し、多子、短命のうちに生涯を終わった。明治の母は、平均六・八人の子を産み、末子出産は三十六歳、平均寿命は四十三歳であった。敗戦後、昭和二十二年は、平均二・七人の出産で、平均寿命五十三・九歳である。これに対し昭和四十八年には、平均二・一人、末子出産三十一歳、平均寿命七十六・二歳となっている。子を産み終わったのち、七年の余命しかなかった明治の母に対し、昭和の母は、五十年近い第二の人生をすこすことができるのである。

そのうえ平均家族数が三・九人ということは、姑と同居しない核家族がほとんどであることを物語る。自分たちの母に比べれば、信じられないほどの多くの自由と余暇を持ち、したいことが自由にできる可能性をもつ専業主婦のブライドを、管理社会の歯車の一つに組み込まれている働く女が、ほんとうに理解できるだろうか。

しかも、その自由と余暇は、半面では多くの拘束に裏づけされている。経済的な自立はない。生産に直接かわっているわけでもない。一方では、はなやかな女性進出の状況がマスコミによって伝えられてくる。その中の不安や焦燥を、何らかの意味で生産とかかわりあい、社会の直接情報にふれていると思っっている働

く女たちがほんとうの意味で理解できるだろうか。

家庭責任を果たしながら就労している、いわゆる兼業主婦にしても、主婦という名は同じであつても、専業主婦の家事や家庭とは微妙にちがっている。省力化された家事、離脱しようと思えば離脱も比較的可能な家庭を、同質の家事・家庭と考えたのでは、専業主婦の立場を理解することは困難であろう。なまじ、家事と家庭責任を日常事としているだけに、その自信が別の立場の情報を受けとる目を暗くしている面も多いと思う。

## 10 男に主夫はいない

望む者は就労し、望まない者は家事見習から主婦へという二つのコースの選択の自由がもてはやされた一時期が過ぎて、両者の共調や共闘が問い直されようとしているのは、前述したような、労働の場での産業予備軍的な専業主婦の存在が問われているからだけではない。専業主婦が存在することによって、「家事と育児は女の役割」という社会通念が定着していることの弊害や、とざされた家庭の中で、子育てを終わったあとと生きがいの喪失に悩む専業主婦の問題などがクローズアップされているためである。

巨視的に考えれば、就労することも自由、しないことも自由、という女の立場は、男以上に恵まれたものと言える。

生まれながらにして、職場で働くことを位置づけら

れ、どれほど家事や育児の才能を持つとも「主夫」であることを許されず、職場と、形骸化した家庭との間を往きつ戻りつしながら、家事や育児の、あの胸ときめくような喜びにもひたれないでいる男たちに比べ、女が少なくとも選択の自由をもっている意味は大きい。

職場と家庭の双方に対し、いわば両棲動物のような機能を備えている女は、情報化社会がさらに進展し、各家庭に情報処理の端末が配置されるようになり、家庭と職場の意味が大きく変化する時期には、男以上に適性を持つ、貴重な生物となるかもしれない。

元来、生活者のための生産であるべきはずの生産が、生産のための生産と化した弊害は、今日の公害問題として、大きな社会問題になっている。これは、家庭人、日常人としての側面を失った、生産要具化した男社会が生み出した公害だとも考えられる。「男は生産者、女は消費者」といった分断された情報の中で、生活者の情報を知ること少ない（あるいは無視する）生産者によって生産される公害のあと始末に、より生活者である女たちが多くの力をさいて苦闘しているのは、一種のカリカチュアだといつても過言ではあるまい。

前述9で、働く女に、専業主婦の、ほんとうの誇りや、ほんとうの悲しみがわかるだろうかという疑問を提示したが、これはそのまま、男対女の立場にもあてはまる。生産の第一線に立ち、われこそは社会を支えていると自負している男たちが、その生産物を受けとめている側の、ほんとうの悲しみや苦しみを、十分に

理解できるだろうか。生産者と生活者は、分断されたままであっていいのだろうか。

## 11 男女ともに生活人としての場を持つ

女が働くことはよくないと言い、あるいは家庭にもりきりでいるのはよくないと言って、相互に、女同志の狭い立場から論じ合うだけでは、両者の接点は生まれない。男をふくめた人間全体の問題として考えない限り、女の解放もなく、人間の解放もないだろう。

P T Aに参加しない兼業主婦を怒る代わりに、P T Aに参加できない父母の悲しみを考えよう。なぜ、子にとつてのすべての親——ペアレンツや地域の住民代表が参加するP T Aでなく、マザーのみが参加するM T Aになっているのか。母親たちだけが猥物的に活動しているのに、会長だけは男性なのは、なぜなのか。

また、ゴミ処理や公害、日照権などの運動が、主婦の活動、主婦の仕事、主婦の義務とされているのは、家事・育児を女のみの役割とする差別の延長ではないだろうか。

こうしたことを、一つ一つ問いつめていくとき、全体としての労働者の労働時間の問題や、利潤追求に走る企業のありかたなどが、鮮明に浮かびあがってくるだろう。そのとき、職業を持つ女も、男も、生活者としての側面を取り戻し、生産要具から人間に復帰する手がかりが得られるのではないだろうか。

情報化社会の進展は、労働量と労働時間を、現実には減少させようとしている。この減少が、失業者の発生につながってはなるまい。富の配分が問われるように、情報化社会の課題の一つとして、「労働量の配分」を取り上げるべきではないだろうか。

家事労働を、経済的価値というよりは、人間としての必要労働としてとらえなおし、職場の労働と通算した労働時間の再配分を考え直すことはできないだろうか。

男女ともに、少ない労働時間と多くの生活時間を享受し、共に「両棲生活」を楽しみ、共に育児に心かたむけるための方法が考えられるときこそ、女の解放も、男の解放も可能になり、子供の未来もひらけてくるのではないだろうか。

## 12 危機に目を向けよう

未来はしかし、楽観をゆるさない。

社会構造の変革期は、本来なら、下積みの層にとつて、絶好のチャンスとなるはずなのだが、職場や家庭の変化、それが女に及ぼす影響について、はたして問題提起や予測がすめられているだろうか。

情報化社会は、いま想像以上の急ピッチで進展している。かつて人手に頼っていた多くの作業は、コンピュータを軸とする機械によって処理されようとしており、労働者を、コンピュータに対して指令を下す

少数のエリート・スタッフと、機械の監視をする多数のラインに分かとうとしている。

先日、私は、ある電機工場を見学したが、オンラインでみごとに部品展開が行なわれる工場内で立働くのは、ほとんど若い女子だけだった。指令と指令のつなぎ目の人手作業の部分を守って働く少数の女子に課されていたのは、間断ない重労働であった。しかも、高価な機械を導入した代償として、機械は昼夜二部稼働を強いられており、女子工員の就労時間は、朝七時十五分から夕方四時まで、昼食時間は三十五分、十時に十分間の休憩があるのみ、ということであった。

「ただ食べるだけの昼休みです」と、女子工員は暗然として語ったが、管理者側は、「中・高卒男女の初任給格差がほとんどなくなった現在、女も男なみに働いてもらわなくては、ペイしない」という意見であった。

このような、ゆとりのない単純繰り返し作業が、若い女——というよりは人間、にとつて、快いものであるはずがない。女たちは、職場よりは、ましな環境として主婦の座にあこがれ、一、二年でそこに逃れ込み、子育てにひと息つける時期が来たときに、逃れ込んだ家庭のむなしさに脱主婦をはかる。そこで待っているのは、パートタイマーという名の、またしても単純繰り返し作業である。

——この「女の路線」は、いま、着々と定着化しようとしている。しかも、パートタイマーは、なまじ、「両棲生活」を可能にするだけに、両棲生活のよろこ

びを知った女たちに歓迎されている。増大するパートタイマーは、就労者の中で、別の層を形づくろうとしており、それだけでなく、就労層と非就労層に二分されている女を、さらに細分化し、その力をいっそう弱めようとしている。

大事に至ろうとしているのは、女ばかりではない。管理社会に組み込まれ、息つく余裕を失い、「主夫」であることも、「パートタイマー」であることも、ほとんどゆるされていない男たちの未来に、明るい展望はあるだろうか。「仕事が生きたい」と、もしもほんとうに信じている男たちが少なくなってしまうと、週休三日時代のその三日を、どのように過ごし得るであろう。週休二日でさえも、主婦たちは、ゴロ寝をする亭主族にとまどい、居住空間の狭さをかこっているのに、「両棲性」の訓練を受けていない男が、家庭に安住できるだろうか。

それを見越したように、第三次産業の振興が叫ばれている。しかも、その第三次産業は、余剰労働力の吸収の場として、国家的振興策が考えられようとしている。しかし、人工的な第三次産業が、はたして人の心にやすらぎを与え得るだろうか。余剰労働力の処理を考えると、女をふくめた、人間としてのドータルの労働量や労働時間が、なぜ再検討されようとしていないのだろう。振興された第三次産業は、人間や、家族に、はたして何をもたらすのだろう。——狭い国土の中で、わがものの顔に広いスペースを占めているゴルフ

場や、夜ごとのネオンの輝やきは、今でさえも、生命の生産と再生産の場としての家庭の危機を暗示しているように思われるのだが。

### 13 先手の側に立つて

すべて、社会の激動期は、価値観の転換をはかる好機であるはずなのに、徹視的な問題にとらわれて、ほんとうに必要なことを見失ってはいないだろうか。

進歩的な考え方をする女性の中には、例えば「情報化社会」ということは耳にするだけでも、にがにがしい表情を示す人が少なくないが、時代の変化に、表面的な抵抗を示すことだけが、進歩的なのだろうか。

産業革命の時期に生活していた人々は、自分たちが後に「産業革命」とよばれるような社会構造の大きな変化に直面していたことに、恐らく気がつかなかったのちにがいない。私たちがいま直面している変化は、その規模の大きさでも、後世への影響の大きさでも、恐らくは産業革命を上まわるものであろう。変化を恐れ、あるいは機械に抵抗を示すことだけが、はたして有意かどうか。機械にしりごみする男たちに代わって新しい機械と取り組んだマンチェスターの女たちが、男女同一賃金をかちとった事実、それがまたいつしか不同一賃金となったプロセスなど、歴史の上に学ばなければならぬことは多いように思われる。

コンピュータに象徴される情報処理機器への、企

業側のすさまじい研究に対し、働く側は、どれほど積極的な研究を行なっているだろう。まして、婦人労働や家族、家庭、その中の婦人の地位に対する影響については、どれだけ研究がすすめられているだろう。

コンピュータ産業は、政府の強力なバックアップのもとに、着々とその根を張っているが、いずれ、コンピュータ公害が問われることになるというのも、関係者には周知の事実である。しかし、その危険性だけを恐れて、駆使することも放棄したのでは、公害の処理策、防止策さえ考え出すことはできない。

人間が駆使することができ、そのゆえに他の動物たちの優位に立つことのできた道具の中でも、最も価値ある道具「火」も、本来、非常に危険なものであった。主婦が日常使っているガスでも、庖丁でも。本来は、危険なものである。危険性の高いものであればあるほど、研究は急務だといわなければならないまい。

生産の受け手の消費者として位置づけられた主婦たちは、物価対策や公害防止などの市民運動に、はなばなしい活躍を示している。「これこそは主婦の仕事」と、自己肯定する人も少なくない。しかし、ひとたび燃えあがり狂乱した物価に、小さなホースを向けても、注ぎ込むエネルギーの割に、効果は低い。公害が多く人命を奪ったあとで、その防止を叫んでも、失われた命は返っては来ないことを忘れてはなるまい。自ら市民運動にない手を誇る主婦たちに、十分な自己満足を与えている筈で、次の公害が発生しようとしてい

る危険を感じるのは、思いすぎであろうか。

#### 14 可能な限りの断面で考えよう

生命を産み、守り、育てる生活は、女にとっても、男にとっても、大切なものである。しかし、その大切な生活は、受け身のかたちだけでは守りにくくなってきている。理想論をいえば、すべての男女が働き、生産の場に直接介入して、情報の創造と伝送に参加してこそ、公害を未然に防ぐことができよう。そして、その働く男女のすべてに週休二日が与えられるようになれば、土曜も日曜もない主婦の現状も当然改善されるだろう。産休、生理休暇など、母性保護の問題、ひいては女の人権の問題も、すべての女の共通の問題、さらには男女の共通の問題として、考えられるようになるだろう。

とはいえ、やみくもに働くことだけがよいというわけでは決していない。単純未熟練労働に、しかも低賃金で唯々諾々としてつくことは、結果として女の地位をいっそう低く定着させる。それは働く女だけの問題にとどまらず、男の女性べっ視を助長し、家庭の中の男女関係にも当然はね返ることとなる。この転換期に処すために、女は、どのような選択を行えばよいのか、現実として、どんな選択が許されているのか、今日ほど相互の情報交換が必要な時期はないだろう。

情勢の判断資料として、仮にも願望をインプットし

てはなるまい。あくまでも、クールで正確な情報を精選し、衆知を集めて検討し、可能な限りの未来を予測して、すべての女の共通目標に対し、悔いのない選択を行なおう。

\*

\*

職業を持つ女と主婦の問題を、ここでは故意に、情報という一つの断面だけで考えてみたが、アプローチの方法は、ほかにも幾つも考えられる。婦人問題に対する既成の概念にとらわれず、人間解放の基本的な課題の一つとして、柔軟な立場で一つ一つ考え直してみることが、いまこそ急務であろう。

最後に、情報化社会を担う情報処理技術者の問題にふれてみたい。

コンピュータの導入に際して新たに開かれた職種である「情報処理技術職」は、当初、これこそ女性向きの職種として華々しく喧伝され、大学の数学科卒などの優秀な女子が開拓期の仕事についた。しかし、日本の電算機の普及率がアメリカに次ぐ世界第二位となった今日では、キーパンチャー・プログラマーなどの、単純で、労働の量だけが必要とする職種のみが「女性向き」とされ、情報処理の中核をつかさどるシステムエンジニアは、全国で数えるほどの少数の女性しかない。「指令するのは男、働きバチは女」の姿が、これほど明瞭に定着化しようとしている現実には、どう対処すればよいのだろうか。この状況を考えることは、明日ではもう遅すぎるように思われるのだが。

「バックナンバー」をどうぞ 定価に送料をそえて下記へ。

〒160 東京都新宿区新宿1-9-6 TEL. 03 (354) 3941「あごら」

郵便振替の場合は、東京5264「あごら」銀行振込は三井銀行四谷支店974-833「あごら」

あごら創刊号

〈女が働くこと〉

- ❑女が働くこと 松谷みよ子ほか
- ❑面接調査〈共働きを調査して〉
- 1 妻の意見 2 夫の意見
- ❑働く女性は過保護か 東京商工会議所  
／山本まき子／斉藤 一／ほか
- ❑母親銀行をつくらう
- ❑新聞切抜帖…71年の婦人界から
- ❑あなたの創造力を…BOC創造銀行

〈定価 200円／送料1部 70円〉

あごら2号

〈女性と能力〉

- ❑働く長距離走者たち…三刈嘉子ほか
- ❑アンケート調査
- 〈女性の地位向上をめぐって〉
- ❑研究 女性はなぜ管理職になれないか
- ❑座談会〈女性と能力〉…貞閑 晴ほか
- ❑グループ紹介…丸の内職場連絡会ほか
- ❑あごら読書室
- ❑新聞切抜帖
- ❑あごらのあごら

〈定価 200円／送料1部 70円〉

あごら3号

〈脱主婦意識〉

- ❑インタビュー 湯浅芳子ほか
- ❑ティーチイン
- 1 女性解放とは 吉武輝子ほか
- 2 脱主婦意識とは 大養智子ほか
- ❑脱主婦に私の思うこと 武田京子ほか
- ❑面接調査〈団地の主婦の解放意識〉
- ❑話題の法律〈二分二乗法〉伊東すみ子
- ❑あごら読書室
- ❑新聞切抜帖

〈定価 200円／送料1部 85円〉

あごら4/5合併号

〈壁を破ろう〉

- ❑インタビュー 市川刃枝ほか
- ❑何かしたい主婦のために
- 〈セミナーの記録から〉吉武輝子ほか
- ❑パネルディスカッション 職業を持つ
- 女性のための政策を五大政党に聞く
- ❑資料〈二つの差別裁判を考える〉
- ❑グループ紹介 婦人問題懇話会ほか
- ❑あごら読書室
- ❑新聞切抜帖

〈定価 300円／送料1部85円〉

あごら6/7合併号

〈運動をすすめよう〉

- ❑運動する人々 塩澤美代子ほか
- ❑座談会〈婦人運動を進めるために〉
- 須藤美代子／渡辺みえほか
- ❑解放への道〈海外の婦人たち〉
- ❑資料〈各国の母性保護〉
- ❑グループ紹介 女性の法的地位を考え
- る会／家庭科の男女共修をすすめる会
- ❑あごら読書室
- ❑新聞切抜帖ほか

〈定価 350円／送料1部 85円〉

あごら8号

〈子殺しを考える〉

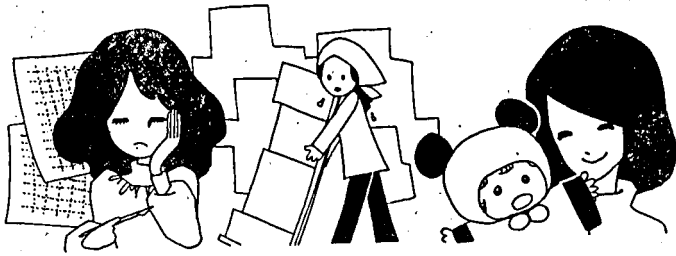
- ❑論文 既婚の母の子殺し考 武田京子
- 子殺しの精神病理 稲村 博
- ❑子殺しの背景 田中澄江 若月俊一
- ❑ルポ 事件を追う／主婦・街頭の声
- ❑資料 1子殺しの公判記録から
- 2世界各国の妊娠中絶立法例
- ❑ティーチ・イン〈性の二重性をめぐっ
- て〉加藤尚文／駒野陽子／梶谷典子ほか

〈定価 380円／送料1部 85円〉



# 生活時間からみた 働く女と専業主婦

昭和48年度NHK国民生活時間調査の結果から



働く女と専業主婦では、毎日の時間の使い方はどのように違っているだろうか。五年ごとに全国的な規模で行なわれているNHKの国民生活時間調査のうち、四十五年度に続き四十九年度(中間)に行なわれた調査の結果が、さる八月に発表された。この調査では、以前の調査に比べ、特に有職婦人と家庭婦人別に、また家庭婦人の中を副業の有無別に、かなりくわしく調査しているので、限られた紙面ではあるが、簡単に紹介したい。

## 一 有職婦人と 家庭婦人の割合

家庭婦人と有職婦人の割合は、図1(68ページ)の通り、有職婦人が若干上回っている。有職婦人のうち、勤め人が六割、農林・漁業や自営業にたずさわる非勤め人が四割である。勤め人は事務・技術職、技能・作業職、販売・サービス職がほぼ三割前後ずつを占めており、経営者・管理者・専門職・自由業等は全国的規模ではゼロである。また家庭婦人のなかで、内職・パートなど副業のある人は四人に一人、その約半分、つまり八人に

図 1 有職婦人と家庭婦人の割合

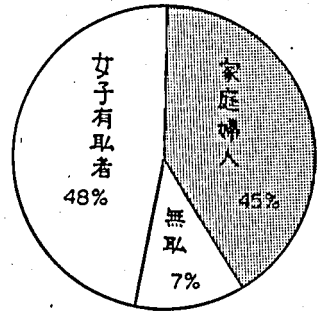
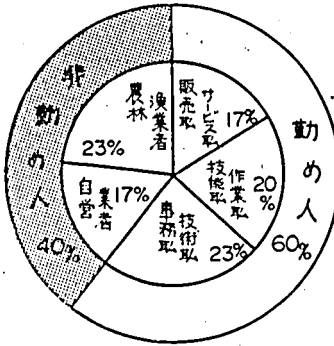
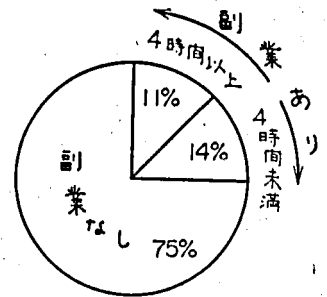


図 2 有職婦人の職業別内訳



一人は、四時間以上の副業をもっている。  
有職者のうちの既婚者の割合は不明だが、家庭婦人の中にも「働く女」がかなり多く、いわゆる「共働き」の概念も、本人が仕事に主体をおくか、家庭に主体

図 3 家庭婦人の副業の有無



をおくかで、その含まれる範囲もかなり漠然としたものである。

## 二 生活必需時間の違い

図 4 は、有職婦人を勤め人と非勤め人、家庭婦人を副業の有無別に分けた場合の、平日・土・日の生活時間の違いを示したものである。

これで見ると、睡眠時間はどの層もあり差がなく、仕事と家事の割合では、仕事をしている人は家事が少なく、家事をしない人は家事が長い。また余暇時間は平日から土・日になるにしたがい増える、というような一般的傾向を読みとることができる。

これをさらにくわしく、生活必需時間、労働時間、余暇時間に分けて、各層の違いがどこにあるかをみよう。

図 5 (70 ページ) は、図 4 の中の五つのグループの差をさらにくわしくみるため、各グループの時間のアタマの部分だけをとり出してみたものである。(順位は時間の少ないほうからつけてある)。

### (1) 睡眠時間

どの層もあり差はないが、副業のある主婦が、平日、土曜ともいっばん睡眠時間が少ない。日曜は家庭婦人の中ではあまり差がないが、有職婦人は、勤め人と非勤め人の開きが、約三十分あり、勤め人のほうが睡眠時間が長い。これは非勤め人の場合、日曜日もしっかり寝ていられないことを示しているようだ。

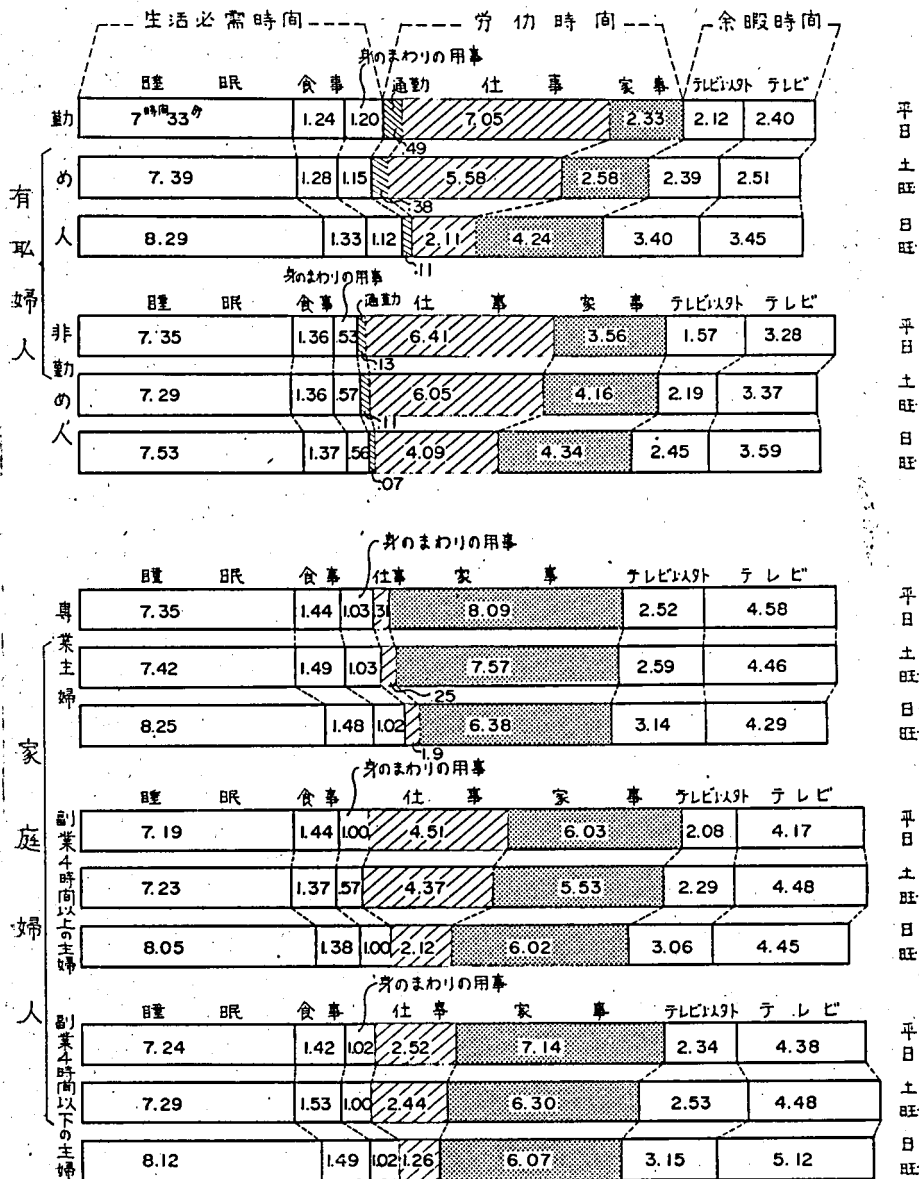
### (2) 食事

これは、どの曜日も家庭婦人のほうが長くなっている。有職婦人は日曜日食事時間が短い。

### (3) 自分自身の身のまわりの用事

家庭婦人の間ではどの層もほとんど差

図 4 有職婦人と家庭婦人の生活時間の違い



がない。むしろ有職婦人の中で、勤め人と非勤め人の差が大きい。この傾向は、平日・土・日とも共通している。勤め人は食事時間を減らしても、おしゃれのほうに時間をかけているということだろうか。外で働く場合とそうでない場合の、時間の使い方の違いがこのへんによくあらわれている。

#### (4) 国民全体との比較

次に女同志の比較ではなく、全体の中で、女の人の傾向はどういうところにあるかわれているか、みてみよう。男女年齢を問わず全体としてみた場合、また同年



代の男性と比較した場合と、比較の仕方はいろいろあるが、ここでは国民全体と

の比較だけにとどめておく。

まず、睡眠時間では、平日・土・日も国民全体に比べて短くなっている。やはり女は早く起きて食事の仕度をし、あるいは夜おそくまで後片付けなどがあるせいだろうか。

食事時間は、五つのグループの中では最も短い有職婦人が、大体国民の平均に近く、家庭婦人は平均より少し長くなっている。

身のまわりの用事は、非勤め人がほぼ国民の平均に近く、勤め人の場合は国民全体に比べ、かなり時間をかけている。

とくに平日の場合、勤め人と非勤め人の開きが大きい。(以上図5)

### 三 労働時間の違い

次に、仕事プラス通勤時間を仕事に含めて考え、五つのグループについて家事時間との比較をしたのが図6(72ページ)である。

#### (1) 仕事

平日は勤め人が最も長く、次いで非勤め人となっている。この開きは約一時間

あるが、土曜日は三十分に短縮され、日曜日は逆に非勤め人のほうが約二時間仕事時間が長くなっている。

家庭婦人の中では、副業四時間以上の主婦が当然仕事時間も長く、専業主婦は仕事時間が少ない。専業主婦といっても、ちょっとした店番などがあり、仕事時間ゼロではない。有職婦人のうち勤め人の場合、平日と日曜の仕事時間の差は約五時間あるが、非勤め人と家庭婦人はその差は大体二時間以下であり、平日と日曜の差があまり大きくない。

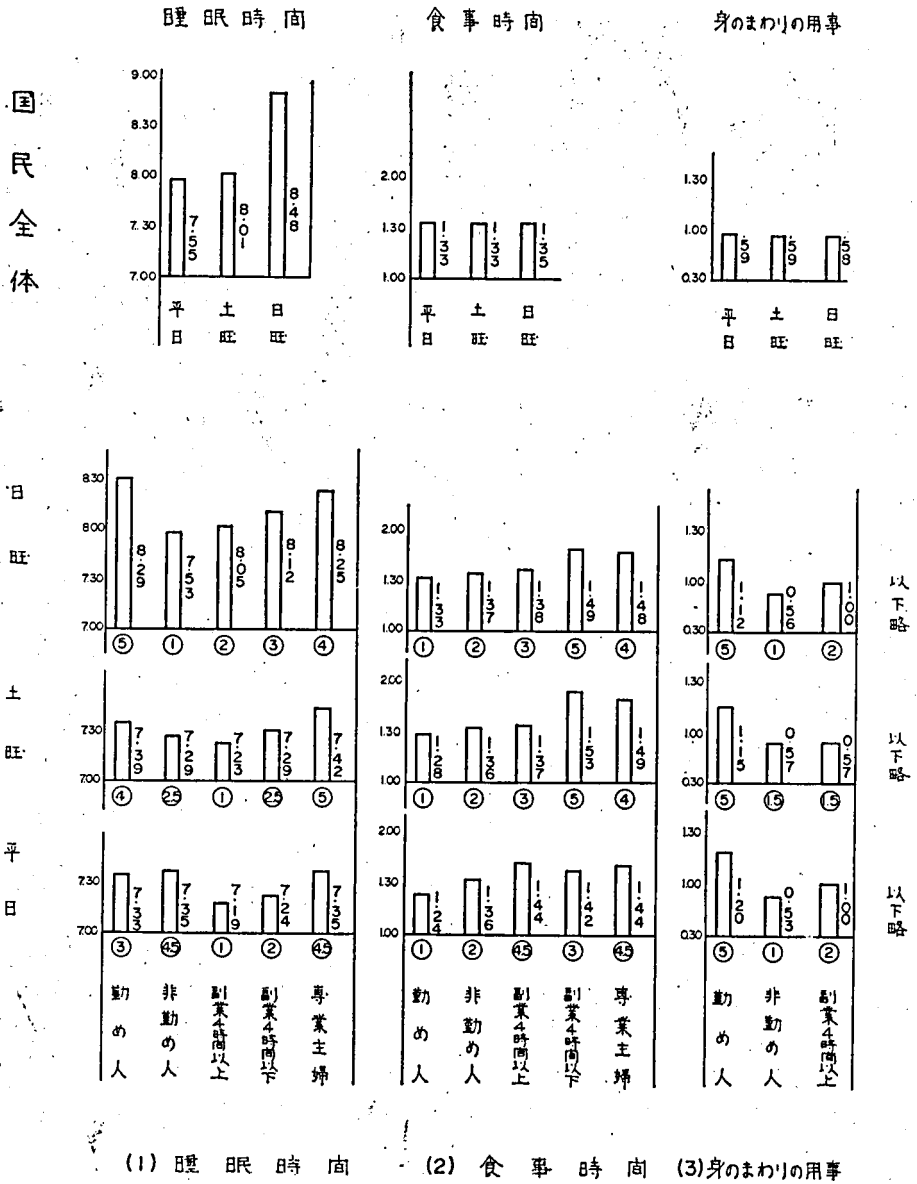
#### (2) 家事

これは逆に専業主婦がいちばん長く、勤め人がいちばん少ない。専業主婦と副業四時間以下の主婦は、平日から土・日になるにしたがい家事時間が少なくなっているが、他のグループは大体逆に、日曜の家事がふえている。しかし有職婦人の家事時間は、日曜でも家庭婦人よりはかなり少ない。

#### (3) 仕事プラス家事ー労働時間

以上のことから仕事をしていない人は家事にはげんでいることが明らかになっ

図 5 副業の有無別にみた生活必需時間の違い ○印は時間の少ないほうからつけた順位（以下同じ）



たが、トータルではどうだろうか。両方をプラスした順位は図7（73ページ）の通りである。

平日の労働時間の最も長いのは、副業四時間以上の主婦で、土・日の労働時間は、非勤め人が最も長くなっている。この二つのグループは仕事もやり、家事もよくやっていると見えそうである。

勤め人は平日こそ長いが、日曜は専業主婦よりトータルの労働時間は短く、かなり自由時間があるようにみえる。

一口に有職婦人といっても、勤め人と非勤め人ではかなり開きが大きく、家事からの解放という意味では、勤め人はかなり解放されているようだが、他のグループは必ずしもそうとはいえない。総じていえることは、有職婦人の中の勤め人と非勤め人との類似性、あるいは家庭婦人の中の（副業の有無にかかわらず）類似性よりも、有職婦人の中の非勤め人と副業四時間以上の主婦のほうが、労働時間・拘束時間の長さからみた類似性が高いということであろう。

#### (4) 国民全体との比較

仕事時間について比べてみると、副業

図 6 副業の有無別にみた労働時間の違い

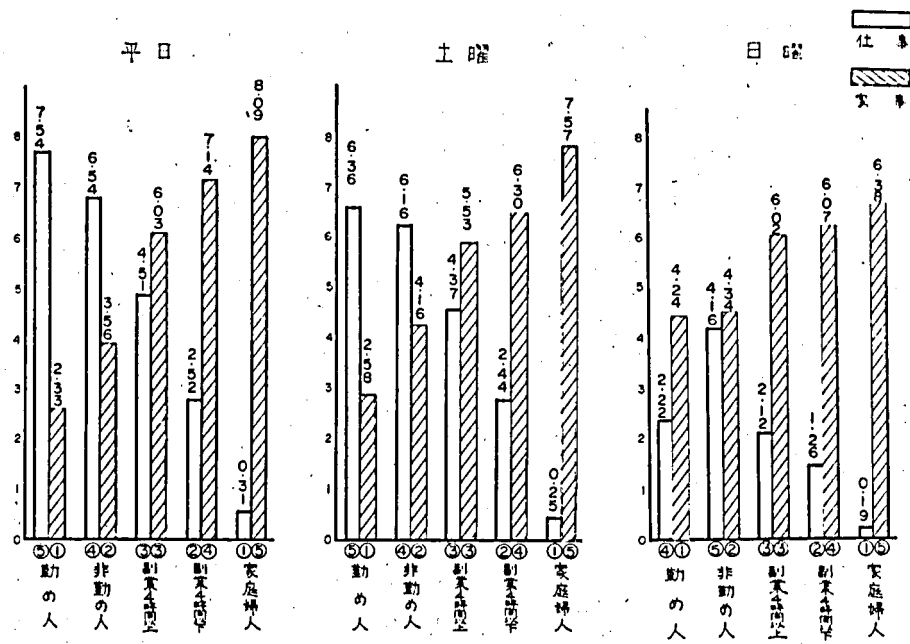
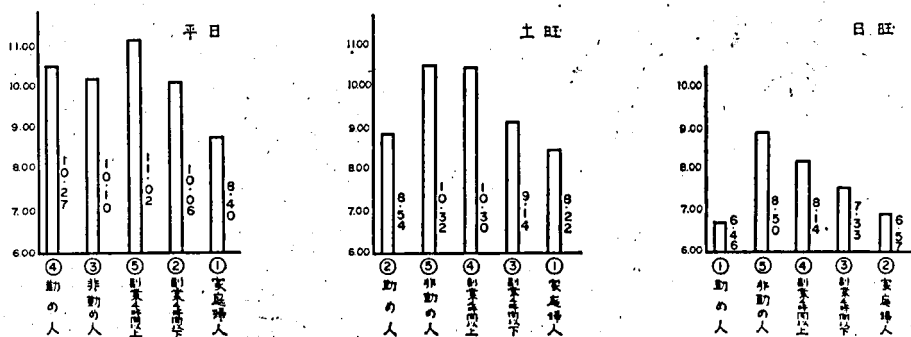


図 7 副業の有無別にみたトータルの労働時間の比較



四時間以上の主婦がいちばん平均値に近い。有職婦人は国民全体より多く、男性も含めた有職者全体に近いのは当然だが、通勤時間をさしひくと、有職者全体よりやや少なくなっている。

家事時間については、やはり家事は女のものなのか、どのグループも国民全体より長い。家事時間がいちばん少ない有職婦人の場合でも、日曜は国民全体より一時間も長く、家事に費やしている。

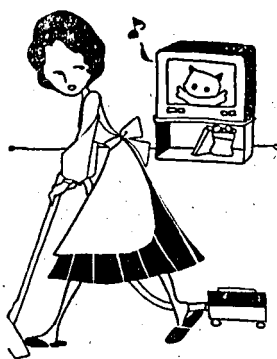
専業主婦は、よくヒマをもてあましているようにいわれがちだが、日曜の家事時間も結構長く、国民全体からみてもあまり自由時間は多くない。副業のある主婦・非勤め人は、平日の労働時間も家事時間も長いうえ、さらに日曜の労働時間が長いわけで、国民全体からみても働きすぎの傾向にあるのではなかろうか。

#### 四 余暇時間

この調査では、生活必需時間と労働時間を除く時間を、余暇時間と名づけている。ここで余暇に含まれるのは、テレビ・ラジオ・新聞・雑誌・本などに対する接触時間、友人との交際、レジャーの外

出や散策、休養などであるが、紙数の関係で、テレビとそれ以外に分けて比較してみたい。

テレビやラジオは、家事をしながらでも視聴できるが、それぞれ別々の行動と



して記録されているので、当然、「ながら視聴」も含まれている。

##### (1) テレビ

家庭婦人は副業のあるなしにかかわらず、実によくテレビをみている。「三食テレビつき」と評されるゆえんである。副業のある主婦も、テレビを見ながらできる仕事が多いということだろうか。

国民全体の平均と比較してみても、平日・土・日とも多くなっている。有職婦人のうち勤め人は、ふだんの日も、土・

図 8 余暇時間の比較

	テレビ以外			テレビ		
	平日	土曜	日曜	平日	土曜	日曜
勤め人	2.12 ③	2.39 ③	3.40 ⑤	2.40 ①	2.51 ①	3.45 ①
非勤め人	1.57 ①	2.19 ①	2.45 ①	3.28 ②	3.37 ②	3.59 ②
副業4時間以上	2.08 ②	2.29 ②	3.06 ②	4.17 ③	4.48 ④	4.45 ④
副業4時間以下	2.34 ④	2.53 ④	3.15 ④	4.38 ④	4.48 ④	5.12 ⑤
専業主婦	2.52 ⑤	2.59 ⑤	3.14 ③	4.58 ⑤	4.46 ③	4.29 ③
⑤-①	0.55	0.40	0.55	2.18	1.57	1.27
国民全体	2.04	3.15	4.02	3.13	3.26	4.07

テレビ以外の余暇活動 文楽・音楽・読書・新聞・遊園・本・ラジオ

テレビの場合 「ながら視聴」も含む

①②③④⑤は時間の少ないほうからの順位 同順位の場合は順位数として示してある。

日曜も、国民全体よりテレビ視聴は少ない。非勤め人はほぼ国民の平均に近い。家庭婦人の中では、専業主婦は、平日から土・日に行くにしがたい、少しずつテレビ視聴が減っているが、副業四時間以下の主婦は逆にふえている。先に労働時間の面では、有職婦人の中の非勤め人と副業四時間以上の主婦の類似性が高いと述べたが、テレビに関する限り、家庭婦人と有職婦人の二つのグループにかなりはつきり分かれ、それぞれの中の類似性が高いように思われる。

## (2) テレビ以外の余暇活動

テレビ以外の余暇活動は、テレビほどはつきりした傾向はない。平日・土・日を通じていえるのは、非勤め人と副業四時間以上の主婦が、いちばんテレビ以外の余暇時間が少ないことである。

有職婦人は日曜は、テレビを見るより、テレビ以外の余暇活動に多くの時間を費やしているようにみえる。(テレビの順位とテレビ以外の順位が全く逆になっている)。

国民全体と比較してみると、平日はどのグループも若干余暇時間が長い(非勤

め人を除く)が、土・日は、どのグループをとっても、国民全体より余暇時間が少ない。このことはやはり、土・日における女の自由時間の少ないことを示している、といえそうである。(以上図8)

## まとめ

以上、ざっとではあるが、生活必需時間、労働時間、余暇時間に分けて、有職婦人と家庭婦人を比較してみた。

この結果、いちばん大きな違いのみられるのは、やはり仕事時間と家事時間である。有職婦人といっても勤めに出ていいる人は、仕事時間が多いかわり、家事時間は少ないが、農林・漁業や自営にたずさわっている非勤め人は、仕事も家事も長くなっている。また家庭婦人の中でも、専業主婦は仕事時間が少ないかわり、家事時間が長く、副業四時間以上の主婦は家庭婦人とはいえ、家事と仕事をトータルした労働時間はいちばん長くなっている。この統計では有職婦人の大部分は未婚者らしいが、「女が働く」ということの意味も、単に勤めに出る、出ないということ以上に、さまざまな色合いが



みられる。

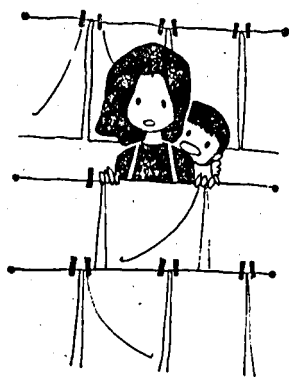
国民全体との比較では、とくに土・日にはみんなが休養したり、遊んだりする割には、女は休めないように、平日とほとんど変わらないくらい働いている人も多い。(とくに非勤め人・副業四時間以上の主婦)。

図9(75ページ)は、副業四時間以上の主婦・専業主婦・有職婦人(勤め人ブラス非勤め人の三つのグループについて、平日と日曜の家事の内容を比較したものである。この場合はそれぞれの家事を行なった人の割合と、行なった人の平均時間(やらない人も含めた全員の平均時間ではない)を比較してある。

平日・土・日ともほとんどの人が行なっているのが、「炊事」であり、その平均時間も長い。結局女は、「食うために生きている」という面がかなり大きいのはなからうか。

「そうじ」と「洗たく」は、炊事ほど絶対に欠かせないものではないためか、する人の割合も、その平均時間も少なくなっているが、平日と日曜の差はあまりない。有職婦人では、逆に日曜のほうが若干ふえている。しかし有職婦人の場合、

約半数は、「そうじ」「洗たく」をしないらしい。これはだれか代わってくれる人がいるのだからか。「実用品の買物」も毎日ではなくてよいいためか「そうじ」「洗たく」とほぼ同じような傾向が見られる。



「縫い物・編み物」になると、それらにたずさわる人の割合はぐっと少なくなり、四人か五人に一人くらいになる。しかし、やっている人の平均時間はかなり長い。とくに副業四時間以上の主婦の場合、仕事以外に「縫い物・編み物」にかける時間はかなり長く、この傾向は日曜も変わらない。専業主婦は、平日は三人に一人は二時間ぐらいやっているが、日曜になると減る。有職婦人も、やる人はやるという傾向が出ている。

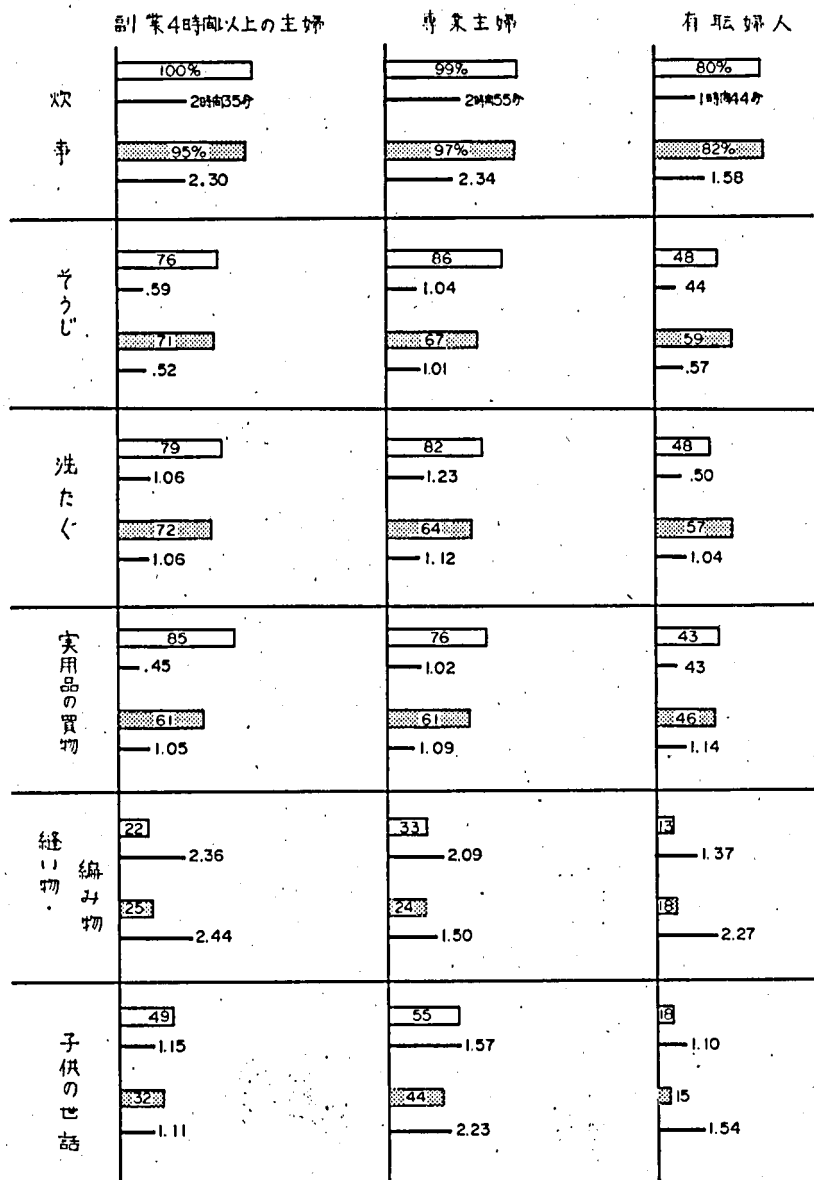
「子供の世話」は、子供の有無、その年齢によっても違ってくる。子供の有無による比較は、紙数の関係で省略するが、専業主婦は「子供の世話」をする人が多く、いちばん時間もとられている。副業四時間以上の主婦に比べても、平日・日曜ともに多い。やはり「子供の世話」に追われ、副業もできないところだろうか。

余暇時間については、余暇時間が長くなればなるほど、テレビ視聴がふえるというのが、とくに家庭婦人の場合、顕著である。他の余暇活動はあまり増えていないし、これからも増えないと予測されている。国民全体の中でいちばんテレビ視聴が多いのは、六十代以上の女子という結果も出ていたが、土・日もあまり自由時間がない女の行きつく先は、「こたつでテレビのおばあさん」らしい。

### これからの家事時間

以上、生活時間を三つに分け、職業・副業の有無別にざっと検討してみたが、いくつか興味ある問題点が出てきたように思う。さらにいろいろな国民層の生活

図 9 どんな家事をどのくらいしているか



平日  
 日曜

一日一回以上行った人の率

— その人が消費した平均時間量

図10 家庭婦人の生活時間量変化の

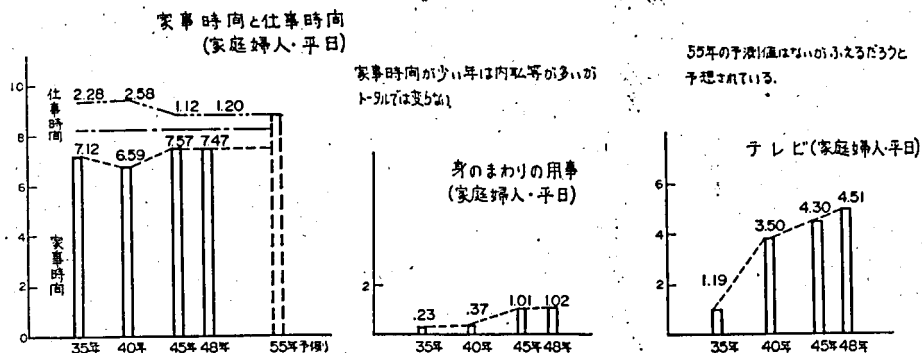
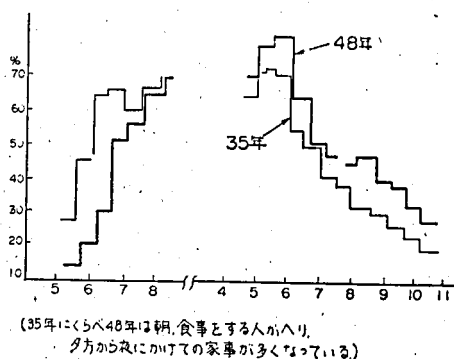


図11 家事をしている人の率 (家庭婦人・平日)



時間によってくわしくみたい方は、参考資料を参照してほしい。

これからの生活時間の予測としては、国民全体として、仕事時間は減少する傾向にあること、テレビ視聴は今後とも増え続けるだろうということ、「宵っばりの朝寝坊型」に全体として移行しつつあることが指摘されている。その中で家庭婦人の家事時間は、内職等の仕事時間も含めてあまり変わらず、今後とも減る傾向にはないという予測が出ている(図10)。

また家事をする時刻は、全体の「宵っばり型」と関連して、朝の家事が減り、夕刻から夜にかけて家事をする人も、その時間も増える傾向にあるということである。(図11)。さらに豊かな社会の到来を思わせるものとして、女の人が身のまわりの用事にかかる時間が、少しずつ増えており、今後とも増えるであろうと指摘されている。

このような一般的な傾向の中で、一人一人がどういう時間の使い方をするかは、また別の問題である。ひまができたからそれだけポケッとテレビをみるのもよし、何かをするのもよし、女の場合、その選択の自由がかなり大きいことが、この調査にもよくあらわれている。あなたにとって、自由に使える人生の残り時間はどのくらいあるか、まず計算してみよう。

参考資料

図説 日本人の生活時間1973

NHK放送世論調査所編

日本放送出版協会発行 千三百円

# 勤勞婦人の 妊娠・出産に関する調査

労働省婦人少年局は、首都圏の病院で  
出産した勤勞婦人約千人を対象に、妊娠  
時の労働条件や妊娠出産時の異常の有無  
を調査した。

## 年齢・職種

調査対象者の年齢は、二十五歳から二  
十九歳が最多数で五十七・一%、二十歳か  
ら二十四歳、二十三・五%、三十歳から  
三十四歳、十五・六%、三十五歳以上三  
九%で、一般と比較して二十四歳以下の  
割合が低い。

職業別の構成は、一般事務四十二・五  
%、教員十六・九%、工員七・三%、看護婦・保健婦助産婦六・二%、電話交換  
手五・七%で、その他保育・理・美容師、  
キーパンチャー、タイピスト、店員等であ  
る。

## 出産退職

出産後一週間以内の調査では、三十七  
九%が退職を希望、残りは職業継続ある  
いは未定である。職種別にみた場合、教  
員、看護婦、電話交換手には退職者が少  
なく、一般事務や店員は、退職者、退職  
希望者が多くなり、理・美容師は最も多  
い。

## 業務軽減

なんらかの業務軽減を受けた者は、全  
体のわずか二十七・四%。店員、教員、  
看護婦、保育などは、半数近くが軽減を  
受けているが、一般事務やタイピスト、  
キーパンチャーなどは少ない。理・美容  
師は、妊娠・出産による退職者が多いた  
めか、軽減を受けた者はない。

## 妊娠中の休業

産前休業をとった者が六十・三%。と  
らなかった者は三十九・七%だが、妊娠  
による退職のためにとらなかった者二十  
九・五%を含む。したがって産前休業取  
得率は九十%近い。

妊娠による休業が多かったのは、保育  
九十一・七%、看護婦八十六・九%で、  
理・美容師はもっとも少ない。

## 年齢

三十四歳以下の場合、年齢による差  
はない。三十五歳以上は、後期妊娠中毒  
症、流早産の徴候、早産、児切迫死、異  
常出血、微弱陣痛、低体重児出生が多い  
傾向。

## 職 種

妊娠中・分娩時・産褥を通じて、理・美容師、保母、電話交換手、看護婦に異常が多くみられた。その原因として考えられるのは、長時間の立業や腹部を圧迫しがちな中腰姿勢、深夜業などの労働条件と、労働時間の短縮を伴う業務軽減を受けた者が少ないことである。異常の少ない教員は、業務軽減を受けた者が多い。

## 労働時間

労働時間が長いほど、後期妊娠中毒症や貧血、流産、低体重児出生などが多くなる傾向がある。

## 残業・深夜業

残業あるものに低体重児出生率が高い傾向がある。

深夜・交替勤務のあるものは、後期妊娠中毒症、流早産の徴候、流早産、前期破水、微弱陣痛、分娩遅延、低体重児出生の割合が高くなる傾向がある。

## 業務軽減

労働時間の短縮を伴う業務軽減を受けたものは、後期妊娠中毒症の発生率が低い。

い。

深夜勤務などがありながら、軽減を受けなかったものは後期妊娠中毒症や早産が多く、流・早産の徴候や低体重児出生率も高い傾向がある。

## 通勤時間

流早産の徴候は通勤時間が長いものに高い傾向があったが、その他は相関関係が出なかった。しかしこれまで他で行なわれた調査では、通勤時間の長さ、つまり症状の重さとは比例するといわれ、長時間の通勤は妊娠経過全般に悪影響があるといわれてきた。

バスや自家用車で通勤する者に流早産の率が高く、交通機関の混雑で座席に腰かけられない者に、低体重児出生率が高い。

## 家庭生活

住宅環境不良、とくに階段の昇降が多い場合、後期妊娠中毒症、貧血、流産、低体重児出生が多い傾向がある。

家族形態は八十・四％が核家族で、つまり、後期妊娠中毒症、低体重児出生率は、核家族以外の形態に多い傾向がある。

## 国・地方自治体への要望

勤労婦人が妊娠・出産・育児について国や自治体に望む政策は、保育施設の増設が最も多く五十五・五％。次いで育児休業四十六・七％、産後休業期間延長の三十二・三％、妊娠中の時差通勤二十八・九％、つまり休暇二十七・六％。

教員、看護婦、保母、理・美容師などの専門的・技術的職業従事者には、保育施設増設を望む声がとくに強く、育児休業を望むものも多い。

## 勤労婦人と家庭婦人との比較

この調査と同時期に行なわれた家庭婦人の調査と比較すると、流早産の徴候、後期妊娠中毒症、前期破水、微弱陣痛、分娩遅延、低体重児出生などが勤労婦人に高い傾向があり、家庭婦人に比べて妊娠・分娩等の経過に異常の割合が高い傾向があると思われる。

労働省は一九七二年施行の勤労婦人福祉法で、事業主に対して、勤労婦人の妊娠中・出産後の健康管理を配慮する努力を求めた。この調査は、今後の具体的施策の基礎資料とする目的で行なわれた。

# 最後の地母神

——寿地区の母親たち—— 野本三吉

オオゲツヒメは、「古事記」にてでくる保食の神と同じ神格で、古代人の食べものの理念を表わしていた。

生きている生命を喰うことが生命の根本である。したがって、次の生命に喰われることが生命の宿命である。

杉本三郎は「古事記」に出てくる、この少し足りないそして人のいい地上の母神のことを思い出した。（「宗門帳」藤森栄一）

## I

「いつまで寝てんだよ、起きろよ、起きんかい、ホラ！」

どら声をはりあげて、松本さんのオバサンが、ぼくの小さな三畳間のドアをたたくのは、毎朝六時少しすぎであった。

夜の遅いぼくは、午前六時といえは、実に気持よく眠っているときで、この荒々しい侵入は、全く理不尽なものであったのだが、少しも、そんな気持にさせないところが、このオバサンの人徳というやつである。

「あんななあ、朝ねぼうしとる間に、みんなバリバリ仕事しとるんで、えっ、若いのに、しっかりせえや」

ズカズカとあがりこんで、オバサンは、湯気のががったテンコモリゴハンと、ミソ汁をぼくの鼻の先に置くのである。

ぼくは、それから、敷きっぱなしの布団の上に、パンツ一枚で起きあがり、おもむろに洗顔におよぶというわけのだが、バーンと一発、背中からお尻のあたりをどやされるのである。

松本さん一家は、病身のご主人と、オクサン、それに小学校一年生を頭に五人の子どもがいるのである。一番下のみどりちゃんは、まだ一才になるかどうかという



ところで、手のかかるさかりなのである。

松本さんは、こうして一家七人で、三疊間の部屋を二つ借りている。それでも、少々の家財道具を置くと、もう部屋の中は、いっぱいになつてしまふ。

一家の働き手のご主人が病氣ということ、松本さんは、生活保護をうけている。この生活保護費だけでとても足りないとなると、このオクサンは、夜の水商売のアルバイトに出るのである。それも、昼間は、子どもたちやご主人の食事の仕度、そして洗濯、掃除、買い出しといった目のまわるような仕事をしてからである。そんなとき折り詰めなどをぶらさげて、少々酔つてご帰宅となるのだが、ぼくの部屋にも寄ってくれるのである。

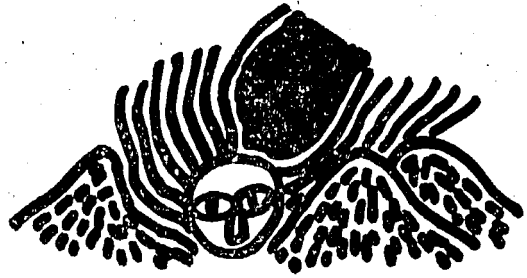
「ちょっとお、まだ起きてる。おみやげよ」

そう言つて折り詰めをボンと投げてよこして、自分の部屋に戻つてゆくのは、午前三時ごろなのだが、朝は午前六時になると、例の大声はりあげてやってくるのだから、なんともはや、大した女丈夫なのである。

この寿の街は、港灣の仕事を中心とした日雇労働者の街で、したがって、単身の肉体労働者の素泊りの宿として、簡易宿泊所（ドヤ）が建てられ、たいていは三疊間で、一日一日と宿銭を払つてゆくことになるのである。だから、どうしても、定着する人にとっては不向きな場所となつてゐる。あるいは、定着者を拒絶する街といつてもいいかもしれない。

ところが、この横浜の寿地区は、他の山谷、釜ヶ崎などとくらべると、はるかに子どもが多いのである。つまり有子家庭が多いということである。日雇労働者、六千人の中に、子どもは三百人、女の人は二百人はいるのである。パーセンテージは低いけれど、これだけの女子どもがいるということは、寿地区の大きな特徴なのである。

そして、この街で生活する子は、どの子も生活力に満ち、粗野でたくましい。そしてまた、母親たちも、男たちに伍して生活してゆかねばならないゆえにたくまし



く、おおらかなのである。この母親たちの、はりあげる嬌声と、子どもたちの疾走する寿地区は、貧しい生活にもかかわらず、どこか古代の大部族の面影を残しており、家族的なふんい気があるのである。

松本さんは、そんな中でも典型的な女の一人である。背は小さいが、まるまると肥え、いかにも健康そうにハチキレそうな腰まわりで、次々と子どもを産んでゆくのである。

オバさんは、よく、ぼくの小さな部屋にもやって来て、ベチャベチャとおしゃべりをしてゆくが、アケツピログのオバサンの過去はやはり暗いのだ。

「あたしの最初のダンナは、フランス人だからね。年とったねえ、船長だよあんた。あたしに、ちゃんと家を買ってくれてさあ、七年間、一緒にくらしたよ。金には不自由させなかったよ。トミコトミコってあたしのこと可愛がつてくれてさあ。本国の奥さんのところへ帰るときは、ポロポロ泣いてさあ。トミコは若いから、いいダンナさんみつけないさい言っさあ、よかったよ」

そのときに、オバサンは英語を話すようになったらしい。アメリカからのフルブライトの留学生が来たとき、とにかくも対等に話しあっていたのは、松本のオバサンだけであった。

「あんた大学出てんだろ、しゃべんなさいよ。しっかりしろやいノ」などと、驚ろかされたものだが、それも、このときに覚えたものなのだろう。

「それからさ、外人あいての水商売に入っさあ、お金のためにずいぶん苦労したわよ。外人っていうのは野蠻だからさ、いきなりとびかかってきたりしてさ、いやだったよ。何度、トイレで一人泣いたかしれないよ」

そして、戦後の横浜でのヒロポンの洗礼をうける。何度も警察につかまり、こずきまわされながら生きのびてきた。

「そんときさ、今の亭主と知りあったのよ。テキヤなんかやってさ、やっぱリク



スリうっててさ、そのとき知りあったのよ」

「あたしも年だしさあ、落ちつこうかなって思ってたからさ、一緒になっちゃったのよ」

その松本のオバサンには、もう二十才になる女の子がいるのである。

「広島施設にあずけてあんのよ。でもさ、二十にもなっているのにさあ、今さら会いに行くのもこわいしさあ、どうしようかなあって考えてんのよ。でも、この間、夢みたよ。そしたら、ユミコがシクシク泣いてんのよ。」

やっぱり、迎えに来てほしんだなって思って、夢なのにさあ、泣いてんのよ、あたし。ばかだね、あたしや。いつまでたってもバカは直らないよ。アハハハ」

この松本のオバサンは、仕事にアブレ、酔って路上で寝ている男たちをみると、一人一人、ハッパをかけて、ニギリメシをつくって持って行ってやったりする。

「しっかりしろ、やいクマ、おまえ、金たまふらさげてんのか、男だったらしっかりやれよ！ ホラ、めし食って、元気だせよ！」

そして、例の平手で、背中をバーンとはたくのである。

たいていの労働者は、目をバッチリ開いて「姉さん、ありがとう」といって、深くと頭をさげるのである。

これだけの激務に耐え、そして子育てをし、さらに夜のアルバイトに出ていながら、松本のオバサンは、ついぞ病気をしたことがないのである。

## II

天から、スサノヲという、荒々しい自分かつての男の神が、腹をへらし

ぼくは、昼は、この寿の街にある寿生活館に勤め、生活相談に応じ、夜は、この簡易宿泊所の二階の部屋に来て、泊ってゆくという生活をしていたのだが、昼間、生活館では話せないことを、よく相談に来るのであった。

てやってきた。

食物をよこせという。

ヒメは一所懸命にこ馳走をして、こ機嫌をとったが、まだ足りないという。

とうとうヒメは口から自分のほらわたを取り出してやった。

（宗門帳「藤森栄一」）

そんな中に、子どもを背負った川浦トヨさんも混じっていた。

川浦さんは、同じように簡宿所に三人の子どもを抱えて泊ってはいたけれど、昼は、飯場の炊事係として働いているのであった。

まだ、学齢前の三人の子、そのうち一人はまだ乳児で背負わねばならず、他の二人は手を引いてゆくということではあったが、川浦さんも、朝早く部屋を出、夕方帰ってくるという生活をしているのであった。

川浦さんの場合は、特定の夫というものがなかった。三人の子の父親は、三人ともちがうのである。

「あたしの家はね、もともと土建屋だったのよ。だから、あたし、父の仕事ぶりなんかよく見てたしね、人の使い方も知ってたし、それに家に、男の子がいなくてね、父の後つぎがなくて、あたしにダンブの運転なんかさせたのよ。だから、大型トラックの免許、あたし持ってるのよ。

ところが、ちょっとした事故がもとで父が死んじゃって、あたし一人じゃ、とてもやってゆけなくて会社を解散したのよ。

だけど、今まで、父の下で働いていた人がね、他の土建へ入って、あたしを拾ってくれたりして、何とか仕事はもらってるのよ」

もともと気性が激しく、飯場や土建の仕事で、男の中で育った川浦さんである。

自然と仕事は、そうした関係になっていった。けれど、川浦さんには、父の会社をもう一度おこしたいという夢がある。

そのためには、どうしても男の力が必要である。しかし、仕事もできるし、しっかりした川浦さんのこととて、通ってくる男に、どうしても頼る気にはなれない。

逆に男の方が頼ってくるということになってしまふのである。そして、今では、三人の男が、交互に川浦さんを訪ねてくる。

いわば、三人の子どもの、それぞれの父親というわけである。男たちが、川浦さ



んを共有にしたのか、川浦さんが、三人の男を夫にしたのか定かではないが、この三人の男たちは別に争うわけでもなく、川浦さんを訪ねてくるのである。

だから、川浦さんは、特に金に困るということとはなかった。けれど、子どもを抱えて、その男たちの金をあてにして暮らすということは、川浦さんの気性としては、どうしてもできなかった。意地でも自分の力で働き、逆に男たちに小使いを渡すような状態であつたという。

けれど、そうした無理がたたって、川浦さんは、何度か血を吐くようになってしまった。コンコンと変なせきが出、タンも出るという。明らかに結核の症状である。それに微熱も出、川浦さんは、心配になって、ぼくのところに相談に来たというわけなのである。

「三人の男たちがね、おれたちが面倒みてやるって言ってくれるけどね、あたし、どうしても人の世話になるのイヤなのよ。人に世話されるより、人の面倒みてやったほうが、なんぼか楽なのよ。だからね、今度も病院の方の費用さえみてもらえれば、あとはあたしが何とかしますから、一度、病院だけやらしてくれませんか」生活保護も、もらわないで、病身の体で、飯場の炊事仕事に行っていた川浦さんである。

すぐに、病院へ行く手つづきをとって、みてもらったところ、やはり、かなり結核はひどくなっているということがわかった。

できることなら入院して治療した方がよいというのである。この診断は、川浦さんにはかなりショックだったようである。

小さいときから、病氣一つしないで成長してきたので、体には自信があつたようなので、よけい、めいり方は激しかった。

けれども、結核であれば子どもたちに感染することも心配だし、とりあえず、入院という措置はとらねばならなかった。

「あたしはね、自分の力で、土建会社をもう一度つくろうと思っていたのよ。こんなところで倒れちゃったら何にもならないな」

川浦さんは、入院の前日、そんなふうに言つて最後の酒だといつて、日本酒をおおつていた。ところで、その三人の子どものことなのだが、乳幼児のルミコちゃんの場合は、施設にあずけるといふことは、しかたないこととして、あと二人の子は、三人の内縁の夫たちが、一切面倒みることになったのである。不思議なことである。

この三人の男たちは、仕事にいつている現場もそれぞれがついているのに、お互いのことはよく知っていた。

いつのまにか会つて、そんな話をしたらしいのである。だから、退院してくるまで川浦さんの部屋はそのまま、三人の男たちはかわりばんこに、この部屋にとまり、あるいは三人一緒に、この二人の子の世話をするというのである。

世の常識から言えば、これは変な話であるけれども、三人の男たちはいっこう平気なのである。

「おれたち、トヨ姉さんには世話になつてるしよ、そのくらいのことならやるよ」それからしばらくして、ぼくは川浦さんを見舞つた。そのとき、川浦さんは、腕をめぐつてみせて、二の腕に彫られたみごとなボタンの入墨を示して、

「あたしもね、前はヤクザの飯も食べたのよ。ボタンのおトヨで通つた。でも、子どものことになると弱いよ。あの男たちが、うちの二人の坊主をみてくれるって言つたとき、ほんとにうれしかったア。あたしさあ、あの三人の男は、どいつもかわいいよ。あたしの弟みたいでさあ、三人とも、抱えてゆくよ、あたし、それで、あの三人も一緒にして土建屋つくろうって思うんだ」

川浦さんの安心した表情が、いかにも少女のようで、ポロポロ落ちてくる涙まで水晶のようだなあと、ぼくは思った。

### III

スサノヲは、このきたない女め、下劣な奴だといふわけで怒って、保食神を切り殺してしまった。ヒメは殺されてもお、死骸から食物を出し続けた。

頭髮から蚕、目から稲、耳からは粟が、鼻の孔から小豆、そして陰部から麦、最後に尻の穴からは大豆が生れきた。

地上の生きとし生ける人は、そのヒメの生命の犠牲を糧として榮えてきた、というのである。

〔宗門帳〕藤森栄一

寿の街では、年に一度、寿まつりというのをやる。今までは冬に行なわれていたのだが、今年は十一月のはじめ、つまり秋に行われたのであった。二日にわけて行なわれる、この初日の夕方からは、手造りの樽みこしが街の中をねり歩き、夜に入ると、火をもやしての火まつりがあるのである。

今年は、この樽みこしは三台で、一台は子ども、一台は男たちと決まっていたのだが、当日になったら、あと一台には、街のオバサンたちが集まってきて、女みこしになってしまった。その中心になっていたのが、平岡さんである。八十キロを超えるという巨漢で、汗びっしょりになってみこしをかつぎ廻るのである。寿の街ではだれ一人知らないものはない平岡さんにも、小学五年の子を上にして、五人の子どもがいるのである。平岡さんは、実に魅力のある豪快な族母的な風格のある人なのだが、ダンナは、他に女の人をつくって静岡の方へ行ってしまった。

時々、寿の街にもやってくるらしいが、平岡さんは、全く気にしないといった様子である。そして、夜の火まつりになると、マイクを片手にドスのきいた声で、大声はりあげてうたうたのである。

この平岡さん、実に面倒がいい。生活に困っている人、病氣やけがの人、そんな人を連れて、よく生活館にやってくる。

「いろいろな話を聞いたんだけどさ、ちょっと相談にのってやってよ。困ってるからさ」

その全体の風格からして、頼ってゆく人は多いらしいのだが、どれもイヤな顔一つせずに聞いてやっているのだ。

路上に倒れている酔った人がいて、ぼくがかかえて部屋まで連れてゆこうとして

いると、ひよっと横に現われて、もう片一方の肩を支えて「しっかりしろよ、ホラ、足をふんばってえ」などと大声だしてくれる人があるので、見ると平岡さんであった。

みかけばかりではなく、力はそうとうにあるようであった。路上で、日雇労働者とわたりあっている姿もよくみかけるが、かなりの迫力である。

「なに、てめえ、もう一回いってみろ、上等だ、相手になってやらあ、こっちへ来い。」

たいていは、平岡さんの言い分が通るようで、一度などは、土下座して謝っている酔った労働者の姿をみたことがある。

そのときは、さすがにはずかしそうに顔を赤らめ「やめときなよ、いいよ、みっともないよ」と連発していた。

この平岡さんも、三畳一間での生活だが、廊下の隅っ子などを利用して、白菜などの漬けものをつくるのが得意なのである。そしてまた、こまめでもある。

「うちで漬けたやつ、うまいよ」といって、持ってきてくれたり、子どもたちにわけてやったりもするのである。男がいないので、男の役も果たしているのだろうが、それが少しも不自然ではなく、全体としては、いかにも女らしい女になっているのである。

この平岡さんや、松本さんなど、寿の子もちの母親たち八人と、寿の子どもたち四十名余りをつれて、横浜の長津田にある「こどもの国」へ行ったことがある。めったに寿から離れない母親も、子どもたちも、大ハシヤギで、前の晩から大分興奮していたようだが、電車の中でも大騒ぎであった。

なにしろ、子どもたちはチョコチョコと落着きがないし、あちこちと席を変わったり、窓から首をつきだしたりする。危なくてならないのである。すると母親たちは、周囲の乗客もおかまいなく、でかい声で一喝するのである。



「コラッ、タツ、何してんだ。やめときな」

見ると自分の家の子ではない。それでもまるでわが子のように呼びつけにし、どなるのである。周囲の人々はビックリしているようだったが、それにもいっそうかまわない様子である。

寿の街では、地域が狭いこともあり、たいていは、みんな子どもたちのことをよく知っている。子どもの方も、それぞれの母親の気性をよく知っている。

だから、自分の家の子だけといったカキネがない。一種の寿地区という大家族といった感じなのである。だからもつていったニギリメシやくだものも、みんなに分ける。

自分の子だけ特別ということがない。

寿の街は、全体には貧しく、そして非衛生な街である。衣、食、住にしても、決して十分ではない。けれども、この街の母親たちは、この不十分な条件の中で、とにかく生き抜いてゆく。それだけにたくましい。子どもも制限することなく産んでゆく。生まれてしまえば、何とか育ててゆくのである。

コンクリートに埋められた都会。そして、その中で吹きだめのように社会からは見捨てられた街。

だが、そこに、こんなにも人間的で生命力にあふれた人々、女たちがいることを人は余り知らない。ただ、こうした母親たちも、一般的には長生きしない。無理がたたるためであろう。ついこの間も、ナミオの母親が死んだ。まだ三十六才であった。残された三人の子は施設へひきとられていったが、三人とも母親の結核がうつって小児結核であった。

ぼくには、この寿の街が、日本に残った地母神の生棲する最後のところのような気がする。そして、日に日に寿も変っているのだ。

# 10年目の主婦休暇

ケンブリッジ留学記

高橋 ますみ



「ケンブリッジ大学へ夏期留学してみたいんだけど」迷いに迷ったすえ、そんなことはかなえられそうにないと内心思いつながら、切り出したのだが、夫はいとも簡単に、「行ってくればいい」と答えた。彼にしても、まだ幼い七歳と四歳の坊やたちと、病身の姑の世話に明け暮れている私が、そのひとことで、本気になると思わなかったであろう。

その日、大学の研究室の前に貼り出されている「ヨーロッパ夏期留学」の貼り紙をうっとり見つめながら、いつか行きたいな、ぐらいい思っていた。毎週たった一度、社会学研究生として大学の門をくぐるために、あとの六日間はその一日のためにあるように忙しい。地方記者をしている夫の関係で、私は二、三年ごとに転勤のある新聞社の通信局を預っているし、ささやかながらも、夕方は三十名ほどの中学生のために学習塾を開いている。姑はすでに七十四歳の高齢で入退院を繰り返している。わが子たちはわんぱく盛り。勉強時間が欲しいと、それだけを思いつめて、朝早くから、家事万端、来客の接待、取材先との電話連絡、新聞整理、幼稚園への送り迎え、毎日毎日、今日こそ

はと悲壮な気持で、たとえ一時間だけでもねん出したいと、こまねすみのように働きまわるのだが、塾が終わり、子供たちの夕食、風呂の世話をし、取材から深夜に帰ってくる夫の晩酌の用意をする、私の方も、もうぐったりしてしまい、ただ一刻も早く寝たいと思うだけで、一週間はまたたく間に過ぎてしまう。研究日の前日は家事に精を出し、事務的な手配に気をくばり、その日の朝は姑の昼食の用意、夕食の下準備をし、ころがるようにして出かけるのだが、持つて行ける研究の成果は、貧弱でみじめである。だが学び続けているという意識だけが私の日常茶飯事の忙しさを支えているのかもしれない。来年の夏は、また転勤かもしれないし、今は小康を得てやっと退院した姑がまた寝込むかもしれない。とにかく今年やろう。——しゃにむに夏期留学の実行に立ち向かった。

主催の海外学術協会からは、すぐ許可がおりた。主任教授の賛成も得られた。二人の幼い子供をどうするか、夏休み中預ってくれそうな所へ手当たり次第に当たってみた。木曾に住む夫の同僚の奥さんが一週間、名古屋の叔母が一週間、かつ



て住んだことのある岐阜県の子供たちの古巣である無認可保育所へ二週間、病身の父をかかえる実家の母が一週間と、子供たちのスケジュールはあぶない綱渡りのようにして決まった。姑は、姑の実家が気やすく引き受けてくれた。夫は、ひとり暮しを楽しむかのようによそおった。

＊

大学都市ケンブリッジは、ロンドンから列車で一時間、ふんだんの緑の中に赤レンガ作りの数々のカレッジが集まり、歴史の重みがそのまま感じられるような町だった。

夏期講座の行なわれるジーザス・カレッジは、ケンブリッジの中でも由緒ある十五世紀創立の大学である。建物は古く、黒いどっしりした鉄の扉を押して、踏み石のすりへった門を入ると、三階建ての赤レンガの学舎がそびえ、その中央にはキリストの彫刻、その両側に十字架、ライオンの絵の大学の紋章が掲げている。その下をくぐると、パッと明るく広い中庭が開け、一面の芝生とそれをふちどるバラの花々、教室の窓をいろどるツタの葉の緑。毎日のことながら、晴れた日も雨の日も美しいと思って眺めた。

私の教室は三階、個人指導による教授と学生のきめの細かい接触を目指しているだけあって、各教室の規模は小さく、机は十人分ほどである。中はうす暗く、片隅に置いてある古ぼけたピアノは、もう数百年もそこに鎮座しているのか、すっかり音律が狂っていた。窓からは芝生を敷きつめたフットボール競技場、その向こうには公園、そしてまた向こうには、カム川の流れがかすかに眺められた。クラスメートは、ベルギーからやって来たまじめ大学生ヨハン、イタリア美人のマリア・エリ嬢、おちゃめなブレイボーイのダリオ、ぼくとつなイタリア青年クラウディオ、それに仙台の高校の先生である吉岡氏、東京造形大学に勤める笹川嬢などであった。夏休みを利用して世界各地からやって来た留学生は、人種も年齢もさまざまであったが、自己紹介がすむと、共に英語を学ぶという共通点が、急速に私たちを近づけた。

会話を教えるホワイットヘッド先生は、まだ若いイギリス青年で、いつもジーパンにシャツ姿。発音に少しなまりがあるように感じられたが、ゆっくり分りやすく話してくれた。

ある日、彼は窓の外を眺めながら、「こんな良い天気、机に向かってるのはいやでしよう」といった。すかさず答えた私たちの「イエス」に、授業をカム川の舟の上ですることになった。カム川はケンブリッジの町の周囲を流れ、有名なボート競技の練習も、毎日ここで行なわれる。のんびり釣り糸を垂れている人、岸に座って語り合うカップル、橋の上からゆきかう舟をあきもせず眺めている老人、ケンブリッジの人々の生活の憩いはいつも、このカム川を中心にある。ホワイットヘッド先生のこいでくれる舟の上で、のどかな水面に垂れ下る柳の枝を、マリア・エリと取り合ったり、ふざけてぶつかって来るダリオやヨハンの舟に、水をかけたり、たとえ川へ落ちてでも「助けて」と英語でいうべきだと念を押した先生の忠告を守って、私たちは、お互いに外国語である英語で、ことば以上に心の通じるおしゃべりを楽しんだ。

フリー・トーキングを担当するのは、ロイス先生。典型的な英国紳士で、インテリジェンスということばは、彼のためにあるのではないかと思われるほどすばらしい先生だった。すみきった声で非常に明

確な英語だったし、留学生の話に心から興味を示し、私たちが甘おうとするその向こうのことまで理解しようと努める態度には、この上もない温かさが感じられた。毎日、つぎの日の話題と報告責任者を決めることにしていたので、下宿での予習は、ほとんどこの授業のために費やした。吉岡氏は教育者らしく、日本の教育制度について説明し、各国の事情を聞き出そうとしていた。ヨーロッパ人は一般に数字に強く、進学率なども必ずパーセンテージを入れてしゃべっていた。日本の大学の入学難については非常に興味を持ち、根本的な原因に関して私たちは鋭い質問をあげせられた。

ベルギー人のヨハンは、トビックスにタバコを取り上げ、その国の主要産業であるタバコの製造法について、微に入り細にわたってえんえんと述べるので、私たちは少々あきれもしうんざりもした。イギリスでは十六歳から喫煙が許されることに驚いたこと、肺ガンとの関係を必配していることぐらいしか、その話題はおつき合いくでなかった。

ロイス先生は、人口問題について提起し、食糧、生活環境の保全のために、い

かに人口増加を食い止めるか、英国では深刻であると述べた。しかし私たち日本人から見ると、広大な国土に比して、人間が少ないように感じられ、日本の大都市の雑踏がうとましいものとして思い出された。あなたたちは、人口密度が日本より低いことをこの国で肌で感じられるかと聞かれたときには、一様に「イエス」であった。イタリアでも事情は日本と同じであるとダリオがいい、フリーセックスが一般化してるからでしょうというぶしつけな質問に、彼らは口をそろえて否定した。カトリックが産児制限の障害になっっていることも話題になり、ヨハンは、キリスト教は信じるが、教会の制度には反感を感じているのだと述べ、人口問題は、いつしか深刻な宗教問題の悩みにまで発展していった。

日本の赤軍がひきおこしたテルアビブ空港乱射事件をどう考えているかと聞かれたとき、「それはむずかしい問題で……」といったまま、ことばにつまづいて目を伏せた私に、クラウディオは、「悪いことを聞いてしまった。私は、すべての日本人が彼らといっしょだ、とは思っていない。どこの国でもさまざまな考えの人はいる

ものだ」とあわてて自分の質問を取り消したのには、こちらがすっかり恐縮してしまった。授業が終わると、彼はわざわざ私の席へやって来て、気にならないで下さいといったわってくれた。まだ二十三歳だという異国の大学生に、人間の本当のやさしさを見た思いがした。

私は、日本では老人問題が、大きな社会問題として、クローズアップされて来た現状を話し、各国の事情を知りたいと求めた。

イギリスでは「ゆりカゴから墓場まで」が、その福祉政策の範となっている。大都市ケンブリッジの街を歩いていて気づくことは、おばあさんが非常に多いことである。彼女らは、きまって外出用のピンク系の服装で、若い人々はあまりつけていないイヤリングを着用しているし、日光の少ない風土病のせいかな、足の関節をわずらって、びっこを引いている人が多い。博物館のキップ切りや陳列品の番などには、老人の職業としての道が開かれているようである。日本の老女のように、「もう年だから」を口ぐせに、自らも周囲からも、女の色香を放棄してしまわなというのは見事である。日本の青年が、

イギリス女は、娘が美しくて中年になると太りすぎて魅力がなくなるが、おばあさんは日本のそれより愛嬌があつてきれいだった。それが、それは本当のようである。それに、彼女らは、バスを待っているときでも、乗り物で隣り合わせたときでも、積極的に未知の人に話しかけたらして、人と人との交流に努めようとする。老夫婦が腕を組んで並木道を散歩しているのは、よく見かける風景で、ほほえましくもうらやましい。スコットランドのパブに入ったら、数人のおじいさんおばあさんがビールを飲んで、歌ったり、おしゃべりしたりと、にぎやかだった。

「ジャパニーズ、ジャパニーズ」と口々にさけんで私たちをその仲間に取り入れてくれた。日本では、七十すぎた老人ばかりで、毎夜バーで楽しむなんて考えられない。私など三十代にして、すでに青春はとうに終わってしまったものと思ひ込んでいるが、彼らは死ぬまで青春の一部分を持つていけるようである。これは、きっと若いときからの生きる姿勢にかかわる問題であろう。いかに生きるかは、いかに老いるかにつながる。私たち日本人が問い直さねばならない問題だと思う。

授業が終わると、私たちは、フィッシュ・アンド・チップスの看板のかかっているお惣菜屋に飛び込んで、あつあつの魚とじゃがいものフライを新聞紙に包んでもらって、キャンパスのベンチに腰かけた。芝生に寝ころがったりして昼食を楽しんだ。

ケンブリッジでは、勤め人も学生も夕方六時には一度家に帰り、夕食を家族と一緒にとってから、改めてドレスアップして、夜の催しに出かける。大学では、レコード・コンサート、リサイタル、映画会、講演会などが毎夜催された。

学生会館では、「007」の東京編を見せてくれたのだが、トルコ嬢や芸者の出て来る場面を他国の留学生と一緒に見るのは、どうも変な感じだった。案のじょう、あくる日、スペインからの留学生、フランス人が、日本では、妻が夫といっしょに風呂へ入り、夫の体を洗うのかと、好奇心からではなく、日本での私の境遇を本当に心配してきいてくれた。そんなことは決してなく、あの映画はごく特殊なケースだとその弁明に四苦八苦した。日本人と見れば、「ホンダ、トヨタ、スズキ」と呼び、オートバイに乗るジエ

スチャーをする彼らにとって、工業国としての日本と、西欧人には理解の範囲をこえる風俗習慣を持つ日本とが、どうにもちぐはぐなイメージとして存在しているようであった。

イギリスから、また、各国の留学生から学んだことも数多かったが、日本ではそれぞれの立場から、おつき合いにも目に見えない壁のある教師、学生、サラリーマン、OL、私のような主婦が、一様に留学生団として、たった一か月ではあったが、日本での役割や背景を抜きにして、何のこだわりもなく議論し助け合えたのが何よりの収穫だったと思う。中年の主婦が大学生たちと、チキンのもをかじりながら夜の街を歩いたり、校庭で鬼ごっこをしたりは、日本ではまずできないことである。人生について密度の高い話し合いを世代を離れた異性とするなど、私の過去十年の結婚生活の枠の中では一度もなかった。一見、自由なようでありながら、男と女、各世代が隔離されている。週刊誌などでは、キーセン観光をはじめとして、海外での日本人のご乱行の話題もはなやかであるが、ひと夏をケンブリッジに学んだ人々は、学習態度

も真剣で、いつも、より高い次元に生きていと願ひ勵まし合っていた。いくつになつても學び続け、老いながらも成長していく姿勢は、日本人には数少ないものである。大学に入ると受験から解放されて、とたんに勉強しなくなり、社会人になれば、ひたすら働いて、余暇はインテリジェンスを必要としない遊びにうつつを抜かす人々が多すぎる。ケンブリッジのフオーク・ミュージアムという私設の民具博物館へ、初老のドイツからの留学生紳士と同行した折、入場券売りの老婆が「あなたは学生か」と聞き、すでに頭を禿げ上った彼は、当然といった顔つきで胸を張って、「イエス」と言つた。その、ごく自然なやりとりを、ぼう然と眺めながら、私が一年前、日本の大学の門を研究生としてたたいたときの人々の好奇の目や、主任教授が「彼女は十年前に卒業し、また學びたくなつたので」とゼミの学生たちに紹介してくれたときの、どつとわき起こった教室の爆笑と、パツの悪さとを対比しながら思い起こした。

\*

ケンブリッジの夏の日長く、午後九時を過ぎて也容易に暮れようとはしな

い。カム川に浮かんだ幾そうもの舟からは、合唱隊の美しいハーモニーが、広々としたキャンパスの芝生に遠い、莊嚴なキングスカレッジの学舎にこだまする。老いも若きも岸に腰をおろし、あるいは芝生に横たわり、その歌声に耳を傾けながら、人生の何かを考えたり、静かに語り合つたりして、そのひとときを過ごす。こんなのでかゆつたりした世界もあつたのだらうか。自分の生の充実感をずしりと感じながら不覚にも涙を流した。十年遅かつた。欲をいえばきりがなく、二十代にここへ来て、せめて三、四年はじっくり勉強する時間が欲しかったと、初めてこの十年の失われた青春を惜しいと思つた。就職、結婚、二児の出産と育児に終始した十年と、ケンブリッジで研究生生活をしたかもしれない十年とを、ひそかに天秤にかけてみたりもした。煩雜な主婦の日常生活の中で、いつか外国へ行つてみたいとは、夢のまた夢ではあつたが、こつこつと独学で続けた英語とスペイン語の勉強は、孤独や情性に一縷の望みをつなぐ活路でもあつた。夢がまがりなりにも達成された今、何に憧れ、何を生きがいにして生きていこうか。転勤の多

い夫の仕事、遅々として進まない私の老人社会学の研究、まだたつぷりと年月を要する育児、年老いた姑の世話、主婦としての枠や制約の中へ再びもどつて、何に希望をつないで生きていこうか。三十六歳の私は、自然年齢でいえば人生の峠のまっ頂上にいる。この峠をどのようにくだつていこうか。外国への夢だけのうちが幸せであつたようにも思えてくる。

キングスカレッジの夕もやに流れるコースに魂をゆさぶられながら、今度は息子たちといっしょに留學しよう、それもケンブリッジで職を得て、自立できる母親としてきつとこようと、また新たな、しかもなかなか達成されそうもない夢がひたひたと胸を満たした。主婦の座だけではどうしても幸福を感じられなかった私は、またもう一つの可能性をいだいて、主婦であり続けて生きていくのだと思う。家庭という鳥カゴから、ほんのつかのま広い世界へはばたいて、また、自らかゴの中へもどつていく。私は米をとぎ、洗濯をし、子供を叱り、お金を得ようとか、細々と勉強し、また、次の十年を、新しい夢をいだいて老いていくのだと思う。

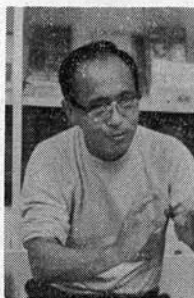
(あこら東海所屬)

## 人口抑制と産む性

社会の転換期ともいうべき激動の中で原点に帰って女性解放問題を考えよう——“あごろ”では1972年8月からティーチ・イン・シリーズを始め、「手弁当でも話し合おう」という有志と語り合いを続けています。今回は前回にひき続いて産む性とかかわりのなかから人口問題を考えてみようと、前回のご出席者青木氏のほか、飯島、高木、松井、村松氏をお迎えし、話し合いをしていただきました。

文 筆 業

青木 やよひ氏



村松 博雄氏

医師・評論家



松井 やより氏

朝日新聞記者



高木 佐和子氏

フェミニタン・  
プレス 主宰



飯島 愛子氏

国際家族計画連盟

——世界的な資源問題に端を発して、人口問題は、いまグローバルな問題となっています。世界の人口を支えるに足る食糧は、一九八〇年には底をつくといわれ、しかも増産の見込みも少ないところから、人口抑制の必要、とくに日本を含むアジア地域での人口抑制の必要が叫ばれています。世界人口会議にも肝心の産む性である女の参加が少ない。特に日本では、女の代表が参加していない状況です。産む権利にせよ、産まない自由にせよ、肝心の産む性としての女が除外された中で論議が進められていることに、大きな危険を感じます。そこで、産む性として、この問題をどうとらえ、どう考えていけばいいか、話し合いたいと思います。

青木 どうとらえるかというときに、人口問題とは何かということを書きこんとおさえておかないと。大体人口問題って、今までいつもイデオロギーのかくれみのにされてきたという面があると思うのです。何か社会の矛盾はみんな人口過剰だからというだけで一まとめにされて、その矛盾をむしろ構造化させる方向に働いてきたという歴史がありますよね、今ま

で。だからわたしたちにとつていま何が問題なのか、見きわめてからでないといけないと思います。

## 人口問題をどうとらえるか

飯島 まず、人口問題を考えるときには、どうしても、その数と質というものをかけ合わせたものによって生じる問題を、人口による問題として考えるということを一応は大前提として考えておかないといけない。ですから、今地球上の資源、エネルギー、食糧、それがすべて限られているとわかったときに、それはいつも数によって問題が起きるのか、あるいは質によって起きるのか、両方やっぱり考えていかなければいけないと思います。よく比べて出る話ですが、エネルギーはインドの人たちの五十倍もアメリカの人たちは同じ生きる間に費やすし、食糧に関しては百五十倍も食べて生きているわけです。人口問題を考えるときには、そうした両面を考えていかなければ、私は、限られた一つしかない地球を考えたら、やはり数により、あるいは質により、どうしても抑制していかなければいけない

ということとは、今の科学の時代ではしょうがないと思います。

今の先進国の人たちが消費しているものを何とか変えなければいけないんですが、資本主義の消費を謳歌するような時代であり、また開発途上国の人たちのあり方が、今の先進国方の経済成長を目指してどんどん進んでいるのが現状だということを考えてみれば、これはやはり、数としても減らしていかなければいけないという考えなのです。

松井 私は二つのことに分けて考えていきたい。一つは八月にブカレストで開かれた世界人口会議、そこに表われた、今の世界が人口問題についてどう考えているかということについて、ある程度一般的な認識や理解を持つ必要があると思うんです。もう一つは、女性にとって人口問題は一般的にどういう関係があるか、ということを考えてはいけません。その場合には、人口問題が単に世界の人口の質とか数だけではなくて、一人一人の子供の数が減るといふことの意味、つまり、育児期間が女の全生涯の七分の一に減っているという事実——昔は子供を産むことが女の一生のほとんどだったわけ

でしょ。そういう人口問題のいろいろな側面を、女性たちの立場で考えていかなければいけないと思うんです。

それで、第一の世界人口会議に出てきた考え方を簡単に言うと、一つには先進国グループ、それはアメリカ、ヨーロッパ――、特にアメリカが主張しているのですが――、飯島さんのおっしゃったように、資源とかエネルギーとか食糧の問題から言って人口抑制していかないと、もう今世紀末には七十億くらいになってしまうという人口爆発説というのがあります。

それからそれに対して、いわゆる第三世界のアジアを除くアフリカ、南米の人たちが、人口はまだ少ないも。っと増やしたい、抑制なんてとんでもない、と資源がないというけれど、ないじゃなくて、資源は過去において先進国によって収奪しつくされた、しかも現在もいろいろな形で植民地主義や帝国主義のために資源は利用できない状況なんだから、という主張がありますね。三番目はソ連と中国の立場ですね。両方とも、やはり基本的には人口問題が主要な問題ではなくて、経済的な建設のあり方、政治的、社会的

な構造をどう変えていくかがポイントであって、人口問題はそのごく一部にすぎないという考え方ですね。ただ中国などは、実際にはものすごい人口抑制をやっています。

それと最後に、東南アジア、インド、パキスタン、そういうグループですが、それは先進国とかなり同一歩調をとって、やはり人口は経済開発を阻害する一つの原因になっているから抑制したほうが良いという考え方を出している。

大体見取図としては以上のようなもので、じゃあ日本はどのグループに属するかというと、一応先進工業国の立場のような発言をしていますね。そういうふうな世界の人口に対する考え方が、必ずしもコンセンサスを得られていないってことはあるのね。私は一応、人口はそう無限に増やすべきではないけれど、その方法は家族計画とかそういう方法ではなくて、本当に社会的経済的な開発なり水準なりを実現していけば、おのずから人口は抑制されていく、そういう考え方ですね。

それから二番目の女のひととの関係というのですが、長い間女は子供を産む機

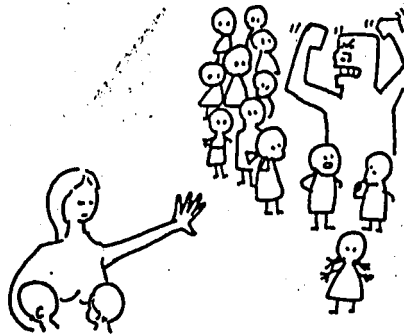
械であった。まあ、この二、三十年でしようね、女の人がただ子供を産むだけ以外の人生を持つことができるようになったのは。やはり子供の数が減ることが、結果的に女性の解放にプラスになると思っているわけです。

子供を八人も十人も産んでいる東南アジアの女の人たちの大変さを見ると、やはり何人子供を産むかについていうことを、自分自身がコントロール出来るようになってはいけなさと感じるんです。たとえば東ドイツの中絶法だか家族法だかの新しい法律では、第一章には、子供を何人産むか、どの間隔で産むかということを決めるのは女の権利である、ということがはつきり書かれています。そういう発想を私は強く出したいわけです。

ということは、女はそういうことを決める権利がある。この権利が、住宅事情とか経済的な事情とか社会的な抑圧とか、いろいろなことで奪われているのが問題なのであって、もともとそういう権利を女性が持つていなければいけないのだという考え方が私にあるので、その自分の権利にしたがって、子供は何人産むかということを決める場合に、女の人の

ちが十分な情報を得られるようなことが必要で、それが国家による命令という形をとるのは危険だと思うのです。

第二次世界大戦中に、ナチスドイツとか日本政府が、産めよふやせよという人口増強策を軍国主義的な目的で国家政策としてとったわけですね。その大体同じ



何人産むかを決めるのは女の権利

時期にスウェーデンではミューダール、そのほかの人たちが、市民自身が人口のことを決めていくという民主的な人口政策をうち出しているんですね。だから人口政策イコール国家が決めるっていうふうにははいけないし、決めさせない

ようにして自分たちが考えるというふうにしななければいけないし、その場合に女の人が決めていってほしいなあというのが私の考えです。

飯島 そうですね、松井さんの意見に賛成ですが、情報と手段だと思っんですよ。避妊のいろいろな手段が問題でしょう。その結果いろいろな職業を女性も得られたり、保育所がちゃんと作られたり、そういうことが大きな問題だと思っんです……。

村松 その人口抑制が必要かどうか、というコンセンサスの問題で……。一つはやはり飯島さんが言われた人間の生命の量ですね。つまりそれは個人個人からいえば寿命の延長ということになるだろうし、人口数ということもあるだろうし。

もう一つ、質という問題はやっぱり、生活水準とか、頭脳活動の問題とか、健康の問題であるとか、そういうことであらうと思っんですね。こういう視点をやっぱり僕はタテ軸にとつてまず考えるということが一つありますね。ヨコ軸には大きな意味ではグローバルな地球ということ、それからやはり日本ということを考える。その時にやはり松井さんが言

われたように、そのスウェーデンのミューダールとはちがった国家的な管理での人口政策が今まで行なわれてきた。ナチスもそうです。そうすると、グローバルでは人口抑制というような問題が、ある程度すんなり入るとしてもですよ、日本ではどうかということ。マニップで、もうすこし検討する必要がある。

それからもう一つは、個人の生活の問題ですね、そこが産む権利につながると思いますね。子供というものはなくてもいいし、片親でも僕は育つと思っし、またそれこそ二親の間で子供を持つてそれがその夫婦の生き甲斐になることも結構だろうし、いろんなケースがあると思っけれども、それと同時に、たとえばスウェーデンの場合には、やはり片親だろうが子供を産まない女性であらうが、とにかく老後の心配はないのに、日本の場合には老後が心配であるところから、子供とかかわりも出てきている、進学競争もある。そういう状況の中での人口抑制ってのは一体何なのか、ということのタテ軸とヨコ軸を一つ考えなくてははいけないと思っし……。

もうすこし具体的に言いますとね。六



年くらい前には財界プロパーは、絶対産めよふやせよと言ったわけでした。若年労働力が足りないという錯覚を持ったわけですね。つまり、今産めよふやせよと言ったって、労働力は二十年後、少なくとも十五、六年たたないと出てこない、そのへんの錯覚を持っていた。ところが日本の経済成長がある程度メドが立ち、日本の若年労働力の賃金がどんどん上ってき

た、そのときにベトナム戦争がおき、台湾、インドネシア、シンガポール、ベトナム、韓国、そういう所に若年労働力を利用できるというふうな認識を経済界が持った。すると、今までの人口政策、少なくとも経済界における発言はガラリと変わったわけですね。つまり、産めよ増やせよはもうやめようではないかと、少なくとも東洋の指導者であるべき日本人は、もうすこし少数精鋭主義でいいこうではないか、これはもう見事に変身したわけですね。だから日本の場合には、そういう、うよ曲折があるから気をつけなければいけないと、そこらへんのケースを一つ一つ細かに検討しないと簡単に乗れないんじゃないか、ということなんです。

青木 皆さん大事なことは言って下さっ

たので……。一つ重要なことは松井さんが言ってらした世界人口会議でも問題になったことですが、人口政策というのはいかなる場合にも上からの強制になってはいけないという点だと思ふんです。国際レベルでは民族の自決権にも抵触するし、先進国が経済援助とひきかえに後進国に押しつけるなどということは許されない。

それと同じように、国内レベルでは産む産まないは国家ではなく個人が決める、とくに女が決定権をもつべきだということ、それはどんなに強調しすぎても、したらないですね。そしてその場合、私は、ただ子供の数だけで考えるんじゃない、自分の個人生活がどういふふうにあるべきかということまでふくめた上で選択する方向に進むべきだと思うんです。

だから子供を持たないってこともいい、こう差しつかえないし、五人持ちたい人は持たたいという、そういう選択が自由な社会が私は望ましいと思うんです。そういう選択の多様性は残しておいても、さっきおっしゃったように結局外で働く女性が増えてきたり、女性のほう

にも生活の多様性を選択する自由が与えられたりしてくれば、やはり産まなくなるといふか、少なくなる傾向が自然に出てくると思います。ですから、いまある家族の形あるいは生活のスタイルを絶対的なものと考えずに、たとえば結婚がいかにどうかってことさえ疑っていいと思ふんです。そこまで考えた上での人口問題であれば、私はどうも疑わしいと思います。

また、いつも人口問題っていうと、質の問題だと言いますが、数の問題でしたね。つまり貧富の一つの次元とか、生活のレベルをどこでとるかということから子供の数が割り出されてきた。電気製品があつて、ピアノがあつて、子供に高等教育をうけさせるには、子供は少ない方がいい、という発想ですね。しかし、もう、これからはレベルの問題じゃなくてそういう方向さへ、みんなばらばらでいいんだ、はっきり言ってしまう、だからヒッピーみたいな暮らしをしてもいいし、一つ屋根の下に男女が暮らさなくてもいい、通い婚でもいいんだと。そういう多様性の中で、子供の数も考えられていいということを、私は言いたい

わけです。

## なぜ子供をつくるのか

高木 皆さんなりにグローバルな視点で意見をおっしゃるけど、もうちょっと根源的に考えると、人間ってのはどうして子供を欲しがるものなのか、なぜ産みたいと思うのかですね。私は独身で子供はいませんけど、自分のきょうだいとか友達に、どうして子供をつくったのって聞くと、大体がなりゆきだっているんで、さよ、ね。子供をつくることそのものに、さして価値を置いていないわけです。やっぱり習慣的に産んじやうわけですね。その時点で、やっぱり女性の意志がどの程度働いているかということには、かなり疑問なわけです。

青木 それは、その前提に結婚というものがあからではないんですか。

高木 そうですね。

青木 結婚すれば、何となく自然に産むのが普通だっていう、そういう社会通念がね……。

村松 ああ、それはちょっと僕は意見がちがうんですが。子供を産んでも産まな

くても僕はいいと思うんですけどね、二人の子供を持ちたいという情熱の火花っていうのがね、男と女の関係にはあるんです。つまり、恋愛っていうのはそういう要素を半分は持っているんで、そこらへんを否定したらね、男と女ってのはほんとに味気ないものになると……。

高木 いや、私が言ったのは要するに、子供を持ちたいというのを一言に否定しているんじゃないかって、ほんとに持たいたいと思って子供をつくりだしたのか、ということ。そうなる恋愛論になってしましますけど、じゃあほんとうに自分たちの子じゃなくちゃいけないのか、要するに血がつながってなくちゃいけないのか、産み育てるということでは……。

そうでない場合に、たとえば、養子をもらうとか、そういうことは考えられないでしょうか。やっぱり自分が産みたい。要するに結婚している自分のパートナーとの血縁が欲しいのでしょうか。

村松 今までね、子供を産むことが女性の義務みたいな、つまり嫁して三年子なきは去るというようなことからすればね、今あなたが言うように、子供を産まない自由、僕は当然あると思うし、養子

をもらってそれを育てることも価値があると思う。それはそれで、そういうチョイスの自由は絶対保障しなければいけないという前提で、惚れた男と惚れた女とやって、子供を産むのもすばらしいではないか、というチョイスも持つべきだ……。

高木 ただそうになるとね、非常に無差別に、まあ乱交に近いような性関係を持つて、だれの子かわからないというような状態で子供を産みたいと思う女性も当然出てくるわけですよ。極端なことを言えば、強姦されてたまたま妊娠してしまっただけ、それでも子供が欲しい、そういう人も、そういう形で産まれた子供も、やはり許容できるような社会ってものを……。

村松 社会のキャパシティだな。それは。

高木 逆に結婚していて子供がないという女性は、やっぱり差別されますね。それから未婚で産む女性ももっと差別されますね、そこらへんのところを……。

村松 だから、結婚のときもですね、レオン・ブルムがテスト・マリッジということを書いたのも、ある意味では時代を

先取りしている部分があったと思うし、スウェーデンだってそうなんで、つまり子供が欲しいような若者のカップルは、妊娠してから結婚式を挙げりゃいいんだ。そういうような自由というか、社会はやっぱりキャパシティとして持つべきですね。

高木　ですから、女性解放運動が人口抑制に貢献できるとしたら、やっぱり女性自身が妊娠することから選ぶ、極端に言えば、セックス・ストライキをやってもいいわけですよ、それこそ殺ないう……。

村松　そりゃ無理だよ。(笑い)

飯島　だってビルだって、いろいろそのほかにもあるでしょ。

高木　でも現実には、私去年アメリカに行ったときにね、向こうの活動家はあらかた同性愛になっているんですね。そうすると彼女たちがほんとうに真剣に言うんです。同性愛の女が社会の半分を占めればね、世の中変わると。人口問題なんかすぐ解決しちゃうと……(笑い)。

松井　そういうえば、私はアメリカでね、ごくふつうの市民が子供の問題っていうか、人口問題に認識持つてるんでびっく

りしたんですけど、たまたま公害反対運動なんかやってる女の人たちで「私にも子供はつくらない」って言ってる人がたくさんいるわけですよ。私が驚いたのは、自分の子供の数をそういうグローバルな問題とからめて考えるという発想が、日本の女の人には非常に少ないわけね。自分の狭いところですべてが決定されるでしょ。広い視野で考えない、そういうことをつくづく感じたの。

高木　やっぱり日本の場合、テレビのコミーシャルなんか、家族が非常に前面に出る。子供の数というのはまあ画面に出ないけど、家族を持つとこんなにしあわせ……という。

飯島　そうなんです。私が言いたいのはいホームの広告。

高木　それに家族計画運動家でさえ、三十までに三年おきに三人産むのが理想とかなんとか、今だにそういうことをのべる人がいる。あれはやはり女性、これからの新婚さんを対象にそういう教育をするわけでしょ、あれはかなり影響を与えますよ。

## ウーマン・リブか

### マンリブか

松井　私が人口問題ですごく感じる点はね、これは正に女の問題であるにもかかわらず日本では、女を完全に除外して問題が考えられて、いる。つまり人口問題審議会にどれだけ女性がいますかってことね。

それから、おとしアジアの人口会議があつて、アジアの各国から政府代表がたくさん集まったんです。日本からも三十何人出たんですが、その中に一人の女もないの。

アメリカの女性の人口学者、フィリップの国立人口問題研究所長の女性、それからドクター、助手、とにかく女性の代表がほかの国ではたくさんいたんですよ。それを見ながらね、ああ日本は産むのは女なのに、日本の女の人たちを除外したところですが決められている、なんら女が参加していないということをもっと問題にしなければね。

村松　ああ、僕、帰ろうかしら。(一  
同爆笑)

青木 中絶の審議会だつて平均七十才という男ばかりでしょ、あんな馬鹿な話でないですよ。

松井 だから人口問題とか、人口政策とかそんなことをまず女の方に取り戻さなかつたら。そこから女としてどう考えるかという発言をする場を持っていかなくちやいけないんですね。

村松 ぼくはこういうふうに思うんですね。男というのがなぜその男性支配に浮身をやつしていたかと言いますとね。まあヒエラルキーの問題もあるし、それを受けついで権力政府、まあ経済もありますわね。一つにはね、男と女というものを考えた場合に、極端な言い方をすればですよ、まあ恋人同士が寝たと、そうした場合に、子供を産むということは女性の胎内から生まれるわけでしょ。確実に分の子であるという実在感の確認が得られるわけさ。亭主はわかんないわけですね。自分の精子が卵子に入ったということはその瞬間には見られないんだから。このねえ、不安感がですね。男性を戦争にかり立てる……。 (女性一同笑ひ)。

青木 いや、でもそれは大事なことで。私有財産の觀念と結びついていますね。

だから、社会が私有制度にこり固まっていなければ、つまり財産を子にゆずるとか、妻子を養ふとかいうことがなければ、子供はだれの子だつてかまわないわけですよ。

村松 そうそう。だから戦争にかりたて、女性を支配しようとする。今まで男性中心の社会の男は、なぜバージニティを尊重したかということですよ。非常に簡単なことなんですよこれは。つまり今まで種つけされていない女性を自分が種つけすることをやれば、あとは屋敷の中に嚴重に見張りをすればですよ、自分の子供であるという確證を得られる。

松井 ちょっと聞きたいんですけど、男性はどうして自分の子であるかどうかということを知りたいわけですか。

村松 つまりね。今まで言つたように権力であるとか財産とか老後とかね、自分がうやまわれたいとか、そんなささいな微に類したことなんだね。つまり男っていうのは、それほどやっぱ非常に何というか、子供じみたところがある、とぼくは思うんだな。

青木 それは男の本性なのか、社会から規定されたものなのか。むしろ社会から

規定されたものじゃないでしょうか。

村松 そうですね。つまり園山俊二のマンガ、ギャートルズなんかいうまくかかっているけど、それはちょっとね、社会から規定されてる。

青木 それに未婚社会なんかに行けば、そんなに自分の子かどうかこだわることはないですからね。

村松 ただまあ一つの社会秩序をそういう形でなければ形成できなかった、で、今もう日本も、極端な言い方をすれば、そういう方向に行くかも知れない。なぜならば、これだけ混乱をきたし若者たちのエネルギーがどういう形で発散できるかという、発散できる対象がないでしょう。独占資本は一見なくなっちゃって、多国籍企業になっている。スイスへ行つて爆破しなければならぬとかね。こりゃあ大変なことだ。とすれば手近かなところで、三菱でやろうとか、三井とかさ、つまりそういうふうなことで、男というのは非常に頼りにならない。つまり自分の実存感でもないわけですね。ないんです。

男の実存感というものは、まさに石川淳が言っているけど、つまり陽根のエネ

ルギーというわけだ、これはいみじくも文学的な表現で私は大好きな言葉なんだけれど、つまりそういうような表現でしか男というものは実存感を得られなかったわけです。そういうふうには非常に情緒不安定な状況に男性はあると思う。その時にね、陽根のエネルギーってのは、せめてオレが種つけをする、オレが避妊をするんだというところで、生活の座標軸があったわけです、ビルやIUDが出て来て、それさえ今なくなっている、だから女性差別なんて問題じゃないんだ、今や、男性差別ですよ……。(一同笑い)

飯島 だから、逆に言えば、そういうことで力を発散するしか男の人はなかったわけだから、もっと別のすばらしい展開をしてほしいですよな。

高木 でもね、マン・リブっていうのが日本でもあるんですよ。親のおしつける結婚をいやがって独身を守ろうと命がけですよ。日本は非常に婚姻率が高いんですよ、二十二から二十六歳くらいまでの間に六十%以上の女性が結婚しちゃうんですよ。そのぶんでいくと、すごい子供が出てくるわけですよ。そこら辺の結婚に対する意識改革ね、それをやはり、

女性解放運動ですこしやらないといけな  
い……。

## 人口問題の解決は

### 女性の解放から

青木 女性解放まで含めないとね、人口抑制と言ったってだめだと思います。今の社会じゃあ……。

松井 つまり一夫一婦制が最終的な形であると信じている人が、日本に一番多いんじゃないかと思うくらい多いんですよ。

青木 しかも適齢期なんてのがあって、年齢的にも集中しているわけですからね。そして独身者は変人だと、男にせよ女にせよ、心理的にハジキ出される……。

村松 男が四十まで結婚しないということは変りものであるという評価は、女性がするんでしょうか、男性がするんでしょうか。

松井 両方でしょう。独身男性は大体、おふくろさんという名の女房をしたがえて、仕えさせています。あれをみると、ほんとうに女性の抑圧の一つの典型だと思えますよ。

青木 ああいう形っていうのは向こうにあまりないですね。

松井 そうですね、日本特有ですね。

村松 だからぼくが性教育に注目しはじめたのはそれなんで、何もセックスのやり方を教えることじゃなくて、つまり母親と子供との精神的な乳離れをどうするかということ……。

松井 平均寿命が女性は大体七十五歳ですからね。子供を産み終えるのが三十歳すぎ。世界的な傾向としては、早く産んで早く産み終っちゃうわけね。産んでから十年くらい子供に手がかかるとしてもね、三、四十年つてもの間、子供と別に生きなきゃならない年月が残ってるんですよ。ところが、日本の場合は、女がいつまでも子どもにつきまとして大学の入学試験にまでついていく。今や就職試験にまでついていく。そこまできているわけですよ。これはほんとうに女性の生き方としても、早く子供から独立して自分の生活を自分のものに……。

高木 それは子供の数が減れば減るほど、顕著になってくるんですよ。

青木 それだけ一人にかかる比重が多くなりますからね。そこまで行く前にそれ

よりもう一つ前の段階で、子供の数が少

なくなつたときの対策って考えておかな

くぢやならないですね。つまり一人っ子は昔から三文安いつて言われたみたいなこと、それが核家族化するとますますひどくなるわけですよ。そうすると三人産まなくぢやなくなつちやうから、人口抑制言うんだつたら、子供同士の横の接触というものを、もつとおとなが考えてやらなければ子供は不幸ですね。

飯島 そう、そうですね、あと老後ですね。

村松 そう、老後の問題とね、松井さんがおっしゃつたご婦人の問題ね、それはひいては亭主の問題でもあるわけで、この間の結婚前日に娘を殺した事件、あんなの典型的だと思ふけど……。

青木 先生、それねえ、全部根は一つですよ。女性のエネルギーを家庭にとじ込めちやうからですよ、すべて。だってそうすれば子供にしか行くとこないですものね……。

村松 はあ、なるほど。

青木 もっと女性が社会でもって自分の仕事を多様に選択できれば、イヤでも子供にかかわっていられますもの。早く

乳離れします。

松井 目を広く向けるようになれば、少しは人口のことも考えるでしょう。

青木 だから万幸、女性が解放されると、かなりもう八十％は解決されちやうんです。

松井 人口問題の解決は、女性の解放なしにはあり得ない……。

青木 もう、これなしにはね……。

村松 女性四対男性一か。ちよつと今日は人選がいけないんじゃないかなあ……(笑い)。

ともかくね、解放されるにしてもされないにしても、さつき言つたように避妊の決定まで女性に奪われたときに、我々男性は、少なくとも月給袋を運ぶ動物にすぎなくなるわけだ。

飯島 いや、それでもないんですよ。

松井 それこそ自分で月給を……。自分で食うということにならなきや。

村松 そうお？

青木 女性が解放されると、男性もすぐ解放されると思ふんです。

村松 そりゃ大前提としてわかるけれども、さつきグローバルな問題と、日本の問題と、個人の問題と、というふうに分

けますと……。 (笑い)

飯島 それに男の人も、クビになったら大変、なんていう緊張感なく働けるでしょ。

村松 それはある。そのときに、花嫁殺し事件じゃないけれども、オレがゾツとしたのはですね、奥さんと娘二人でしょ、そして亭主の気に入らないおむこさんでしよ。母と娘がホイホイして、亭主を疎外してね、たんすはどこにしましよるか、ウェディングドレスはどれにしましよるか、つていったらね、オレだって頭にくるんじゃないかと……。

松井 でもねえ、そういうときに、他に女性をつくるでしよ。そういう男性がいかに多いか……。

青木 あの問題の場合、結局あの父親っていうのは、妻子を養わなきゃならないがために、可愛い娘のために、自分はイヤだイヤだと思ひながら職場にいたと思うんですよ。家族がぶら下がっていいければ、もっと自分の能力を生かせる仕事、収入が少なくなつて社会的地位が低くなつても、好きなことできたと思ふんです。そうすれば、あんなふうに子供に執着しないですんだと思ふんです。

村松 そりゃあねえ、確かにそうなんです。そのとおりなんです。だから日本の東京大学の教育、つまりエリートコースというのは、その柔軟さというものを教えていないんです。

青木 それはもう社会全体の責任だと思ふんです。ですから私は、多様性の選択のできるような社会であれ、と思つてゐるわけなんです。それがなかったら男も女も不幸だと思ふんです。

## 男らしさ

### 女らしさを考え直そう

村松 つまりやつぱりトンボじゃないけど、複眼でどう見られるようなね……。ある人のエッセイで、新幹線つてのは

ね、我々人類を撲滅させるものであると、それはどういふことかという、一つの説は「あ、あそこにいい木がある

な」というインパルスが目から大脳に行くまでに新幹線は通つてしまう（一同笑い）。そうすると、もう見られないんだ。この欲求不満がね、三菱重工のガラスの破片につながるんじゃないかと……。ぼくそう思うよ。

青木 そうですね、象徴的ですね。すべて生活がああいうふうになつちやつてゐるわけですね。立ちどまつて考える、眺めるということが不可能になつていままのね、今。

松井 あれはやつぱり男が発明したものですな。（笑い）

青木 そうです。大賛成。なぜかいていますと、女の人つてのは、ものごとを循環で考えますよね、こうなったら先がどうなるかってこと、いつも考えますよね。

子供だつて産みつぱなしでわけにいかないから。ところが男の人は先のことを考えないんですね、だからつくればいいんですよ。前に進みさえすればいい、後のことは知つちやあいないつてのが、男の論理だと思ふんですよ。

村松 その時にね、男と女に分業というのは考えられないんでしょうか。つまりねえ、胎内回帰ということがあるわけですね、産んだ子供を又子宮に吸い込む、吸い込むというとおかしいけれど、母子相姦なんかそういうようなもんだな。で、それに対するアンチテーゼとしてね、男はやりつぱなし、新幹線は作りつぱなし、戦争で殺しつぱなし。その時の分業

というものは世界で考えられないのかしら。もう一度、だから別の意味での男らしさ女らしさは考えられないのだからうか、と考えているんですがね……。

青木 なにしろ、今までの社会つてのは、男の論理だけで出来てたわけですよ。だから女の論理もそこに入らなければ、まず、分業にも何にもならないわけです。女の論理というものが対等に、パラレルに置かれたことがないんですから。

村松 はい、わかりました。そりゃあわかる。どうして四対一なんだろう。（笑い）

松井 今までのバランスを少しでも補うには、四対一でも足りないんですよ。

村松 今日陰謀に乗せられた……。何でオレはいっしょうけんめい診療を早く切りあげて来たんだろう……。 （笑い）

高木 私はね、女として人間らしく生きたいってことならわかるんですが、そこらへんの、男らしさ女らしさっていうのは、具体的にどういふことなんでしょうか。

村松 ぼくはホルモンのことを言っているわけなんですけどね。つまり女が外に出る、女が闘うと言つてもいいですよ。

女が亭主を養う、いいんですよ。そうすると一つの比喩から言うと、一方では三船敏郎みたいな男があるとし、片一方ではナヨナヨした女があると思いますね。人類ってのは、そういうブリズムがあるとすれば、男っぽい女もいますね、女っぽい男もいますね。そうするとこのブリズムがある程度縮まってくるわけだ、段々ね。つまり女が外に出て働く、あるいはまた……。

松井 男が家事を手伝う……。

村松 こういうブリズムが縮まってきたときに、妊娠能力のホルモン、あるいは男性の精子を活躍させるホルモン、そういうものの分泌が相当ちがってくると思うんですね。

青木 その男らしさ女らしさってのは、ほんとうに生物学的な根拠の上に立っているものと、それから社会的につくられたものがありますからね。

村松 そりゃわかっていて発言しているんで。つまり社会的な問題を別にしてね、生理的な問題です。そうした場合に、ぼくはブリズムが狭くなるのはいいと思うけれど、そのときにでもぼくは分業はあるんじゃないか、ということ言ってる

わけです。

松井 なきゃあいけないんでね。昔の男女同権運動は女も男と同じようになれ、というのだったけれど、やはり男みたいになるのは間違いですよ。やっぱり女の良さというものを、とにかく私たちは守っていかないといけないと……。

高木 問題は、やっぱり役割を強制されてきたということなんです。それは男もそうでしょう。

松井 私がこの間週刊誌に要約して紹介したスカム（SCUM）っていう考え方ね、ソサエティ・フォー・カッティングアップ・メン、これはアンディ・ウォーホルを聖った女の人でヴァレリイ・ソラスという女の人が、スカム——男を切りぎざむ協会、スカム・マニユフェストというおもしろい本を書いているんですよ、もう胸がすくわけです。

村松 あれは面白い。

松井 つまり男ってのは、女の出来そこないだと甘う考えです。今までの女が男より劣っているという考え方を全部ひっくり返して、とにかく男ってのは染色体が足りなくて男になった、女になれなかった存在である。月満ちて生まれなかつ

た存在であるという発想で、意表をつかれた感じ。そういう、女ってものの良さみたいなものを考えたほうがいいし、考えていかなくちゃいけないと思うんです。

### 科学的にも性は変わる

松井 だから女の人が解放されることが人口問題の解決にもつながる、というわけで、じゃあ具体的にどうすればいいかってことを話し合っていたら……。

飯島 自由な社会ってのは確かにすばらしいところはあれども、じゃあ、具体的にみんなが何から始めればいいか、ということにもふれたら。頭でわかっている行動できないっていうのが現状だと思うんです。

村松 そのときに、さっき松井さんが言ったことは非常に大事なことのだな。当然ホルモンのバランスも変わってくるわけで、従来の男性志向というのかな、つまりぼくは、女性が働くということ結構だと思うけれど、しかもなおかつ妊娠能力が落ちないようにするにはどうす



ればいいか、というのが二十世紀後半の課題だということを言いたいわけです。

飯島 妊娠能力が落ちないというのは、どういうことですか。

松井 それで思い出したんですけど、知人が中国へ行つて、彼は中国の未来について憂いて帰つて来たんです。なぜかという、中国の女性はみんな男のように働いている、だからボインがほとんどいない。これは母性として非常にゆゆしき問題である……。(笑い)

村松 いや、ボインがいるかないか、わからないけれどもね、それは労働すれば筋肉はしまるし、そういう意味での今までのようなボインはいなくなってしまうけど、ホルモンの分泌が微妙に変わることは事実だと思ふな。それをまだ現代の医学は解明していないんだよ。

飯島 妊娠能力が落ちるといふのは、男も女も、年中子供を欲しいと思ふような気持がなくなるのではないかということから、ホルモンの作用によつて、そういう減少が起こるということですか。

村松 そうです。

飯島 では、もし欲しいと思へば、そういうホルモンの働きはあるわけですね。

それならば、別にそれは問題ないんじゃないですか。

青木 現代だって、相当ストレスでやられていると思うんです。

村松 そういうことです。ただね、そこそグローバルに言うと、こういう例があるわけですね。ある一定の島にネズミが繁殖した。そのときにネズミの集団はどういう行動をとったかという、まず、じじいネズミとばばあネズミを食い殺し、その次には子供ネズミを食い殺した。それで結局残つたのは若いビチビチした男のネズミと、全く少数の妊娠能力のあるメスネズミなんです。

だから、そういうふうな一つの生物原則みたいなものがね、どうも人間を含めた動物の世界には……。

青木 それは日本だって、昔子供は間引きで、樞山節ですから、同じことではないんですか。

高木 あの人間の精子銀行つてのは、可能なわけでしょ。非常にいきのいい精子だけ残しておいて……。

松井 さっきのヴァレリー・ソラナスの考え方では、男はもういらなくなってわけね。処女生殖ができるようになるだろう

から。セックスは女だけでいい。

村松 ああ、やりたくないのかな、女は。

高木 それはファック用の男は不妊手術をして、用途別、目的別に数をそろえておくんです。

村松 そのときに人間は発狂しないかなあ。

高木 いや、それはあくまでも、今の私たちの文化のレベルで考えているわけで……。人間の性文明つていうのは、それこそ、もっと多様化していいと思うんです。

松井 別に必ずしもバイセクシャルじゃなくてもいいわけでしょ、ホモセクシャルでも。母子相姦だって今、はそれこそタブーだけれども、将来タブーであり続けるかどうかもわからないでしょう。社会的に母子相姦とか、近親相姦は大変なことだけれども、それは避妊の技術が大変だったからとか、家制度がくずれるからだとか……。

村松 そうした場合に人口を減少して人類が滅亡するか、あるいはある程度の適度人口を保つためのフィードバック機構を人類が作れるかどうか、という問題になるね。

松井 性というものが、今まではもっぱら、それこそ何千年の間生殖と結びついていましたが、避妊の技術、医学の進歩などによって、生殖以外の性が大きな役割をはたすようになってきた、男女のヘテロセクシャルの場合ね。だけどそれからさらにわくは広がって、男女のホモセクシャル、あるいは母子相姦とか、そういうあらゆる形の関係というものが、これから多様化していく方向にあるのかなあ、どうなのかなあ、というのが疑問としてありますね。

## 性道徳と性教育

村松 そりゃあ、今までの道徳はとっぱらわれるさ。そのときに、現代のカルチャーという言い方はあるかもしれないけれども、人間の持つ美意識というのは、いったいどういうものなのか、どこまで変わるかということだな。

青木 あの、ホモセクシャルまで行かない段階で、生殖とセックスを分けるってことがまず必要なことだと思います。村松 いや、ぼくがその分けるという最初の論文を書いたんですよ。

青木 だから現代では明らかに、むしろ分けることのほうが道徳的だと思うんですけど。

飯島 そういうことは、実際避妊などでもう行なわれているんじゃないかしら。

松井 中途半端な形なのよ。一夫一婦制の間柄では生殖以外の性の快楽についても、肯定されるものとして社会的に定着したわけね。ところが婚外となると、本当にまだまだ……。

松井 それからもう一つは、家族計画のことについてまだふれてないんだけど、日本では性知識、避妊その他の性についての情報が、女の人に対して普及する度合が本当に遅れているわけね。私、スウェーデンの性教育がほんとうにすばらしいと思ったのは、やっぱり日本では、女が自分の子供を生んだりいろいろなことを決定するために必要な情報を、今まで女に隠してたってことなのね。

青木 それが、現代の方がひどいと思うんですよ。昔は農村などでは性はかなりあからさまに話されていましたよね。だから子供は自然にそういうことを学んでいたのに、今みたいに都市化されちゃって、コミュニケーションが相互になく

なっちゃってる、しかも性ってものがむしろ現代の方がタブー化されているんじゃないですか。だから高校生の妊娠とか中学生のそれとかいう悲劇が起こるんじゃないですか。

松井 だから、性教育とか家族計画というものの今までのイメージが、ものすごく保守的なので、純潔とか新婚教育とか、一夫一婦の夫婦が健全な性生活を守るということだけでこり固まった人たちが、全国で家族計画みたいな形で性教育を行なっているということに非常に問題がある、と私は思います。

家族計画ってものが人口問題とからまってるで言われているでしょう。日本でいう家族計画ってのは何なのか、何をやっていいのかを、私たちが新しい視点で少し洗い直さないと、本当に保守的な、さ末なことを教えているにすぎない。結局、性への解放に、具体的に結びつかないのではないかと思います。

村松 具体的に家族計画ということばより、計画出産ということばの方がいいかな。やっぱり新しいことばを作っていかないとダメじゃないからね。

高木 英語のブランド・ペアレンツフッ

ドのほうが、ファミリー・プランニングよりはよほどいいですね。

松井 ファミリー・プランニングだとすると、未婚の女の人に教育するという発想が出て来ないわけですよ。

高木 私の聞いたところでは、今も高校生などは実際、握手をするのと同じくらいにセックスをしているということですから……。

村松 いや、だからといって性教育で中学生から避妊を教えようと思っても、教育の世界では全然通じないよ。

松井 学校の先生も保守的ですからね。本当に日本の女は若い時代から性の知識、情報、あるいは手段を手にして、自分の子供をどうする、人生をどうすることが決定できるようにされてないんです。

## 人口抑制と老後保障

村松 このへんで、もう少し具体的に、人口抑制はほんとうにできるかどうか、あるいは、人口抑制をした場合に、メリット・デメリットが各個人なりご婦人なりにあると思うんで、そこらへんを……。

青木 できる、できないというのはどういうことですか。

村松 ぼくは、まず日本の場合においてはちょっとできないだろうという気がするよ。なぜならば、決定的に老後の不安定なものが解消しないんです。日本の社会保障ってのはね、今の政治体制が変わらない限り、どうしようもないんです。

- ということはですよ、たしかに子供は自分の親なんか知っちゃあいない、という考え方はあるよ。しかし今の親はですよ、やっぱり子供に依存せざるを得ないという考え方をぬけきれない。そういう意味でやっぱり少なくとも二人以上産みますね。今、静止人口としても一億六千万になるわけですからね、二人ずつ産んだだけでも一億六千万なんで、そのときには、ある意味で社会ってのはパニックが来ます。

飯島 でも、そういうふうに、現状が厳しいわけですね。それを考えるときに、自分が今十分に親たちの老後の生活をしているかというところ、ほとんどみていないがためのいろいろな老人の悲劇があるわけですし、その先を考えると、その傾向は、もっと厳しくなってくるわけですね。

ですから今の人たちが、自分の老後を考えて子供を産むっていう傾向が、私は少なくなるのじゃないかと思えます。精神的にもちゃん支えはありますよね。

村松 ですからね、まず第一に老人の自殺が増えるんです。その次にフアンシズムが来ます。そういうものを防ぎながら、人口抑制をするにはどうしたらいいか、ということについて、ちょっと私は絶望だということを言いたいわけです。

とすれば、日本というような状況もあるけれども、もう一つ国をとっぱらって、一つの視点が有り得るのかどうか。我々はそのままで考えなければいけないのではないかということを、日本全体が考えるような運動を起こさなければいけないんじゃないか……。

松井 じゃあもう一つはね、今先生がおっしゃった、子供に老後の生活保障を期待するということは、これからも続くかどうかについて議論がかなり分れますね。飯島さんのように、そうでもないという意見もあるし、ほかの人はどうみるか……。

村松 現実においてはね、野たれ死にをする覚悟を、今の三十以上の人たちが持

つかどうか。持ちゃあしないんです。松井 だけど、子供をあてにしますかって……。

村松 あてにはしていません。あてにはしないんですけれども、現実にはそれに依存せざるを得ないんです。でなければ、自殺するんだから。

青木 子供に依存せざるを得ない状況が戦後の三十年よりも、これから先ひどくなるという根拠は何ですか。戦後のその時点でも、出生率は一・八%、一・三%にとどまったわけですね。ところがなぜ今後三人になるという見通しをおたてになるのですか。

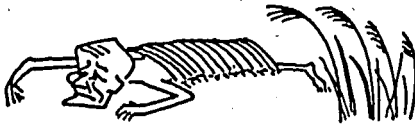
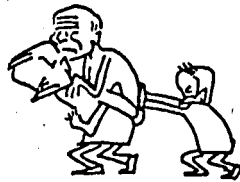
村松 三人に、ということではないです。二人ということです。二人でも一億六千万人になるということです。

青木 今までも大体二人だったわけですね。それがつまり増えはしないけれども減りはしない。減る可能性はほとんど期待できないってことですね。つまりこれから減らないということですね。なったかどうかという問題より以前にね、人はなぜ子供を持つかってこと、案外根拠があると思うんです。それを考えないで、数だけ想定してもあまり意味がないと思

うんです。それで今、社会保障がでて来たわけですね。

ただね、今までより、これから先、子供に社会保障を期待する度合が強くなるかどうか、つてのは、異論があるところじやないかと思ひます。

村松 そういうことです。だから、あなたは自殺する覚悟があるか、ということだ。



子供にたよるか、野たれ死にか

青木 私いらないんです子供。でも、一般的社会現象ですよ。

村松 そういうことを言っているわけです。そしてそれは深刻なこと。そういう

こと、ほんとうに悲しいことなんだ。

青木 ええ、私も悲しいことだと思っています。だからこそ、こういう所へ来ているわけですよ。でも、こういう可能性ありませんか。つまり子供に期待するつてことは、子供が出世してエリートコースを行ってくれて、自分たちを社会的地位からも経済的な立場からもバックアップしてくれると、そういう期待があると思うんです。ないですか。ただ子供はいさえすればいいいもんでもないと思うんです。

村松 両方ありますね。

青木 だから、そうしますとね、今はやはり子供は二人が限度じゃないですか。大学へやろうと思つたら、三人は物理的に不可能だと思います。二人だってきびしいですよ。だからそういう意味で、そんなに社会環境として子供が増えるつていうのは、あまり考えられないんですけど。

村松 だからさ、増えないことが考えられるのはわかるんですよ。しかしそのときに、自殺する覚悟、野たれ死にをする覚悟を、あなたは持つかもしれないけれども、一般の労働者の妻は持つか。持つ

ないんだよ。

青木 野たれ死にをしないことの保障が、子供に限るかということ……。

村松 そういうことですよ。そしてその保障というのが日本においては社会的には絶望だ、という認識をほくは持っている。そのときにどうするか、ということとです。その悲しみをどう救うか、ということとです。絶望ですよ。金権政治がなくなつたときに、次は何かという、ファシズムです。必ず来ます。それに対して、我々の側の準備するのは一体何がある。青木 私だってそれは考えて、市民運動や、いろいろやっているわけですけどね……（笑い）。

村松 わかる、わかる。だけれども、もうちょっとシビアに考えなきゃいけないんじゃないかってこと。

青木 ですから、人口問題について何が私たちに考えられ、どういう見通しが持てるかということ話し合いたいと思っ

ているわけなんで……。

## グローバルな視点で

### 子供を考えよう

松井 今、子供二人つてことが大体定着していますね。ところが本当はもっと子供が欲しいのに、持てないっていうキャンペーンがかなりあるでしよ、一部に。それについてどう考えるかってことが一つあるわけです。つまりね、住宅がないから、もっと欲しいのに二人しか産めないってことを、いろいろな大会でよく聞くんですよ。労働組合の大会でもね。そういう発想は、展開してはいけません。いかどうかっていうこともあるわけです。もっと社会保障が完備し、住宅もちゃんとあつて、教育もちゃんと行なわれれば、もう一人欲しいのに持てないんだってこと、よく聞くんじゃありませんか。

高木 それは結局、家族単位で、という意識があるからでしょ。自分の家は守りたいという……。

飯島 自分の家は守りたい、でしかないわけ。だけれども、今の日本では、もう資源がなくて、この狭い土地の中で世界にまれにみる人口過密な中に住んでい

る、しかもその生活たるや、すごい消費を行なつていて、すべて外国に依存して物を買ひ、物を売るといふことで成り立っている経済状況でしょ。もうどうしたって、これは全体的な数と価値観を変えていかなければダメなんじゃないかと思ひますよ。

松井 だから、私は日本の女性がグローバルな視点が薄いつてことが、さっきから話題になっていましたけど、次には、日本のレベルでも女の人として考えなければいけない、すごい深刻な問題があると思うんです。

これだけ日本の経済的な高度成長のため、よその国の資源の略奪と経済的な侵略をこのままやっていたら、もう大変なことになりますよ。たとえば、中絶を規制するような優生保護法改定について東南アジアの人たちがどういふふうに思うかという、ああ、これはまた日本が軍国主義を復活してやってくるんじゃないか、と、ものすごい恐怖感を持っているわけですよ。そのことに對しても私たちは、女としてもっと目を開かないといけないんですよ。

青木 子供の数を減らすかどうか、とい

うことも当然そうですけど、やはり、私たちの生活の味を変えていくという発想もなくちゃいけないと思います。

松井 そうそう、ただ人口の問題だけを取り出してはいけないんで……。

飯島 そういうことよね。

高木 だからやっぱり核家族ってことも順次解体されてはいるけれども、もっと積極的に……。自分の子供、という考えではなく……。

青木 そうですよ。世界の子供というふうな考え方に変えていくってこと。それがさっきの老後の問題にもつながってくると思います。自分の子供にだけしがみついているというのは、悲惨だと思わんです、精神的に……。

松井 そう、いかに変えるかってこと。

村松 そのとおりなんです。それを変える方法は一休何なのか……。

松井 やはり、私たちは、女性解放運動をやるよりし方がないですね。

青木 一つは自分の生活を変えることだと思っています。自分にできることをまずやって行こうと、ロガをやったり玄米を食べるなどしています。

村松 つまり、食糧摂取を低下させるこ



女は母親だけが役じゃない

とは、ベージュ・メタボリズム、基礎代謝を下げるということだ。  
青木 そして、子供がなくても生きがいがある、という自分の生活を持ちたいと思っています。

村松 わかります。大体この三つですか。

青木 それから、社会参加を……。むしろ動めにしられる男にはできない、女の役割というものがあると思います。

村松 そのときにあなたがさっき言ったけれども、なぜ子供を産むかということ。やっぱり根本的な問題に返る。子供が欲

しいっていう女性、夫婦が当然あるわけです。あってあたりまえと思う。そのとくにですね、まあ社会を変えなきゃならないという前提があるんだけど、そういう社会参加なり、基礎代謝を下げるなり、そういうことが現実に行えるかどうか、そういうことです。

松井 だけど、それはやっていかなきゃしょうがないんで……。

青木 案外簡単に換えられるものですね、人間っていうのは。

高木 自分が充実してくれば、生活のスタイルはどんどん変わるんです。

松井 私、問題はね、日本の女が自分の子供に頼る度合いを、いかにしてなくしていくかってことが、日本の女の解放につながると思うんです。日本は非常な母性崇拜文化の国で、おふくろのイメージが強いですからね。つまり子供ってことに母ということ、しか女の生きがいがない、そういう文化をやっぱり変える必要

があると思うんです。主権回復というのは非常に大変なことですけど、やっぱりやらなきゃいけないことだと思っています。

青木 一人一人が意識改革をし、かつ社会通念を変えるように自分の持ち場で努

力することですね。世論を変えていくことに、自分が何らかの形で参加すること、両方やっていたいけば、それくらいしか、個人に出来ることってないんじゃないかしら。あんまりグローバル、グローバルと言ってみても、観念だけではね……。

松井 たえば、私は子供ができないんで病院に行ったわけですけど、一緒に行った人など、子供ができないとわかったら、帰りの電車の中から飛びおりんばかりの悲嘆にくれているわけですよ。彼女は子供がいなかったら私は生きていけない、まわりもそれを期待していると。子供を産むことしか、その女の人生の支えはないような、そういう状況なんです。ほかに何か生きがいがあればいけないと思うわけです。

青木 今の日本の女って、すごく不安定ですよ、子供でもないなかったら。

村松 だから、その不安定な社会なり、しきたりなりは、変えられるのかというのが、さっきから言ってるほどの質問なんです。

松井 女性を解放していくっていう、私たちが女性解放運動で目指しているのはそういうことなんじゃないですか。

村松 だから、それはいつごろまでにできるか。

松井 まあ、少しずつ、やりつつあるんじゃないですか。

青木 みんな一所懸命束縛をくいかにしているわけです。

## 家族と共同体

村松 だから、そのときに、その時間のベクトルと人口増加を考えた場合、どうも人口増加のカーブの方が早いんじゃないかと……。

青木 それはそうかも知れませんが、でも人口抑制を外から強制すると、ファシズムになっちゃうわけですよ。さっきからおっしゃる通りに。

松井 だから女一人一人の中からでてこないと……。

青木 女一人一人を自分をふくめて啓蒙して変えていく。それからさっきから言っているように社会通念を変えていく。

これは男の方にも大いに行けることですね。つまらないことですけれども、独身者を軽蔑するとか、血縁にこだわるとかそういう偏見を自分自身の中から取り除

いて……。

飯島 親だって、娘に早く結婚せいか、そういう育て方をしなくなりましょ。これからは。

村松 ただね、一つ言えば、その家族ぐるみの喜びもあり得るキャパシティをもった社会ですね。念のために言っておきます。

松井 選択のある社会ですよ。

高木 あの、今言った家族というのは、血縁の家族でしょ。私はもう少しね、つまり共同体というようなもの、同志的な結合というようなことを考えるわけです。

村松 私は結婚というものは本来は、そういうものでなければならぬと思いますね。やはり一緒に生きて行こうや、という一つの同志的な結合が結婚であると思いますね。

高木 つも現実には家族のしがらみ、というようなものに抑圧され切つてると思うんです。もちろん恩恵も受けてるだらうけど。なまじ恩恵があるばかりに、がんにがらめになつて。そういう家族の重圧から自分自身を解放しないと……。

青木 あなたのおっしゃってるようなこ

と、マーガレット・ミードが言っている。人間は孤独じゃ生きられないんだから、世帯は必要だと。ただ、血縁じゃなくともいいんだと。そこらへんのけじめは分けたいですよね、たしかに。

高木 だからハウス・ホールドってことですね。かまどを同じくする、同じ釜の飯を食うという。

松井 ところが、日本は非常に儒教的な思想がまだ根強いでしょ。だから家族といえど、夫婦と子供と……になるんです。

青木 血縁共同体なんですよ。

村松 うーん、僕がどうしても心配なのは、人口増加と女性解放のカイブと、人口増加のほうがどうも急激に行っちゃうんじゃないかと……。

青木 私、一つ松井さんにうかがいたい。アメリカで十五年くらい前ですか、子供が多い方がいいというのは、それが五年前にいらしたとき変わったという、その間十年もたっていないでしょ。なぜ変わったのか。

松井 それは、女性解放運動の、つまりやっぱリウーマン・リブの大きな流れが一九六〇年の半ばから、萌芽として起こ

ってきたのと合致してるんですよ。

高木 アメリカの人口問題のいろいろな会議などにも、必ず女性が参加しています。日本からも参加してくれないか、と私の所へも手紙が来ますが、私はそれをどこへも持っていく場がないんです。

青木 アメリカが変わったのなら、日本だって変わる可能性あるんじゃないですか。

松井 アメリカの場合、女の役割の認識というのが完全に変わっているの。例のフリーダンの「フェミニン・ミスティーク」に書いてあるように、女があるべき姿というのが戦後非常に保守化して、家庭の中で良き妻・良き母としてってことで、徹底的にキャンベーンされたんです。マーガレット・ミードがそれに一枚加わっていましたが、昔の原始的な社会をモデルにして……。子供は五人くらい産むのが非常に流行していたんです。ところが、ベティ・フリーダンのような女性解放的な新しい人が出て来て、家庭から外へ出ようと、社会的な参加というものを、強調するようになったわけです。

村松 それは、いくつぐらいのお母さんから変わりますか。

高木 教育というのはある程度関係あると思うんです。中学卒業して東京に集団就職して、すぐ結婚しちゃったというような人は……。

松井 本当にそれは……。この間、塩沢美代子さんから話を聞きましたけれど、紡績工場の女の人たちは、最も結婚に対するあこがれが強いそうです。とにかく、いかにしてむなししい工場生活から足を洗うか、それには結婚による脱出だけが唯一の切り札なんです。専門的な職業を持っているような女性は、そういうドロ沼からはい出る方法は、別にいくらでもあるわけです。

結婚だけがすべてだ、というそういう庶民の女の人たちの結婚に対するものすごい執着、あこがれ、これを忘れちゃいけない。リードも発言しているけれども、だから、そういう人たちがねえ、変わっていくような女性解放運動でなければいけないということです。エリート女性だけでなしに。

村松 うん、そう、僕が言いたいのはそんなんです。

青木 今ね、彼女たちが結婚に執着しているのはね、花嫁とはいかにすばらしい



かという、結婚に対するマスキミのキャンペーンが入っちゃっているからではないですか。だから逆に結婚はすばらしいものじゃないんだ、やっぱり女は自分の人生は自分で選ばなきゃ、という考えが起これば変わりますよ。

村松 あ、僕の心配はわかりました(笑)。

そのときにですね、結婚以外にすばらしい生活を得られるという可能性を、さっき言った中学卒業で工場で働いている女の女性はあるかどうかな。

青木 それ以前に、私は結婚に対する過大な幻想をふりまきすぎていると思います。しかも商業主義と結びついちゃってひどくなる一方なんです。

村松 だけどまあ、幻想はなくなる可能性はあるだろうと思います。しかしその反面において、すばらしい人生を持ち得る可能性があるかどうか。

松井 私はねえ、まだ日本ではやるべきことが、たくさんあると思いますよ。例えば、女性に対する職業教育一つとっても、アメリカに比べれば無に等しい。工場で四、五年働いて、十八歳、二十歳になった女の人が違う職業に変わろうという場合に、ある新しい職業につけるよ

うな職業訓練の機関が全国的にあればですよ、それはスウェーデンだってアメリカだってやってるわけですよ。そういうことを日本では全然やってないで……。

村松 そうじゃなくて、それはね、男の社会でもそういう可能性はないんじゃないか。

松井 だけどね、男はいったん職業にいたら、一応はその会社にとついたらるわけですよ。別に足を洗って結婚しようなんて思わなくて……(笑)。

村松 いやいや、そういうんじゃないくてやはり男だって、たとえばハンコばかりおしているのはイヤだというふうな男だっているわけですよ。男だって人間なんだから(一同笑い)。ね、そのときに職業を変えられますか。つまり職業教育というのは本当に行なわれているんですか。

松井 だからそれは全体的なことを言っているわけですよ。まだまだやれることはあるということで。村松さんみたいに、ああ社会保障はぜんぜん良くならない、それから結婚以外にどんな生きがいを与えられますかって言ったら、なんにもできなくなっちゃう。(笑い)

村松 ああなるほど、それはむなしくな

る。ヤケ酒飲むしかない(笑い)。だけど現実として、どうもそうではないかと……。

松井 そりゃあねよくわかるんですよ。

今の若い世代の女の子たちの、何とか自己主張がなくて、結婚だけを考え、相手の男に気に入られることしか考えないような、そういう情けなくなるような状況はありますよ。でもやはりそれは社会全体のあり方に影響されているわけでは……。

青木 結局差別っていうのは相対的なものですからね。どんなに低い層でもやはりそこではまた女は差別されているんですよ。まずそういうことをなくしていつてからいろいろ言うべきで、それをしないでダメだというのはちょっとね。

村松 それはわかりますね。

青木 それは人口問題だけじゃありませんよ。核が頭の上で爆発するかも知れないし、私は食品公害に敏感になっていますので、次の世代には奇形ばかり生まれてやっけて人口問題どころではないんじゃないかと。だから人間は核で亡びるか、添加物で亡びるか、いずれ亡びるんじゃないかと思ってます。だけど人間生

きてる限りは何か可能性に向かってやらなきゃならない。それが人間の義務なんだと思っています。

だから自分自身としては、先生が野たれ死におっしゃるけど、私が個人的に野たれ死にするのが早いのか、世界規模で人類が破滅になるのが早いのかわからないだと思いますよ。

村松 うん、だから逆の言い方をすれば、野たれ死にとかそんなことではなくて、中学卒業の女性が生きたいなあというふうな、支えるものは何なのか、それはつくられるものなのか、現代においてつくりうるものなのか、ぼくはそれを言いたいわけです。

青木 一つにはもちろん状況全体を変えていくってことがありますが、それをやりながら、やはり連帯感を持つことが大切なことだと思えますね。私が「新しい地平」をやっている女性に気がついたことは、職場で働いている女性は悩んでいるのは自分ひとりだと思っているんですね。ほかの女性たちは、やれレジャーだ、ボーイハントだって毎日時をすごしているわけで、そこで差別なことを考えるのは異端者なんです。それがまた

私たちのグループに來まして、苦しんでいるのは自分ひとりじゃないとわかったときの生き生きしてくる感じ。それを見ていますとね、ちょっと私やめられないと……。それだけでも女性にとっては支えになるんです。

村松 だからつまり連帯という問題です。これはぼく、前から言ってますが、その連帯なりサークルなり、そういうものが昔は一つのコミュニティの中にあったわけですね。それが拡散したときに、つまり過密都市のこういう状況の中でどの程度つくられるかということです。飯島 そりゃあね、つくっていくよりしやうがないんじゃないですか。

松井 大体私はね、抑圧をいろんな形で感じていれば、だまって手をこまねいていられない気持ちになる。何か立ち上るか闘うという生き方を選んで行く女性が増えてくると思えますよ。ものすごく悪戦苦闘で大変なことだけれどもね。

青木 地域運動などでも、女性が多いです。しかしそれをやり続けるためには女はもう一歩出なきゃならないんです。たがいがいやり続けられなくなるのは家族のしがらみなんです。亭主やおしゅうとめ

さんにやめろと言われたり。

だから女が地域運動をやり続けるためにも、そこからもう一歩出る女性解放運動の視点というのは、別に勇ましいことを言う必要はないんですけどね、女も社会参加をすべきだ、というくらいの見通しを持たないと、やっていけない現状があるんです。そういう日常生活の中でのいろいろなことから一歩抜け出すための新しいまなざし、というものをやはり女は持っていきたいと思うんです。

松井 だから今年はまあ人口年で、人口問題を世界的に考えたわけでしょ。来年は国際婦人年ですから、女性の問題を考えようというので三つのスローガンがあるんです。一つは平等、男女のあらゆる差別をなくそうという。次に発展。発展っていうのは、女の社会参加ですね。それから平和です。これはやっぱり人類の世界のこれからのあり方を女の人がつくっていくんだということです。今年人口を考えて、次には女性の問題を考えていくいいチャンスだと思えます。

\*

\*

## 食糧危機を

### どう乗り切るか

村松 具体的なこともう一度考えますけどね、一億六千万人になって、だいたいぶなのかな。

松井 大体二十一世紀ですか、一億六千万になるのは。

飯島 それがそのときまでにどういう社会的な状況になるか、つまり質の問題ってことになるんじゃないですか、それまでに何が出来るかということ……。

青木 個人に自立の精神が必要ないようにやはり、自給自足の精神って必要だと思ふんです。今、日本みたいな所で食糧の自給率三十%以下ですね。七十%近くを輸入している。その分だけ世界の飢えた人の食糧を横どりして、工業製品だけはどんどん輸出して外貨をためこんできたんです。だからこれからは自給自足の建前でやっていて、他国の労働力もエネルギーも資源も搾取しない、という方向に行かなければならないし国民一人一人がそういう情況を納得した上で人口抑制にとり組むべきだと思ふんです。

松井 それにはかなりの意識変革が日本の私達一人一人につきつけられていますね。物質的な生活水準を切り下げる覚悟がどれだけあるのか……。

飯島 それは日本国内のことばかりではありませんね。私たちが、一人で経済成長率一%に下げると言っても、ほかは高い経済成長率でやっていては仕方がないし。これはやはり国際的な問題も、いつもみんな考えていかないと。

村松 自給自足の問題になると、一千万東京、つまり過密都市が問題になる。

松井 人口問題のいくつかの側面のうち世界的に一つの大きな問題として、都市化ということがあるわけですね。

村松 そうです。それから今まで東京に集まってきた人をどういうふうにして地元に戻して、しかもそこで安定した生活ができるか……。

青木 農業政策ですね。

松井 そうですね、農業の復権が絶対必要ですね。

青木 それは食糧の自給ってことで農業の振興しなきゃウソですね。実に今までこんなデタラメな政治あったのかしら、と思うくらい腹立たしいですね。

村松 そのときに、まあ、ぼくは政策なり経済の問題、くわしくはないんですが、農業政策で生きていけないから、経済成長つまり工業化にいったのか、あるいは独占資本がもうけるためだけにやったのかそこらへんの分析はどうですか。

松井 そりゃあ高い利潤を求めるという資本主義の……。

青木 そう、資本主義の悪がまんえんしてることですよ。

松井 だけどそれはすでにしつべ返しを受けているわけでしょ。環境汚染という形が一つ。食品公害について考えても、食糧を本来の形でなくして、例えば土の上を歩いてお日さまを浴びているにわとりの卵を食べられなくなったということが一体文明の進歩なのかどうか、つくづく思ふんです。

村松 その通りなんだけど、もう一度質問するのはですね、現実につまり自給自足という大前提に立てば、いくら技術革新しても日本の適度人口は五千万以下ですよ。つまり江戸時代においては三千万、二百六十年の間にはほとんど増えてないんです。もちろん鎖国ということがありますよ。技術革新がなかったというこ

ともありますよ。しかしまさにそこにおいてちょうどよかった人口というのは、三、四千万なんです。だから現代の文明の恩恵を受けたとしても、ぼくはせいぜい一億は超えないと思いますね。それは認めますね。

高木 許容人口ですね。

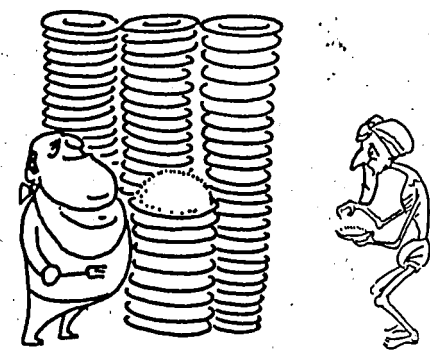
村松 つまり青木さんの言う自給自足の前提に立てば、一億以下でなければ、それが適度人口ですよ、推定として。とするならば、現実には一億六千万になる、そのギャップをどう救うかというところ。

青木 ですから、その場合に、許容人口がいくらかということを国民に知らせて、国民が自発的にこれは大変だから人口抑制しなきゃならないという情報と教育をもっとすべきだということですね。

松井 それを知らせもしないでね。

青木 そう、それを知らせる何の努力もしなかった。それから田舎へ行くと休耕田と称して田んぼにはペンペン草が生えています。それから裏作については何の手も打たれていなかった。そして畑はほとんどブルドーザーでひきはがされて赤土が出ています。こういうことをしておいて、人口が増えて食糧がなくなるから

子供は二人にしろ、という押しつけをされても国民は納得できない、ということがまずあります。それは政府も十分努力して、私が自給自足と言いましたのは原則としてということですから、原則としてできる限りやって、しかも国際的に助け合うということは、そこではじめて出てくることで、自分の所はいいかげんに畑を荒らしておいて食糧をよそからとってくるという精神では国際協調もできない、ということを私は言いたいわけです。



アメリカ人はインド人の百倍食べる

村松 その通りです。ただ現実の問題としてポリシーの問題になるわけですけれども、まず日本において情報の伝達を正確にする。それはある意味では日本においては可能かもしれない。ただ、自給自足でやっていけるかどうかですよ。

青木 そうしますと選択は二つしかないと思うのです。一つは強制的に人口を抑える。それだとナチと同じようになってしまいますね。もう一つは食料が非常に苦しくなってきた、一人当たりの需要を三分の一に減らすという方向ですね。

村松 三分の一ということはあり得ないです。

飯島 しかしかなりの量を減らせること、村松 日本人の平均カロリーはまだ三千五百ぐらいです。インドは大体二千以下かもしれませんね、三分の一は無理ね。飯島 例えば、お米を玄米にするだけでも、相当な変化がありますね。そういう方向も考えてもいいと思います。

青木 その考えに賛成ですね。せっかく

玄米に含まれている脂肪や蛋白質やビタミン類を捨てて肉食で補っている現在の食生活はおかしいと思います。おまけに日本が輸入している穀類の大きな部分が食肉用の家畜のエサになっているんですから、世界で毎日一万人の人が餓死しているという現状ではこれは犯罪的でさえあると思います。

強制的な人口抑制などというのは食生活の改善などあらゆる手を打ってからのことだと思ふんです。人口というのはなぜ制限しなければならないかという、未来の人類が幸福であるようにという大前提があるからであって、それを人間そのものの自由を抑圧して……。

松井 今の人類が苦しめられているんじゃない、なんにもならないと思います。

村松 それはわかるのだけれど、一億六千万どうするか……。

青木 それは人間ひとりひとりが決定することであって外からというのは、私は断固として反対したいわけです。(笑い)

村松 それはわかるなあ。

青木 だからそれほど大変なことだったら国を挙げてあらゆる努力をすべきだと思います。

松井 面白いことに、今までは、もっぱら国際分業論となえた財界でさえも、さすがに食糧自給論となえはじめています。そんな古めかしいことを言うのはほんの二三年前までは嘲笑の的だったんですよ。私の知り合いの農業関係の記者など前から食糧自給論を言っていました、みんなに嘲笑されていたんです。だけれど去年ぐらいいからものすごく聞かれるようになりました。そういう時代の変化というのは、ものすごく急ですよ。

村松 つまり食糧自給ということですよ。そうすると国際分業論が破壊されて、通産省が破産したということでしょう。それはそうなるとおる意味でナショナリズムの復活になるわけです。

青木 では今までのいわゆる国際分業論が、其の平等の上に立った、ほんとうのインターナショナルナリズムなのかどうか。

高木 通産省をもっと広めるといいと思います。国際結婚なども、もっと自由にできるように。

村松 つまりいい意味でのナショナルリズムが復活するという面もありますね。

松井 今は帝国主義なんです。村松 だけど悪い意味での、まさに帝国

主義的なナショナルナリズムが復活する可能性もあるということをぼくは一番最初から言っているわけです。

飯島 それはもうありますね。それとある国で現在非常に侵略的な行爲を行っている、自給率を高めればもう少し縮小される部分もあるということですよ。

## テクノロジの肥大化

松井 私など食品公害をやっている恐ろしくなってしまうのは、食べ物の本質というものを失なって全部工業生産でいいという考え方になってしまつて、石油たばくなどもそうだし、そのうちチューブ入りの宇宙食でいいという発想になってしまふわけね。これが一体本当に人間らしい食べ物だろうかという気になってしまふんです。

青木 カロリーだけはちゃんと確保されてね。

松井 つまりクロレラなどのように試験管で作つたようなものになってくる。もともと本来の姿に、今から戻らなくては人口の問題だけではなくて、すごく悲劇的な状況だと思っていますね。

飯島 私たち日常土の上歩くことないです。ね。もっと自然に帰ることを考えてもいいんですよ。

青木 人間がまず自然の一員である、人間もまず動物であるというところへもう一度返らなくちゃだめなんじゃないでしょうか。そうでないと産む性としての女だって大事にされる条件は出てこないですものね。試験管ベビーでいいじゃないかってことになってしまいますよ。

松井 そういうテクノロジーの肥大化ってことに一番敏感になるの、女ですよ。

青木 毎日、子供に食べさせなきゃならないし、生まれてくる子供のことを考えなきゃならないですから、これはもう観念じゃないですよ。

松井 現在のテクノロジーってものはね男がつくったものであるということか。

村松 なぜ男がそういうものを作るようになったのか。

青木 それは結局、女は子供を産むということだけが与えられた役割であったからですよ。それ以外のことは何ひとつ発首権を認められなかったし、参加の位置がなかったということです。

村松 産業革命なんかそうだろうな。そ

ういう発想だろうね。

松井 だって今現在アジアでも一般大衆の女は相変わらず、十人も十何人も子供を産むという、生物学的な性の役割を押しつけられているわけでしょ。教育を受けられるようなチャンスもなければ、そういう女の人たちに何の権利もないというところにつながってくると思うんです。

村松 ちょっとほんとに心配だね。

青木 考えたら、ゆううつになりますねあらゆることが。

松井 だから、どうしたらいいかって、ベシミスティックになれるのはすごくよくわかるけれど、そういうふうにしたら何もできないことになっちゃうから。

村松 だからそうじゃなくて、そのときに何かお祈りみたいな救いがないかというのを言いたいわけよ。(笑)

青木 でもね、自然をこれだけ破壊し動物をこれだけ虐待し……。人類が復讐うされているんだと思えば仕方ありませんね。

松井 人類っていう種だってやはり限界があるでしょ。地上から消えるときがあるんだから……。

## 自分の

### 立っている場で運動を

松井 だけど本当に日本ではこれまで人口問題に女が何ひとつ発言できなかったということを含め、あらためて感じますね。やっぱりそれは日本の女が家庭の中にだけにとじ込められていたということでしょうね。

村松 まあそればかりじゃなくて、人口問題やってるのは男でも日本ではまだ変わりものだよ。

飯島 これほど人口学というものが進んでいない国もない、後進国ですよ。

青木 経済学のおまけみたいなものですね。

松井 それはやっぱり戦争の後遺症というか。人口政策と聞いただけで、ああ軍国主義と思うし、だから市民の側で民主的な人口政策をつくるっていうことを、全然怠ってきたわけですよ。

村松 だって人口学部というのは、日本の大学で一つもないでしょ。

青木 そういもの大学につくるべきですよ。

松井 それには女の研究者が入るべきですね。そういうの作ると、また絶対、男がぎゅうじっちゃうのでは困る。

高木 現実としては、今だに女性がただ産む性であるだけだということ、それから、実際に子供二人なりをかかえている人などはどの程度社会参加できるか、ということが問題になるのではないかと思います。そこでもっと声を大きくすることが大切だと思いますが……。

それと、今実際に子供を育てている人たちが切実には感じていないということの方が大きいのではないかと思います。飯島 いろいろな形で情報っていうのが必要なんでしょうね。

青木 たとえば、生活の面でいま食品公害とか学校給食とかで、これでいいんだろいかという疑いを持っている方は意外と多いと思うんです。だからその辺に、どうやってアッピールしていくかってことですね。一対一でアッピールする仕方もあるし、あるいはマスコミを通じてやるのか運動を通じてやるのか、それはその人その人が自分の立ってる場で一所懸命やるしかないと思うんです。飯島 そうですね、それから例えばこう

いうふうにして発言した声というのが実際に届きにくいということ。

青木 届かないですよ。届いていけばもっと世の中よくなってるはずで、運動やっていると、いやになっちゃいますよね。

松井 それはもう限らない努力より以外ないんじゃないかしら。あきらめずに。

村松 だから、ぼくはさっきも言った連帯、若い人たちの握手だと思うんですけどもね。つまり運動し続けることは、

次の世代にそれを引継ぐということでしょう。そういうことが可能かどうかということなんです。どうしたらいいかな。

松井 みんながどうかってことよりまず、自分はどうかってこと。自分ができるだけのことをやろうと思っていくしか……。それがどれだけの効果があるってことから考えたら行動できなくなる。青木 そう考えたら、いやになっちゃいますよね。でもやっていると仲間ができるのは嬉しいですね。特に女の問題は……。

### 欲しい子供を抑制できるか

村松 ぼくは一つ大事なことを忘れていて、今思い出したんだけど、子供が

なぜ欲しいか、という点があります。こんなひどい世の中に子供を産んでしまっちゃ子供に申しわけないという考え方があるというのは、当然だと思うんですよ。だけどそれを一般の方々が持つかどうかということ、ちょっとぼくはわからないので聞いてみたい。

高木 持つかどうか、考えなしに産んでいるところが非常に多いと思います。

青木 考えなしに、というのは……、

高木 出来たから子供を持つというそれだけのことで。何となく子供は産むものだと思っているところがあるんです。

青木 そんなですよ、それ、問題だと思っただけです。結婚したら子供を産むんだ、つまりその前にもう一つ、人間はある年になったら結婚するもんだというのがある、次にこうなるといふ感じ、必ずしもその人の本来のものなのかどうか。教育なんていうのもあるし、しつけられちゃっている。それが自然のようだけれど、問題は実はそれが人工的なんだということじゃないですか。

村松 そういう社会通念は、ぼくは徐々に変わらないうちです。それから女性が結婚しなければならぬというような

通念も変わってくる。それも認めるんだけど、やっぱり産んじまうと、いうことがあるでしょ。

高木 夫はいらないけど子供は欲しいっていう人もいるしね。

村松 だから逆な方がいい方をすれば、こんなスモッグの多い、公害の多い、過密都市の世の中で子供を産むことは気の毒だというような考え方は、つまりそういうふうに社会通念が変わるかどうかというと、その辺がどうか、という気がするんですがね。

高木 公害の中に生きられるかどうかなんて考えるヒマもなく産んじやうのが大多数じゃないかしら。

村松 そうだろうなあ。だからぼくは、一億六千万よりは超えるだろうという発想があるんだよ。どう考えてもそのときには、オプティミスティックにはなれない部分があるんです。

飯島 だからそれはね、育てながら二人のほろがよさそうだなってことは社会の状況をみながらわかるわけでしょ。そういうときにそれをおして、四人も五人も、というのはまた話が違うでしょ。

村松 そりゃ違う。それこそ次元が違う

んだ。ただ産む実存感というものは……ぼくが男で、それがいいからよけいに感じるのだけども。

高木 一人産んだら、二人産みたいし。自分が動物的になるのが嬉しい……。

飯島 そういうの絶対あると思いますよ。本当だと思わ……。

村松 だから、どうしたらいいかってことを、さっき青木さん言ったけどもね、まさに、一人一人が、そういう運動をしなければ、という考え方は、十分わかるわけです。それも非常に大きなフアクターになると思うけれども、別のフアクターはないだろうか、という摸索をしたいと思いますね。

「」ところで、計画出産ということがありますね。強制されることは確かに悪いことだけれども、計画出産があるというところの教育がまず行なわれる、これは認めるでしょ。

青木 それはさっきから言われている情報が足りない足りないということ、もっともって行なわれないと……。

村松 そう。そういう意味ではぼくは性教育でもね。性教育、避妊の教育を徹底的にしなければいけない。しかも青木

さんが言うように、そこにはチョイスがある、理由があるということが、どうもやっぱりこれから日本で大きなポイントになるんじゃないかなあという気がするわけです。それで実行があるかどうかということがね、そういう性教育運動をやっているが、むなしさがあるんだなあ。どうも全然そういうふうなもの別な、ひとつの尺度なり、メルクマールで子供を持ちたりね……。

飯島 情念の世界であるとかね。人間、ここには失敗があるということ、もう最後まで許容して何か進めないと、仕方がないんじゃないでしょうか。

## 人口問題と差別の歴史

村松 だから、今世紀の末には、大体七十億から八十億になるでしょ。今三十八億って言ってるけど、どうも四十億ぐらいらしい。そこで、一つの問題提起は、基礎代謝を下げて生きていく方法と、地球の資源の再配分ですね。配分を公平にしたら、それこそ八十億生きのびられるわけですね。この問題が一つあります。

楽天主義者の考え方は、たんばく源の



# 月刊 婦人展望

市川房枝編集

婦人問題、婦人界の動向など、最新のニュースを満載した充実した16ページ。市川房枝大先輩を中心に婦人問題関係のベテランによる執筆と編集。お申し込みは下記へ——

誌代 100円 送料 12円  
半か年前金 600円 (送料共)  
一か年前金1,200円 ( " )

## 発行所

財団法人婦選会館出版部

東京都渋谷区代々木2-21-11

郵便番号 151

電話 東京 (03) 370-0238~9

振替 東京170790

開発とか、サハラ砂漠を緑の楽園にできるのではないかとということ。現時点で考えたら、どうも後何年かはうまくいかないんじゃないか。そのときに資源の再配分で人間が生きられるかということを考えたかどうか、と思うんです。

松井 私の言い残したことは、人口抑制論について批判的なグループ、たとえばアメリカ国内の黒人の人たちとか、第三世界の人たちの発想ですが、人口抑制は有色人種の爆発的な人口増加を恐れた、人種主義的な、白人優位の考え方ではないか、と疑っている。ということの頭に入れておいてもいいのではないかとということです。

青木 アフリカの問題だって、先進国が資源搾取をしなかったら、あんなじめ

な飢餓にならなかったそうですね。あれは自然のままじゃないからで、そこを視野に入れないが人口問題を言わないと。国際的にも国内的にも、現状を固定化してただ一律に人口抑止政策を押しすめるといふのは危険です。私たちは意識しないで人種差別と低開発国に対する抑圧をしているから。

松井 アフリカの人口の稀少は、大量に奴隷いとしてアメリカが連れ出してしまったその後遺症なんで、過去の植民地主義、帝国主義の侵略を反省しない。

青木 それとさっきのエネルギーや食糧の消費量と対峙して考えたら、どんな不公平な話かってことをふまえないと……。

飯島 そうなんです、その国の経済成長の段階とその人口構成とを考えないと。

村松 飢餓もあります。それからベトナムでもアフリカでもアラブでも戦争で殺し合いが行なわれている。そうした人間の差別の歴史、そういう時間の軸を考えながら、しかも現状をどうするか、という一つの二重構造というか、そういうことの発想に持っていかなければ、まっとうに全世界の人々に理解されないだろうという気がしますよ。

青木 人口問題って一方では地球規模で考えなければならぬけど、その実現となったら一人一人の問題で、生き方まで問われてくる……。

高木 少なくとも自分自身のことは自分で、産む産まないを考えるのが必要でしょうね。そして女自身が情報源になるということですね。



## International Women's Year 1975

### 活発な世界各国の動き

一九七五年の国際婦人年を期し、世界の各国では、実質的な平等へ向けての効果的な行動が実を結ぼうとしています。

「国際婦人年」は、七二年の第二十七回国連総会で決定されたわけですが、日本は国連加盟国でありながら、政府もマスコミも共に冷淡で、公式な行事としては、労働省婦人少年局が、四月の婦人週間を拡大する形で行なうことが予定されている程度で、女性でも、国際婦人年のこと

を知らない人がほとんどです。

### 日本での行事予定

日本では民間が主体で計画、NGO(非政府機関) 国内委員会では、記念集会やシンポジウムを企画しています。

〔記念集会〕七五年は、婦人参政権三十周年にも当たるので、六月第一週に「婦人の地位向上をめざす大集会」を開きます。政党系列下団体や労組関係もふくめ、右から左まで、できる限り広範の民間婦人団体に、委員長、市川房枝氏の名で計画の段階から参加するよう呼びかける予定。七四年内に準備会を開きます。

〔シンポジウム〕内閣の「婦人に関する諸問題調査会議」が行なった総会調査報告を点検、放置されたままの調査結果を検討するとともに、現在の日本における男女差別の実態を調査・発表し、政府に対する要望書を作成する予定です。

その他、加盟団体が、それぞれ独自の行事を計画しています。「あこら」も参加し、行動する予定です。

### 国連は明確に男女差別を否定

なお、この機会に、国連の男女差別に

対する基本的姿勢を調べてみたところ、差別撤廃への明確な姿勢が打ち出されていることを痛感しました。以下に、その概要を、簡単に紹介しましょう。

### 〔国連憲章〕

まず前文で、「基本的人権と人間の尊厳及び価値と、男女及び大小各国の同権とに関する信念」を改めて確認しています。

第一条「国連の目的」の3では、「人種、性、言語または宗教による差別なく、すべての者のために人権及び基本的自由を尊重するよう、助長奨励することについて、国際協力を達成すること」を規定。

第八条では、「国連は、その主要機関及び補助機関に男女がいかなる地位にも平等の条件で参加する資格があることに付いて、いかなる制限も設けてはならない」

第十三条「総会の研究発議及び勧告の目的」1のbは、「人種、性、言語または宗教による差別なく、すべての者のために人権及び基本的自由を実現するよう援助すること」を規定。

### 第九章「経済的及び社会的国際協力」

第五十五条は、国連が促進すべきことを三項目に分け、そのcで「人種、性、言語または宗教による差別のない、すべて

## 1975年は国際婦人年

の者のための人格及び基本的自由の普遍的な尊重及び遵守」をうたっています。

人種差別・宗教差別等と同様に、性差別のない世界をつくることを、明瞭に目的にしていることがわかります。

### 「人権に関する世界宣言」

一九四八年、第三回総会で採択されたこの宣言は、人類の歴史における画期的な宣言とされていますが、これも男女の平等をはっきりとうたっています。

まず前文では、「……基本的人権、人身の尊厳及び価値、ならびに男女の同権に関する確信を憲章において再確認し」と述べ、第二条では、「人はすべて、人種、皮膚の色、性別、言語、宗教、政治上

その他の意見、国民的もしくは社会的出身、財産、門地または他の身分といった、いかなる種類の差別もなしに、この宣言に掲げられているすべての権利と自由とを享有する権利を有する」ことを宣言しています。そのほか第十六条は「婚姻における男女の平等」、第二

十五条の2は「母と子に対する特別の保護と援助」を規定、単なる形式的平等でことたりとしな

で、現実存在する差別に監視の目を注ぎつつ、実質的平等を目指しているのが注目されます。

### 「その他」

ユネスコ憲章やILO憲章も、男女の平等に考慮を払っています。とくにILOでは男女平等を重視し、総会の議題が特に女性に関係があるとき、加盟国代表の二名以内の顧問のうち、少なくとも一名は女性でなければならない（第三条の2）とか、事務職員には女性を含めなければならない（第九条の3）などを規定、また女子労働力の保護の必要も、前文で宣言しています。

### 世界会議は七五年六月メキシコで

このような背景のもとに「女性差別撤廃宣言」は一九六三年第総会で発議され、六七年十一月七日、第二十二回総会で満場一致で採択されました。

宣言は十一條からなり、政治参加、教育、職業、結婚、国籍、刑法、親権、労働権など、あらゆる分野における女性差別の排除をうたっています。

「国際婦人年」は、こうした一連の思想と行動のうえに設けられたもので、七四

年一月には「婦人の地位委員会」第二十五回会議が開催され「国際婦人年」の活動計画案が討議されました。国連主催の「国際婦人年世界会議」は、七五年六月下旬から七月上旬まで、メキシコ・シナイで開催される予定です。

### 人権の基本として運動を

このように、男女差別の撤廃は、基本的人権の尊重の基本であることが、世界各国で合意されているのにもかかわらず、日本は、国連加盟国でありながら、「女性差別撤廃宣言」を批准していません。

第二次大戦の敗戦で、国際社会から追放された日本が、やつとの思いで国連への加盟を認められたのは、一九五六年十二月のことです。

その後はどなく、日本は、高度経済成長への道を歩み始めることになり、GNP 2位にまで躍進したわけですが、人権尊重の基本である男女差別撤廃に、政府が冷淡な態度を示していることは、人権についての考え方を如実に示すものとも言えます。世界の婦人運動の大きなヤマ場の一つとして、強力な運動を展開し、政府の姿勢も正したいものです。

## リブ・新宿センター

センターにビルを飲みたいという女が来た。これまで避妊はしてこなかった、中絶したばかり、男がコンドームをいやるのでビル、ということらしい。ああこれじゃ男が喜ぶだけだよ。くやしくないのかなあ。ビルは良い薬でも悪い薬でもないけれど、こういう飲み方はよくないよ。中絶にしても離婚にしても、家出したってそうだ。そういう女にセンターが貸せる手があるとしても、それは例えば初めて自転車に乗る人のために後ろをちょっとおさえることぐらいだろう。そのちょっとをきっかにペダルをプラスの方向に向けられるかどうかは、乗り手次第。ヘタクソな乗り手はあたしだって同じこと。相談役などガラじやないけれど、ほんのちょっと役に立てることがあるかもしれないし、あなたの力も貸してほしい。そんなかんじのセンターなのです。

## 男のなぐり方講座もある

新宿駅南口から徒歩十五分、明



治神宮に近いマンションの四階、四一〇号室。部屋は六、八、十帖からなる2LDK。八帖の日本間と台所付きの十帖の板の間をプチ抜きで使えば、五十人は収容できる。この台所付きの集會室こそ、最初からの念願だった。

つまり、みんなが楽しく集會に参加すること、楽しく茶わんの後片付けが同時に可能になるような空間を欲していたのだ。

このようにして、四十六年にセンターができたが、現在ここには五人の女が共同生活をし、次のよ

うな活動を定期的に行なっている。

○毎月第一火曜日 午後三時～  
無料法律相談 民事、刑事、労働にわたって弁護士中島道子さんが相談に応じている。

## (予約制)

○毎月第一、第三土曜日 午後七時

土曜パーティ 自分のことを語ったり、情報を交換しあう。飲み物や食べ物は余裕のある人が持参する。

○毎月火曜日 午後七時

翻訳グループ会議 海外のリブ資料を翻訳したり、日本のリブの状況を英訳して、海外との情報交換。

○毎水曜日 午後七時

「緋文字」ティーチン ビルを飲みたい人、中絶したい人たちのために医師の紹介もしている。来れない人は電話を。

○毎月二回 午後六時

講座(男のなぐり方)(会員制)  
その他、十一月からは「韓国、

連絡先——東京都渋谷区代々木4の28の5

東都レジデンス 410号

TEL. (03-370-6007)



#### 女の生きざまの出会い場

リブセンターはひとくちにいえば「女同士貸しあえる手を貸しあうためのもの」として創られたも

アジアの問題について」連続ティ  
ーチンを行なっている。機関紙  
リブニュース「この道ひとすじ」  
を毎月一回発行、一部五十円。  
その他、中絶・避妊に関する資  
料作り、女の「子殺し事件」の資  
料作成、優生保護法改悪阻止のた  
めのミュージカルなども行なっ  
ている。

ので、親切運動本部ではない。女  
同士寄り添ってニッコリのリブセ  
ンターではなく、どこまでも己れ  
は己れの生を引き受ける女たちの  
その生きざまが出会い場としてリ  
ブセンターはあると考えている。  
集会室については前述したが、  
残る六帖のひと部屋には、全国の  
リブの資料が揃っている。  
資料やニュースの売り上げと、  
グループのメンバー、および個人  
で参加している人達のカンパなど  
により、家賃六万円は支払ってい  
る。センターは宿泊も可能で、電  
話は二十四時間通話可。

#### まず己れの

##### 解放から始めよう

確かに私たちは、今だ明確な運  
動論を持ち得ていない。しかし確  
かなことがひとつ、リブという運  
動は、今まで運動といわれてきた  
ものの延長線上でとらえることの  
できない、つまりはそれだけの可  
能性をもった運動だということ。  
そしてその可能性は、解放への起

点をまずもって己れに置き、我が  
身が解き放たれていく確かな手ご  
たえの中で運動論を模索していく  
中でしか開花し得ないと思える。  
ともかくにも世直しは口先で  
はなく行動だ。義務や使命感で動  
くのではなく、人間愛が世直しの  
原動力。もとより自己愛抜きの人  
間愛なんてウソッパチ。姉妹たち  
よ、まずやりたいことをやろうと  
する己れ、己れ自身の世直しから  
とりかかれ！

#### 新宿センターは健闘する

最後に大切なことをひとこと。  
それは、新宿センターは、東京で  
唯一の、公然？たるリブセンター  
なんかではなく、これから数多く  
作られていくに違いないリブセ  
ンターの一つにすぎない。

東京はむろんのこと、全国津々  
浦々に、続々と産声をあげるリブ  
センター。点が線となる、その日  
に向けて、女たちが己れの日常を  
破壊し、創造する作業に、新宿セ  
ンターは健闘するゾ！（W記）

## 石油たんばく禁止を求める連絡会

市民として危険を訴えよう

石油たんばくの危険性を訴えて世論を喚起した「石禁連」が生まれたのは、一九七三年一月。各地域の消費者の会などから出されていた厚生省への「石油たんばく禁止申立書」を一本化したのが契機となった。

企業から厚生省に提出されている資料は千八十ページ。しかし同じ省内の食品衛生調査会には、二十四ページの要約しか届いていない。申立書を厚生省が握りつぶしたら、訴訟に持ち込み、原資料の



公開を迫ろうと計画したが、一応申立書は受理されてしまった。

そこで、世話人の一人、大高節子さんが、日本食品衛生学会で、一市民として、異例の発表をした。七月、パリで開かれた「世界の環境の中の薬品と生物学会議」に高橋暁正氏と共に出席したり、なりふりかまわず「石油たんばくの恐ろしさ」を、訴え続けている。

### 澄んだ主婦の目で追究

石油たんばくだけではない。危険食品の追放を目指す活躍も多彩だ。この春から夏にかけては、AF2問題で大忙し。AF2の毒性を発表したために上野製菓から告訴された郡司さんを支援したり、厚生省に連日出動して座り込んだり。特に食品衛生調査会がAF2を討議する日には、会場の外で声高に危険性を話し合う戦術を展開した。これは委員の一人、高田ユリさんのアイデアによるもの。この場外運動が展開されると、調査会のふんい気がガラリと変わった

という。

そのほか国立遺伝衛生研究所の田島さんを委員に送り込んだり、七月には国会内で公明党の勉強会を開かせたり、ついに、厚生省もAF2禁止を発表するに至った。

この運動の間に、メンバーはいろいろなことを経験した。例えば「人間は氷河期にも生き延びたのだから、これくらい大丈夫」という厚生省課長の暴言に腹を立てたり、郡司裁判の進行中にも、上野製菓が、AF2の生産をどんどん他の製品へ変えて行くのを見て企業の姿を改めて認識したり、厚生省の課長が裁判でAF2の安全性を主張したり……。ふしぎなこと、驚くことは多かった。

### 背景は国際石油資本と国連

ふしぎなことは国内だけではなく、パリでの会議に参加したのは、市民では大高さんだけ。しかも「食物の代替品と人間の健康」という分科会では、「反石油たんばく」どころか、学者は石油たん

連絡先——杉並区堀の内3—50—5

大高節子方

TEL. 03—311—1309

ばく推進派ばかりで、ふんい気もむしろ石油たんばく賛成といった感じ。しかも会議のリーダーシップを国連のWHOがとっていたという。

そこで大高さんが「ネズミの口蓋裂(三つ口)」のスライドを見せ、日本の実験データを説明したところ、それまで居眠りしていた人たちがたくさんいたのに、急に議論が沸騰。会議後の食事のときに国際石油資本の人が来て、高橋氏や大高さんと三時間も激論した。

「石油から食糧を」の発想が提案されたのは一九六三年の世界の石油会議でのこと。石油たんばくの背景は国際石油資本だが、この大資本との関係を改めて痛感した。

### 貧乏人だけなぜ毒を

最近、石禁連のメンバーの一人が恐ろしい話を聞いた。レタスが大暴落、山積みで腐っているある農村地域で、農家の主人が言った。「奥さん、ほしけりや持っていきなよ。うちにはトリも豚も飼って

るけど、家畜のエサにはしないよ。奇型が出ると困るからね」——豚も食わない農産野菜が、人間の食糧になっているのだ。

国立衛生研究所で、AF2を食べさせていたネズミはこの春に四匹死んだ。

しかも不愉快なのは、こうした有害食品が、低所得者層をねらってつくられていること。ハムでもソーセージでも、高い値段の高級品にはAF2が入っていない。AF2入りトウモロコシも、大量生産の低価格品だ。「貧乏人は危険食品を

食え」ということか。

それだけではない。石油たんばくのような人工食糧が輸入されるようになる、日本の農業、ことに畜産は潰滅的な打撃を受ける。

農業は一度潰滅したら容易に立直れない。去年の石油ショックのようないことが起こったら、どうなるのだろう。

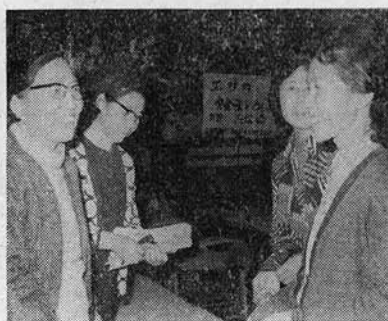
### 子供たちのために闘う

食品衛生法で許可されている添加物は、現在、約三百種類。

「全部調べたい。でもそのためには三百年ぐらい生き抜かないと」「しかもバックは国連や国際的大資本、私たちの力が何になるのかと気落ちしてしまっている」

「でも、運動を始めてから、恥ずかしかった街頭運動も平気になりました。これからも子供たちのために頑張ります」

組織体ではないから役員は置かず、何人かの世話人が活動の核となっているというこのグループの前途は、多難だが明るい。(N記)





## ◆家庭科の

### 男女共修をすすめる会

#### 大好評のパンフレット

九月末「家庭科の男女共修をめぐる一問一答」と題するパンフレットを発行したところ、たいへん好評で、大学の教材としても利用され、一か月もたないうち増刷。

内容は、女子の特性に応じた教育は必要か、学校で家庭科をやる必要があるかなどの一問一答スタイルで、巻末には戦後の家庭科の動きに関する年表もついている。すすむ署名運動

女子必修を定めている現行の教育課程そのものが改められるよう、教育課程審議会に対して要望の署名を提出することになっているが、現在でも男子の家庭科履修が禁じられているわけではないので、自治体ごと共修がすすめられるよう、都に対しても署名を提出する予定。

#### 「男女の特性」をテーマにした集会

第四回集会のテーマは「男女の特性と家庭科教育」。家庭科を、再び女子の教科にしてしまった文部省はその理由を「女子の特性にかんがみ」と述べている。その言いが正しいかどうか基本的に検討してみた。講師は児童精神医学の立場から平井信義氏、文化人類学の立場から原ひろ子氏。「男女には特性があるか、あるとすれば、教育はそれにどうかかわりを持つか」について話していただいた。原さんによればほとんどの社会で男女の役割分担が行なわれており、文化人類学からは差別の不当性

ぐるーぶだより・ぐるーぶだより・ぐるーぶだより・ぐるーぶだより

を明らかにできないが、特性に応じた教育が必要だともいえないとのこと。平井さんは、「やさしさ」も「決断力」も男女ともに必要だし、学問的にみて「性差」というのは、はっきりしない。教育上男女をわけける必要はなく、男女とも家庭を大切にする人間になるように育てるべきだと主張された。

十二月の第五回集会でも「特性」をテーマとし、家庭教育論の立場から藤井治枝氏、教育社会学の立場から山村賢明氏に話していただくことになっている。

パンフレット 一百部円、送料実費、注文は〒151渋谷区代々木二の二の一婦選会館内 家庭科の男女共修をすすめる会(〇三)三七〇一〇二三八

### ◆女性の法的地位を考える会

#### マス・コミの威力を痛感

毎日新聞の八月二十八日付家庭欄に会の活動が紹介され、全国から手紙や電話が殺到した。その後、共同通信社のニュース・サービスで、全国各地の新聞に掲載されたため、ふたたび手紙の洪水。それらの手紙の内容は、会の活動ぶり、パンフレット、ニュースなどを希望するものがほとんどで、財政難の上に人員も足りない会では、どう応答すべきか、手紙の山を前に頭をかかえている。アンケートまとまる

民法第七五〇条の夫婦同一氏強制に関するアンケートは、一応まとめることができた。

いずれ「あごら」誌上で、その一部を紹介する予定。



# あこら読書室

婦人問題関係書籍より

## \*性の神話

### ——女性解放の諸問題——

エブリン・リード 著

三宅義子／大原紀美子 訳

拓植書房

アメリカ反墮胎法闘争の先頭に立つ著者が人類学の研究を基礎に、マルクス主義の立場から女性解放の歴史と理論をわかりやすく述べ、女性解放運動にたずさわる人々の疑問に答えた解説書である。

こと新しいリブ理論を展開しているわけではないが、なぜ「女性の劣等性」という神話が生まれたのかを歴史的に説きあかして、現在の抑圧と差別が、階級社会の発生する以前には存在しなかったことを繰り返す述べ、現代の家族は「自然な」単位ではなく、支配階級によって、階級支配の道具として人工的につくられ

たことを明らかにしている。そして、家族という組織の再構成は、女性解放の不可欠な要素であり、それは社会そのものの再構成と密接不可分であることの重要性をうたっている。

結婚制度にとられず女性が女性自身の性生活を自分で支配しようとする「性革命」が、家族制度解体のポイントとなることを指摘しながら、筆者は、女権拡張ならぬ女性解放運動では、男性が敵ではないと言い切り、「女性革命」のめざす「人間革命」は社会主義革命を望む声にはかならず、よりよい新しい社会を創り出すための必死の闘いに、戦闘的労働者・学生運動家・黒人・その他抑圧された人々の中に同盟者を見出すと述べている。

婦人問題学習のテキストとして好適。訳文もよくこなれていて読みやすい。(A5 二百五十七ページ 九百八十円)

## \*つよい女は美しい

桐島洋子・小沢遼子 著

ゆまにて出版

同じ昭和十二年生まれの二人の、奔放な、そして心あたたまる対話集。

友情・結婚制度・セックス・主婦・育児・地域社会・政治・リブ・母性保護から、共同生活者や桐島洋子の恋にまで話は及んで、心に風が吹きとおったようなさわやかな読後感が残る。

つよい女とは、依存しない女、自立した女。その美しさが言外に見事に語られていて、「弱い女は美しい」と教えられてきた神話のギマン性を痛烈にくつがえす。

「しどころもどろに生きているだけ」という小沢氏が、「女も有能になるよりしうがないのよ」と言っているのける桐島氏の見事な有能さに、しだいに惹かれていくプロセスも、おもしろい。

すべての男女に、わけでも恋愛・結婚・職業などで悩む人に一読をすすめたい。

(四六判 二百七十ページ 七百二十円)

## \* 女性解放思想の歩み

水田 珠枝著

岩波書店

著者は、この本のあとがきで「わたしが無謀をあえておかししたのは、ほかならぬ、この分野の研究がまずしいからである」と述べているが、確かにルネッサンスから今日までを通しての、女性解放思想の歩みを跡づけた文献は、まれである。そして、今日このような本が書かれた意味は、現代の社会の差別が、単に階級差別だけに一元化されるものではなく性による差別という、もうひとつの視点が絡み合うことによって、女性が精神的自立と経済的独立の道をせめられ従属を余儀なくされて、その自覚さえも、しにくい状況がつけられていることにあるかと思う。

そこからの脱出をとげる展望をひらくために、かえりみて歴史に学ぶということがひとつの方法であり、その必要にこ

たえるものとして編まれた本書は、新書版の手ごろさに加えて問題意識も明確、啓蒙書としても適当である。これからの考え方の上にも方向づけを与えることになろう。

著者が本書で目指しているものは、女性解放思想を家父長制との緊密関係でとらえている点である。近代の思想、すなわち市民階級の思想は、たてまえとしては人間一般を解放し、自由と平等をその原理としながら、結局は男性の解放に限定された。本来、生活資料の生産＝男性と、生命の生産＝女性とは不可分の関係にあり、歴史を進める原動力として相互依存の関係にありながら、近代資本主義社会は、生命の生産は生活資料の生産に一步を譲ることを余儀なくされた。

この男女関係の優劣の固定化・永続化。そしてそれを制度化するものとして築かれたのが、ほかならぬ家父長制である、とし、西欧型の近代社会がひとつの幻想に過ぎないことを視点として、家父長制についてきびしい目をむけている。

したがって女性解放思想の起点を封建制の崩れはじめたルネッサンス期とし、次いで十八世紀後半から産業革命期を重

くみる。特に、産業革命の進行の過程に現われたイギリスの女性解放思想家ウルストン・クラフトの中に、その先見性の証しを見究めようとしている。彼女は二度目の夫であり無政府主義者のゴドウィンと共に、近代思想の限界を破って解放をおしすすめようとした。だがフランス革命の退潮を背景として挫折し、混乱に陥ったといわれるが、ひとたび提起された問題は歴史の過程で無視されるはずはなく、支持と批判の両面から論じられることになった。特に、家族制度を擁護するか変革するかをめぐって、十八世紀―十九世紀を通じて、フェミニズムと反フェミニズムの思想が激突した。そこから婦人参政権運動や売春禁止運動に発展してゆくが、一方、マルクスは自己疎外と人間解放の理論によって、女性解放にゆるがぬ方向性を与えたといつてよい。二十世紀後半の女性解放思想は、マルクス主義が提起した労働主体としての女性と、フロイド、エレン・ケイ、ストーパスなどが問題にした性的存在としての女性との分裂を克服して、性的抑圧機構としての家族制度を変革して女性解放を現実のものにする模索の時代であるとし

て、最後に今日的継承の問題点を展開すること、本書を結んでいる。

(新書版 二百十ページ 二百三十円)

### \*元始、

## 女性は大太陽であった 完

——平塚らいてう自伝——

大月書店

既刊上・中・下の三巻につづく完結篇。結婚・出産・育児の多難な時期から始まる。この時期にも文筆活動はやまず、論争史に残る与謝野晶子との母性保護論争を展開する。「婦人公論」と「太陽」の誌上で、晶子が母性保護を婦人の経済的独立に反する依頼主義と断じて、女子の徹底した独立を主張すれば、らいてうは、母性保護あつての経済的独立だとして譲らず、これに山田わか、山川菊栄の諸氏も加わつて、婦人労働の本質論がたたかわされた。

この主張を契機として新しい婦人運動に発展してゆく。新婦人協会が生まれる。明確な階級的立場をとらず、広範な婦人層の組織的な啓蒙運動として、それは青踏社の限界を超えるものであり、同時にそれは女性の地位向上の具体的課題とし

て、婦人参政権・治警五条改正等に進展してゆく。やがて心身の疲労に耐えぬまま、運動の第一線から引くが、この篇は大正五年から昭和十五年まで、運動の渦中に在つての母としての身辺雑記、折々の人、交友の思い出等、豊かな幅広に触れあいにみちあふれた好篇である。

今日を遠く洞察し、早くも大正の初期に女性解放の根もとに横たわる母性の問題を、かくも明確に堂々と主張し、自らもそれを貫いて生きた姿勢の見事さには目を見はる。

大正期の母性保護論争から戦後の日本母親大会の結成と、その後の運営まで終始一貫して変わらぬ信念は、まれなる知性と洞察力にささえられたものであらうが、その魂魄には圧倒される。

(A5 三百六ページ 九百五十円)

### \*働く婦人と母性保護

嶋津 千利世編

労働旬報社

働く婦人の数は、今日六百万をこえる状況の中で、母性保護の問題は、経営と労働の接点における最も鋭い緊張関係にある、といつても言い過ぎではないよう

に思われる。

特に、合理化の進む中で、母性保護の権利侵害が目にはみえない形で進行していることも反映して、労働問題としても、ひとつの焦点になっている。その手引書としてまとめられたものは、今まで大変に少ない。その意味で、この本は便利である。

内容は三章から成る。

第一章 合理化のもとにおける母性破壊の攻撃とその実態について

第二章 母性保護の権利を確立するにはいかにたたかうべきか

第三章 そのたまたかいの実際のすすめ方  
婦人労働問題研究会の会員の共同執筆だが、個別企業の労働組合の婦人部の協力もあつて、資料や実例にそつて具体的に説明されているためか、新書版としては内容も豊富で、今後の労働問題、婦人問題を考へてゆく人々たちにとっては、必読のテキストと言える。

ただし最近、労働組合でしばしば使われる母性破壊という言葉は、正しくは母性保護権利の侵害という厳密な使い方をした方がよいのではないかと思う。

(新書版 二百七十五ページ 四百円)

## \*小さな檻

——子捨て・子殺しの系譜——

南川 泰三著

ブロンズ社

読み終えたとき、ある種の疲れが心に沈む。新聞にテレビに報道されるコインロッカー事件が、最初ほどの衝撃を与えなくなり、又か、といった風に受け止められる昨今。情報の波状的な慣性に鈍磨されて、深い追究から人の心をそらしてしまう情況である。著者はその中で事実を執念の如く追い、世間の一方的な見方から角度を変えて、殺す側の立場を洗い直すことで、報道とそれを受け止める側の安易さを、終始反ばくしている。

なぜ殺さなければならなかったかの原因を、現代の女の母性愛の欠如に単純に一元化してしまう風潮にこそ、問題の深刻さと表裏をなすものが潜んでいるのではないか。

現代の子捨て・子殺しには、独特の情況反映があるのではないか。その独特の情況を見えにくくしていること。とくに社会的・歴史的原因に帰するよりは、見えやすい個人に責任を帰し、一切の原因を母

親一人にかぶせて、見えにくい社会的責任を隠べいしようとすることに、著者は怒りをもって立ちむかう。

日本の歴史は子殺しの歴史であり、それは貧しさから生まれる。貧困の意味こそ違え、昔も今も社会のしわ寄せは、弱き者、弱き命の上にかかって、その結末はあまりに悲しい。

明治から今日までの、子捨て・子殺しの事件を丹念にたどり、それを明るみに出して、これら不幸に消えた小さな魂と薄幸な記録を現代の心に呼びさまそうとした野心作。

(A5 三百五十二ページ 八百六十円)

## \*わが生は苦悩に灼かれて

中本 たか子著

白石書房

プロレタリア婦人作家の自伝。一九二九年十一月、著者は、それまで少しづつものを書いて暮らしていた郊外の住居をたたんで、当時労働運動のひとつの焦点となっていた危戸のモスリン工場近くに移り住む。そこからこの自伝は始まるのだが、同時に一人の人間の一九三〇年代もまた始まるのである。

組織の末端にあつて全協の青年らの活動に入つて行く、そのゆく手には非合法の暗い時代が横たわる。だが当時の「労働者農民大衆と共に」の旗じるしのもとに活動に入つてゆく者の胸には、あくまでも未来への明るい希望が燃え、またそれゆえに自己の信条にそむくことのできない純粋な使命感が、苛酷な規律にも身を服させる。

山口県、瀬戸内の半農半漁の貧しい村に生まれた著者が、小学校教員をやめて文筆に志し、上京してプロレタリア作家の戦列に加わってゆく前期の自伝だが、著者自身の言葉をもつてすれば「わたし自身の内部をながれている血は、過去数千年間耕作に従事してきた者のそれであり、そこには農民の愚直さがあり、絶海の怒涛にいどむ漁民のあらくれがある」と述べている通り、幾たびかの投獄・拷問・発狂・松沢病院へ、そして出獄。出獄すれば再び組織活動、また投獄、牢やぶり、保釈中の重罪で懲役四年。組織活動中に党員と愛し合うが、組織の中では許されないうままに再々投獄。互いに獄窓をへだてたまま身を焼く恋に苦しむが、やがて獄中で転向をした相手との訣別を

もって終わる。波らんに満ちた青春の日の、苦渋に満ちた自伝である。

日本の当時の暗い時代を背景に、自らは破滅に追いこまれながら、なお信念をまげず、人生の輝きを労働大衆の革命達成の中に純粹に求めようとした青春の日を、回顧的な風化作用にさらさないで描いたこの自伝は、自伝のワクを越えた歴史の意味をもつ。

(A5 二百四十一ページ 七百五十円)

### \*女への讃歌

—われらの解放

富山 妙子編著

三省堂

女性解放をめぐる対談と討論の記録である。もちろん登場するのは女性ばかり。対談の面白さは、互いにハネ返す速球の面白さとその争点の鋭さにあると思うが、対話者のパーソナリティがかかわって、面白くもあり、つまらなくもない。

ここで舞台まわしの役をつとめる司会の富山妙子氏は画家で、その経歴については随所で語っているが、大陸で育ち、敗戦前に男なみに生きるためには画家に

なることだと志して女子美術に入学。当時の校風になじまず退学。恋愛、結婚、子供を産み、離婚をし、本業の絵の方では早くから製作のモチーフを底辺社会に求め、そこに渦巻く解放への意欲を自らのものにしようとしてきた。一九七三年一月から「市民に権利の回復を、市民連合」を主宰。

本書は四編からなる。第一編は、富山妙子と語る、の対談。田中美津らウーマン・リップの旗手、詩人、未婚の母など顔ぶれは多彩である。第二編は討論。「われら女の解放」をテーマとしている。つづく第三編は農村婦人の問題を中心としての討論。最終編は、同じく対談。いずれも司会、聞き手は富山妙子氏による。

第一編の対談は、多くは若い世代の登場であるが、中には石垣綾子氏のような先輩もいて、おしなべてその発言は、まず自己から出発していること。建前における従属させるのではなく、せんいトサマの革命でしかないことを前提に、理念を地でゆく生きざまに発言の重みがあつて面白い。

第二編の討論、「われら女の解放」は、この本の本質的な部分とも言えるだろう。

個々人の発言にはそれぞれかなりの差を含み、解放への多様性を示す点で興味深い。その志向するところは、より輝いて生きることへの熱っぽいような渴望と脈動であり、怒れる女たちの声に触れる。

ひと時代前の女性解放は近代的合理性にさええられた思考に根ざすものであったが、いま、アンチテーゼとして、近代的性、合理性の否定の上に問題が投げかけられ、それを受け止められないいらだちと怒りがこめられている。

だから、現実にはその論理がかなり飛躍したものとして投映されるのだが、反面、思考の純度はむしろ高く、それゆえに惹かれるものが十分にあるのだ。

女の過去の私怨の歴史をねじ曲げてゆく方向性のかたに、女への讃歌をひびかせようと信じている人たちの論理と感情とが吐露された対談集として興味をひく。(A5 二百七十二ページ 九百円)

### \*廃娼ひとすじ

久布白 落実著

中央公論社

久布白落実女史の名前は矯風会をただ

ちに連想させるほど、まさに生涯を神と道連れでこの運動に八十余年をささげたのである。

この道一筋と、ひたすらに進んだ人の伝記から学ぶことは、いうまでもなく、その抱く信念とそれを実践にうつした行為とのたぐい合いの美学にあると思うのだが、それにもう一つ加えられるならば、その人の人生のさまざまな局面でその人を支えた人間関係と、そこに織りこまれた周辺の人々の人物像の面白さにあるように思われる。

徳富蘇峰、蔵花兄弟を叔父とし、叔母である矢島柑子を師として、多くの知友にささえられて宗教活動に身を投じた著者の幸せは、天与の環境というものかもしれないが、またそれを榮養としながら独自の境涯をひらいた著者の八十九年にわたる一生は、多くの毀誉褒へんはあるとともに、そこに日本の社会史をみる思いがある。

まがりなりに昭和二十二年の空襲防止法成立をみるまで、その長い道程に婦人矯風会による運動は、いわばストインズムの代名詞のように、「禁酒と魔娼」のスローガンが多くの擲論の中に耐えてき

た。民間募金、五銭袋の運動、婦人更生ホームの設立など、この運動をすすめる過程にはいかにも著者の人がらや奇抜な着想を思わせる記録があつて、事実としても面白いが、それにしても注目し値するのには、明治人の気骨と、その基底に流れる明治のナショナリズムの中にあるオプチミズムとも言えるのだろうか。その表現形式として花ひらいた運動なればこそ、「公娼制度こそ日本の恥辱」として、かくも根強く持続してきた理由ではあるまいか。

また、それゆえに戦争中は軍国主義の土俵にひきこまれて、ついに独自の行動形式を組み得ない結果ともなったのである。

矢島柑子という人の側面描写もさえているが、その驥尾に伏して、一筋に矯風会にささげた著者の生涯の折々の節は、多くの批判も向けられたが、その晩年の記録にみるかぎりでは極めて弾力性のある思考に目を見はらざるを得ない。この文中にひとりの人の輝きと、その光ぼうをみる人は少なくないように思われる。

(A5 三百十九ページ 千円)

## \*講座「おんな」

「そして、おんなは……」

筑摩書房

この講座の第一巻から五巻まで興味深く読んだ人には、大変待たれた最終巻であらう。

相変わらず意味深長な混迷を引きずったままの終幕ではあるが、これがかえって現在の状況をありのままに映し出した編集というべきかもしれない。

今日の社会が直面している、あらゆる面でのゆきづまりは、これまで「男の論理」で動いてきたことに起因するものとして、それにとって代わる「女の論理」が、人間解放への軌道修正や方向転換に直ちに特効的な意味をもたらすとは言えないとしても、今のままでは世の中がだめになるという警鐘として、女性の側からの社会の立て直しや作り替えの方向を仮説的に提示するものとして面白い。

冒頭が多田道太郎氏の一文によると、この世に、男があり、女があるという生物学的事実のほかに、われわれを呪縛する抽象としての性を社会の脈絡の中で考へるべきだとして四つの性を指摘する。

男が女をみる。その視線から一つの「関係」が生まれる。女が男をみる。その視線からもうひとつの関係が生まれる。こうして「男と女」との関係はこういうものなのだという考えが形作られている。社会とは実体ではない。関係のネットワークなのだ。「男のみる女」「女を見る男」のほかに「男のみる男」「女をみる女」という四つの性があり得るのではないか。

「ほんとうの女」とはどういうものか。この模索がこれまでの歴史の中には欠けていたのではないか。男は管理と支配のためにその論理と抽象とを考え出した。女がいつまでもどうしてその枠組みの中に安んじて生き得ようか。「女のみる女」の可能性とその独自性をどのように展開させたらいのか。

この一文を受けて、板谷翠、沢地久枝、河野妙子、大原富枝、芝木の子氏ら十名の人が、それぞれ持ち味をきかせて発言していて面白い。その中に二つの対談が織りこまれている。〈対談〉矛盾のかたまりとしての男と女——「力への恐れ」を生み出す社会のなかで今をときめく小田実、柴田翔氏の対談。もうひ

とつは、〈対談〉呼応するエロス——男の解放、女の解放——石牟礼道子、見田宗介両氏の登場。

そこに流れているもの、印象として心に沈むものは、女の性の可能性の一つとして、自然との共存の道のようなもの。そしてもう一つは、現代社会が忘却のなかに押しやっけてしまいつつある「人間のやさしさ」が、まだ生物的存在としての女の性の中に、比較的ありのままに内在していることを、内側からそつと差し出してくれていることのうれしさでも言えようか。

石牟礼道子氏の言葉が、これまでの氏の生活の軌跡に裏づけられて深く、印象的に、最後を飾っている。

(A5 二百七十五ページ 六百八十円)

### \*妹たちのかがり火 続

—戦死した兄さんを悼む—

仁木

悦子編

講談社

「戦死した兄さんを悼む」と、副題のそえられたこの文集は、いわば女の戦中派といわれる世代、つまり今日四十代、五

十代に達した妹たちが、連絡し合い、聞き伝え合って自然に結ばれた形でつくられた「かがり火の会」により、共通する悲しみの体験をここにつづった記録で、すでに刊行された第一集につづく続編である。鎮魂曲であるよりは、まさに反戦の賦とも言えよう。悲しみと哀惜の思いは残された者に負わされて、生きながらえてきた者の涙をいまなおわきあふれさせる。戦争のむなしさは、百万言を費しても言っただけぬ口惜しさに通ずるとは言いながら、なお書かずにはいらぬ者の迫力をたたえた文章に埋められたこの記録に、戦争の証言と反戦の深い思いを読みとることができる。

貧しい小作農の長男として生まれ、この子さえ一人前になったらと、両親の期待をにないながら昼も夜も働きつづけ、ようやく成人して甲種合格。戦争の激しさの加わる中で、すぐに戦場へ。北支那に、ビルマに、ニューギニアに。しかも、多くはその最期の地すら明らかにされないうまま、遺骨も遺品もない白木の箱となつて無言の帰郷である。悲歌の中で両親は老い、妹たちは「兄さえ生きていたら」といついっまでも痛惜の思いに堪えつづ

けていく。

「兄のめい福を祈りつつ」というこの中の一文は妹の心情を託した率直な文章によって感動を呼ぶ。三人の兄の三人すべてを失った妹の「オリオン」の星」にも涙をおさえ難い。広島原爆投下によって母、兄、妹らを一時に失った「十三人の死をみつめて」はまさに生きながらの地獄をくぐりぬけた苦しみにみちている。

これらの記録にまじって、弟を失った「三月十日のこと」の痛ましさはたとえようもない。三月十日の東京大空襲の下町で当時三才の弟を背に負って逃げまどい、ついに川の中に火を避け、水に濡らした一枚の布団によってかろうじて命をささえたが、弟はついに背中のこと切れて冷たくなってしまっていた。幼い弟への哀れさと痛惜に終生責めさいなまれる姉の記録など、絶語の体験とも言うべきものであったことだろう。

戦場にわが子を失ってやがて三十年。両親の多くは世を去り、戦争体験を知らぬ世代がぐんと層を増している。高度経済成長と管理社会の中で戦争批判すら口にしにくくなった今、中年を迎えてようやく落着きを得た妹たちも、成年に達す

る子の親となって、あらためて戦死した兄を追憶せずにはられない心情から、本書が編まれたものである。

戦争の証言は、戦場での体験からだけなされるものではなく、人間の命にかかわるものをすべてつづみこんで、ありとあらゆる場所から発言することによって反戦平和への道程に光を投げかけるものではなくてはなるまい。

(A5 三百三十二ページ 六百円)

### \*働く婦人の講座Ⅵ

#### 働く母の保育論

諏訪 きぬ  
土方 弘子 共著  
柴田 悦子

汐文社

母親が外で働くことは、都市と農村とを問わず、もはや珍しい現象ではないし、その数は年々増しつつある。これらの多くの働く母親たちは、子供の問題、とくに保育問題に、無関心でいるわけにはゆかない。

子供を育てる喜びと労働する喜び、共に人間としての深い意味を貫徹するなかで、仕事をもち母親の生活のベースと、

子供の成長のリズムとを、どのように調和させてゆくのか。今日の保育論の重たい意味がある。

今、保育の現場では毎日がどのように動いているのか。泥くさい日常の事がある、青森市や大阪市の保育園の現状をありのままに示すいくつかの事例から出発して、子供、保母、母親のそれぞれの立場での問題を展開している。

多くの家事労働が社会化され、軽減されてゆく中で、育児の社会化だけは最後まで母親の役割領域のものとして、今なお集団保育に踏み切らせぬ後ろ向きの議論が後をたたない。

第二章以降は集団保育と子どもの豊かな成長のための意義を追求することに多くのページをさき、これまでの歴史的経過をふまえて、その将来を展望することになげている。

もちろん、家庭責任は、集団保育によって肩代わりされるべきものではない。その意味で、現在家庭教育に残されている重要な意味合いを保育運動との関連で別の観点からとらえかえす必要がある、その点が本書の中で、かえって正しい認識の方向を模索する指針を示している面



白い。

最後に働く婦人の運動と保育運動に触れ、その理想と現実とのなほはだしい落差をどう縮めてゆくか。その意義を女の生き方につなげて一巻の保育論にまとめ上げた、今後の学習の上によい素材となる一書。

(A5 二百七十三ページ 七百八十円)

### \*多摩のおんな

―手づくりの現代史―

多摩のおんなを綴る会

三省堂

これは活字となった歴史上の著名な人たちの頂点をつなげて書かれた本ではなく、無名の人たち、特に、庶民の女たちの生きた姿を映し出して、手づくりの味わいをたたえた記録集である。

都下の辺縁の多摩地方も、超近代化と過密東京のおおりを受けて急速に変ほうしつつあるが、今からおよそ百年をさかのぼる祖母や母の時代には、女のいとなみはいかなるものであったのか。もはやその原型をとどめるものもない急速な変わり方を目のあたりにして、この地域に住む人たちが、「今ならまだ遅くない」

と聞き書きや体験をつづったもの。

第一章は多摩地方の郷土史と民俗についての解説、第二章は村の暮らしてある。水の祭と生活、という一章には、水場を求め水を守ること、そして水を祭ることが主婦の務めであったころの、自然と人間感情とのかかりについての生活史として生きた人間の歴史を感じる。四季折々の祭り、お釈迦祭や念仏講など素朴な宗教感情に満ちた生活詩がある。この生活史の中で女の生きてきた軌跡をたどることは興味深い。美しくありたいと願う気持ちにそむいて、昔の母たちは暗い地味な着物に身をつつみ、ひっそりと、しかし懸命に生き続けてきた。

「暗い色の着物」という一文も深い感銘を呼ぶ。そして女たちの懸命な生きざまを示すものとしてその背には常に何かが負わされる。それがかこであり、背負子であり、おさな児であるとき、おのずから生産にたずさわってきた者の風格がそなわる。そして、女が外に出て働く時代になる。紡績女工の生活、繰り糸機の中の青春。暗い女工のイメージと重なりながら哀歓をつづる一文には、労苦に裏打ちされたしっかり者の自信が楽天的に刻ま

れている。へき地の助産婦の忙しさををつづった一文にも、今は忘れられた労苦となつかしさと農婦たちのたくましさが浮彫りされている。民俗と労働と女の歴史に手作りの親しさがある。

(A5 二百九十二ページ 八百円)

### \*母権と父権

―婚姻にみる女性の地位―

江守 五夫著

弘文堂

戦後の最も大きな意識転換を私たちの身近にみるとすれば、それは婚姻の問題であろう。結婚の形は大きく変わった。戦前のゆるがぬ家父長制のもとでは、結婚の選択の自由は大きな制約を受けていた。戦後それは変わり、それが六〇年以降、更に急速の度を加えて変化しつつある。今日、いわゆるウーマンリブの運動がジャーナリズムに支えられて登場してきているが、アメリカから輸入されたこの運動は、欧米人の婚姻体系が――日本ではこれが近代的で民主的と評価されて受容されてきたが――必ずしも真に民主的なものではなかったことを暴露する結果となった。

自由と平等のスローガンのもとに成立した近代市民社会においても、夫の支配と妻の隷従の上に成立ってきた婚姻は、決して其実の平等ではないことにようやく目をひらかれたとも言えるだろう。

本書の追求する課題は、今日の「一夫一婦制」の起源をさぐり、現代の婚姻の社会的本質を理解し、伝統的な家父長制婚姻の社会的基礎を解明しようとする試みとして興味深い。

平塚らいてうは、「元始、女性は大陽であつた」とうたつたが、母権制は社会原始の基本的な特質の一つであつたことを今日疑う者はいない。

この原始母権制がどのような形成過程をたどり、当時の婦人がいかなる地位にあったのか、それが別れて父権制に移行し、父性の原理が顕在化して、女性の世界的敗北として「一夫一婦制」とその秩序をささえる家父長の原理が現出するまでの歴史的發展を視野におさめた人類の婚姻史の巨視的考察を本書はそのねらいとしている。豊かな文献考証と、今日世界各地における原住民の、生活様式にみる婚姻関係の原型を紹介しながら、家族社会学者の学説を平易に織りまぜている。

終章の「一夫一婦制の過去と未来では、以上の解説をふまえて、過去の汚れた一夫一婦制を、真にその名に恥じない一夫一婦制になすためにはどうしたらよいのか」という命題を構え、エンゲルスの「家族・私有財産および国家の起源」において示されている結論のなかの「新しい一夫一婦制」への発展の要因を「生産手段の共同（『社会的』所有への移行）」とそれを契機として「個別家族が社会の経済的単位たることをやめる」という事実のうちに求めた点を評価している。

社会の経済的単位としての個別家族の揚棄は、婦人から「私的」な家政をまぬがれさせることによって、婦人の社会的生産への復帰——それは婦人解放運動の前提条件であるが——を可能ならしめると同時に、このようにして平等となった男女の間の婚姻から物質的な契機を取り除くことによって、彼らが純粹な愛情にもとづいて婚姻をとりむすぶという道を切りひろぐのだとして、その展望に著者の結論を重ね合わせている。

「本書は、エンゲルス以後の民族学の成果をふまえて、母権制と父権制の歴史的・社会的基礎を究明し、彼とはかなり異

なった見解を随所にとりいれながらも、過去の「一夫一婦制」の社会的本質と、未来における「一夫一婦制」への展望において、結局エンゲルスと同一の結論に到達したのである」と著者は結んでいる。

(A5 二百五十一ページ 百十円)

\*土着するかあちゃんたち

牧瀬 菊技編

太平出版社

三里塚では、すべてのことばに、闘いの体験と、権力への鋭い批判が光る。立木に体を鎖でゆわえつけて抵抗するその主婦たちの生きた証言を、今こそ聞き書きしなければ、と、さし迫った気持で録音し、活字におこした貴重な記録である。

七つの年から子守りに出され、さんざんな苦勞を重ねた一主婦は、一生のうちで一番楽しかったのは闘争だと語り、クソ袋と刀で最後まで闘うだ、と言いつつ、

三里塚はすでに遠い日の出来事のようになりつつあるが、今なお燃え続ける反対の火を伝える本書は、それを支えているものが、農民の驚くべき大らかさと楽天性であることを語っている。

(A5 二百七十六ページ 九百円)

# 新聞切抜帖

一九七四年  
七月一日  
十月十五日

## 法・裁判

刑法改正答申、その後

法制審議会の答申が出てから三か月、法務省ではPRのために解説書や、一般用と専門家用の二種のパンフレットを作り、熱心にPR中。

日弁連はビラまき、反対集

会をやり、パンフレットも好評なので、詳しい「刑法改正読本」を作成中。

すでに十二の地方議会が反対を決議、もっと増えそう。

新聞協会、雑誌協会、書籍出版協会なども反対意見書を出す。  
(8・19朝日)

妻の相続税を軽減

田中首相は、五十年年度税制改正に関する大蔵省の方針の説明を求めた際、配偶者の相続税負担軽減に配慮することを指示した。

四十八年度税制改正で「妻の座優遇」はある程度進んだが、さらに優遇を求める声が高い。  
(8・25毎日)

結婚改姓と女性

現行民法では、夫婦は同一の姓を強制される。夫婦のどちらの姓でもよいが、実際には夫の姓が圧倒的に多く、女はカメレオンのように姓が変

わる。「女性の法的地位を考える会」は、夫婦は同一姓でも別姓でもよいように民法を変え運動をしている。

(8・29毎日)

尊属規定削除を急げ

尊属傷害致死罪が合憲か、違憲か争われていたが、最高裁は「合憲」とした。尊属殺人重罰を「違憲」とした昨年の判決の根拠も「法の下の平等」ではなく、「酷にすぎる」が多教意見であった。

しかし尊属規定は、差別の「程度」ではなく、「理由」が問題である。法と道徳を混同し、孝道を強制する尊属規定はすみやかに削除すべきである。  
(9・28朝日、毎日)

女子若年定年制

名古屋放送を相手に、女子若年定年制は違憲と女子社員二人が提訴し、名古屋地裁で勝訴した。会社側は名古屋高

裁に控訴したが、棄却された。  
(9・30朝日)

\* \*

名古屋地裁の一審判決と、

これを支持した名古屋高裁に心からの敬意と、賛同を表す。私の学校にも多数の女教師があり、ほとんどが母親であるが、男教師と対等に、同等の責任を負っている。(釜石市小学校長、五十六歳)  
(10・9朝日)

独禁法と消費者

公取委が発表した「独占禁止法改正試案」は、現行法よりも企業にきびしく、通産省や企業は反発している。

しかし消費者参加の余地はまだ不十分で、告発権はなく、賠償額などの被害救済も弱い。また公取委の委員長は大臣にして、政府の指揮下に入れようとする動きもある。

(10・9朝日)

## 米系混血児、無国籍の恐れ

日本の国籍法は、出生のとき父が日本国民であれば、子も日本国民、という男系血統主義。一方、USA移民及び国籍法は、「米国外で米市民と外国人の間に生まれ米国民権を得た者は、市民権留保のために十四歳から二十八歳まで、本国内に最小限二年間継続して住まねば、国籍を失う」と定める。

アメリカ人を父に、日本人を母に日本で生まれ育った混血児の四十三％が母子家庭。自力で米国生活ができないものも多く、約三千人が無国籍になる可能性があるが、法務省は日本帰化に消極的。

(10・14朝日)

簡易調停で仕立代を賠償服代を買って自分で仕立てたら、不当表示のためシワが寄りやすかった。店では服地

の代替品を出すことにしたが、「素人の仕立代」賠償は認めない。東京・大森の簡裁へ申し立て、四万円の賠償支払いの調停が出た。この種の裁判は日本で初めてだが、消費者の行動として「集団訴訟」と並んで今後の焦点になりそう。

(9・8朝日)

## 進出

火消しの世界に女性幹部  
男の職場だった東京消防庁で中堅幹部の「消防副士長」の昇任試験に二十七名の女性が合格。五倍の難関で、合格率は男性よりも高い。

(8・18朝日)

## 競馬中継のレポーター

東京のラジオ局ニッポン放送の競馬中継の専門レポーターに河合純子さん。京都生まれ、二十五歳。

(9・4、9・20毎日)

第八回世界社会学会議で八月十九日から五日間、七十五か国の約三千人が参加して、カナダのトロントで開催。

(9・12朝日)

## 活動

主婦が「利きじょうゆ」

東京中央区の消費者友会の主婦たちが、中小メーカー製のしょうゆを、会社名をわからぬようにして味みをした。味も香りも有名メーカー品と変わらず、値段も安く、本醸造で合成保存料なしのものが多かった。今後は一括購入などで、広めるつもりという。

(8・23朝日)

国際社会学会の役員の候補者や執行委員会のオブザーバーに女性を加える要求が出た。

(綿貫譲治上智大教授)

(9・5毎日)

消費者運動、農村で学習

安全で健康な食生活のために、これまでの産地直送活動をこえて、農業や農家経営の実態に目を向けようと、「日本消費者連盟」「婦人民主クラブ」の活動家が、宮城県の前民と交流した。まだ具体的行動には至らないが、共通の課題

が多いことがわかったとい  
う。(9・12毎日)

### 消費者にとつての独禁法

日本消費者連盟では、消費者にとつて望ましい独禁政策のあり方を考える「消費者と独禁政策」という公開研究会を開く。(9・8毎日)

### 合成洗剤やめて

東京台東区の主婦の消費者団体「台東たねまぐ会」は、「健康に悪影響の恐れがある合成洗剤、中性洗剤の生産・使用の停止」を区議会に請願。同一趣旨の請願が中野、渋谷の区議会ですでに採択、大田でも採択の見込み。(9・15朝日)

### 寝たきり予防

東京小金井市の「老後問題研究会」が行政に働きかけて、月一回の「寝たきりにならぬためのリハビリテーション相

談日」を設けている。専門医の指導で、訓練機械も使って一日十人くらいの相談を受けている。(9・21朝日)

### 在宅身障者に介護保障を

身障者が自由な社会生活を営む要求が高まり、「在宅身障者の保障を考える会」は、施設や家族の厄介ではなく、行政による介護人派遣を要求している。(8・8毎日)

## 抗議

### 離婚問題で勧め先にデモ

初老の男性が長年つれそつた妻に暴力をふるい、財産を一銭も渡さずに離婚しようとし、妻はウーマンリブ・グループの中ビ連に訴えた。中ビ連有志の「女を泣寝入りさせない会」は夫と交渉したがラチがあかず、勧め先にデモをした。(8・20毎日)

サラリーマンの妻として胸が暗れた。妻の内助は間接的に会社に貢献しており、公の場での発言権があるはず。(主婦、五十二歳)(8・24毎日)

\* \*

なんとなく笑いのこみあけるニュースだった。日本人は、男も女も別れ下手ではないかと思う。別れたければ、それなりの報いを受ける覚悟が必要で、それ相応の謝罪の心を物質であらわすしかない。

(瀬戸内寂聴)(8・31朝日)

\* \*

「女を泣寝入りさせない会」はすでに二人の「女性の敵」を降参させたが、八日に三人目をやり玉にあげた。これは中年の夫が三年前から他の女性と同せい、二年前に勝手に離婚届を出してその女性と再婚し、妻が離婚無効の訴訟中というケース。(10・9毎日)

### アパートの立ちのき通告

東京港区の木造アパートで洋服仕立業をしていた五十歳の独身女性が、家屋老朽を理由に突如「退居を要求された。家賃を供託して一人でがんばったが、他のあき部屋窓、たたみ、床まで取りはずされて恐ろしくなり、二〇番した。裁判で決着をつけるしかない」という。(8・18朝日)

### 欠陥プレハブ住宅に抗議

首都圏の主婦八人が自力で大手メーカーを相手に、欠陥プレハブの補修や建てかえを要求して闘っている。グループの連絡先は千葉市登戸5-6-12中村富貴子さん。(9・4朝日)

\* \*

消費者と業界の懇談会が東京・高輪の国民生活センターで開かれた。業界側は消費者代表の抗議を全面的に認める低姿勢ぶりだったが、メーカーから離れた公的検査機関の

設置については消極的。

(9・17朝日)

## 労働

有給育児時間かちとる

東京日本橋の高島屋デパートで、出産後一年間の有給育児時間を認めさせた女性がいる。正職員四千人中半数は女性だが、デパートの勤務体制が特殊なため、既婚者は一割、子持ちはんのわずか。まず労組を説得し、やっと会社に一年間の有給育児時間を認めさせた。これにはげまされ、銀座松坂屋でも獲得した。

(10・14赤旗)

働く婦人の福祉に理解を

婦人の職場進出は雇用者の三十三%という塩的な面だけでなく、質的にも変わった。高度の知識や技術を要する職域や管理職につく女性が増えた。九月十五日から「働く婦

人の福祉運動」がはじまったが、母性保護や育児の問題など、働く婦人の悩みはつきない。

(9・16毎日社説)

看護婦のオヤジの会

看護婦の劣悪な労働条件は家族を犠牲にしている。看護婦だけの問題ではない。看護婦の夫も立ち上がる。青森県八戸市の藤田健次さんの投書をきっかけに生まれた。妻の夜勤・過労は夫にも負担だ。まず夜勤のタクシー代を病院が払うよう要求する。

(10・1朝日、10・29毎日)

「いま学校で」女の先生

小、中学教師の五十三%は女性だが、校長や教頭など管理職は少ない。退職勧奨年齢も男性に比べて若く、出産や育児の負担も大きい。教師の側からみると労働条件はきびしいが、父母とくに母親の不満や反発も大きい。教育と教

師をめぐる様々の問題を、特に女教師の視点から分析。

(9・11・10・26朝日)

パート・内職口が急減

不況で雇用状況が悪化、内職はありつけるのが一、二割、パートは昨年の半分で求職が求人を上回った。このため、夫は操短や時間外カットで減収、主婦は失業という家庭が増えている。(10・16朝日)

## 調査

看護婦さん嘆きの全調査

日本看護協会が、所属者全員を対象に「保健婦・助産婦・看護婦の実態調査」をまとめた。賃金は全体の八十七・二%が十万円以下。一か月平均の夜勤回数は四十四・五%が九回以上。医療事故は高齢になるにつれ減少。(8・8毎日)

恵まれぬ中小企業の女性

都労働局は、都内の中小企業で働く女性就業実態調査をまとめた。生活のため働く人が過半数で腰かけ組は少ないが、賃金や定年制などの労働条件は男女格差が大きい。女性管理職のいる企業はわずが一割強。(8・18毎日)

独身の中・高年婦人

都民生局は都内の四十歳から五十四歳の独身女性を対象に、意識と実態を面接調査した。六十四・五%は結婚歴がなく、教育が高いほど独身率が高い。平均月収も男性より低く、健康、経済、住宅など老後の不安も大きい。

(8・21朝日)

小学校の女教師増加

文部省の学校基本調査では小学校の女教師は一九六九年以来、過半数を制して増加し、今年是全国平均五十四%、沖縄、千葉、大阪、埼玉、福岡の順

に多い。少ないのは北海道、長野、鹿児島。順。中学でもふえ続けているが二十八・八%。高校は十六・八%で十年来不変。(9・26朝日、毎日)

#### 水不足問題のアンケート

都民室が都政モニター五百人に聞いたところ、九割が節水努力の必要を感じていた。節水の実例は「洗たく機をやめてオケで洗う」「フロの水を洗たくに、洗たく後の水をバケツで水洗便所用に」など模範的。(8・30毎日)

#### 物価高、貯蓄を食う

全国の六千世帯(回収は、四千七百)を対象に、貯蓄増強委員会が調査。貯蓄の種類は預貯金と生保・簡保が圧倒的。インフレで貯蓄目標額は五割もふえたが、実際には貯蓄を減らさざるをえないとか、できなくなった世帯がふえた。ボーナスを貯蓄しても家計が

苦しく引き出すことも多い。(10・2朝日)

#### 家族の重荷、恍惚の人

東京都民生局の調査では、都内在住老人の約五%の三万人近くが「恍惚の人」で、半数は家族が一日中つきつきり。家族の二十%近くが施設への入所を希望するが、本人が希望するのはわずか四%。(9・12朝日、毎日)

\* \*

二十六年間も寝たきりの夫の看護に疲れた妻の無理心中未遂事件があった。家庭奉仕員は少なく、低所得者層だけが対象だが、もっと増員して家族の負担を軽くすべきだ。(10・2朝日)

## 会

#### 母親大会

一九五五年に始まってから二十回を迎え、参加者の中に

は、この年に生まれた女性もいた。母親運動の原点に返ろう」「ひとりぼっちの母親をなくそう」などの合言葉で二万二千人が集まった。(8・12朝日、8・13毎日)

#### PTAの母親役員

全国PTA研究大会母親部会が北九州市で開かれた。役員の後継者難、会合の出席率が悪いこと、女性会長は単位PTAにはすこしあるが、府県単位ではないことなどが話題に出た。(8・29毎日)

#### 婦人学習の新しい芽

婦人の学習・運動と社会教育をテーマに、社会教育研究全国集会在名古屋で開かれた。役所の講座を聞く受身のものから自主的活動への動きが目立ち、内容も教養だけでなく社会福祉や公衆学習など多様化。働く女性と専業主婦が協力できる学習や、幼児を

もつ母親が参加できる運動を願う声が多かった。(9・14朝日)

#### 国際大学婦人連盟会議

世界中から約千人が集まり京都で開催。人口問題にもっと女性の発言をとか、男性の独占である電子工学の教育を女性にも開放する、女性の政治への進出が大切などの意見が出た。(8・19朝日)

#### 有職婦人国際会議

五十六か国から約千人が参加してブエノスアイレスで開かれた。先進国、途上国を問わず、女性が社会的、政治的、経済的差別を受けていることは共通だった。日本からは三十人が出席、市川房枝さんが選挙について話して拍手がわいた。総会では地位向上、保育所設置など十九の決議がされた。(9・3朝日、9・9毎日)

# 列國議會同盟 (I・P・U)

十月二日から東京で開催、婦人議員全員を接待委員に指名し、女性差別と非難された。反対の声は事務局に伝わったが、十四年前の先例をたてに強行。八日の日本と外国の婦人議員の会で、議長への抗議を話し合う。(10・4朝日)

婦人議員のパーティは十か国十六人、日本は衆参両院二十五人中十一人が出席、市川房枝氏のあいさつで開会、来年の国際婦人年での協力を誓いあった。(10・9朝日)

世界各国代表議員の夫人たちは、日本の物価高にびっくり、「日本人はおとなしい、ふしぎな国ノ」(10・12朝日)

## 巖本善治記念の会

自由民権や男女同権論をとなえ、明治女学校を経営、教養・文芸の「女学雑誌」でその

主張を展開した巖本善治の三十三忌にちなみ、再評価をはかる会が命日に、東京・新宿の中村屋で開かれた。(9・24朝日)

## 全国養護問題研究大会

全国の養護施設の保母、指導者、教師と研究者が年休をとって、手弁当で川崎市に集まった。公的な財政措置の乏しさ、慈善事業から出発した私立施設の問題点など、政治の冷たさが話題の中心。(戸塚康、9・20毎日)

## 人

### 賞

市川房枝さん 七十四年度、

ラモン・マグサイサイ賞

(8・3朝日、毎日)

宮岡多恵子さん、「冥途の家

族」が第十三回女流文学賞。

(9・5朝日、毎日)

今井俊子さん 第一回ブッチ

ーニ国際コンクール二位。

(9・6毎日)

森下洋子さん プルガリアの

国際バレエ・コンクールで

金賞。(8・17朝日)

## 死

南部あきさん 服飾評論家。

戦後ファッション・ライタ

ーの草分け。リンパ肉腫の

ため、七月十二日、六十二

歳で。(7・12朝日)

いわさきちひろさん 童画家。

一九七三年、イタリアのボ

ローニャにおける第十回国

際絵本展で、グラフィック

賞第一席に選ばれた。肝が

んのため、八月八日、五十

五歳で。本名、松本知弘。

(8・9朝日)

石井梯子さん 女子テニス界

の草分け。第一回(一九二

四年)、第二回の全日本選手

権シングルス優勝者。肺が

んのため八月十三日、六十

八歳で。(8・15朝日)

石渡満子さん 女性判事第一

号。一九四九年東京地裁判

事補。一九七〇年定年退職

後は弁護士。結腸がんのた

め、八月二十七日、六十九

歳で。(8・27朝日)

阿部静枝さん 歌人。歌集「霜

の道」がある。脳出血のた

め、八月三十一日、六十九

歳で。(9・1朝日)

三つ子を撮って十年

渡辺みどりさん、日本テレ

ビのディレクター。三つ子の

成長記録を十年間撮り続けて

いる。この蓄積の成果が最近

放映され、見る人の胸をうっ

た。(9・3毎日)

## 女流棋士、欧州で活躍

小林千寿さん、十九歳、四

非三段。小学校入学と同時に

木谷九段に弟子入り、高二で

初段、三年で二段。欧州囲碁

選手権に日本棋院から派遣さ

れ、七月九日から五十日で十



六都市を回り、一度に五、六人相手に対局した。

(9・3 毎日)

### 日航に女性次長

日航広報室課長の滝田あゆちさん、九月の人事異動で国際業務室次長に昇進。次長は役員以外の最高ポストの部長につく役職で、女性としては初めて。

ウーマンリブ運動は肯定するが、自分は権利の主張ではなく、実績を示したいという。

一九五五年東大法学部卒。

(9・3 朝日・毎日、9・11 毎日)

### 「フランス」に抵抗

高橋秀子さん、エールフランスのスケジュールデス。パリ転勤を拒否、解雇通告を受けたが、仮処分ではね返し、高裁で勝訴、しかし会社は依然として乗務を認めない。

(9・6 毎日)

### 盲人用テープの朗読録音

杉谷文子さん、主婦五十八歳。

鉄道弘済会が関係団体と共に催で選考した「第四回全国表彰者」の一人に選ばれた。

上野寛永寺貫主兼輪王寺門跡の夫人としての忙しい生活の中で、読み手の少ない時代小説をテープに入れてきた。

(9・9 毎日)

### 寿地区の天使

渡辺幸子さん、横浜市の簡易旅館街、寿地区の保健婦さん。寿地区を担当して五年、町の人は彼女の訪問を心待ちにしている。勤務時間外でも、身銭を切っても、保健所職員の肩書ははずれて地区の人と対等につき合ってきた。どんなに疲れても翌日は新しい気持ちで訪問する。

(9・11 朝日)

### おかあさんの性映画

いえき・ひさこさん、撮影

中の映画「恋は緑の風の中」

(家城プロ)のシナリオを書いた。中学二年の思春期の男女の純愛と、その世代が直面するセックスを中心に、家族や学校とのかかわりをメルヘンとして描いたもの。監督は夫の已代治氏、早ければ十月中に封切りの予定。

(9・13 毎日)

### 身障者の喫茶店「車いす」

土屋都子さん(三十五歳、下半身不随)は六月中旬、甲府市で喫茶店「車いす」を開店。顔なじみ客もふえて、着実に前進している。

(9・13 朝日)

### 動物園病院の院長さん

増井光子さん、新装なった東京、多摩動物公園動物園病院長。生まれ変わることができれば、なんでもこの仕事をやる」ほどの動物好き、大阪出身、獣医学博士、三十七歳。

歳。

(9・20 朝日)

### 沖縄の売春を調査

弁護士、金城清子さん、沖縄の売春について十九人の弁護士とともに現地調査し、レポート「売春と前借金」をまとめた。沖縄では婦人の人権問題は米軍の人権侵害のかけに隠れていた。働く女性が多いのに、国会議員、県議ゼロ、市町村議員もわずか。売春でも前借金制度がある。

(9・22 朝日)

### 重度身障児に私設図書館

小村静江さん、北海道小樽市で重度身障児用の私設図書館を開いている。東京では岩波書店の児童図書編集者で、自宅に三千冊の児童文庫も作った。北海道移転後は、重度身障児用文庫に変えたが、辺地の子には郵送するしかない。短大講師などの収入のすべてを文庫に注入する小村さんに

は、郵送費が出せず、盲人用同様の無料を訴えているが、役所は非情で十月からは値上げ。  
(9・23毎日)

### 衆院で男女差別を追及

田中美智子さん、衆議院の社会労働委員会で公務員の男女差別をとりあげた。女性には係長相当の五等級への昇格がむずかしく、一定年齢以上の女性が六等級にたまっていく。田中さんはこれまでも、女子若年定年制や民間企業 of 性差別賃金などをとりあげ、即解決につながった例が幾つかある。これまで女の問題は国会での市民権さえなかったが、人類の半分は女だから、これをかちとるのは私の大きな役割と思う、と言う。  
(10・15朝日)

### 金大中氏救出運動ならず

文 明子さん、元韓国文化放送駐米特派員。亡命先のア

メリカで反朴運動を続けていく。アメリカでの金大中氏救出運動を東京で講演しようと思日したが、ビザの入国目的違反と法務省がさしとめたため、十日夜帰米。  
(8・13朝日)

## 保育・育児

### 保育時間を長く

長野県山ノ内町で開かれた第六回保育団体合同研究会の「保育時間」分科会で、保育時間の延長をめぐる討論された。大都市では通勤時間は長くなる一方、五時に勤務が終わってさえも、保育園に着くのは六時半というのも珍しくはない。しかし、保育時間や保母数などの基準は厚生省が以前に決めたまま。保母と保護者が条件改善運動を共同する呼びかけが、参加者の共感を呼んだ。  
(8・16赤旗)

### 障害児の保育

身心障害児は健康児との交流の中で成長し、健康児も障害児との触れあいで成長するが、切り離されている。第一回「障害児教育報告会」が東京で開かれ、「自閉児と共に育つ子供たち」をテーマに、小児精神科の医師、小学校教諭、保育園保母、母親が報告した。この報告会は情緒障害児全般について継続的に開かれる予定。  
(9・2朝日、9・6毎日)

全国初の重症心疾患児保育施設、心臓病の子供の「こぐま」園が開園、四月から二十人の子が週二回通園している。  
(8・16毎日)

### 母たちが連帯集会

公害で苦しむ都内五か所の保育園・幼稚園の父母たち約百人が、主婦会館で「子供々の環境権を守る連帯集会」を開いた。「大きな声を出せない子供たちの立場を考えよう」と、建築公害対策市民連合が呼びかけたもの。周辺に十階前後の中・高層マンションが建てられたり建築中の五園の父母たちは「自宅では日が当たらない。せめて子供に太陽を奪うな」と「子供の論理」を主張、「子供たちの手に太陽を取り戻す決議」を全員一致で採択した。(10・1毎日)

### 子殺しの風土

子殺し事件で「加害者」である親たちは「被害者」でもある。未婚の母や障害児への偏見、貧困、家庭不和、病苦、社会的孤立などが重くかぶさっている。母性を失ったのは母親ではなく、社会ではないだろうか。  
(母性喪失9・3—12朝日)

### 学童保育

第九回学童保育研究集会が

二十二、三兩日大阪の吹田市で開催。京都や埼玉県草加など、市の条例化されている自治体の報告、東京新宿百人町の全国学童保育連絡協議会をセンターとして運動することなどを申し合わせた。

(9・30朝日、10・1毎日)

### 北朝鮮の子供たち

託児所から小中学校まで、一切、金がかからない。そのほか課外サークルで小中学生には週二回あらゆる学習がある。

女性の四十三%が働いている北朝鮮では「婦人の家庭からの解放」が国の三大技術革命の一つ。働く婦人の子供たちは生後一年七か月から託児所に入り、週日は全託、週末に自宅に帰る。土曜に母親に連れられていくときはうれしそうだが、月曜に帰ると家のことは気にしない生活で、のびのびと育つ。なお五歳から

七歳までは幼稚園だが、これも全部公立だ。(10・16朝日)

### 無認可保育所

産休明けから預かる認可保育所や公立保育所はほとんどない。八か月以上の子は預かるが、定員が極端に少ない。国や自治体は、無認可保育所に保育浪人を押しつけながら財政援助はしない。園長や保育士の給料を削り、バザーや自治体のわずかな補助金値上げなどでやっと運営している。

産休明けから公立保育所に入れるのが本当だが、すぐには実現できないから、当面は国が無認可に援助して、より良い環境で保育することを関係者は熱望。(10・14、17毎日)

## 健康

### AF-2 全面禁止

国立衛生試験所が発がん性を実証したため、厚生省では

やっと今月中に使用禁止措置をとることに決定。

(8・21毎日)

### 公害病補償の男女格差

中央公害対策審議会の環境部会が公害健康被害補償法の実施細目を答申した。労災補償などに比べて一応前進しているが、補償費の算定基礎を平均賃金にしたため男女別、年齢別の格差が大きい。

(8・13朝日・毎日)

### 家庭用品の安全基準

十月から家庭用品の規制法が施行される。厚生省はホルムアルデヒドなど三種類の基準をきめ、安全確保に第一歩をふみ出したが、まだまだ不十分。有害物質を家庭用品に使うことを再検討する必要がある。

(9・18朝日)

## 本

### 性の神話

著者は昨年来日した米国人運動指導者。エンゲルスの立場と人類学の成果とから、「女性は劣った性で、家庭だけが居場所」は神話と主張。原題は「女性解放の諸問題」エブリン・リード著・拓植書房・九百八十円。(10・14朝日)

### 女がそとで働くとき

TBS 婦人ニュースのアナウンサーだった著者が、職場での体験とそれをふまえた主張。米栖琴子著・水旺社・八百八十円。(9・9赤旗)

### われらチンプー

社会人類学者がバブア・ニューギニアの高地人社会について書いた本。一九七三年にオーストラリアから独立して国づくりを進める高地人の側に著者は立ち、彼らへの正當な理解をわれわれに要求している。畑中幸子著・三笠書房

九百八十円。(9・9朝日)

### 市川房枝自伝 戦前編

愛知県農家に生まれ、暴君の父に対する母の嘆きが、性差別への闘いの出発点であった。その闘いの日々が、正確で豊富な資料をもとに書かれ、それがそのまま女性の権利拡張史になっている。新宿書房・二千円。

(9・30朝日)

### 覚書 幕末の水戸藩

祖父、青山延寿の遺した資料を中心に母親や古老からの聞き書きで裏づけをした。文章の若々しき、視点の新鮮さは八十三歳とは思えない。いまでも婦人解放に情熱的な山川さんは「来年は国連の婦人解放年なのに日本ではなにもしていない。労組も母性保護の一本足だけ」と鋭い。山川菊栄著・岩波書店・千五百円。

(9・23毎日)

### おんなの現代史

「たけくらべ」の美登利、「金色夜叉」のお宮、「女の一生」の布引けい、「君の名は」の真知子など明治、大正、昭和の三代のヒロインを、明治以降の日本の歩みと対照させて描く。加太こうじ著・現代史出版会・九百八十円。

(7・8公明)

### 女性思想史

一九四九年の旧著を田中和子が改訂したもの。ヨーロッパの女性の地位、権利獲得のための思想と行動をえがき、日本の女性解放運動にも及ぶ。読書会のテキストにもよい。神近市子著・亜紀書房・八百五十円。(9・9朝日)

### 小梅日記1

紀州藩校・学習館の哲学の妻、小梅の幕末から明治にかけての日記の復刻三分冊の第一冊。激動の時代の記録であ

り、家計や物価など実生活の記録でもある。志賀裕春、村田静子校訂・平凡社・七百五十円。(9・16毎日)

### 女流作家論

十六人の女流作家を論じたものに、対談と評論をそえたもの。一見女流作家に甘いよう、実は鋭さがある。重複や各編の軽重の差があるのは残念。奥野健男著・第三文明社・千二百円。(8・12朝日)

### ソビエトの保育

日本の保育関係者百人の、モスクワ、レニングラードの保育園、小児病院などの保育事情視察記。自治体問題研究所編・自治体研究社・七百五十円。(日本とソビエト)

### あすをひらく保育

日本学術会議の国民生活問題シンポジウムの報告書に加筆したもの。保育所・幼稚園

が、社会の非民主的な力のため大きな制約を受けてきた歴史と現状、改善すべき点を示している。小川太郎、深谷錦作編・時事通信社・九百円。(9・9朝日)

### 百万人の保育教室

保育園長としての二十年の経験に立って、保育教育でまもるべき原則を示し、保育行政の欠陥をすどくついている。近藤薫樹著・草土文化・七百十八円。(9・9赤旗)

### しつけ

題は古めかしいが、心理学的人類学という新しい方法による開拓的試み。しつけを通じて日本人の性格と文化的特質をとらえようと試みている。原ひろ子、我妻洋著・弘文堂・千円。(8・19朝日)

子どもの遊びと手の労働  
手の労働が人間形成に占め

る役割を明らかにして、子供の生活の中へ遊びと手の労働をとけこませる教育方法を研究している教師や親たちの共同労作ですぐれた問題提起。子供の遊びと手の労働研究会著・あすなる書房・千円

(8・23朝日)

### 現代家庭教育論

江戸時代からの家庭と家庭教育をふりかえりながら、新しい家庭を創造するための家庭教育の目標と内容の展望。藤井治枝著・ドメス出版・千二百円 (9・2朝日)

### PTA役員ハンドブック

たとえば学級・地区委員の選出、総会運営、行政当局への陳情・請願方法、規約改正の方法、予算の組み方の手引き、あいさつや司会のやり方もある。西村文夫、橋本寅十著・帝国地方行政学会・千四百円。(7・6教育家庭新聞)

### 母として 教師として

#### 生活者として

著者はつづり方運動で投獄された村山俊太郎氏夫人。夫は戦後教職に戻ったが病没し著者も教壇を追われた。その中で五人の子を育てた記録。副題「私の家庭教育」村山ひで著・労働旬報社・八百円

(9・4朝日)

### さわやかな風のように

東京豊島区の「母親勉強会」のお母さん百人がつづった生活のよろこび、悩み、思い出をまとめた本、同会は03—九七—一四〇三〇(8・25朝日)

### 翼をはたて

脳性マヒの著者は苦しい訓練と努力で、小卒の学歴で社会福祉主事の資格を得、大学に学んだ。

一九六〇年出版の「その歩みはおそくとも」はその闘病記録だが、今度はその後の生

活や、身障者の福祉問題について

の意見と主張。小柴資子著・日本放送出版協会・六十円 (8・21朝日)

### 戦禍に生きた子どもたち

飛行機工場のあった群馬県太田市は戦時中、激しい空襲を受けた。当時、教師だった著者が、学校事務日誌、教師

たちの手記、回顧録、生徒の作文などによって生徒の姿を描いている。小林ふく著・鳩森書房・千六百元 (9・23朝日)

### 自費出版の歌集「水畔」

江戸川べりで生まれ、生きてきた羽生瑞枝さん(七十二)が結婚式の記念に、ふるさとの川、江戸川の歌四百首をまとめた。 (9・13朝日)

### 草の実会 二十周年記念文集

第二集「轍(わだち)―戦争体験の中から今日をさぐる」

これまで戦争体験を語ってきた五十代、六十代以外に、四十歳前後の疎開っ子世代も発言。四十数編、約二百ページ、発行所は東京杉並区本天沼三―二十四―十三 石崎あつ子方。送料別三百五十円。

(8・21朝日)

第三集は「希い」、老人問題の将来。老人問題研究グループだけでなく、会員全体からの、四十数編、二百ページ。発行所は東京台東区台東三―五―二岡野喜代方、送料別三百五十円。 (9・21朝日)

### 30年目の記録―沖繩の声

毎日新聞「女の気持」の投稿者と愛読者のペングループが沖繩の主婦の特別寄稿を中心にまとめた戦争体験文集。

日本軍は女、子供、老人に銃口を突きつけ、濠から弾雨の中に追い出し、十万以上の島民が犠牲になった。復帰後もきびしい沖繩の現実を訴え

ながら、戦争反対を強く叫んでいる。

発行は和歌山市六十谷三五〇、岡村喜美江さん方、振替は大阪三〇九二三八、五百五十円。(9・30毎日)

## 意見

男にも後始末のしつけを

幼稚園で紙細工の共同製作をした。先生は、女の子だけに後片付けを命じ、男の子はそのまま外で遊ばせた。これは、家庭でもよくある光景だが、公書やインフレなど市民生活の基盤を無視した高度成長経済の原点はここにあるのではないか。「家庭科の男女共修をすすめる会」に私が参加したのも、男性を変えて、日本の現状を変えるのがねらいだ。(樋口恵子、8・12朝日)

アメリカの消費者運動  
ラルフ・ネーダーは十五万

ドル(約四千五百万円)の私費を投じ、あらゆる層の人々千人以上を動員して、議会が憲法の精神に即して実際に機能しているかを点検した。ウォーターゲイト事件発覚の半年以上も前のことだった。

議会にも、消費者利益を代表し、「議会監視」の名のロビイスト・システムが誕生。議会外では、「一般市民の利益を守る訴訟グループ」が主に政府を相手に、年間二十五件の訴訟を提起。

アメリカ同様の社会的・国家的問題を持つ日本でも、オバマ後追い陳情型を脱皮しダイナミックで構造的なものにしたい。野村かつ子、消費者問題研究家、8・15毎日)

### 「女工哀史」五十年

女工哀史の出版から五十年、繊維産業は日本経済の核心の座を重工業に譲ったが、東南アジアに進出して、五十

年前の女工哀史の実体を輸出している。日本人として、「女工哀史」を書物の古典にとどめず、今日の思想を行動の火種にしたい。(渡谷定輔、詩人、8・15朝日)

### 消費者運動を市民運動に

東電が政治献金をやめ、他社に波及しそう。このゲリラ戦の成功は、従来の消費者運動の反省にもつながる。これまでは失敗を恐れる傾向があったが、実行できる人が、できることから始めなければ運動は進まない。主婦だけではなく法律家などの専門家が参加して、市民運動としての質が向上したことも、大きな前進だ。(野村かつ子、(8・17朝日)

### 共働き家庭の食事

夕食づくりは、共働き女性の重荷。わが家では週二回、夫や子どもも分担して材料を

買う。前日の後片付けのとき、翌朝と夕の下ごしらえをし、帰宅後わずかの時間と手間ですむようにしている。夫が台所のことを知っていること、急場には子供だけでも食べられる訓練も大切。かんづめ、冷凍食品も常備している。

それにしても、安くて栄養的に安心な勤労者用レストランは、家事の社会化指向の第一歩ではないだろうか。

(柴田悦子、大阪市大助教授、8・29赤旗)

外から見た日本女性の地位  
ニュージーランド在住の日本人商社員たちは、夜遅くまで働き、夜はピアノ、休日はゴルフの生活。妻たちは家に閉じこもり、子どもだけを相手に暮らす。

こうした生活は一般のアメリカ女性には、日本の女の社会的地位の低さと見えるらしい。日本の女性は、デモの中

でも男の後ろにつき従っているのだからという疑問が、日本の女性問題に関心を持つきっかけになった女性たちも多かった。

(小沢遼子、9・3朝日)

### 人口抑制策と性別分業

妊娠中絶手術、IUD、ピルなど、人口抑制策は女性のみに重荷を負わせがちであり男性のバイブカットを奨励すべきだという意見はもっともだと思う。中絶やピルの禁止は女性の苦痛をふやすのは事実だが、女性解放運動はバイブカット推進といった視点もとりに入れるべきではないだろうか。

(松田道雄、9・10毎日)

### 共働きの夫から

都労働局の調査では、共働きでも夫は家事を手伝わないという。自分は共働きをしていながら、共働きは戦場のよう

な毎日。掃除など省けるものは省いて、思いやりとやさしさは省かないこと。すべて二分というケチな考えでなく、やれる条件の中で努力、協力しあうといい。

(早乙女勝元、8・15朝日)

### 男医優位の医学界

大学卒の女性がふえたが、若いときは結婚・育児で、仕事をするのは中年のパートや内職が大多数。しかし医師のような専門職では全員が職をもつ。日本の女医数は男医の約10%と少数、女子教育を考へなおしては。

(川上武、医師、10・5朝日)

## 投書

### 出色の婦人問題講座

小金井市の「現代に生きる女たち」連続市民講座は、講師も内容も抜群で感心した。革新市政下、市民グループの

自由企画と聞いて、なるほどと思った。他市も見習ってほしい。(10・20社会新報)

### 目にみえない重圧

転職しようとしたが、二十四歳前後の女はほとんど対象外だった。だから低賃金で失業保険や厚生年金などの社会保障のない臨時職やパートへ追いやられる。(臨時職員二十四歳、9・6毎日)

### 女に生まれて損

私は女に生まれて悲しい。祖父は「女だから」といつも言う。人間に生まれたからには、同じように扱われなくてはいけない。

(中学生十四歳、9・10毎日)

### 四歳児の女意識

自転車の練習をしていた四歳の娘が「私は女だからすぐにはうまくなれないはず」という。喫煙や洋裁のことでも

いろいろと言う。女だからといって甘えることも、卑屈になることもないと教えたが、はたしてわかっただろうか。

(主婦・三十歳、9・12朝日)

### 女性の生保掛金を安く

生命保険の掛金は死亡率を基礎にしているが、男女の平均余命が違うのに同一掛金はおかしい。(札幌市・無職・三十歳、9・22毎日)

### 安くなっています

たしかにおかしいので、当社では厚生省の簡易生命表ではなく、「経験生命表」をもとに女性保険料制度を採用している。ほかにも採用している社がある。(東京生命、企画課長、10・2毎日)

## 国際婦人年

政府の参加計画できる  
来年は国連の国際婦人年、

労働省婦人少年局は政府の参加計画を発表。

婦人の社会参加と男女差別徹底を柱に、記念祝典、婦人の地位と役割の日米共同研究、日本の戦後の婦人の歩みと世界の婦人についての資料集発行。  
(10・9朝日)

### 婦人問題は世界共通

来年の国際婦人年の準備として、国連主催・セミナーがカナダで開かれ、労働省婦人少年局の森山局長が出席した。算術的平等を求め西欧と実質的平等を求めアジアとの違いと、スウェーデンの発言が印象に残った。婦人問題に対する考え方は大きく変わりつつあることを痛感したという。  
(9・28朝日)

## 物価狂乱

庶民に重(十)月

コメ 十キロ千六百円→二千

百円

国鉄 最低運賃三十円区間五キロまで→三キロまで

地下鉄 最低運賃四十円→六十円。

バス 一区间四十円→六十円 往診費 (七割給付) ニキロ

以内百十一円→四百三十円 郵便小包 第一地帯市内、百

五十円→二百五十円 第一地帯市外、二百円→三百五

十円、第二地帯三百円→四百五十円 第三地帯四百

円→五百五十円(9・30朝日)

### ささやかな自衛策

十月一日の国鉄運賃大幅値上げを前に、定期券や回数券を買うために連日長い行列。

コメも三十二%アップで注文殺到。小荷物は二十日ごろから急増して滞貨の山。  
(9・28朝日、9・29毎日)

### 国鉄の売上げ新記録

料金値上げ前日の国鉄の売

上げは約百十億円、これまでの最高額の約三倍近く、特に回数券、定期券、指定券が多い。  
(10・1朝日、毎日)

### インフレ阻止国民集会

東京・明治公園で二十九日、三万五千人が集まった。家族連れが多く、生活を守るための切迫した気持がにじみ出てデモのプラカードも派手ではないが切実な内容。  
(9・30朝日、毎日)

## 繁栄のかげに

### 被爆女性の自殺

原爆死没者慰霊式の当日、広島に住む三十歳の被爆女性が自殺した。また、たった一人の妹を原爆でなくした名古屋の女性(七十七歳)が自殺した。  
(8・7朝日)

### 戦争の傷あと

戦争で負傷した軍人、軍属、

動員学徒、女子挺身隊員などの犠牲者には一応の救済策がある。しかし、女性が大半を占める一般市民は対象外である。

西ドイツでは戦場と国内、官民の別なく平等に救済されている。  
(8・15朝日)

### サハリンからの帰国

十年間の帰国運動が突って母子三人が横浜入港のソビエト船で帰国。朝鮮人の夫は帰国後消息不明、洗たく婦をしながら二人の子を育ててきた。サハリンには、帰国を望む日本女性が百人もいるという。  
(8・28毎日)

### 水俣病百人目の死者

五歳で発病、十八年間寝たきりで口もきけずに生きてきた松永久美子さん(二十三歳)は、二十五日朝、水俣市立病院で急性肺炎のため死去。  
(8・27朝日、毎日)



## 三十年ぶりの里帰り

中国在留日本人八十九家族九十八人が、中国民統特別機で里帰り。五十代の女性がほとんどで、戦前に渡航し、戦後に中国人と結婚した人が多い。敗戦の混乱で肉親にはぐれ、中国人に育てられた人も数人。

(8・23朝日)

## 海外

### 〔韓国〕

金大中氏は女性地位向上派長幼の序と男尊女卑が根強く、野党の政治家でもそうだが、金大中氏は違った。三年前の大統領選では「大統領直属の女性地位向上委の設置」を公約、女性の強い支持を受けた。(猪狩草、8・16朝日ジャーナル)

### 伝統を守った陸英修さん

「メンドリが鳴けば家がほろびる」といわれ、女性の口出

しはタブーが伝統。解放記念式典の場で被弾・死去した陸英修大統領夫人は、こうした伝統を厳しく守った女性といわれる。

(8・16毎日)

### 〔朝鮮民主主義人民共和国〕

#### 高い女の解放度

女性の四十三％が社会的労働に従事、家事・育児からの解放は国家の重要政策だ。寄宿制もある託児所、幼稚園、小中学校は無料。学童保育の豪華版の学生少年宮殿も素晴らしい。大学だけは奨学金制度だが、実際には無料同様。

(10・16朝日)

### 〔中国〕

#### すすむ避妊

孔子の「男尊女卑」思想は農村に根強く残り、男子誕生を願った多子家庭も多く、農村の人口増加率を高めていた。

しかし国家的な産児制限策と批林批孔運動は、これを克服

しつつある。男性用避妊具も普及し、詳細な図入りパンフレットもある。(8・6朝日)

### 夫婦は愛人

運転手や職場の幹部などに女性がどしどし進出。男性が市場での買い物、料理、洗たくなどの家事を分担するのもごく当たり前。夫も妻も相手を愛人・アイレンと呼び、夫婦の地位もそれにふさわしく同等になった。婦女頂半辺天、女性が夫の半分を支えるという毛主席の言葉から、「半辺天」は女性の代名詞にもなった。

(9・8朝日)

### 田中首相出迎えの差

九月末の日中航空路開設の一番機、中国側は女性二十四人がいたが、日本は黒い背広だけ。通訳の林さんはげげな表情だが、「日本ではふしぎに思う人さえ少ない」ことは理解を絶するらしい。女性

の社会的進出はめざましく、全託の保育施設、カギっ子用の安い食堂、洗たくやつくろいものなどの家事を社会化する組織に感心した。批林批孔も浸透して、人間の意識に根強く残る性差別をきびしく追及していた。

(兼松左知子、10・14朝日)

### 〔南ベトナム〕

#### 大統領辞任要求の女性群

チューー大統領の辞任を要求して、ゴ・バ・タン夫人が組織した仏教尼僧や女性約百人が四日朝サイゴン市場前に集合、約一キロ行進し下院議事堂前で集会。(10・5毎日)

翌五日には仏教尼僧グループ三、四十人が、デモ禁止警告を無視して、チューー辞任要求の街頭行進を開始、解散させられた。(10・6毎日)

### 〔パキスタン〕

少ない女性選挙

(7・18 毎日)

テヘランのアジア大会に参加した選手は百八十名だが、女性はおずか一人。中国は二百六十人中八十七人、朝鮮は四十七人の女性選手を派遣した。女性をスポーツに参加させない後進国と思われても仕方がない。——ある女性の嘆きの投書。(9・16 朝日)

(ギニア・ビサウ)

平等をめざして

新しく独立したこの国はもとも男尊女卑、小学生の中の女子の比率は二十五%。一夫多妻の風習もある。解放運動の担い手PAIGCでは、党員には一夫一妻を守らせている。(8・7 朝日)

(フランス)

女性の地位担当相誕生

ジスカールデスタン大統領は「女性の地位」担当閣外相を新設、ジャーナリストのジルーさんを任命。

署長、警部に昇進の道

上級警察学校(日本の警察大学校に相当)の入学資格を女性にも開放、署長や警部へ昇進の道を開いた。

(9・2 朝日、9・4 毎日)

離婚は八組に一組

離婚率が高まり、国立統計経済研究所の調査では八組に一組の割合。フランス人の七十七%が離婚手続きの簡素化を望んでいる。(9・21 朝日)

(スペイン)

女性闘牛士復活

フランコ政権発足以来、女性闘牛ではワキ役で、リング上で牛と一騎打ちするマタドロー(闘牛士)になれなかったが、政府は三十五年ぶりに女性闘牛士の復活を認める。

(8・12 毎日、8・21 朝日)

(イギリス)

物価・消費者保護大臣

シャーリー・ウィリアムズさんは労働党内閣の物価・消費者保護担当相。四十三歳。経済専門紙フィナンシャル・タイムスの元記者。企業利益を抑え、食料品価格を下げ、消費者に十分な情報を流せば物価は下降と主張。

(8・12 朝日)

タイムスに初の女性編集長

リタ・マーションさん、タイムス紙の百八十六年の歴史で初の女性編集長に。記者歴は二十年。(9・3 朝日、毎日)

「平等賃金法」来年から

男女の賃金格差廃止を各企業に義務づける「平等賃金法」がいよいよ来年末から施行される。

「女性差別撤廃法案」は今年末に国会提出の計画。

(9・8 毎日)

(北 欧)

各国とも高い地位

デンマークで五人目の女性市長が誕生、知事もいる。中央では、国会議員百七十七名中二十七名が女性、大臣も二人。

ノルウェーでは首都オスロ市議会の過半数は女性、第二の都市トロンドハイムでは女性議員七十名に男性議員二名。中央政府の大臣三名、百五十五人の代議士中二十五名が女性。

スウェーデンの女性たちは結婚にさめきっていた。未婚の母や婚外子への法的・社会的差別もなくなり、「未婚の母の家」も不要になった。

(松井やより、7・3、4 朝日)

(チェコスロバキア)

離婚法を平等に

婦人紙「プラスタ」に離婚法の一部改正提案が載った。長い結婚生活のあとで離婚すると、現行法では女性保護が

不十分で男は十分な給料と、若い妻との再婚があるが、老妻は少ない年金で職もない。夫の死後の年金も新しい妻にいく。無責任な離婚と女性の不平等をなくそうと主張したところ、賛成の投票が殺到。

### 賃金格差は三十六%

男女が同じレベルの仕事をして、平均三十六%の賃金格差があると労働、社会問題研究所のフルボルカ博士が指摘。伝統的に一家の担い手として男性が優遇され、仕事の分担をきめるのは、指導的地位にある男性なのが、格差の理由。

(9・9朝日)

### 「キューバ」

#### カストロ新民法計画

カストロ首相は革命記念式典の席上、女性解放が進まなかったことを認め、女性の地位を高めた新民法の制定計画を発表。

(9・3朝日)

### 「アメリカ」

#### ポランティアは問題

ウーマン・リブの代表的組織NOWでは、ポランティアは無報酬の家事育児の延長で、女性の経済的自立を妨げる。労働には正当な報酬をと宣言。賛成・非難の論争を起した。

(7・19朝日)

### NOWの要求

NOWの会議で、地方分権が強すぎる時代遅れの離婚法の改正や、判事や弁護士に女性を増やすことを要求。

(7・23朝日)

### 進出する女医

入学難の医科大学に女子学生数が全体の十五・四%に急増、ハーバードやコロンビアなど有名大学では約三分の一。これまで女性専門医は小児科、麻酔科、精神分析科が多かったが、最近では産婦人科医が増加。

(8・12朝日)

### 女性運動家に高い評価

消費者運動の先進国アメリカでは、日本と違い女性運動家の力が評価され、行政や民間レベルで重要な地位を占める。トップレベルの行政担当者から草の根まで、幅広い影響力、活動力をもつ女性運動家が多い。

(8・29毎日)

### 「女性平等の日」

フォード大統領は八月二十六日を「女性平等の日」とする法律に署名、男女平等をうたった憲法修正の批准を各州によびかけた。一九二〇年のこの日、婦人参政権が認められた。

(9・2朝日)

### 学界では差別

微生物学会が婦人会員の活動を調査した結果、女性会員は全体の二十九%で、その四十六%が博士号をもつ。既婚率は男九十%、女四十四%、子を持たない率は男十二%、

女五十二%、収入は学士、修士、博士と高学歴になるにつれて性別格差が大きく、講師、助教授、教授と地位向上につれ格差は開く。職業上の地位も差があり、学部長や学

長はゼロ、正教授は六%で大多数は準教授と研究員。博士でも五十人以上の職業を管理する女性は少なく、半数以上が一人で孤立して仕事している。(8・9朝日ジャーナル)

### 切抜コピーサービスのお知らせ

「あごろ」掲載の新聞切抜きの原寸大コピーをご希望の方にお届けいたします。

一件 六十円(会員)

〃 八十円(非会員)

ほかに郵送料実費

◎「項目名」「掲載紙名」「掲載月日」

を明記、料金同封(小額切手でも可)のうえ、下記へ。

〒160 東京都新宿区新宿一の九の六  
「あごろ」新聞切抜係



## 〈会員紹介〉

八百屋や魚屋の店先で、ふと  
出合いそんな中年の奥さん。素  
朴であたたかな——稲垣さん。

★「現代を生きる女たち」の  
講座ですか？ 松岡洋子・塩  
沢美代子・松井やより・吉武  
輝子：なんて、よくも一流の  
人を集めた、と驚かれました  
が、一つには小金井市が革新  
市長だからです。全国でただ  
一つ、市民参加の企画委員会  
が設けられてまして、市民講  
座も自主的に運営されてるん  
です。

今度の企画は、去年十回に  
わたって行なわれた婦人学級  
講座「女の座の変遷」を聞き  
続けた十二人の仲間が、その  
後、「現代婦人問題を考える  
会」というのを作って勉強を  
続けていたが、この人たちが  
婦人問題専門家のご意見を  
聞いて企画したもので、婦人  
民主クラブの湯浅さんにはと  
くにお世話になりました。

★夜の講座にしたこと、です  
署名を集めてお願いしたん  
ですか？ 昼の講座にすれば、出  
席者はもっとふえるのでしょ  
うが、「ご意見拝聴」だけで  
終わってはつまらない。夜の  
所だけがやっと認められたん



小金井市の市民講座  
「現代を生きる女たち」を推進する  
稲垣 信子さん

ほうがどうしても意欲的な人です。私たちは国立や三鷹の  
主婦たちの会です。初めから  
が集まるので、思いきって夜  
にしました。希望者は八十人、  
いすがたりなくて、座って聞  
かなければならないのでは：必要があるのか！と議員さ  
所まで作って主婦が勉強する  
の？と議員さ  
をあげてみたら四十人ぐらい  
でも、お話が終わって二人の  
熱心な質疑応答がけ出して  
ただけのようにな

の勉強も勉強になりました。  
四十すぎてからでも、勉強す  
るのって楽しみです。

このお母さまに刺激され  
たのか、長女の沙由美さんも、  
山岸会のお手伝いで活躍中。  
十月二十六日には、「男と女  
の革命」の対話集会を成功さ  
せた。

婦人運動の展開には、小  
さなグループに所属して勉強  
することがたいせつ、と、山川  
菊栄先生も言っておられるが、  
一人一人が勉強し、一人一人  
が少しずつ変わっていくとき、  
世の中も、少しずつ住みよ  
くなるのかもしれない。

## あごろのあごろ

あごろのあごろ―読者の  
広場です。ご参加を心か  
らお待ちしております。

## あごろ

「あごろ」の新しい読者とな  
って、非常に熱意ある編集に  
感動させられます。婦人問題  
を考える人ばかりでなく、も  
っと多くの人に読んでもらっ  
て、人間としての共感を呼び  
合いたいと思いました。

8号の特集「子殺しを考え  
る」の中で、若月俊一さんの  
「母性という負担に、個人  
的にも社会的にも、そして国  
家的にも、大きなシンパシー  
を、当然のシンパシーを払う  
必要がある。いきなり子殺し

なんて、かわいそうですよ。」  
のお話に強く共鳴させられま  
す。

本当にそうです。男性が、  
母性という負担に、自然な理  
解と加担をするときがこなけ  
ればこのような悲惨な事件が  
なくならないと思います。バ  
スや電車の中で大きなおなか  
をした女の人に席をゆずろう  
ともしない人たちが平気とい  
られる日本の社会、産休をと  
る女の人がまわりの人のお荷  
物のようにされている職場。  
私は十年前、放送局に勤め  
ていて産休をとったとき、ま  
わりの男性のシンパシーのな

## あごろのあごろあごろのあごろあごろあ

さがとても身にこたえました  
而と向かって言われたことで  
はないけれども「僕らがカブ  
っちゃうんだから」という  
姿勢は、ヒューマンな連帯感  
のない冷たい社会の所産では  
ないかと、悲しい思いをしま  
した。

自分の女房にはこんなこと  
はさせられないと言って辞め  
させてしまうけれども、他人  
のことにそこまで思いやりを  
向けていたらたまったものでは  
ない。家庭も、自分の仕事  
のために築くのであって、女  
が困ることにいちいちかわ  
ってはられない。――この  
ように女が苦しむ問題を一緒  
になってのり越えようとしな  
い男性が主体となっているの  
が日本の社会です。

男性も管理社会の中であえ  
いでいるのはわかりますが、  
体制的抑圧は男も女も同じで

す。母性の問題は、社会的、  
国家的な見地から意識を高め  
てゆかなければならないと痛  
感しています。

仲佐雅子・編集者

あごろの何げないところが  
気に入りました。お金がなく  
てユメのあることが楽しいと  
思いました。「安保に反対しま  
しょう」とか、「キリスト教の  
理想とする社会の建設」とか、  
ワケのワカラナイことをスロ  
ーガンにしていけないところは  
気が楽です。BOC通信の文  
面、どなたが書いておられる  
のかわかりませんが好感が持  
てます。

でも「あごろ」には時々不  
愉快に思うことがあります。

例えば、繰り返し繰り返し出  
て来る「家事と育児に明け暮  
れ」「家事と育児だけの毎日」  
「育児・家事にしばられる主

男性から

皆が避けているテーマに大胆にアプローチして成果をあげている。

\*

斎藤信彦・医師

女性の意識の問題を分析す

ることを期待しています。主

タをおさえてその中から問題点をさぐる方法で。

N・A (教授)

✱

が深いので心強く拝見しておりますが、意見をといわれると少し遠慮してしまいます。

ところで最近、厚生省から出た、初歩的なミスをおかした愚劣な子殺し統計、注意な

さいましたか。

松井直(教授)

161

「子殺し」は避けて通つてよい問題ではないにしても、雑誌全体を暗いものにしてしまった。仕方ないところか。

大田 博(会社員)

\* おさない日の、恐ろしい、悲しい記憶を思い出しました。

二歳の妹が泣いたために、父に野原に捨てられたこと。それを四歳の妹と助けに行つたこと。

長屋住まいの、ぼくたちでした。 橋田和男・会社員

## 子殺し

子殺しという問題には女性の矛盾、置かれている状況の残酷さ、はたまたあらゆる社会矛盾が集約して現われていると思うので、その意味ではテーマとしてよかったと思いますが、全般に評論家的態

度の文章が多く、女性の本質に迫り、子殺しを犯した女とも連帯しようという基本的な姿勢に欠けていたように思います。現地ルポは視点が全くわかりませんでした。

\* 渡辺聖子・公務員

一般の報道にはない、社会の被害者としての内面が掘り下げられていて、参考になりました。 上田信子・会社員

\*

「自分が関心のあることに他人も関心を持つべきだ、また自分と同じように考えない人はおかしい」という風に考えない方が、少なくともそのように相手を買めない方が、結果として「あこら」の求める方向についても同調者を増やすのではないでしょう。か。「あこら」を読んでいると、そういう文章にぶつかります。

「子殺し」の特集でも、団地に住んでいてコンクリートの壁に囲まれて、それから脱出するために、子殺しを考える人の方が人間として正常、などという文章を読むと、まったくびくびくしてしまいました。

妻として母としての生活だけで、しあわせで満足、という人がいれば、それはそれでいいと私は思うのです。それが異常というのでは、子殺しの母を冷酷と一方的に責める人と同じ独断に陥っているのではないでしょう。か。

世の中にはいろいろな人がいて、家庭の中にいて生きがいを見出す人もあれば、仕事に生きる人もいる、両方やりたい人もいる、そういう風に考えられないでしょうか。女性全部が「女は子育てだけでは満足できない。育児は社会全体の責任」と考えた方が、そ

のような主張をしたい人のためには有利ということばかりですが、現実はそのようではない。世の中には、子育てにより、それほど自由な生き方から遠ざけられているとは思わない人が大勢いる。そしてその人たちを味方にしなければ育児の社会化は少しも進まないでしょう。だからまず、立場のちがう相手を批判するのではなく、味方にするのはどうしたらいいかを考えた方がいいと思います。

\* 稲生和子・主婦

「子殺し」については、新聞などを通じて入ってくる情報ではこまぎれなので、「あこら」で取りあげていただいで自分自身考えるよい助けになりました。ただ集録は週刊誌的で読みごたえが全くなく残念に思いました。



丸山恵子・アルバイト中

教師をしています。母親が

安井八重子・高校教師

子殺しについてはもつと生

ふんふん

宮沢和子・主婦

ということがまったく理解出来

が、万物の長たる人間のため

高野ひさ子・タイピスト

**○**

今後、保育所育ちの子ども

松山洋子・主婦

ころはよかったです。子

なぜ、下ばかり向いて歩く

美しい日本のことをひび

伊藤祐子・文筆業

3

母性は人間の大切な特性で

熊井順子・会社員

自分の生き方や仕事について

私、情報産業関係の十名は

55



「まあ、こんな雑誌があったの」と、たいてい、とても喜んでくださるので……。

\*

使ひ捨て時代とやらで、何も彼も使ひ捨てにしがちですが、この不況下、もつとりサイクルを考えてみたかどうかでしょう。

子供の古い衣類など、こんなにモノのある時代に……と思つて、つい、人にさしあげる

「あの人も気がひけますが、『あら』の会員同士なら、遠慮なくゆずりあえるのではないでしようか。共働きをしています。日曜しか洗たくができないので、いくら数があってもありがたいものです。小さな地域、地域で、もっと連絡をとりあいませんか。」

後藤好子・会社員

お三郎東海

「夫の転任についてまわる生活の中で、せっかくできた友だ人ともすぐ別れなければならず、主婦としてかかえている問題は一向解決できない。BOCの支部を作って孤独な主婦たちの話し合いの場にしましょう」という、高橋ますみさんの提案がとりあげられて、東海支部が発足することになりました。

朝から冷たい秋雨の降る十月二十二日（火）、会場の愛知県婦人文化会館日本間には、主催者の天候の心配をよそに午後一時の集会時間前から、次々と女たちがつめかきました。座ぶとんやテーブルを出して会場作りを手伝ってくださる人々の姿にも、この会への期待の大きさがうかがわれ

東京からは、斎藤千代さんが、体重よりも重いのではないかと思われる荷物を背負って、はるばる駆けつけてくださいました。

本部からの「あごろ」八号を全員に配って、まずは全員が初対面の挨拶、高橋さんと斎藤さんの趣旨説明のあと、自己紹介から会は始まりました。

「子供を育て上げたが何もすることがない。何をしたらよいか」「洋裁や簿記の腕を持っているが、生かせない」「夫や姑の反対のために世の中へ出られない」「育児のために、やむなく職をやめたが再就職できない」「夫の転任のために自分の仕事を持てない」「家裁の調停をしているが、女の問題は相変わらず根深い」「女の子を四人かかえて小説を書

あぐらのあぐらのあぐらのあぐらのあぐらのあぐらのあぐらのあぐらのあぐら

「女性三十歳定年」問題で、裁判で係争中の名古屋テレビの大木捷代さん、清水洋子さんの顔も見え、女であるが故の職業上の差別に対し、敢然と闘うお二人の訴えを直接に聞けたことも印象的でした。

話し合いに入ってから、年輩の方から従軍看護婦や戦後の耐乞生活の経験が出されたり、学習会をしましょうという呼びかけや、例えば、おこうこを漬ける、子供を預か

名称は「あごら東海」とし、

(東京 H・I)

があります。

(東京 C・K)

(神奈川 K・K)

ユ一、買物、料理などいた

教えます。

(三) M.T

整理上手です。

英語教師二十余年、英語を  
通じて外国の友人を持ち、録

信に興味を持つ

イタリア刺しゅうが好きです。

(東京 S・A)

子供をあやすこと。子供に勉強を教えます。子供に本を読んで、読み聞かせをします。

(東京 M・H)

司書歴五年です。文献の調査やリファレンス・サービスを。

華道（池の坊） 茶道（裏千）

(東京 Y・Y)

\* 傷つけず、悩みなどを

で、(家)の免許を持っていますの  
十人ぐらいのグループで

＊ 高校時代から短歌をしてい

勉強したい方がありましたら

実費でお教えます。

(千葉 F・T)

(愛知  
M  
・  
A)

\* 資料や図書の整理が好きで

士の資格を持っています。

(埼玉 H・F)

(千葉 S・S)

\* 医療事務ができます。

\* 真多呂人形のつくり方をお

・英文タイピスト。自宅で作業できる方。定常的な仕事ができる。

可。

\*

・音楽の好きな方へ。本文百五十八ページで紹介の会員、熊谷さんが、クラシックスの切符を扱って下さる方を募集中です。一定のマージンのほか、扱ひ者の切符が無料になります。お風呂屋、喫茶店、タバコ屋などと関係のある方は特に好適とのこと。

\*

・講演、座談会などの録音テープを書き起こす仕事が好きの方。婦人問題、時事問題、化学、医学、情報処理関係などに、十分な知識のある方。ご自分の得意な分野と、お手持ちのテープレコーダーの機種、録音速度、経験内容など

**あーらのあーらのあーらのあーらのあーらのあーらのあーらのあーらのあーら**



【あごらの施設利用ご案内】

事務局 東京都新宿区新宿1丁目9番6号 平介ビル2階 〒160 TEL354=3941

※読書室「あごら」

●場所 事務局に同じ 約25平方メートルの読書兼集会室です。いす40席あり。

TEL354=9014

●利用時間と使用料 月～金 午前9時半～午後6時開室（読書、原稿書き、待ち合せ、小集会にご利用ください）1人2時間まで100円（お茶つき）なお集会の場合は月～金、午後6時～10時 および土、日 午前10時～午後10時も利用できます。ただし予約制。土、日は特別料金（1人2時間まで200円）となります。

●複写機、映写機等も利用できます。

●貸ロッカーあり。月額1,000円

※創造銀行（BOC=バンク・オブ・クリエイティビティ）創造力、労力、特技等を預託、利用希望者に貸しつけるシステムで、企画、調査、編集、校正、印刷等の実務のほか、「赤ちゃんをあやす」「やりくり上手」など、いろいろな能力が預託されています。

【編集後記】「あごら」の会員は、有職者と主婦が、ちょうど半数ぐらいずつ。女のグループとしては珍しい比率だといわれています。でも、会員同士でも、時間帯がなかなか一致せず、お互いの対話の機会が持てません。せめて誌上交流をはかりたいと、特集を企画しました。それぞれの反論をお待ちしています。社会の激動の中で、いま、私たちが考えなければならないことは、山ほどあるように思われますので。

---

あごら9号の編集と編集協力（イラスト・新聞切抜等をふくむ）

浅野美和子 飯田順子 居森ひさ子 植松節子 大沢敏子 大橋倫子 岡 ゆき 川上正子  
北里洋子 黒沢照代 後藤多見 小深田和子 齊藤 涼 眞田房枝 高橋ますみ 塚本和子  
月江政美 仲佐雅子 永松三恵子 西尾恵子 西野厚子 根井はる 橋爪希代子 長谷川美子  
永上喜久子 福田光子 安江とも子 吉野由喜子 若林高子 渡辺和子

---

〈あごら〉9号 1974年12月20発行 本文 特白嶺A36.5kg 表紙 特画アートA86.5kg

●発行所 BOC出版部 〒160 東京都新宿区新宿1-9-6

●発行人 斎藤千代 ●印刷者 永井芳江

AGORAは、古代ギリシアの市民の「ひろば」。市民は、このAGORAでだれでも自由に語り合い、買物をし、そこから、民主主義が生れたといえます。

私たちの「あごら」は、小さな「せまば」にすぎず、まだ力弱い存在ですが、女の問題を中心に、考えあうよすがにしたいと思います。ご参加を、心からお待ちしています。

#### 〔あごらの生いたち〕

働く女が、職種、賃金その他で受ける差別を解決したい… 家庭と職業の両立は困難だが、助けあう方法を考えよう… 家庭に潜在する女性の能力の社会参加の方法を考えよう……

「あごら」を生み出した母体BOCは、1964年、このような目的のために、ボランティア活動をすることをこころぎして生まれました。

以来10年、問題を解決する方法をさぐろうとするたびに、婦人問題の根の深さに直面、苦闘を重ねました。遅々とした歩みでしたが1972年、雑誌「あごら」を発刊、1973年、読書室「あごら」を開設、女の問題——ひいては人間の問題を考え続けていこうとしています。

息の長い活動が必要ですので、活動は任意、時間と体力のゆるす範囲で結構です。義務としては、会費納入の義務があるだけです。会の運営は、会員から選出された運営委員が行ないます。

現在、会員、誌友、計511名、名誉会員は、婦人問題の大先輩山川菊栄先生お一人のみです。

〔現在の主な活動〕 ●雑誌「あごら」の発行 ●月次例会(研究会)の開催 ●創造銀行(BOC)の運営 ●読書室「あごら」の運営 ●女性の前進に役立つ出版物、視聴覚材などの製作 ●ベビー・シッターのあっせん(準備中) ●再就職のあっせん(準備中)

#### 〔参加者の組織〕

会員、誌友、賛助会員のかたちで参加できます。会員、誌友には、共に、雑誌「あごら」と連絡葉書「BOC通信」(月1回)をお送りします。

会員は、つぎの特典があります。

- 雑誌「あごら」を毎号講読できる ●例会、総会に参加できる
- 雑誌「あごら」の編集に参加できる ●読書室「あごら」を優先利用できる ●リゾート施設「中山文庫」を利用できる ●創造銀行の預託能力を会員価格で利用できる ●希望者は、創造銀行に、自分の能力を預託することができる。

(誌友は、雑誌「あごら」を毎号購読する方、賛助会員は、「あごら」を精神的、経済的に支援して下さいの方です。)

会費＝年額 2,400円 誌友費＝年額 2,000円

賛助会費＝随時、金額の多少は問いません。